あさきゆめみしきみへ

さたけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あさきゆめみしきみへ

【Ｎコード】
Ｎ９１３６Ｑ

【作者名】
さたけ

【あらすじ】
日本政府は魔法使いの犯罪、テロ対策として公安六課を設立。六課の新人魔法使い「美樹」は相棒の「璃瑠」と共に勘と直感と予感と当て勘と第六感となんとなくと推理で犯罪に立ち向かっていくこととなるのだが。

＊　　ＧＬ（ガールズラブ、百合、同性愛）といった表現が入ります。苦手な方はご注意ください。
＊　　ＨＰでも連載中です。

【一章・少女は欺いた】

【一章・少女は欺いた】

私、伏見美樹（ふしみみき）は課長のデスクまで呼び出された。課長は笑顔で私に紙を一枚手渡す。

地図だった。ネット上から印刷したものらしい。簡単な地図の上の一点に赤いマーカーで丸がつけてある。

聖マリア学園。なんというかエロティックな響きである。

「聖マリア学園？」

「なんていうかエロイだろ」

中学生レベルのこの中年オヤジのにやけた顔にイラっと来たが、同じことを考えていた自分もイラっと来た。

私が公安部公安六課に着任して三ヶ月。

この課長は女子高生刑事ってエロイだろ、なんて理由で私を引き受けたらしい。

高校は中退してるが年齢的には高校二年生ということになるのであながち間違いでもないが。

私が普段捜査の時には女子高校生の制服を着るよう命じられているのは、この課長の利己的な理由で無いと思いたい。

「んで、どんな事件？」

捜査資料のデータを携帯に送ってもらいながら私は聞く。

事件の概要から関係者からの聞き込み内容まで一通り揃っていた。

一週間前、正確には６日前に起きた事件らしい、公安六課に回ってくるにしては遅い気もする。

「女学生が一人姿を消した。所轄の捜査では不可能と判断され六課に回された」
「魔法絡みっすか」
「もしかしたらそういうことになるかもしれない」
課長が薄い茶をすすりながら答える。ちなみに髪も負けず劣らず薄い。
お茶パックを3回使いまわしたくらい薄い。

後ろから声がした。

「おはようございます美樹さん。今日も死相が出てますね」
「おはよう。私は、めっちゃ元気だよ」
「そうですか、残念です」

私のパートナーである璃瑠が板チョコかじりながら立っていた。
まさか朝飯がそれか。
私より二つ下の１５歳と一部の殿方が目の色を変える年齢でありながら、公安部員である。
茶色が多く混ざった細い髪は顎のあたりで切りそろえられ多少の癖があるため少し内向きに巻いている。
白い肌は少し紅潮し小鼻に薄い唇と美少女たる素質は十分に持ち合わせているのである。
さらに特筆するならば細い眉は絶えず不機嫌そうにひそめられ、目は不快感にまみれている。
そして私が元気だったことにショックを受けたのか、落胆の色が見える。
もう一度言うが、私の現パートナーである。

「では美樹さん、現場に行きましょうか」
「ああ、付いて来るの？」
璃瑠が満面の笑みを見せた。
「美樹さんの死に顔を見るまで側を離れないつもりですから」
「なんだろうね、告白にも聞こえなくないんだけど、うれしくねーよ」

【1－1】

【1－1】

聖マリア学園はキリスト教系の寮制の女学校である。
去年開校二十周年を迎えたそうで、私には基準が分からないがわりと新しいようである。
新しい建築であるが三年前に改築を行い、セキュリティ面は完璧らしい。
外壁は高く、防犯カメラが２４時間稼働しており寮生活にありがちな寮長の目を掻い潜り……なんてのは無理らしい。
まぁ寮に入ったことはないので、実際どんなものかは計りかねるが。
とりあえず言うなれば、私とは程遠い世界である。
それと言うまでもないが金持ちのお嬢様ばかりである。

そんな聖マリア学園の応接室にある、なんとも居心地のいいソファに腰掛けて私の居心地の悪さは最悪であった。
まず応接室に通されただけで、貧乏性の私の体は拒絶反応を示した。
金かかってんな、と。やばい、蕁麻疹が出てきた。

「緊張しちゃうな、こりゃ」
「現場に入るときはいつでもそうあって欲しいものですね」

私のこぼした嘆きに鋭く横の少女が返す。
このちんまいのが私の現パートナー（別の人に変えて欲しい）である。

落合璃瑠（おちあいりる）、聞くところによると史上最年少の公安部員らしい。
１５歳にして私よりキャリアが長いと聞く……こんな国で大丈夫か？　まあ着任したての私と比べてもしょうがないが。
生意気にして不敬な口ぶりに対し私は璃瑠の髪をかき乱しながら諭す。

「リラックスが私のモットー、そして私という存在自体が癒し」
「賤しいの間違いじゃないですか？」

私の手を払いのけて璃瑠は髪を手櫛で直す。指先で栗色の細い髪が踊った。

性格は不敬、生意気、根暗、堅物、皮肉屋、喧嘩っぱやく、絶えず不快感と嫌悪感にまみれているせいで目付きが悪いと、まったくもって言うことなしである。
それでいて見てくれは良いと、嫌な人間というより他はない。
邪魔になるからと短くしている髪を伸ばせば何処ぞの美少女コンテストとやらで、
なかなかの成績を収めてくるにちがいない。まぁ優勝するのは私であろうが。

ここで待たされて5分経っただろうか、という時にドアが開いた。
長身の女性が入ってくる、化粧っ気は薄く切れ長の目が印象的である。
こういった所ではシスター服かと思ったが黒のスーツであった、意外。
というよりも、高校の制服にコートといった出で立ちの私たちが場違いである気がしてくる。
まあ年相応であるし、一応わざわざ制服を着る理由もあるのだが。
スーツの女性が頭を下げた。

「お待たせしてすみません。関と申します。学園からは捜査に最大限協力するよう言われております」
「公安部公安第六課の伏見です。こっちは同じく六課の璃瑠……じゃねーや、落合です」

公安部公安第六課超自然現象及び事件特別対策係。
やたらながったらしいので、六課とみな呼ぶ。
良い略し方がなかったらしい。ゲンケンと呼ぶのもいるが、いまいちだと思う。
超自然現象とは言ってはいるが、実情は巷で「魔法」と呼ばれている現象を追っている。

【1－2】

さっそくですが、本題の方に。と璃瑠が急かした。

「所轄に何度も同じ話をしていると思うんですけどお願いします」

「はい。おそらく大体の情報はお聞きになられているかと」

関さんが二枚閉じの紙を机に滑らす。

個人情報のデータベースを印刷したもののようで家族構成から成績、性格に至るまで記述されている。

入間沙織（いるまさおり）、１６歳。顔写真は大抵写りが悪いものだが、この子は写真からして美人だった。

眉の辺りできれいに切り揃えられた前髪に、大きな目。

成績優秀、生活面では品行方正で部活は弓道で全国大会出場経験あり。

敵わんなこりゃ。そんな感想をこぼしそうになる。

「逆に美樹さんが勝てるような相手っているんですか、人間で」

「失礼だな、居るよー、一人くらいはいるよー」

「人間で！？」

「居るよ！」

関さんが遠慮がちに喋った。

「話を続けてもよろしいでしょうか」

「すいません、つづけてください」

「六日前に、寮長の方からわが学園の生徒が一名、入間沙織が見当たらないとの報告を受けました。

校内をくまなく探索しましたが見付からず、家の方にも連絡はありません」

入間沙織の写真の顔を焼き付けながら、私は話を続ける。

「失踪届けが出されたのが、その二日後ですが」

「来ていただいたときに見えたかもしれませんが、わが学園の周囲は3．5メートルの塀に四方を囲まれ出入り口は計四箇所以外にはありません。

一箇所は常時施錠されており、他の三箇所には守衛を置いており出入りにはここでのチェックが要求されます」

関さんが寮生向けの規約を私に渡した。

これによるならば、寮からの外出は厳しい制限はないようであるが、

外出の際には外出簿に行先、用件および帰寮予定時を記入しなければならない。

出入り口には守衛がおり内外からの通過は防犯カメラでチェックされている。

また守衛にＩＤカードをチェックされその記録をつけてからでなければ外に出ることは出来ない。

外部の者が入るには簡易手荷物検査もされる。少々大げさではないかと思うが、これも時代なのだろうか。

ちなみに私たちは入り口で散々止められた。

そりゃ、女子高生が警察名乗ってきたら不審がるのも分かるが、もうちっとグローバルな視点をもてないものか。

あとうちの課からちゃんと連絡しておかないものか。しね、課長。

「外出記録には入間沙織の名前はなく、防犯カメラにそれらしき姿もありませんでした。

また失踪した日の午後六時頃には学園内での目撃情報がありました。」

出入りがかなり制限される。
仮に入間沙織が家出？したとして寮から勝手に出るには監視カメラに映らず、守衛の目を掻い潜らなくてはいけない。
もしくは私の身の丈三つはある塀を乗り越える。現実的ではないな。
かといって学園内部にいたとしたらとっくに見つかっているはずである。

「だから失踪届けが遅れた、と」

所轄の方から捜査資料のコピーは貰ってきてある。
妙な感じがしたのか、それなりにしっかりとした調査がしてある。

「入間沙織には失踪する理由はありましたか？」

璃瑠が入間沙織の生活面の評価とにらめっこしながら聞く。お前も少しは優等生を見習え。
璃瑠の質問に関さんは即座に返した。

「ない、と言い切れます」
「絶対に？」
「はい。真面目な子でしたから」

書類上の評価をそのまま受け取るならそのようである。
関さんは少し声を落とした。

「入間沙織は学園内から消えたんです。誰の目にも触れずに」

【1－3】

「入間さんは非常に真面目な生徒です」
「みたいですね」

関さんは入間沙織に信頼を置いているようだった。

「無断外出をしたことも帰宅予定時刻から遅れたこともありません。学業も前向きに取り組み、見本のような生徒でした」
「美樹さんも駄目人間の見本のような人ですよね、あれ？　人でしたっけ」
「もし動物園で見かけたら教えてくれ」

捜査資料によると当初は入間佐織が家……寮出した可能性が高いとみて彼女の友人に話を聞いて回ったらしい。
しかし友人達は口を揃えていっている。
真面目な入間佐織がそんなことをするとは思えない、何かに悩んでいる素振りも無かった。
「入間沙織は消えてしまった」のだ、と。
彼女たちが「消えた」と言ったのはそれだけこの学園から内密に抜け出すことなど不可能だという意味であろう。
そして捜査の過程でもそう判断し、人が消えた。という怪奇な事件として公安六課に回された。
筋書きには納得できる。

璃瑠が捜査資料とにらめっこしながら聞く。

「しかし、入間沙織が失踪当日に大きな荷物を持っていたという証言がありましたよね。
家出という線は有り得なくも無いと思うんですが」
「それはそうですが、だとしたらどうやって学園から内密に出たんでしょうか」

そうする理由も無いか。
外出自体は出来るのだから、適当な理由でもつけて行方さえくらませればいい話である。
消えた女学生ねぇ……。
ひとまずは手軽なところから捜査に取り掛かろう。

「防犯カメラの映像と学園内を見せていただけますか」
「ええ」

璃瑠に防犯カメラのチェックを任せて私は学園内を見せてもらうことにした。ものすごい嫌そうな顔をしたが。
適材適所である。動体視力がよく、視野も広い璃瑠に任せた方が良いに決まっている。
別に面倒だからというわけではない、断じてない。

人が消えた。その可能性よりも入間佐織が理由はなんにせよ、なんらかの手段で外部に内密に出たほうが有りうる。
公安六課としては人が消えた。という選択肢を消してはならないが、それを最優先にしてはならない。

「休みの日ってのは寮生はどうしてるんですかね？」

関さんに案内してもらいながら学園内を探索する。

あまりに広いので、見て回るだけでも時間がかかりそうである。学園内の捜索はすでに所轄の警察官なり学園の職員がやっているのでどうしようか。

「基本的に寮におります。部活に出る生徒も多いですが」

今日は休日なのに難儀なことである。私はそういったものに入ったことがないので心情が理解出来ない。

この聖マリア学園は部活が盛んなことで知られているらしい。文武両道、お金持ち。

誰か私を玉の輿に乗せてくれないものか。

【1－4】

【1－4】

学内を外壁沿いに一周回ったあと校舎を真っ正面から眺められる位置に出た。

外壁を見た限りよじ登れそうな場所は無かった。

外に内密に出る方法は璃瑠の防犯カメラの報告と照らし合わせて考えることにする。

「学内の建物はいくつありますか？」

「学舎が2つ、大聖堂が一つ、寮が2つ、あと屋内運動場が併設されている部室棟です」

目視でありとあらゆる部屋を確認したと聞いたので、見落としそうな場所を考える。

入間佐織が学園内に隠れる理由があるかは分からないが、仮に能動的に隠れているとするなら同じ場所に一週間近く留まっているとも思えない。

とはいえ、今の段階では外に出たかすら定かでないのだ。

そこまで考えていると横やりが入った。

「関ちゃーん！」

呼び止められた方向を見ると一人の女学生が駆け寄ってきた。

関さんが長身のせいもあるだろうが、並ぶとその女学生は大分小さい。

「あぁ、ちょうど良かった。

この子が入間さんのルームメイトの薬師寺早苗さんです」

薬師寺早苗と呼ばれた女学生がしげしげと私を見た。
眼鏡におさげとは今時珍しい子だと思う。
あとうるさい子だと思う、刑事の直感として。
薬師寺早苗は私と関さんを交互に見る。

「関ちゃん関ちゃん。この子なになに？　転校生ー？　サオリンがどうしたのー？」

サオリンというのは入間沙織のことか。関さんが私をチラッと見た。
捜査資料によるならば、薬師寺早苗は入間沙織と失踪当日に会って話をしている。
彼女のが最後の目撃証言である。
話を聞いてみるのも悪くない。

「入間沙織さんのことで話を聞きにきた刑事なんだけど、薬師寺早苗さんだっけ、ちょっと良いかな？」

私の言葉を聞いて薬師寺早苗は目を丸くした。そして叫んだ。

「刑事！？　ホントに！？　高校の制服着てるよ！？」
「女子高生刑事なのよん」

私は笑いながら警察手帳を見せる。
それを薬師寺早苗はしげしげと見た。そして叫んだ。

「すごーい！　ドラマみたーい！」
「すごいっしょー」

「刑事って高校生でもなれるのー！？」
「すごいっしょー」
「犯人とか逮捕したことあるのー！？」
「すごいっしょー」
「高校の制服って私服警官の範疇に入るのー！？」
「すごいっしょー」

― 5 ―

【1－5】

中庭のベンチに場所を移して私は薬師寺早苗から話を聞くことにした。
憩いの場だという、ここは休日にも関わらず生徒がチラホラ居た。
視線が気になる、そんなに私の美貌がうらやましいのだろうか。
捜査資料には薬師寺早苗から聞いた証言のデータがすでにあるのだが、生で聞くのとはだいぶ変わってくる。

「入間佐織が居なくなった日に何か変わったことは？」

私の質問に薬師寺早苗は堂々と即座に返した。

「なかったよー」
「失踪する理由に何か思い当たる節は？」
「わかんなーい」

本当に無かったのか、ルームメイトにすら隠していたのか。
話の方向を変えることにする。

「入間沙織が居なくなった日に最後に会ったのは何時ごろ？」
「えーと午後6時くらいだったかなぁー、勘違いしないんで欲しいんだけど夜のね」
「夜じゃない午後六時があるのか」

この世界は未だに神秘で満ち溢れているな。

「いや六時はまだ夜というには早すぎると思うなー」
「夜の、って自分で言ったじゃねーか」

あれだ、めんどくせぇ。

「とりあえず、その時の状況を思い出せるだけでいいから話してくれないかな」

薬師寺早苗がまたうなり始めた。指を唇にあて考え込んでいる。
一週間近く前の出来事になるので記憶はあいまいになるのも無理はないと思うが。

「たしかー6時前に部活が終わったからー、帰ろうと思って校舎の一階を通ったら丁度会ったの。
それで一緒に帰ろ？　って声かけたら用事があるからゴメンねって言われてそれで別れて終わり。
んで、その時大きめのバックを持ってた」

捜査資料には薬師寺早苗が6時ごろ入間佐織と会っていたことは書いてあった。
その時の聞き込みの内容も既に目を通してある。失踪理由に思い当たる節はなしともされていた。
最初に璃瑠が言っていた入間沙織が大きな荷物を持っていたというのは、この薬師寺早苗の証言によるものである。

「バック？」
「そう、普段使うやつとは違ってー青と白のスポーティーな感じのやつで赤いロゴが入ってた。
そうだなー旅行カバンみたいなやつ」
「中身は？」

「わかんなーい。おっきなバックだねって言ったら旅行みたいでしょって笑っただけだったからー」

【1－6】

入間佐織が失踪前に旅行カバンのような荷物を持っていた。
準備があったのなら何らかのアテがあったのだろうか。
私は関さんに聞く。

「家出ならぬ寮出だとしたら関さん、入間沙織に親戚は？　ここから行けそうな距離で」
「そこまでは……ちょっと分かりませんね」

聞き込みの段階で薬師寺早苗から入間沙織に会ったときに大きな荷物を抱えていたという証言は出ている。
それで当初は家出だろうということで決まりかけていた。
しかし、学園から秘密裏に出ることが不可能。理由を見当たらない。行きそうなアテには居ない。
と、それらの理由からいつの間にか彼女は消えたとされていた。

はい、そーですか。ではさすがにすまないわけで。
通常の捜査では解決できない事件を扱うのが六課であるが、通常の捜査では解決できないと最終的に判断を下すのも六課である。

「外出時には行き先も書くんでしたっけ」
「ええ」
「入間沙織の今までの外出先調べさせてもらっても？」

とりあえずは入間沙織の行き先を考えよう。見落としがあるかもしれない。

薬師寺早苗と携帯電話の番号を交換しておく。
それが終わって私は立ち上がった。それを引き止めるようにして薬師寺早苗は私に聞く。

「刑事さんはー、サオリンは家出だと思ってる?」

薬師寺早苗の問いに私はちょっと悩んだ。

「思ってるよ。消えたっていう答えじゃ給料も出そうにないしな」
「じゃあ一緒だー」

薬師寺早苗はうれしそうに笑った。屈託の無い笑みに一瞬驚く。

「?」
「サオリンは家出だと思うよー。消えたなんてありえないもんね」

ば、……あほ、……少し抜けていそうな子だと思っていたが、案外冷静なのかもしれない。
ルームメイトだから入間沙織の機微を感じ取っていたかも。
ただ、話を聞く限りそこら辺を聞き出すのは骨が折れそうだ。
薬師寺早苗は立ち上がった私を見上げながら笑う。

「だから刑事さんたちは、学園内より早く外を探した方がいいと思うな」

気のせいか、薬師寺早苗の言い方に何処と無く棘を感じた。

【1－7】

入間沙織の外出届を調べてみると、最低でも週一回は出かけているようだった。とは言え買い物の為が多い。

誰かに会っていた可能性はあるだろうか、家出するキッカケかアテになる人物がいたのだろうか。

「ん？」

三ヶ月前から月二回の割合で通院の為と外出届に書いてある。それ以前には見当たらない。

病名などは書いていなかった。

さすがにそこまでは踏み込まないのだろうか。

「関さん？　入間沙織には持病かなんかが？」

捜査資料にも最初に見せてもらった個人情報にも持病の話はなかった。

「持病といいますか、薬師寺さんが言うには三ヶ月前ごろから体調不良を訴えていて通院していたとのことです」

「体調不良？」

「詳しくは分かりませんが」

少しばかり気になったので先ほど教えてもらった薬師寺早苗の携帯に電話をかける。

連続した呼び出し音が鳴って、数秒。

さっき聞いたばかりの薬師寺早苗の間延びした声が電話越しに聞こえた。

『はいはーい』

「さっきの伏見です、何度も悪いな」

携帯の音声メモを起動する。

これがあれば電話での内容を録音保存が出来る。

『ほいほーいなんでしょー』

「入間沙織が通院していたらしいんだけど何か知ってる？

ああプライバシーに関わりそうなことなら無理には言わなくていいから」

まぁ病院に出向くだけであるが。

権力って恐ろしいね。

それに加えて私には美貌もあるから恐ろしいね。

『たいした話じゃないよー？　なんかー頭痛と疲労感がたまにすごいんだって』

頭痛に疲労感。

璃瑠が横に居ると私もそうなる。

「三ヶ月前からってなってるけど、それ以前は無かったてこと？」

通院のためという理由は三ヶ月前を境に登場している。

『たぶんそうだよ、急にだったから』

「病名とか原因とか」

『原因は全然わかんないんだけどストレスからくる精神的なものじゃないかってー』

【1－8】

「病名とか原因とか」
『原因は全然わかんないんだけどストレスからくる精神的なものじゃないかってー』

原因不明、病名不明の頭痛。
嫌な予感がした。
調子を変えないようにして私は聞く。

「吐血したり呼吸困難を起こしたことは？」
『えーと、過呼吸になったことは一度だけあったよー』
「変なこと聞くけど、そういう症状は君には」
『……ないよ？』
「……そうか、ありがとう」

まさか、な。
そうは思うもののそうとしか思えない。
璃瑠に携帯で電話をかける。今頃部屋にこもって防犯カメラの映像をチェックしているはずだ。
呼び出し音が唐突に途切れて璃瑠の声がした。

「あぁ、もしもし。璃瑠？」
『なんですか、鬱陶しい』

電話をかけただけでこの言われようか。

「失礼な。ビデオのチェックはどう？」
『流し見ですが終わりました。外出届のリストにある時間と人数通りで他の人物が出た様子はないですね。
リストにあった本人とカメラの映像の人物画一致するかの確認はしてません』
「それは手間がかかりそうだしな」
『が、外出時にＩＤカードの提示が求められるようですから多分不一致は無いと思います。
それと防犯カメラが途中で止められたりした形跡はありません』

完璧な仕事振りだ。私、要らないんじゃないですかね。

「ふーむ、分かった。こっちは入間沙織のルームメイトから話を聞けた。そっちに行くから合流しようぜっ！」
『いやですぜっ！』

切られた。
何故だ。
私はさめざめと泣いた。
慰めてくれる関さんの優しさにまた泣いた。

【1－9】

璃瑠の元に戻った私は薬師寺早苗から聞いた話を伝える。
関さんに守衛の担当時間を調べてもらっている間に璃瑠と話を進めることにする。

「……だそうだ」
「かくかくしかじかなわけですか」
「だそうだ」
「入間沙織が原因不明の体調不良を訴えていた」
「だそうだ」
「捕まってるところから逃げることを、なんていうんでしたっけ」
「だっそうだ」
「入間沙織が原因不明の幾つかの病状ですか……」
「つっこみは！？」

璃瑠は私を無視して、紅茶にスティックシュガーを5袋を一気に流し込むと口をつけた。
淹れてくれた関さんが見たら泣くだろうな。
高いぞ、この紅茶たぶん。なんたって私の舌が一口飲んだだけで痙攣している。
貧乏性の体だから。
口内炎出来そう。

「防犯カメラの件はさっき電話でも言いましたが、問題点は見つかりませんでした。
守衛は協力したとしても、カメラはどうしようもないですし」

「となると外壁かねぇ」

璃瑠が私にこの学園の地図を見せる。どこから手に入れたそんなもん。そこに璃瑠がボールペンで印をつけていく。

三箇所に印をつけるとそれを渡してきた。

「人目につきづらそうで出た先に支障が無さそうな場所です。まぁあくまで私の主観ですが」

「で？」

「外壁の高さは3．5メートル。不可能な高さではないですが道具なしでよじ登るのは無理かと思います」

「入間沙織は運動神経がよかったみたいだけど、ありゃ無理だろう」

「となると梯子か何かが必要になると思うんですよ」

とはいえ塀の前に梯子が落ちてたらさすがに気がつくだろうし、となると引っ張り上げたのだろうか。

もしくは梯子なしで外に出たか、梯子を元に戻す協力者がいたことになる。

ロッククライミングの趣味があったりはしないだろうな。

璃瑠が話を続ける。

「ただ梯子をまさか寮の部屋において置けるとも思いませんし、となると学園から拝借したと思います。

とはいえ学園側の備品が消えているという報告はないようですし」

「まぁ入間佐織が梯子を個人的に持っていたこともありえなくは無いけれど」

梯子が好きで飾っておくような人間だったかもしれない。

「そんな物が置いてあったらルームメイトの薬師寺早苗が気付きま

すよ」
「妙なインテリアで通せないか？」
「美樹さんの頭脳も妙なインテリアなんですか？」

これは馬鹿にされているのだろうか、ほめられているのだろうか。
飾っておきたいほど素晴らしいという意味で良いのだろうか。

「てか、学園の備品なんてそんな話あった？」
「捜査資料にあったじゃないですか。私たちの推理はここの所轄が最初にやったのと同じものをなぞってるだけですよ」

【1－10】

【1－10】

「てか、学園の備品なんてそんな話あった？」
「捜査資料にあったじゃないですか。私たちの推理はここの所轄が最初にやったのと同じものをなぞってるだけですよ」

スティックシュガーをそのまま飲み干しながら璃瑠は答えた。
甘そう、というか気持ち悪い。
璃瑠は甘党というには度をこしている。
本人曰く大量の糖分を取らないと脳が持たないらしいが、そんなことをしていたら体の方がもちそうにない。
量は食べれないらしいので、摂取方法が少々見た目によろしくないのである。

「ですから、これから先は公安六課としての推理になります」

璃瑠が真剣な顔つきになったので、私も気を引き締める。
膝を詰めるとはこのことか。

「美樹さん」
「なんだ」
「真面目な顔をしないでください。笑いが堪えられないです、というより気持ち悪いです」
「なんでだ！」

失礼な冗談を言うものだ、と思っていると璃瑠のグーパンチが顔

面に飛んできた。
鼻面に容赦なく痛撃が入る。のたうち回る私を無視して璃瑠は話し始める。

「入間沙織は失踪前に旅行カバンらしきものを持っていました」

『普段使うやつとは違ってー青と白のスポーティーな感じのやつで赤いロゴが入ってた。そうだなー旅行カバンみたいなやつ』と入間沙織は証言している。旅行カバンと断定出来るかは分からないが、大きな荷物を持っていたのは確かである。

「入間沙織は家出したと仮定して、入間沙織が学園から外に出たという証言、証拠がありません」

防犯カメラ、守衛の証言、外出届、このいずれにも入間沙織の存在はない。
まったく跡を残さず入間沙織は学園外に姿を消した。

「これを可能にするには防犯カメラに映らない、もしくは3．5メートルの外壁を飛び越える必要があります」

防犯カメラは24時間稼動しており、細工等は見られなかった。
また外壁を飛び越える道具は見つかっておらず、学園の梯子類の備品が消えたという話も無い。

璃瑠が声を落とした。

「そして入間沙織の原因不明の体調不良、これは魔法による中毒症状に当てはまります」

公安六課の目的は「魔法」だ。
私たちそのために居る。

「入間沙織は魔法使いではないでしょうか」

【1－11】

【1－11】

魔法の歴史は古く日本においても妖術と呼ばれ古典作品の多くにも登場している。

魔法という言葉に共通する意識は常人では不可能な奇跡的な結果をもたらすものということである。

中世ヨーロッパにおいて魔女狩りなるものが行われた歴史を鑑みれば、魔法というものは確かに信じられていた。

しかし、例えば魔女の仕業とされた謎の病なんてものは衛生環境による伝染病であったりなど現代社会に至るまでの過程で多くの不可解な出来事は科学的説明で決着がついた。

「入間沙織は魔法使いではなかったのでしょうか」

公安六課が担当する魔法というのはそれらのような「おとぎばなし的」なものではない。

魔法は確かに存在する、それは某小学生探偵ですら解けないような犯罪を引き起こす。

それは許されるものではない。

璃瑠の推測、入間沙織が魔法使いではないかというそれに、私は単純な疑問を呈す。

「だけど、入間沙織が魔法を使ってまで内密に学園を出る理由はなんだ？」

学園から出ること自体は簡単だ。荷物だって適当な嘘で誤魔化せる。
外出届けとＩＤカードのチェックさえしっかりこなせば、守衛に止められることも無い。
しかし、それすら入間沙織は嫌った。
「出ることを誰にも知られなくなかった、にしても翌日には発覚するでしょうし。確かに妙ですね」
入間沙織は家出だか寮出だかする理由がない、そう周囲は思い込んでいた。さらに学園から内密に出ることはほぼ不可能である。
だから消えた、という話が出た。
魔法を使ってまで誰にも知られずに学園を出るほどの理由。
親の元にも学園の元にも連絡をしない訳。
入間佐織の周囲の評価からすれば失踪事態がおかしなことであるのに。
こういう時は基本に帰れだ、と誰かが言っていた。
そう言おうとする前に璃瑠はタブレットＰＣを取り出して何かを睨み付け出した。チラッと覗くと捜査資料であった。
やっぱり私要らないんじゃないんですかね。
「魔法を使ってまで内密に出る理由、まず失踪の理由すら分かってないしなぁ。
ルームメイトでさえ理由は思いつかないって言ってたし」
私のぼやきに璃瑠は顔を上げた。
「……そのルームメイトの薬師寺早苗って人が旅行カバンって言っ

たんですよね？」

「そうだよ、さっき会った」

璃瑠が数秒考え込むと急に押し黙った。

璃瑠が黙ったので私は紅茶に口をつける。

やっぱ高い味だよこりゃ。ヘルペスが出そう。

貧乏性だから。

【1－12】

「お時間をとらせました。すみません」

そこで関さんが入ってきて私たちの正面の席に座った。
守衛のタイムテーブルを受け取ると璃瑠に手渡す。
私は関さんに向き直る。ここまでの話をはっきりさせとかなくてはならない。

「関さん。今回の入間沙織の件ですが、薬師寺早苗が6時ごろに入間沙織が旅行カバンを持っていたのを見たという証言が出た以上彼女は消えたのでなく家出したのだと私は考えます」

璃瑠が何か悩んでいるようだった。こういう時の璃瑠は無視するに限る。
璃瑠の集中力を切らすわけにもいかない。
まず機嫌が悪いので関わりたくない。

「ですから、入間沙織が家出に至った動機を調査し彼女の行くアテを探します」

魔法によって内密に学園を出たと判明しても彼女の行き先のアテがまったく分からないのだ。
話を続けようとした私を関さんが遮った。

「しかし、入間さんは家出なんてするような学生では……」

入間沙織がどれほどの信頼と期待をもって周囲から見られていたかは分からない。
しかし、彼女は消えた。とまで言わしめるほどの存在であった。
私は最大限言葉を選ぶ。

「関さん。人間誰にでも人には言えないような悩みや隠し事があります。
それが彼女のような真面目な人間の場合にはそれが良くない形で現れてしまうこともあります。
ただそれを周囲の人間が嘆くこ――」
「盛り上がってるとこ悪いんですけど」

璃瑠が言葉とは裏腹に悪びれずに口を挟んだ。
璃瑠はタブレットPCから頭を上げる。

なんでこのタイミングが悪い時に割り込んでくるかな。
璃瑠は私の不満に気付かないのか、気にも留めていないのか無視して関さんに向く。

「学生から話を聞きたいんですけど」
「はい？」

璃瑠はタブレットPCの画面、捜査資料を指で突きながら続ける。

「5時から6時の間に入間沙織に会ったって証言してるこの東楓（ひがしかえで）って人に」

【1－13】

【1－13】

璃瑠の希望で東楓の寮室に向かい私たちは話を聞くことにした。
捜査資料によれば東楓は17時頃から18時にかけて入間佐織に会っていたらしい。
東楓は快活そうな少女だった。ショートカットにした髪をおでこを出すようにゴムであげている。
元気一杯って感じなんだろうな、マスクしてるけど。
元気しか取柄が無いんだ、と笑いながら東楓は咳き込んだ。
河童の川流れみたいなもんだと思う。

こちらが年下だからか東楓は気軽な風であった。

「で、なんだ？　聞きたいことって」
「入間沙織が失踪した日に彼女に会ってますよね？」

捜査資料の東楓の証言を見ながら話を聞く。

「そうだよ。確か17時くらいに中庭で話をしてたんだよ。
17時50分くらいだったかなぁ、沙織の携帯にメールが来て誰かに呼ばれたみたいで。それで別れたんだよ」

捜査資料どおりである。会話内容は雑談、失踪を匂わせるような会話は無し。
入間佐織と東楓は仲の良い友人であるらしい。
休日に出かける時は大抵、東楓も一緒だったと言っていた。
そんな東楓ですら失踪の理由は分からないという。

入間沙織の抱えてる闇は思った以上に深いのかもしれない。
それとも、東楓が嘘をついていることは有り得るだろうか。
璃瑠が聞いた。
「その時の入間沙織の格好は分かります？」
「格好？　いつも通りだったけど」
「入間沙織がその日大きめのカバンを持っていたことは？」
「カバン？　いやー、いつも使ってるスクールバックだと思ったけど」
薬師寺早苗が旅行用のような大きめのカバンを持っていたと証言していたが、東楓と会っていたときには持っていなかった。
東楓と会っているときにはまだ家出の気はなかったのだろうか。
「その時、入間沙織と言い争いになったりは――」
「美樹さん、黙っててください」
璃瑠に制された。何故だ。
私はさめざめと泣いた。

【１－１４】

涙を流す私。
それを無視して璃瑠は話を続ける。

「メールで誰に呼び出されたかは分からないんですよね」
「『ちょっと呼び出されたからごめんねー。また明日ー』みたいにしか言われなかったけど。
わざわざ聞く必要もないし」

また明日、か。しかしその後に彼女は誰にも知らせずに学園を出た。
心境の変化があったのだろうか。
薬師寺早苗が会ったときには既に旅行カバンを持っていたわけであるし、となるとメールに何かありそうだ。

璃瑠が学園内の地図を取り出した。ちょっと考えてから質問に戻る。

「入間沙織と別れた時間は１７時５０分頃で間違いないですか？」
「確かそうだったと思うんだけど、聞きたいラジオが１８時１０分からあって寮にゆっくり戻っても間に合うかなって思ったから」

なんだか懐かしい言葉が聞こえた。

「ラジオ？」
「井草良太郎（いぐさりょうたろう）のエブリ６ってラジオ番組のファンなんだけど、知ら

ない？」

井草良太郎もエブリ６もまずラジオ自体にも知識が無い。

あまりそういったものには関心が無いので私には分からなかった。

璃瑠は聞くまでもなさそうである。

この時代にラジオとは。

とりあえず、時間の記憶違いはなさそうだ。

璃瑠が続ける。

「中庭から寮までどれくらいかかります？」

「へ？　１０分くらいかかるけど」

敷地内で１０分かかるというのは、やはりおかしいと思う。でかすぎね？

私の通っているコンビニでさえ５分だ。

ちなみにそこの深夜のバイト店員がおでんを入れるのが下手で気に障る。

はんぺんとかたまに折れるし。

璃瑠は私を放っておいて話を進めていく。

「入間沙織がメールで呼び出されて急いでるというか焦っている様子はありましたか」

「？　なかったと思うけど？」

璃瑠は満足したのか東楓にお礼をいって立ち上がった。よく分からんが聞きたいことは聞けたらしい。

私は最後に東楓に聞く。

「どんな些細な事でもいいんだけど、本当に入間沙織の失踪する理由に心当たりは？」

東楓は、数秒考え込む素振りを見せた。

「刑事にこういうこと言うと相手にされないのかもしれないと思ってたんだけど」

「実は私、刑事ってわけでもないんだ。だからそういうのは気にしないで」

「沙織はいつも誰かに見られてるような気がするって不気味がってた。

でも沙織は目立つ子だし仕方ないんじゃないかって思ってたけど。もしかしてそれってすごい大事なことだったんじゃないかなって最近思えてきたんだけど」

東楓の言葉は迷いが見えた。後悔も見えた。

「気にすることはないよ。それが本当かは分からない」

誰かに見られているような気がした。

それは精神的に危ない状態だったせいなのだろうか。

部屋を出て私は璃瑠に聞く。

「で、何か分かったのか？」

「入間沙織の目撃証言は幾つかありますが、時間的には薬師寺早苗が最後の目撃証言で、その前が今の東楓です」

今更な事を言う璃瑠に首をかしげながら、私は相槌を打つ。

璃瑠が私の方に振り返って言う。

私に向ける笑顔が怖い。

「美樹さん、こっから中庭まで全力で走ってみてください」
「なんで！？」
「ダイエットみたいなもんですよ」

【1－15】

【1－15】

よく分からん理由で中庭まで全速力で走らされた私は中庭で荒い息をしながら携帯を開いた。
またも周囲の目が気になる、先ほどとは違った目線が。休みなのに中庭なんかに来てるんじゃないよ。
璃瑠には中庭に着いたらすぐに電話をかけるように言われていた。呼吸を整えて璃瑠に電話をかける。

『お疲れ様です、着きました？』
「着いたよ、全速力だよ」

璃瑠が私に何をさせたいのかさっぱりである。さっぱりといえば私は胡麻ダレのつけ麺が好きである。
私はベンチに深く腰を下ろした。ここで、東楓と入間沙織は会話をしていたわけだ。
何が入間沙織の心境を変えたのだろう。彼女の心に少しでも近づけたら、と私は辺りに視線をやる。
ここから何が見えたのか。何が聞こえたのか。何を思ったのか。
璃瑠が平坦な声で言った。

『5分ですね。早いじゃないですか』
「どーも」

特に嬉しくない賞賛を受けた。

『東楓が入間佐織と分かれたのが１７時５０分。薬師寺早苗が入間沙織と会ったのが１８時頃。その間は１０分程度です』
「うん？」
『旅行カバンを東楓と会った時には持っていなかった。
仮に寮に旅行カバンを置いていたとしたら寮に取りに戻って校舎にまた戻るのを１０分程度で行わなければ、
１８時頃に薬師寺早苗に会うことが出来ません』
「確かにそうだけど」
『美樹さんの全速力で片道５分です。
しかし東楓と別れた後の入間沙織の目撃証言は薬師寺早苗のもののみで、全力で旅行カバンを担いで走る入間沙織の証言はありません』

入間沙織は学園内で知名度があった。
目撃証言の一つくらい出てきてもおかしくはなさそうだ。

『入間沙織の部屋を見せてもらうことにします』
「私も行こうか？」
『結構です。』

私はさめざめと（ｒｙ。

【1－16】

【1－16】

璃瑠の考えがイマイチ掴めないので、私は「魔法」以外で学園から出る方法を探すことにする。

私は正面門のところまで来ていた。正面門は塀の高さとあまり変わらない鉄格子の扉がありその脇に防犯カメラが設置してある。

防犯カメラは門の出入りを完全に捕らえられる位置であり、死角はなさそうである。

門の脇に監視所があり守衛が一人常駐している。

ここでＩＤカードの提示と外出届を提出することで、外に出ることが出来る。

カメラに映らずというのがやはり厳しい。璃瑠のチェックもあったし、カメラに細工したりはしていないようだ。

他の門に行っても同じだった。どこも防犯カメラがあり死角は見当たらない。

やはり入間佐織が魔法使いである可能性が高まってきた。

そこで電話がなった。

合流しろとのことだった。

随分と勝手だな。寛大な私は従うけれど。

入間沙織の部屋は薬師寺早苗の部屋でもある。

本日二度目の対面となる彼女は部屋の中をある意味荒らされているわけで。その面持ちには穏やかでないものが見えた。

薬師寺早苗の目には涙さえ見える。

「刑事さんー、この人が部屋をー」

「ごめんね、本当にごめんね。璃瑠って気が回らないからゴメンね」
「美樹さんは頭を回してくださいよ」
課長はちゃんと根回ししてほしい。
「で、何か見つかったのか？」
私は入間沙織の部屋の物を元に戻すのを手伝ってやりながら聞く。
璃瑠が透明なビニール袋に入れた幾つかの入間沙織の所持品を私に見せた。
「携帯の充電器がありました」
「そりゃ携帯くらい持ってるでしょ、最近の子なら」
私の返事に璃瑠は小馬鹿にした態度を見せた。
癪に障る。
「普通持って行きませんか、旅行カバンすら持ち出すなら」
璃瑠は他にも、なんて言って別のものも見せる。
携帯用の洗顔材、常備薬、はぶらしセット。
璃瑠が言いたいのはこうだ、これらのものを家出するなら持っていかないか、と。
「美樹さん、私は入間沙織がみずから失踪を選んだとは思えません。少なくとも旅行カバンの中には外泊するための準備はありませんでした」
「でも私は結構ホテルの設備に期待するタイプだな」
私の返事に璃瑠は眉をひそめた。わがまま姫の機嫌を損ねてしま

ったか。

「美樹さんが失踪すればいいのに」

「失敬な」

「失言でした」

「くだらなくて失笑するよ」

【1－17】

【1－17】

璃瑠が学園内の地図をまた広げる。
日ごろ人の出入りがなく隠れることが可能でありそうな部屋。
そう言って璃瑠は四つの候補を挙げた。第二小講義室、視覚講義室、教材室、屋内運動場第三倉庫。
どれも一週間の間に人の定期的な出入りがなく、鍵をかけることが出来るらしい。

「入間沙織は学園から出る気は無かったんです。まだ学園内に居ると私は思います」

それは少し飛躍しすぎではないだろうか。薬師寺早苗と関さんが口には出さないが、違うだろうと言いたげである。
璃瑠の見つけた入間沙織の私物は確かに持っていってもおかしくはない。
しかし、取るものも手につかずということだったのではないか。
東楓の証言によれば、入間沙織はなんらかのメールを受け取った。それをきっかけに東楓と入間沙織は会話をやめ別れた。
その時に入間沙織は薬師寺早苗曰く旅行カバンを持っていなかった。
そしてその１０分後、薬師寺早苗と会ったときには旅行カバンを持っていた。
中庭まで私が全力で往復して１０分だ。入間沙織が私より圧倒的に俊足であったとも思えない。
入間沙織の受け取ったメールに何らかの失踪するトリガーがあった。

メールを見た後入間沙織は急いで学園を出る準備をし、そこで薬師寺早苗に会った。
呑気に荷物をまとめてる暇があったはずが無い。
だから、色々な物を忘れていっただけだと私は思う。

「入間沙織が失踪してもう一週間近くも経ったわけだし、それに学園内は最初に捜索されてる。その可能性は低いんじゃないか？」

私の意見に璃瑠はあからさまに嫌そうな顔をした。
人の意見を聞くのって大事だと思うんです、私は。

「私の直感がそういってるんです
「勘かよ」
「あともう一つ理由が」

第六感とか言わないでくれよ。
璃瑠の推理の基本は一に直感、二に予感、三、四がなくて第六感となっている。五は無いらしい。

「なんで薬師寺早苗と入間沙織は会ったんですか」
「へ？」

いきなり名前が挙がって薬師寺早苗は驚きのあまり椅子から転げ落ちた。
まぁ、嘘だけど。

「この学園の出口は三箇所、外壁を乗り越えた可能性も考慮しますが。
しかし、どれを利用するにしても寮から校内を経由する必要はないんですよ」

薬師寺早苗が入間沙織と会ったのは校舎の一階だという。
校内に用事があった？　薬師寺早苗と会った時、用事があるからと言っていたらしいし。

璃瑠の推測はともかく学園内に何か証拠が残っているかもしれない。

「分かったよ。なんにせよ、ここに居ても仕方が無いし学園内調べに行くか」
「最初から分かってくれればいいんですよ」
「へいへい、分かったよ」
「へい、は一回です」
「へい」
「はいって言って下さいよ、はしたない」

誰か新しい相棒に変えてくれないかしら。

【1－18】

【1－18】

関さんの案内の下、何故か薬師寺早苗も引き連れて私たちはまず教材室に着いた。

幾つか教材室はあるそうだが、ここだけがあまり使われていないそうだ。

部屋に入ってみると窓が無いようで、廊下からの光だけが足元を照らしている。

埃臭さが鼻をつき、関さんが室内灯を点けるとそれがより強まった気がした。視覚的効果は恐ろしい。

「電気ついても暗いな」

「美樹さんの未来みたいですね」

天井近くまでダンボール箱が積んであるせいか、室内灯をつけても部屋は薄暗い。

どっかの潜入工作員が喜びそうな部屋だな。

部屋は狭く、壁の四方はアルミ棚が並んでおり人二人が横に並ぶのがやっとといったところだろうか。

物置以外の用途はなさそうである。

狭いので肩とか頭とかぶつけてしまう。

「こういうところだと璃瑠は小さくていいな」

「美樹さんも人間的に器が小さくていいですね」

怒らない、器が大きいから。

璃瑠の身長は１５０ｃｍだと本人は強く主張しているが、１５０ｃｍも無いだろうと私は睨んでいる。
怒るから言わないが。

「ちっちゃい刑事さんってー身長どれくらいあるのー」
「ちっちゃ……」

薬師寺早苗が遠慮の欠片どころか気配も無い発言をした。
ちっちゃい刑事は良くない。その呼び方は良くない。某スピリチュアルなんたらに詐欺師とか呼んじゃうくらい良くない。
璃瑠は不機嫌そうな顔をして渋々といった感じで答える。

「……１５０ｃｍです」
「えーでも、私は１５５ｃｍだけどーちっちゃい刑事さんより１０ｃｍくらい違うと思うよー」

薬師寺早苗にはデリカシーという言葉が欠如している。刑事の直感として分かる。
もう、りっちゃんとかそんなあだ名で呼んでもいいから、ちっちゃい刑事とか呼ぶな。
あと璃瑠が不機嫌そうなのに気付け、薬師寺早苗。お前は出来る子の筈だ。

「ちょっと並んでみようよー」

駄目だ、並ぶな。璃瑠の身長は１５０ｃｍだ、それでみんな幸せじゃないか。
検証とか要らないから。
後、璃瑠も大人でいて欲しい。怒るなよ、絶対に怒るなよ。

「視聴覚講義室まで案内しましょうか！」

関さんが提案した。

空気の読める大人の女性っていうのは素晴らしいと思います。

私は薬師寺早苗の背中を押す。

「いいですね！　行きましょう！」

埃臭いし、薄暗いし、陰気臭いと三拍子揃っているのでとっとと切り上げることにした。

【1－19】

【1－19】」

薬師寺早苗と璃瑠の間に関さんと私が割って入るようにしながら視聴覚講義室に着いた。

「ここが視聴覚講義室です」

関さんに鍵を開けてもらい中に入る。

続いて璃瑠が私の後に続くと、関さんが薬師寺早苗を入り口で引き止めていた。形としては私と璃瑠だけが部屋に入ることとなった。

たかが身長、されど身長。

「並ばないでください！　測らないでください！　もうそこでじっとしてて下さい！」

視聴覚講義室はキャスターによる移動式の長机が規則的にならび、入り口のある教室の正面に巨大なスクリーンとガラス戸の棚に映像メディアが置いてあるだけの殺風景な部屋だった。

映像を見るための部屋らしいので窓には遮光カーテンがかかっていた。

重たい黒が窓全体を覆っている。普段から遮光カーテンは締め切っているのだろう。

締め切っているせいか、芳香剤がいくつも置いてある。微かな刺激臭がした。

「これ、うちのと同じ芳香剤だな」

私はしゃがんで机の下を覗き込んでみると、教室の後ろの壁まで見渡せた。
段差もなく長机の脚は細いものであるので遮るものは何も無い。
つまるところ、何も見当たらなかった。しゃがみこんだまま私は聞く。

「この視覚講義室の鍵は普段はどこに」
「用務室と職員室、あと理事長のところに置いております」

教材室の鍵と同じ保管場所である。

「それは誰でも持ち出せます？」
「届けがあれば生徒にも貸し出しています。ごくたまに無くす生徒も居ますが」

えへへー、と照れくさそうに薬師寺早苗が笑った。お前かよ。

「なくしたのか」
「今月にねー。でもちゃんと最後には見つけて返したよー」

三日間なくされたんですよ、と溜息まじりに関さんが言った。

「あれだな、問題児がいると大変っすね。私もよく分かります」

大体、うちの六課にまともな人間が居ない。
そしてパートナーも問題児である。
良識にあふれ真面目な一般人の私としては関さんに精一杯の同情と最大限の共感をもっていた。
問題児のパートナーが不思議そうに私に聞く。

「知りませんでした、問題児本人も大変なんですか？」
「問題児はお前だよ！」

薬師寺早苗が驚きの声を上げる。

「私じゃないの！？」
「お前もだよ！」

めんどくせぇ。

【１－２０】

【１－２０】

第二小講義室とやらに着いた。
小講義室と聞いていたのだが、この大きさで小か。
三人がけの長机が横三列、縦に八列並んでいる。
関さんに部屋の室内灯を点けて貰うと、ＬＥＤの白光が差し込んできていた西日に紛れた。
ライトのスイッチを押すときにまじまじと見たが関さんの指って綺麗だな。あこがれる。

「関さん、指綺麗ですね」
「はい？　ありがとうございます。私が使ってるハンドクリーム教えましょうか？」

壇上に机、そして並んだ長机。他には何も置いていない。一応、部屋中を見て回ったが特に何も見当たらなかった。
強いて言うならば、１００円玉を拾った。ラッキーである。

「なんもないな」
「美樹さんの頭の中みたいですね」
「結構詰まってるんだぜ、知らなかった？」
「北海道産小豆１００％使用とかですか」

薬師寺早苗が驚きの（ｒｙ。

「刑事さん、そんなの詰まってるの！？」

「なわけあるか」

関さんが会話に割って入る。

「私としては食パンの彼の方が好きなのですが」

「関さんああいうタイプに弱いんだ？　しらねぇよ！」

ちなみに私はカレーパンのやつが好きです。

なんていうか、レギュラーなのにイマイチ人気が出ないような子が好きです。

関さんによれば第二小講義室の鍵は用務室と職員室、理事長に普段は置いてあるらしい。

教材室といい視聴覚講義室といい鍵はすべて同じ場所に保管してあるようである。

勝手に持ち出すことがどれも可能であるということか。

「刑事さんは、サオリンが見つかったらどーするの？」

「どうするって……」

拾った、もとい私の元に迷い込んできた百円玉を財布にしまっていると薬師寺早苗が話しかけてきた。

いつになく真剣な顔だった。

「どーするの？」

「それはどういう意味だ？」

意図が分からない。

「サオリンはね、すごい人だったんだよ」

【1－21】

「サオリンは昔から勉強も出来たし運動も出来たし、それに他の人に優しかったの」

入間沙織とルームメイトになってどれくらいになるかは知らないが、薬師寺早苗の言い方には子供時代を懐かしむような語り口であった。

今もまだ子供だと思うが。

「困ったことがあったら他の人はみんな、サオリンに相談してたし、どんな時でもサオリンは他の人に手を差し伸べてた」

入間沙織の評価を周囲の人間に聞くならばおそらくどれも同じようなものしか返ってこない筈だ。

優等生。人柄も良く、欠点のない。完璧な人間。

「だけどサオリンはいつも孤独な人だった。友達も楓っちしか居なかったし。

でも他の人はみんなサオリンのことを頼りきってた。でも一歩引いてるんだよー。傍から見たらどう見ても。」

高い壁だ。入間沙織を隔てていたものは。それを彼女が作ったのか、周りが作ったのかは分からない。

それを私が知る術はない。

入間沙織が失踪する理由など周囲の人間は有り得ないと言った。

それは事実でありそうでないとも言える。
周囲の人間にとっての入間沙織という人間は自分から失踪するような人間でなかった。困難から逃げ出さず、そして周囲の人間に優しく手を差し出す。「そういう」人間だった。
彼女の周囲にそり立つ壁ではそうとしか見えなかった。

しかし、薬師寺早苗は入間沙織が耐え切れなくなって逃げ出したのだと思っている。
それは周囲の人間からは決して出なかった言葉だ。

「サオリンは耐えられなくなっちゃたんだよー、きっと。そんな風に逃げ出したサオリンを見つけたら刑事さんはどうするの？
連れ戻すの？　またこの場所に？」
「……私の任務は入間沙織を見つけ出すまで。それから後は彼女自身が決めることだよ」

人生を比較してはならない。そこに一定の評価など存在しないのだから。
入間沙織の行為を否定してはならない。彼女の心境は察することしか出来ないのだから。
だから私は私情を挟んではならない。
けれど、私は自身と彼女を比べてしまう。

「サオリンには外壁よりもっと乗り越える壁があったのかもね」

薬師寺早苗がぽつりと呟いた。

璃瑠が私たちを呼んだ。次の場所に行くらしい。

一つだけ。

私の気のせいかもしれない。
私の思い違いかもしれない。
薬師寺早苗の言葉を深く考えすぎただけかもしれない。
けれど、一つだけ。

他の人とは、入間沙織から見た他人ではなく。
他の人とは、薬師寺早苗から見た他人ではないのか。

そうだとするならば、入間沙織は薬師寺早苗に手を差し伸べることは無かった、そう言いたいのか。

【1－22】

【1－22】

屋内運動場第三倉庫の扉を開くと、その名のとおりの倉庫であった。

卓球台に、バレーボールか何かのネット。分厚い体操用のマットが何枚も積みかさなり、得点電工掲示板がスイッチを切られた状態で並べられている。

室内灯のスイッチの場所が見当たらないと関さんが探し回る。

「ここじゃないですか？」

璃瑠が積んである木の箱の隙間に手を突っ込んでいた。

壁のスイッチの手前に木の箱を積んでしまっているらしい。

ちょっと手間取ってから璃瑠はスイッチに手を届かせた。

倉庫というより他はなかった。

つまるところ何も無かった。

入間沙織が筋トレしながら私たちを待っていたりはしなかった。

「やっぱりなんもないな」

「美樹さんの休日の予定みたいですね」

「ゲームで終わる璃瑠に言われたくない」

「反射神経を鍛えてるんですよ」

璃瑠がそこらかしこを見て回る。

入間沙織を見つけたら、どうするの？　か。

考えてもいなかった。
本人がそれを選んだなら、私たちにそれを引き戻す権利はあるのか。

いや、違う。入間沙織が自分から失踪を選んだという証拠は無い。
璃瑠はそう言っている。
それを確かめてからだ。

「美樹さん、ちょっと良いですか」
「なんだ？」

璃瑠が私に指を見せる。人指し指の先から少し血が出ている。

「あれ？　どうしたんだ、この指」
「さっきスイッチ押すときに木の箱で切っちゃたんですよ」

大した切り傷でもなさそうだが、見た目がよろしくない。少し痛々しい。

「で、絆創膏持ってないですか？」

無いとは思ったが一応カバンの中を漁る。やはり持ち歩いてない。
余分なものは持ち歩かないのが出来るヤツの証だと言われたので持ち歩いていない。
基本、なんでも璃瑠に持たせる。

「まぁこの程度なら舐めときゃ大丈夫でしょ」
「へ？　あ、ちょっ――」

璃瑠の指を取って指先を口に含む。軽く吸うと血の味がした。

てっきり璃瑠の指くらいなら砂糖の味がすると思っていたが。
口から離してハンカチで拭う。
大した傷口でもないので今日中にふさがるだろう。

見ると、璃瑠の口が静と動の間で揺れ動いていた。
何か言おうとしているのは分かるのだが、言葉が出ないようだ。
気のせいか、頬が高潮している様に見える。

「な、なにをしてくれてるんですかぁ！？」

何故か平手が私の頬にとんだ。
何故だ。
平手打ちされたのは私であるのに、璃瑠の頬が赤くなっていた。
口から泡を飛ばすとはこのことか。

「ば、馬鹿じゃないんですか！？」
「いやなんで……」
「一回死んでください」

慌てた璃瑠の姿を随分久しぶりに見たような気がした。
とりあえず、よく分からないが理不尽だ。

【1－23】

すっかり夜が夕方を追い出してしまっていた。
時間も時間なので、今日は切り上げることにする。明日は入間沙織の友人関係をあたるとしようか。
なんだか気まずい雰囲気のまま私と璃瑠は養護室に来ていた。
関さんに絆創膏を貰った璃瑠は何故か貼るかどうかを迷っている。
結局、四つの部屋を見て回ったが入間沙織に繋がりそうな何かは見付からず私は璃瑠から平手打ちを貰った。
何がいけなかったのだ。

璃瑠が指を切らなければ平手を貰わなかったのか。
壁のスイッチの前に木箱を積んでいたのが悪いのか。
なんなら最初から室内灯を点けっぱなしにしておいてくれれば良かったのに。
何がエコだ。

「何がエコだ……？」

引っかかる、何かが。どこかで納得させていた事実がどこか違うと叫んでいる。
関さんが私の言葉を拾った。

「当学園は教室は常時消灯して電力消費を抑えています。施錠すると消灯し忘れていても消えるようになっているんです。
それとソーラーパネルが設置――」

記憶を整理する。今日一日の映像が、脳内で瞬いて他の映像を連れてきて消える。語られた言葉が響く。それは共鳴しているように聞こえながらも、そのどれもが別々に触れ合わず重ならず気ままに通り過ぎていく。

そこに秩序は無い。しかし私に見せびらかすように、見せ付けるように。勝手気ままに響いているように、合奏を聴かせる様に。

映像に映像が重なり、動画が静止画になり、写真が奥行きを持ち、記憶の中の視覚情報が匂いを持ち、聴覚情報が手触りを持ち、私の視点が広がり、場所が変わり、見下ろし、見上げ。

私の中の記憶が洪水を起こし、その濁流が新たな流れと合流しうねりが削る。

その跡地に私は立って、世界を眺める。

記憶は記憶を越え目の前の現実となる。

それはまるで魔法のように。

『外出記録には入間沙織の名前はなく、防犯カメラにそれらしき姿もありませんでした。

また失踪した日の午後六時頃には学園内での目撃情報がありました』

『沙織はいつも誰かに見られてるような気がするって不気味がってた』

『入間沙織は家出したと仮定して、入間沙織が学園から外に出たという証言、証拠がありません』

『私は入間沙織がみずから失踪を選んだとは思えません』

『関さん、指綺麗ですね』

『サオリンはいつも孤独な人だった。友達も楓っちしか居なかったし。でも他の人はみんなサオリンのことを頼りきってた』

『並ばないでください！　測らないでください！　もうそこでじっとしてて下さい！』

『旅行カバンを東楓と会った時には持っていなかった。仮に寮に旅

行カバンを置いていたとしたら寮に取りに戻って校舎にまた戻るのを１０分程度で行わなければ、１８時頃に薬師寺早苗に会うことが出来ません』

『電気ついても暗いな』

『東楓と別れた後の入間沙織の目撃証言は薬師寺早苗のもののみで、全力で旅行カバンを担いで走る入間沙織の証言はありません』

『届けがあれば生徒にも貸し出しています。ごくたまに無くす生徒も居ますが』

『さっきスイッチ押すときに木の箱で切っちゃたんですよ』

『当学園は教室は常時消灯して電力消費を抑えています。施錠すると消灯し忘れていても消えるようになっているんです』

『これ、うちのと同じ芳香剤だな』

『原因不明の体調不良、これは魔法による中毒症状に当てはまります』

『そうだなー旅行カバンみたいなやつ』

『入間沙織は魔法使いではないでしょうか』

『なんで薬師寺早苗と入間沙織は会ったんですか』

いうなればパズルだ。まとまりも列もない言葉達が螺旋を描き、収束し、崩壊し、反発し、離散し、また結合していく。

言葉は記憶を、事実を、過程を、憶測を、予測を、推測を、推理を矢のように貫く。

それは鮮やかにうねり輝きをまし囁き増幅し言葉が現実が記憶が、確定できない答えに寄り添っていく。

それはまるで魔法のように。

閃きと言う魔法が。

私の中で。

姿を。

見せた。

それはまるで魔法のように。

言葉で、瞳で、振舞いで、そして魔法で。

「――少女は欺いた。」

「はい？」

璃瑠がいぶかしそうに私を見る。

「トリック分かっちゃったかもしれない」

【1－24】

【1－24】

非常灯の明かりだけしかない、校内の廊下はぼんやりとした明かりに照らされながらも確かに暗闇を隠し持っていた。

隠し切れなかったのか、見せびらかせているのか、暗闇は確かな存在感を誇示している。その中に目を凝らせば何も無いことは分かるが、その目を凝らす一瞬に何かが視界の端を通った気がしてしまう。

本能的に暗闇を私たちは避けようとする。故に、私たちは暗闇を照らすかがり火を求めた。いや人とすら呼べなかった時代から誰かが火に手をかざしていたのだろうか。

科学の発展はまるで暗闇が存在しないかのごとくまばゆい光で世界を照らし続けてきた。けれど、その灯台の下は暗闇が這い明かりが強ければ強いほど暗闇はその反動で黒を増していく。

その反動は私たちがふと気付いた時に襲ってくるのだ。

明かりに目を奪われ、気付けないだけで。

慌しい足音がした。

「ごめーん刑事さん、待った?」

「ううん、今来たとこ」

薬師寺早苗が懐中電灯片手にやってきた。暗い廊下だと昼間見た彼女とは別人に見える。

「で、どうしたの?」

私は携帯で視聴覚講義室の前に彼女を呼び出したのだった。璃瑠には別の場所で待機してもらっている。

「ちょっと気になることがあってな」

視聴覚講義室のドアを開けて、薬師寺早苗を招き入れる。

暗い廊下から「明かりのついた」視聴覚講義室に入ると一瞬目がくらんだ。

「確認したいんだけど、入間沙織に会ったのは何時だっけ」

「6時くらいだったよ」

「その時、旅行カバンみたいなものを持ってたんだよね」

「そうだよ」

「その時、会ったのはお前がメールで呼び出したからだよね」

「違うよ」

「お前、今2つ嘘をついただろ」

薬師寺早苗の目は私を見据えていた。逸らす気配はまったく無い。動揺の色は見えない。しかし昼間に見た色はない瞳だった。

「入間沙織は6時頃、旅行カバンのような物を持っていたって言ったよね。

でも、お前の前に東楓が入間沙織と会っていた。東楓の証言では5時50分頃に入間沙織にメールが来たのをきっかけに二人は分かれた。

お前に会うまでの10分間の間に何処から旅行カバンを持ち出してきたのか。

中庭から寮までは往復で走って10分はかかるし、その時の目撃

証言はない」

東楓の証言は5時50分まで。その後に入間沙織の目撃証言はなく、6時頃の薬師寺早苗のものだけである。そしてそれを最後に薬師寺早苗は姿を消した。

「私たちは旅行カバンを持っていたことから入間沙織は家出だと思い込んだ。

でも、学園から外に出るのに旅行カバンを持って校内を通る必要はない。だから校内でお前に会ったからには入間沙織には何か校内へ向かう理由があったということになる」

それを私たちは探した。

璃瑠は学園内に入間沙織が居るのではないかとまで言った。

家出するために旅行カバンを持っていたにしては持っていく荷物がおかしいと。

「でもその何らかの理由は分からなかった。

だから見方を変えた。

何故、旅行カバンを持っていたという証言が東楓の時にはないのか。

何故、旅行カバンをどこかに取りにいったとしたら、東楓と薬師寺早苗の証言の間の時間に目撃証言がないのか。

何故、校内で薬師寺早苗に会ったのか」

その結論にたどり着くまで随分と遠回りをしてしまった。

いくつも勘違いしてしまった。

ミスリードさせられてしまった。

「入間沙織は旅行カバンなんて持っていなかった」

入間沙織が旅行カバンを持っていたという証言が薬師寺早苗以外から出ない理由は簡単だ。

誰も見てないからだ。

なら、薬師寺早苗だけが入間沙織の旅行カバンの証言を出来たのは何故か。

「お前、入間沙織が旅行カバンを持っていたって嘘をついただろ？」

【1－25】

「お前、入間沙織が旅行カバンを持っていたって嘘をついただろ？」

その嘘はあるミスリードを引き起こす。

入間沙織が自分から失踪を選んだのではないか、というミスリード。

そのミスリードを引き起こさせる理由は何か。

逆に考えればいい、入間沙織が学園に居ないという、かりそめの真実で隠れてしまう答えは何か。

入間沙織が失踪を選んだと私たちが思い込んで得する人物は誰か。

「薬師寺早苗、お前は入間沙織をメールで呼び出しこの視聴覚講義室に監禁した。

それが私の出した結論だ」

私の結論を聞くと薬師寺早苗は笑顔になった。拍手までしてみせる。

「すごい、すごい。刑事さんのお話はよく出来てると思うよ。うん、おもしろい。でもそれじゃ肝心のサオリンは？

ここにいるんでしょ？　どこー？　サオリンどこなのー？」

彼女は手を顔の上にかざして辺りを見回す。

無邪気な仕草。

部屋を一通り見渡して私に向き直る。挑発的な瞳の奥を私は覗き込もうとする。

「ここの鍵を三日間失くしたと言っていたでしょ。鍵を複製するのに三日もあれば十分だ」
「それで合鍵を作って私がここに自由に入れるようになっていたって刑事さんは言いたいの？」
理解が早くて助かる。
「でもそうだとしても、サオリンがこの視聴覚講義室に居ないんだったらただの思い違いだよ。
ここに監禁しているっていうならどこに居るのー？」
「居ないな」
それを聞いて薬師寺早苗が口を開こうとしたのを私は遮る。
「いや、正確には『誰も居ない講義室の映像』を見ているわけだ。いや見せられているわけだ」
私は視聴覚講義室の映写機のスイッチを入れた。
スクリーンに映像が流れ出す。一昔前の洋画だった。何かの授業で使ったのだろうか。
「目から入る情報というのは簡単に言うと光が物に反射しそれが眼の中で像を結び脳に伝えてるわけだ。
この映写機による映像も同じだ。そう見えるように光を反射させてるわけだ。
で。もし、この教室の空間にプロジェクターに投影するように偽の視覚情報を貼り付けることが出来るとしたら、わたしたちが見えるのは実際にあるこの教室の映像ではなく、その上に重ねた偽の視覚情報しか見ることが出来ない」

「刑事さんのお話が難しくてわかんないんだけど」
「私たちの見てる景色に別の景色を上書き出来れば、ここにいる人間沙織が見れないってこと」

存在さえ気付かせないプロジェクターなどあるわけもないし、どんなに精巧な映像でもプロジェクターに映されていれば私たちは気付く。
だが仮に空間に精密な映像が投影できたら。私たちの視覚情報に上書きが出来たなら。

「それを可能にするのが『魔法』だ」

【1－26】

【1－26】

「今、私が見ているこの視聴覚講義室の視覚情報、つまり映像は魔法によって写真かなにかを基にしたデータを見せられているんだ。魔法を用いて『誰も居ない視聴覚講義室の映像』をこの空間に貼り付けている。

このスクリーンみたいにな」

映像を止める。映画は、カップルが歩く石畳の街並を映しているところだった。

「魔法……？」

「とぼけるなよ。入間沙織に魔法中毒の症状が出ていたのはルームメイトであるお前が魔法使いだからだ。

生活時間の多くをお前の側で過ごしたからお前の魔力に当てられたんだ」

魔法は有毒だ。存在しているだけで人体に悪影響をもたらす。強力な魔法使いであればあるほど、周囲の人間も巻き込む。

薬師寺早苗が不機嫌な顔になる。電源を切った懐中電灯のストラップを指にかけて回す。プラスチックと金属が触れ合う小刻みな音がした。

「ねえ、刑事さん。私が魔法使いだって言われてもー意味が分からないんだけどー。

それにー、そんな魔法があるっていう証拠はー？　今見てるこの部屋は魔法による偽の映像だっていう証拠はー？

魔法なんてゲームじゃないんだからさー」

「この部屋が監禁場所に使われた理由は、この部屋全体を入り口から見渡して隅々まで見ることが出来るからだ。

魔法で視覚に偽の情報を流すことは出来ても、詳しく調べられたらボロが出る。

誰も居ないということを見ただけで印象付けなければならない」

「へー」

「現に、私たちが今立ってる入り口から入ってすぐのこの場所から、この部屋全体を見渡して隅々まで見ることが出来る、床に誰かが転がっていないことも分かる。

それはなぜか、……偽の情報とはいえその映像が視覚に認識されているからだ」

「ふーん」

床のカーペットに何かのシミがあることも。長机の下の網棚に何も乗っていないことも。部屋には誰かが転がっていないことも。遮光カーテンが閉まっていることも。

それらは確かに見ることが出来る。

「で、一つ引っかかる点が出てくる。この魔法は空間に景色を貼り付けているわけだが、脳に直接映像を送り込んでいるのではなくて間違った景色を見せられているだけだ。言うなれば蜃気楼に近い」

「それで？」

「なぜそれが見えるんだ？」

私の質問の意図を測り損ねて、薬師寺早苗は言葉につまる。私は入り口近くの室内灯のスイッチの前に立つ。

「物が見えるのに必要なものは3つある。光を反射する物体、それを見る人間の視覚、そしてもう一つ、光源つまり光だ」

そのどれかが欠ければ私たちは何かを見ることが出来ない。それは景色も同じだ。

しかし、この部屋には一つ欠けている。なのに、この部屋の景色は確かに見えている。

「この部屋室内灯が点いてないんだよ。遮光カーテンも閉まってて電気も消えてるのになんではっきり見えてるんだろうな。

はっきりとこの明るい部屋が」

【1－27】

【1－27】

「この部屋室内灯が点いてないんだよ。遮光カーテンも閉まってて電気も消えてるのになんではっきりみえてるんだろうな。

はっきりとこの明るい部屋が」

「それはー……」

「私がこの部屋の違和感に気付いた理由は一つだ。

最初にこの部屋に入った時、関さんはお前を入り口で食い止めてて、部屋の中には入ってなかった。

最初に入ったのは私と璃瑠だけだ。私は部屋の室内灯のスイッチの場所なんて分からないから、スイッチを点けるのは関さんに任せていた。

璃瑠も部屋に入ってずっと私の横にいたし、誰もスイッチなんて押していない。

なのに、部屋は明るかった。

上映用の遮光カーテンが閉まっているのに」

校内は節電の為に使用されていない部屋は常時明かりが消されており、施錠すると自動的に室内灯は消えると関さんは言っていた。

最初に入った時に、室内灯のスイッチを押さなければ部屋の明かりが点くわけがない。

誰も気付かなかった、気にも留めなかった。

「この部屋を一目見ただけで誰もいない部屋だと認識させるのに、部屋が暗ければそれは出来ない。

だから、この部屋に貼り付けられた偽の映像は、部屋の室内灯をつけた状態の部屋だった」

暗い部屋を魔法で見せても意味がない。部屋を見渡すだけで誰も居ないことを認識させなければならないのだから。

だからこの部屋に貼り付けられている映像ははっきりと見ることが出来るように明るい部屋のものだった。

元の部屋がどんなに暗くてもその上に偽の映像を貼り付けてしまえば、私たちはその偽の映像をしっかりと認識する。

そこに矛盾が生じた。

例え見えないスクリーンだとしても、流れる映像でその存在は認識される。

「室内灯もついておらず遮光カーテンが閉まっている。なのに私たちには確かに明かりのついた視聴覚講義室が見えてるんだ。

これが魔法の存在の証明だ。気付けないレベルで偽の情報を見せられているんだよ」

薬師寺早苗が唇を噛んだ。表情がより一層険しくなる。

「刑事さんの言ってることは面白いよ。だとしても私が使ったって証拠にはならないんじゃないの？」

噛み付くような勢いで言い放った言葉。

魔法による犯罪はそこが厄介だ。

証明するのは難しいが、証拠も見付かりづらい。

しかしそれを見つけるのが私の仕事である。

「魔法を用いて『誰も居ない視聴覚講義室の映像』をこの空間に貼り付けている。

部屋に入っても違和感を覚えないほどに正確に映像を再現している。

だが魔法は完璧に元データを再現しすぎて犯人にとっては写すべきものでないものも写してしまっているんだよ」

光が物に反射しその反射したそれが私たちの眼に入り視覚情報として認識される。

この部屋には一つだけ厄介な反射する物が残っていた。

「そこの棚のガラス戸に映ちゃってるぜ。カメラを構えるお前の姿が」

【1－28】

「そこの棚のガラス戸、そこに映ちゃってるぜ。カメラを構えるお前の姿が」

薬師寺早苗はミスをした。基にするデータとして明かりをつけた誰も居ない視聴覚講義室を写真にとり、その写真をこの空間に貼り付けたときに。

写真を完璧に再現したために、この空間に描写されている偽の映像にガラス戸に映っていた風景も入れてしまった。

その写真を撮影する瞬間の薬師寺早苗を。

「これ以上の言い逃れは出来ないぜ」

私の言葉に薬師寺早苗は数秒を静止すると、険しい表情を崩した。何度か深呼吸をして口角を上げて見せた。

「まさかー室内灯で気付かれるとは思わなかったよ」

「あとは芳香剤だな。その匂いにまぎれて刺激臭がした。排泄物はオムツ処理だろうが、臭いがかすかに残ってた。

最初は気付かなかったけど」

薬師寺早苗が目を閉じた。彼女が指を鳴らす。

川のせせらぎの様な音がして、空間が剥がれ落ちていく。空間の端が解れ、光の粒子に変わり粒子が瓦解し粒子よりもっと小さな一瞬の煌きに変わる。

風に流されるようにしてその煌きは渦を巻き流され溶ける。

世界はドット絵で、その一ピースが崩れていくごとに元の世界の暗闇がその崩れた隙間から覗く。
私は壁の室内灯のスイッチを押し込み、ＯＮにする。
景色の崩れた隙間から光が差す。気付けば足元が崩れていた。
かりそめの映像が崩壊し、私の立つ場所で色を持った光の粒子が天に昇っていく。
見えている景色が、私と彼女以外の全ての景色が崩れていく。

崩れた景色の先、正しい景色の部屋の隅に一人の少女が見えた。
写真で見た少女だった。
床に転がされている入間沙織は手錠とガムテープで自由は奪われていたが、生きているようだった。

「寮の部屋に監禁しとけば、ばれなかったかもな」
「いやだよ、部屋に置いとくなんて」

崩れた景色はもう既に跡形もない。しかし入間沙織が転がっていること以外は今の景色は何も変わっていない。
完璧な魔法だった。
完璧ゆえに彼女はミスをした。
けれど、いくつもの巧みな嘘に騙されてそこまでたどり着くのに時間がかかってしまった。
彼女は見事に欺いたのだった。

「すごいね、刑事さん」
「本当を言うと半分ブラフだったよ」

ガラス戸に映りこんでいた姿は薬師寺早苗だと言い切れるほど鮮明なものとは言い難い。
だが、十分だ。少なくとも細かい証拠は積み重なっていたのだか

ら。

入間沙織のガムテープをゆっくりはがしてやる。
涙で乾いた瞳が助けを訴えていた。
写真と謙遜がないくらいに入間沙織は美人だった。
しっかりと通った鼻筋に薄い唇。写真では気付かなかったが口元にはホクロがあった。

「大丈夫か？」

入間沙織がただ頷く。擦れた声にならない声が口から漏れた。

【1－29】

「先に用事を済まさせてくれよ」

薬師寺早苗の細い手首に冷たい無機質な手錠をかける。

罪状はなんだろう、わかんねぇ。てか、逮捕で良かったのかも分からない。璃瑠を呼んでからにしとけば良かった。

携帯電話で璃瑠を呼び出す。

「璃瑠」

『はい』

「入間沙織を保護した。こっちまで上がってきてくれ」

『了解です。あと勝手に薬師寺早苗に手錠とかかけないでくださいよ』

「おお……」

薬師寺早苗の手錠を外していると、可愛そうなものを見るような瞳に射られた。

いや、でも魔法使いの犯人相手に自由にさせとくってのもおかしな話ではないだろうか。

手錠を使わずに動きを封じる方法、抱きしめたりしてればいいのだろうか。

「美樹さん！」

「来たか。そこに入間沙織がいる。公安所轄の病院まで搬送してくれ。それと六課の回収班に連絡を」

璃瑠と、璃瑠が連れてきた救急隊員に声をかける。
璃瑠が薬師寺早苗の斜め前に陣取る。薬師寺早苗が一歩でも動けば実力行使に出ると言わんばかりに璃瑠は殺気立たせていた。
ストレッチャーに乗せられ運ばれていく入間沙織から薬師寺早苗は目を逸らした。
一時の慌しさが、去ると薬師寺早苗は口を開いた。

「刑事さんは準備がいいね」
「本当なら私が魔法を解除したかったんだけどね。お前が犯人だっていう証拠がなくなっちゃうからさ」

璃瑠にチラッと視線をやる。何も言わないので、私は質問を投げかける。

「なんでこんなことになったんだ」
「……。」
「入間沙織のイジメは酷かったのか？」
「なんでそれを？」
「勘」

人には、その人自身の歴史がある。それは言葉に表れる。
その一瞬が見える時があるのだ。

「サオリンはみんなに優しかったんだけどねー。
私に対してはそうじゃなかったんだ」

明るい口調は崩さない。まるで他人事のように。

「こいつはずるいよ。真実なんて多数決だから」

【1－30】

【1－30】

薬師寺早苗の語る言葉は途切れ途切れで断片的で、拾い集めて繋げて形を見繕ってもそれはどこか欠けた物だった。

私は彼女の語る以上のことは訊ねなかったし、璃瑠は無関心を決め込んでいた。良心の欠片も残ってなければ、馬鹿らしい、とでも言ってのけそうな顔で。

遡るなら、どこからだろう。入間沙織が感情の捌け口に薬師寺早苗を選んだときか。この二人が出会ったときか。果ては入間沙織が優等生であり始めた時か。

入間沙織は薬師寺早苗に影でイジメを繰り返していた。キッカケは多分、些細な事で。

真実なんて多数決だと、薬師寺早苗は言った。

誰もが、築かれた高い壁とそこに描かれた壁画に感服しながら、その箱庭に踏み入れることはなかった。

誰もが、多数が信じる虚像に眼を潰されて、その影に埋もれた事実に気付けなかった。

本当にそうなのかは、私には分からない。

入間沙織の所業を薬師寺早苗が仮に叫べたならその声を誰も信じることはなかったのか。そんなことがあるのだろうか。そうとまで思わせてしまうほどだったのだろうか、彼女の高い壁は。

欺いたのは誰だ。

入間沙織か薬師寺早苗か、それとも多数で括られた人間か。

「一つだけ聞いていいか」

簡潔に述べるなら、薬師寺早苗は入間沙織より受けていたイジメをキッカケに今回の監禁事件を起こした。
しかし、これだけは結論が出なかった。

「この後どうするつもりだった。監禁した果てはどうするつもりだった？」

五分近く独白を続けた薬師寺早苗の口から返事はなかった。
まぁ、いい。ここで調べ上げることでもない。
そこで電話が鳴った。
私のと璃瑠の携帯電話の着信音が不恰好に重なる。
公安六課からだった。

「はい、伏見です」
『今、二人とも何処ですか！？』
「学園で犯人と一緒だけど……？」

電話先から酷く慌てた声がした。
璃瑠と顔を見合わせる。

『入間沙織を搬送中の救急車が武装した魔法使いから襲撃を受けました！
現場に救援を派遣しましたが一人の身元が確認できません』

仮にだ、薬師寺早苗が何らかの目的を持って監禁をしていたなら。
薬師寺早苗の監禁に何か明確な目的があったとも思えない。入間沙織に見たところ外傷は無かったし、復讐としても、もっとスマートな方法があるはずだ。
つまり、彼女には監禁の理由はあっても目的が無い。

一週間近く目的もする事もアテもない監禁など出来るはずがない、何か終着点があったに決まっている。彼女以外の。

なら、第三者が居たとしたら。第三者が何らかの目的を持っていたとしたら。第三者が機会を窺っていたとしたら。

警察の初動が早すぎてその機会を逃していたとしたら。

好機は今しか有り得ない。

『入間沙織が拉致されました』

【1章・少女は欺いた完】

【2章・隠者は待ち続けた】

【2章・隠者は待ち続けた】

昼前に、公安六課のオフィスに着てみると美樹の姿は見当たらず、璃瑠はどこか拍子抜けしたような気分だった。
課長が昼近いにも関わらずまだ来ていなかったので、六課のオペレーターである八坂皐(やさかさつき)に聞く。

「おはようございます、八坂さん。美樹さん、まだ来てませんか？」
「おはようございます。伏見さんなら射撃場に行きましたよ」

朝から元気だな、と思いながら璃瑠は八坂に礼を言って去ろうとした。それを八坂が呼び止める。

「あぁ、管理係の狭山さんが呼んでました」
「狭山さん？　用件は何ですか？」
「そこまでは。暇な時でいいから今日中に来て欲しいと」
「了解です。今から行ってきます」

狭山亮(さやまりょう)、公安総務課公安管理係所属のベテランである。顔を会わせたことは一度しかないが、美樹を引っ張ってきたのは彼だと聞く。見る目があったのか、ただの気まぐれか。美樹に関しての評価がいかんともしがたいので、結論を出すのには苦労しそうである。
陸自（陸上自衛隊）の候補生だった美樹を任期終了前にスカウトして無理やり公安六課にねじ込んだらしい。
特例に次ぐ特例でありある種鳴り物入りで着任したのである。なお、権限を持たないため公安からの命令以外で美樹が警察活動をすると

逆に捕まる。
美樹が、ここまでの待遇を受けているのは一つの理由がある。５ナンバーと呼ばれる魔法使いだからである。

魔法は元素Ｍａを用いた特殊な化学反応でありその反応一つ一つに確認され次第、分類番号が振られる。
その頭には魔法を大別した数字が振られるのだが、１が反応、２は干渉、３は生成、４が独立となっており、分類不可なものには５が振られるのである。この分類不可というのが厄介であり、簡単に言うと原理や理屈が分からないもの、または非常に特殊な結果をもたらすものである。
５が振られた魔法は非常に特殊で、その原理が分からない故に一部の人間にしか使えなかったり従来の魔法を超越した威力を持つことが多い。
そのため、上層部は５が振られた魔法、そしてそれを使える人間を重要視している。美樹が公安になかば強制的に連れてこられたのもその辺りの要因が絡んでいると思われる。詳しい話は璃瑠が知る由もない上に、第一美樹の５ナンバーとされている魔法を見たこともない。
なので璃瑠としては考えるのを止めにして、今までの説明が馬鹿らしく思えるほどに馬鹿な美樹の扱いについて頭を回した方が有意義とするのである。

「お久しぶりです、狭山さん」
「呼び出してすまないな。朝行ったところ伏見君は居たのだが君は着ていないと聞いてな」
「それは無駄足を踏ませたようですみません。昨日は朝方まで動いていたものですから」

言ってしまえば寝坊であるが、今日は朝から来る必要がなかったの

で問題ない。

「仕事熱心でなによりだな。それでだな。先日発生した拉致事件、被害者・入間沙織は革新派の鷺宮こよりとその実行グループによるものと判明してな」

「鷺宮こより……ですか」

璃瑠としては嫌な名前を聞いた。

鷺宮こより。テロリストにして優秀な魔法使い。

「鷺宮こよりが直接的な武力介入とはめずらしいな」

「何か、声明は出てますか？」

鷺宮こよりは核心派のグループの中でも穏健派である。

「いや。目的は今のところ不明だな。今は入間沙織の周辺の血縁関係を六課に探らせているな」

「ただ、鷺宮こよりが入間沙織を人質に取るとも思えませんが。革新派の中でも鷺宮こよりは穏健派です」

「入間沙織本人に何かあると見るべきかもな」

「何か、ですか」

「美樹君が言うには入間沙織の救出時、容態が安定していたことが気になるらしいな」

「……入間沙織が常時魔法発動中の部屋に一週間近く監禁されていたにも関わらず急性魔法魔法中毒にも重度魔法障害にもなっていなかった、それに鷺宮こよりが何かしらの理由で知り、興味を持ったと？」

「そこまで断定は今のところ出来ないがな」

薬師寺早苗が何かしらの目的をもって監禁していたとは考えづらい

と美樹は言っていた。なにかしらの着地点を探っていたのかとも思ったが、最初から鷺宮こよりが誘拐を持ちかけていたのかもしれない。

「と、まぁ、ここまで、話したのはある種の決着だな。この件から伏見君と君は手を引け」
「それは、そちらからの命令でしょうか」
「そうだな。対テロの班に今回の件は一任して、君達は通常の任務に戻るんだな」
「了解しました。一つ宜しいでしょうか」
「なにかな」
「美樹さんを、鷺宮こよりと接触させないようにする意図は何でしょうか」
「そういった意図はないな、対テロ班の方が捜査が進展すると考えた結果だな。君達二人だけで追えるようなものでもないしな」
「そうですか」

「鷺宮こよりと伏見君のことが知りたければ本人に聞け」
「案外口が堅いんですよ」

【２－１】

公安部公安六課超自然現象及び事件特別対策係。
別にＵＦＯによる誘拐だとか、幽霊が出るからお祓いしてほしい、とかそういうことに関わる課ではない。
表向きは超自然現象となっているが、実際扱うのは科学分野だ。

元素Ｍａ。数年前に始めて観測された元素。それをＭａ元素高度反応技術法、通称魔法で利用してやることで特殊な反応を期待することが出来る。
観測、確立されていなかっただけでその存在自体はあった。
今まで、超能力だとか霊能力だとかされてきたものは大体が魔法で説明がつく。
魔法といっても、おとぎ話のようなものではない。れっきとした科学である。

それらの魔法は一部の関係者を除いて秘匿とされているが、国家規模でその研究がされている。
魔法は従来の軍事のあり方を変えた。魔法が使える歩兵は、単身で重量戦車以上の火力を簡単に運用しエネルギー兵器は従来では実用不可能とされていたが魔法を原動力としていとも簡単に可能として見せた。

それは一つの弊害をもたらした。犯罪への転用である。軽犯罪から国家存亡に関わるテロまで魔法が用いられることでその対処は困難を極めた。

その対処のために新設されたのが公安部公安六課超自然現象及び事件特別対策係である。

『射撃訓練フェイズ5終了です。採点結果を表示します』

的が沈黙して電子音が訓練の終了を告げた。
気分が沈んでいる時は、私は射撃訓練場にこもる。ひたすら無心で引き金を引く。

なんの解決にもならないが、少なくとも気は紛れる。あと射撃の腕前も上がる。それと、たまに受付のおっちゃんがお菓子をくれる。

「美樹さーん」

射撃の採点をしていると、璃瑠の声がした。

「璃瑠か、おはよう」
「おはようございます」
「にしてもめずらしいね、射撃場にくるなんて」
「美樹さんを呼びにきたんですよ」

璃瑠は射撃が苦手だ、そして嫌いだ。自分で蹴った方が早いとまで言う。
なので射撃訓練場に来る事はほとんどない。

「結果どうでした？　射撃の」
「フェイズ5で97点」
「すごいじゃないですか」
「そりゃ、璃瑠に比べたらね」
「最高レベルで満点近く出したら誰でも褒めますよ。公安の施設だ

と物足りないんじゃないですか」
「暇でも見つけて軍の訓練施設でも借りるよ」
私が璃瑠と比較して勝っているのは射撃くらいだろうか。あと、美貌か。
「で、なんの用？」
「今朝こそは美樹さんが死んでいると思ったので」
「今朝も元気だよ」
「たまには私の希望に答えてくれたって良いじゃないですか」
「生きる希望をなくしたら考えるよ」
六課のオフィスに戻って来ると課長に呼ばれた。璃瑠も一緒に、とのことだったので連れて行く。
課長は私たちに急な休暇を言い渡した。
「休暇ですか？」
「うん、二人にね」
私は驚いた。
前回の入間沙織の事件のせいかと邪推してしまう。これは褒美ではなく厄介払いだろうか、と。
「急だけど明日から三日間フルで休みをとっていいから」
「それは有難い話なんすけど、なんでまた急に」
「入間沙織を拉致されたとはいえ鷺ノ宮こよりの尻尾を掴めそうらしくてね、そのご褒美だって」

手を回したのは狭山だろうか。

「課長、それなんすけど私もなんとかその件を追わせて欲しいーー」

言い切る前に私の言葉を璃瑠が遮った。

「狭山さんに言われましたよね。諦めましょう美樹さん」

「それはそうだけど」

食い下がる私の肩を課長が叩く。

「とにかく休暇だよ。一度しっかり休んでそれからだね」

「……はい」

【2ー2】

【2ー2】

翌日、私達は東海道線の特急に乗っていた。手回しが良いと言うか、璃瑠は昨日のうちに箱根の温泉地のホテルに部屋を一つ予約し、特急の指定席を取っていた。
オフシーズンですから簡単でしたよ、と璃瑠は笑ったが私は一言も温泉とは言っていないのだが。まぁ別に良いけれど。
車内でサンドイッチをかじりながら璃瑠は観光ガイド本を眺めている。

「美樹さん、何処に行きたいですか？　宿はとったんですけれど、行き先は決めてないので」
「任せるよ」
「つれないですね」

そう言いながらも璃瑠は上機嫌であった。浮かれまくっている。ドット柄のシフォンのワンピースなんて着ている。私服姿はなかなか見る事はないので妙な感じである。

朝会ってから今の今までジト目でない璃瑠なんぞ気味が悪くて仕方がない。
旅行に浮かれるなんて年相応な所もあるじゃないかと思った。

「あ、ここなんて良いんじゃないですか」
「遠くないか？」
「タクシーで一時間かかりませんよ」
「タクシーなんて乗ったら蕁麻疹が出るよ」

貧乏性の体だから。
歩けば良いじゃん。

「じゃあここは？」
「うーむ、新婚旅行じゃあるまいし」
「新……な、何馬鹿な事言ってるんですか！？」
「そんなに怒ることでもないでしょ……」

私のぼやきは璃瑠のビンタで打ち止めを食らった、何故だ。

【2ー3】

「チェックインは私が済ませてきますので美樹さんは休んでて下さい」
「いいの？　悪いね」
「ご老体に無理はさせられませんから」
「ぴっちぴちだよ！」

これでご老体なんて言われたら世の中の殿方はロリコンしか居ないのではないのかと思う。
実際半分くらいはそうだと思うが。

ホテルのロビーのソファに私は腰掛けてチェックインの手続きをしている璃瑠を眺めていた。
フロントデスクは何であんなに高いのでしょうかね、璃瑠の身長だと無理あるよね。面白いから放っておくけど。

横のスーツの男性が騒がしくて気になった。何故スーツなのさ、折角の休暇気分を滅入らせやがって。

年は４０代くらいであろうか、量の減った髪を七三分けで撫で付けている。丸眼鏡をかけておりくたびれたシワが見える。

落ち着きがない。たえず視線をあちらこちらに飛ばしているうえ、手元が落ちつかないのかタバコになかなか火がつかない。
正面玄関の方を気にしているので、誰か待っているのだろうか。

大丈夫かこの人。
少し距離を置こうか、それとも話しかけようか。

「あのー……」

意を決して話しかけると男性がこちらに振り返った。コーヒー片手に、勢いよく。

「だぁぁぁっ！？」

【2ー4】

おっさんに振り向きざまに盛大にコーヒーをかけられた私はその芳醇な香りは香水には向かないな、と知り得た。

「本当に申し訳ない、すまない。この通りだ」
「いやホント大丈夫っすから」
「美樹さんの服なんてもともと薄汚れてますし」
「お前にもコーヒーかけたろか」
「本当に申し訳ない、すまない。この通りだ」
「いやホントに大丈夫っすから」

コーヒーがかかった服のまま私と璃瑠と隣に居たおっさんはホテルの部屋に移動しているところだった。
気の弱いおっさんらしく、もう良いからと言っているのに謝り続けている。
見兼ねた璃瑠が部屋まで荷物運ぶのを手伝って貰えればチャラにしましょう、と言った次第でおっさんに荷物持たせたまま私達は連れ立って歩いているのだった。

「３０６号室、ここですね」

璃瑠がカードキーでドアを開けると、璃瑠は言った。

「えーと、お名前は？」
「えぇ、はい、久米川と言います」
「じゃあ久米川さん、荷物ここまでで良いです、ありがとうござい

ました」

璃瑠が久米川から荷物を受け取ると久米川は財布を取り出した。

「これをクリーニング代に」
「いやホント大丈夫っすから」
「美樹さん元々泥水で洗ってますもんね」
「コーヒーは泥水じゃねー」

あと泥水で洗ってもねぇ。

「誰か待ってたんすよね？
こっちはもう気にしなくていいんで」

私がそういうと久米川は驚いた顔をした。

「どうしてそれを？」
「いや見てたらそんな感じだったんで」
「実はそうなんだ」
「だからもうこっちは気にしないでいいっすよ」
「申し訳ない」

【2ー5】

久米川と別れて私達は部屋にはいる。和室のこじんまりとした部屋で荷物をすみに下ろす。

「このシミ落ちるんかなぁ」

「美樹さんの人生の汚点くらい頑固そうですね」

クリーニングサービスなんてこのホテルにあるのだろうか。

ひとます脱ぐ事にする。

グレーのニットにいかにもといったコーヒーのシミが付いてしまった。

「なんだよ璃瑠、あまり見るなよ恥ずかしい」

「み、見てません！」

顔を真っ赤にしながらソッポを向いた。今日の璃瑠は調子が狂う。

「ここ、クリーニングサービスなんてあんの？」

「あるみたいですよ」

案外すごいホテルにきてしまったようだ。

「じゃあ、ちょっとフロントまで行って来るよ」

「着いていきましょうか？」

「大丈夫だ、問題ない」

「迷子にならないで下さいね。オートロックじゃないので帰ってき

たら勝手に開けちゃってください」

開けっ放しで大丈夫なのか。

まあ璃瑠が大の男三人に襲われたとしても負けるとは思えないが。

「オートロックじゃないのか、分かった。行ってくるよ」

【2－6】

【2－6】

フロントでクリーニングサービスを依頼するとロビーに響き渡る怒声が聞こえた。

「どーなんだよ!?　?え?　??
久米川!?」

どこかで聞いた名前が怒鳴られていた。
めんどくさい事になりそうだなぁ、なんて思いながら振り返ると久米川が若い男に食いかかられていた。

「今すぐ戻れば社長も大事にはしないって言ってるんだよ!」
「いや、しかしそう言われても」
「それとも、覚悟決めるのか!?」
「お二人さんストーップ」

私は久米川と彼の胸ぐらをつかんでいる若い男の間に割って入った。
久米川は怯えと驚きの混じった表情をしていた。

「なんだ、てめぇ」
「お二人さん落ち着いて。周りみんな見てるからさ」

若い男に向かい合う。２０代後半といったところか。剃り込みと赤のメッシュを入れた短髪であり、口もとにはピアスがしてある。

「ここは公共の場。で、ここに来てるのは旅行客。あんまり気分壊されたくないんだけどさ」
「うるせぇよ、関係ないんだから引っ込んでろ」
「そういう問題じゃないっしょ。私は煩いって言ってるんだよ」
「うるせぇのはてめぇだろ」
「自分の声量も分かってないのかよ、その耳はなんだ、飾りかよ。最近のトレンドかよ。どうせなら猫耳つけるくらいの面白いことしろよ」
「猫耳なんて今日日流行らねーんだよ。今はキツネ耳なんだよ」
「ニワカ乙。どうせ狼と通信料が終わったら廃れるんだよ」
「んだと!?」

私と彼の口論はフロントスタッフの介入によって中断された。

「あのお客様、他のお客様のご迷惑となりますので」

互いに舌打ちして私と彼は一度押し黙る。
久米川の為の口論だったがこう言われては黙るより他ない。

「なんか冷めちまった。風呂入ってくるか。おい久米川、俺もこのホテルに泊まるから勝手に出歩くんじゃねーぞ」

若い男が去って行くのを見送って久米川は息を吐いた。

「何すか、今の」
「彼は下井といって、僕と同じ会社の同僚だよ」
「久米川さんの待ってた相手ってのは」
「彼だよ。何処からか僕の居場所を突き止めてね。追いかけて来た訳だよ」

追いかけてきた？
どういう意味だろうか。

「あのー、良かったら事情を話してみません？」

【2－7】

「子供に聞かせるような話じゃないんだけどね。僕は会計士なんだけど、長年勤め先の企業の脱税に手を貸してきた」

思ったよりハードな話が出てきた。

「だけど、それが嫌になってね。それで内部告発って分かるかな」

「分かります」

「内部告発を考えた。でも社長に脅されてね、何かすればどうなるか分からないぞってね」

脱税の内部告発か。あまりその手の話は詳しくは無い。魔法がからむような犯罪者では無いし。

「迷ったんだけど、やっぱり不正にこれ以上耐えられなくてね。でもやっぱり勇気も出なくて。だからこの遠くの地まで一回離れて考えてみたくて」

「でも下井が来てしまったと」

下井は社長の息子か何かだろうか。

「下井は何て言ってるんですか」

「このまま大人しく東京に戻って帳簿データと証拠写真を返せば大事にはしないって言ってるんだよ」

「もし久米川さんが本当に内部告発を考えているなら弁護士か警察にまず相談すべきです。相手は脅迫まがいのことをして来てる訳で

すから」

久米川が紙封筒を大事そうに抱えている事に気が付いた。帳簿が入っているのだろうか。

「やっぱりそうだよね。僕はいつも考えが甘いんだ。箱根に逃げて来たのだってただ逃げたい一心だったのかもしれない。あんな恐ろしい組織と手を結んでいる会社が怖くなってね」

コーヒーのお代わりを口にしながら久米川は続けた。ついコーヒーに対して身構えてしまう。次、汚されると服の変えがない。

「僕はここの出身でね。本当は両親の土産物屋を継ぐ筈だった。でも気弱で人見知りが酷い僕より妹の方が向いてたから、妹にまかせて僕は会計士になった」

この人には無理だろうなぁ。と純粋に思った。

「数字と向き合う時に僕自身は関係無いからね。数字は絶対だ、誰の前でも平等に同じ姿でいる。
そんな強い人間になってみたいよ」

【2ー8】

「数字も視点をずらせばいくらでも嘘をつきますけどね」
「璃瑠よりマシだな」
「美樹さんに言われるくらいですからね」

部屋にもどって久米川の話をすると璃瑠はつまらなそうに言った。
休暇だからヤル気がないのは分かるのだが、もう少し真摯にならないものか。

「美樹さん、久米川さんの件に首突っ込むんですか」
「私になんか出来ると思う？」
「無理ですね、元々何も出来ない人ですけど」
「失礼な、なんか出来ることくらいあるよ、ポーカーとか強いよ」
「知りませんよ」

璃瑠のいう事はもっともだ。私が協力出来る事はない。
いやでも、ほっとけない空気を出してるんだよなぁ。

「まぁ、応援くらいしか出来ないな。そういや璃瑠、今は何時？」
「四時半です。夕食は六時半からですよ」

とりあえず、お風呂に入ってから何をするか考えようかしら。

「じゃあひとまず温泉にでも入るか。璃瑠行こうぜ」
「りょーかいです」

ホテルの地下一階の温泉に着くと下井に出くわした。

「てめぇはさっきの」

「その節はどーも」

久米川の事を連れ戻しにきた筈だがちゃっかり温泉に入っていくようだ、浴衣に着替えているのですっかりバカンス気分か。

「あんた久米川さんを連れ戻しに来たんだろ？

温泉なんて入っててていいのかよ」

「あのおっさんが自分から帰るって言うまで根競べだよ」

ずっと下井が居るなら久米川なら怯えて音を上げそうである。

「おっさんの事なんかなんだっていい、てめぇに言っておきてぇ事があったんだよ」

「なにさ」

こんな奴の話は聞きたくもないのだが、聞かなかったらどうなるか分からない。

如何にもな悪人面してやがる。

「猫耳は俺も好きだ」

「あんた、案外いい奴だな」

【2ー9】

璃瑠が服を脱ぐのに手こずっているのを手伝ってやるか無視する悩んで先にいく事にした。

日々の疲れとか憂いとか黒い物を全部落とすように私は湯に浸かる。思わず熱いお湯に府抜けた声が出る。

世の中の全てがどうでも良くなるな。

ここの温泉はかなり硫黄の匂いが強い。人によっては苦手かもしれない。

「璃瑠やっと来たか。
……そんなにきっちりタオル巻かなくたって良いじゃん。私達しか居ないんだから」
「だって恥ずかしいですし」

璃瑠は俯きながら言葉を放った。
こうして見ると璃瑠の肌は相変わらず羨ましい。雪解けのように透き通る肌に濡れて枝垂れた髪が張り付いて妙な色気がある。
湯気に縁取られた四肢は少し朱に染まり恥ずかしそうな所為に少しばかり私は動揺した。

「恥ずかしいも何も、璃瑠みたいな小学生体型じゃ隠すところないだろ」
「……発育の良い方がやっぱり良いんでしょうか」

「へ？　？いや、どうなんだろう。でも世の中の殿方は身長低い方が好きなんじゃないかな」

世の中の三分の二はロリコンだと課長が言っていたから。

「世の中とかじゃなくて、その……み、美樹さんはどうなんですか？」

「私！？」

思わぬ質問に素っ頓狂な声が出た。浴場にそれが響き渡る。

意味が分からないぞ。

「どうなんですか？」

ぐいっと璃瑠が迫ってくる。

「えーと、あの、そうだなー、私は小さい方が可愛らしくて良いのではないかと思う次第です」

私がそう答えると璃瑠は照れた顔をした。そして私に近い事に気づいたのか慌てて離れる。

逆上せたのか顔が赤い。

「大丈夫か、顔赤いけど」

「だ、誰の所為だと思ってるんですか！？」

「知らないよ」

【2－10】

【2－10】

何故か、とっとと先に帰ってしまった璃瑠に置いていかれた私はエレベーターで三階まで上がるところだった。
エレベーターの中も温泉の臭いがする。それとも私からだろうか。

このホテルは一棟の中に全ての施設が入っているようで、地下の温泉から私たちの宿泊部屋のある階までエレベーター一本である。
エレベーターが三階に着くと間の抜けた音がした。

「今日の璃瑠はやりづらい……なんなのさー」

機嫌が良いんだけど、悪いような。
璃瑠との付き合いは数ヶ月程度であるが、未だに良く分からない。
どこに住んでいるかも知らないし、家族がどんな人かも知らない。
どうして公安六課にいるのかも知らないし、第一どうやって刑事になれたのかも不明だ。
私と同じように特例だろか、だとしたらいつから活動しているのだろうか。

考えたら何も璃瑠のことを知らないことに気がついた。

聞きたいけれど聞きづらい。訳ありとしか思えないわけで。

いや、せっかくの二人での旅行なのだから一気に距離を詰めるべきではなかろうか。
しかし。

「今日の璃瑠はやりづらい……！？」

部屋の前に来た辺りで私は確かに聞いた。
いや聞かざるを得なかった。あまりにも近い距離だったから。
轟くような爆発音がした。
聞きなれた、しかし普通なら聞く筈もない音だった。

「銃声！？」

目の前のドアが勢い良く開いて璃瑠が飛び出してきたので私たちはぶつかる形となってしまう。

「うわっ」
「美樹さん！？」
「今の銃声は！？」
「分かりませんが、おそらくこの階のどこかの部屋です！」

【2－11】

【2－11】

慌てて走ってきたホテルのスタッフを璃瑠が呼び止める。警察手帳を見せてがなる。

「警察です、事件の可能性があります。この階に宿泊中の部屋のチェックと至急マスターキーを！」

「は、はい！」

私は部屋に戻るとケースから持ってきていたハンドガンの「H&K MARK 23 SOCOM」を取り出す。

ドイツ製の公安六課標準装備である。

フラッシュライトとレーザーサイトを備えるレーザーエイミングモジュールており、全体的に四角に近い。

グリップを握り弾倉（マガジン）と安全装置（セーフティ）を確認すると廊下の璃瑠と合流する。

「302号室、304号室から人が出てきましたが、中を確認してから室内に戻しました。他に外に出た人間はいません」

「本当にこの階なのか」

「私の聴覚を舐めないでください」

ホテルスタッフがカードキーを持って戻って来た。息切れと慌てているせいかろれつが回っていない。スタッフが私の持っているハンドガンを目にして息を呑んだ。

彼にはこの状況が分かっていないのかもしれない。銃声だと実感は

ないだろうし、むしろ警察手帳を見せられて事件だと言われた方が衝撃的であろう。

「チェックインされている部屋は３０２、３０４、３０６、３０９です」

３０６号室は私達の宿泊している部屋なので、残るは３０９号室だけである。

「璃瑠、３０９からは？」

「誰も出てきていません」

私はスタッフからひったくるようにカードキーを受け取ると３０９号室まで駆ける。マスターキーで３０９号室のロックを解除する。安全装置を解除して、撃鉄を引き倒す。璃瑠がドアの右手につくと、私に頷いた。呼吸を一つ置いて、目で返事をする。

「突入する。１、２、３！」

璃瑠が一気にドアを開けると私は身を滑り込ませる。それに璃瑠が続く。引き金に掛けた指先から緊張感が伝わる。

部屋は洋室で、少人数用の部屋らしくドアを開けるとすぐにベットルームが見えた。

その手前にバスルームとトイレのドアがあり、ドアを開ける。

「クリア」

誰も居ないのを確認してベットルームの手前まで先行した。

右手を突き出し、左腕は引くように曲げ姿勢を低くしながら銃口を前に向け部屋に飛び込む。
シングルベットの上に、キャリーバックが無造作に上げられており、中身が散乱していた。
その荷物に赤い何かが飛び散っているのが見える。
嗅ぎ慣れた臭いがする。

ベットの端から人の足が見えており、向こう側に誰かが倒れているのが分かった。
私はゆっくりとベットの向こう側に回りこむ。倒れているであろう場所に銃を向けたまま。

「久米川さん！？」

身体を歪ませて、血溜まりの上に仰向けに久米川が倒れていた。
血はまだ乾いていない。

傍らに黒光りする拳銃が落ちており、室内には血の臭いに上書きするように火薬の臭いが充満している。

「璃瑠、救急車と警察を」

これは助からないだろうが。
既に絶命した久米川の前で私は手を合わせた。

【2ー12】

【2ー12】

警察が到着して館内は少々騒がしいものとなった。
璃瑠が現場指揮をとっている刑事に話をつけに行っている。
それをぼんやり眺めていると、後ろから肩を叩かれた。
「おい、なんの騒ぎだよこりゃ」
下井が立っていた。風呂上がりだから髪が濡れたままで下を向いている。
そう言えば温泉の脱衣所の前で会ったな。
シャンプーの匂いがした。
「久米川さんが死んだ」
「は？　？おい、それはマジかよ」
「あんたはどこに居たんだよ」
「ずっと温泉に入ってたんだよ。それより久米川のおっさんがなんで死んだんだよ！？」
知らないよ、と吐き捨てると下井が何かを言おうとしてから押し黙る。
璃瑠が戻って来た。
「美樹さん、ちょっと」
璃瑠に連れられてとある部屋に連れていかれた。宿泊部屋であり中

に入ると、スーツ姿の男性が座っていた。
面長で口髭を蓄えている。
眼光が鋭い。年は５０過ぎた位だろうか。

「警視庁の方に確認をとった。お前たちみたいなのが、公安だとは驚いたよ」
「公安六課所属、伏見美樹です」
「そっちの落合から聞いたがお前たちが第一発見者だと」

この刑事、良い声しているなぁなんて思った。低音で聞きやすい。

「はい。銃声が聞こえたので緊急性のある事態と判断し私と、伏見美樹の二名で室内に突入し遺体を発見しました」
「その時、室内にはだれも居なかったのか？」
「はい」
「では、その時部屋の鍵はどうした」
「ホテルスタッフにマスターキーを借用しました」

どうも尋問されている気分である。

「部屋の鍵は閉まっていたんだな？」
「はい」
「間違いはないな？」
「ありません」

そう聞くと刑事は考え込む仕草をとった。

「そうか、ちなみに公安はこの件に介入するのか？　？お前たちの格好を見るに仕事で来ているわけではないんだろう？」
「上から指示があるなら動きますが、おそらくはないかと」

「そうか、下がっていい。後で事情聴取に誰かを寄越すから協力してくれ」
「一つ頼んでも良いでしょうか」
「なんだ」
「公安六課関係の話、私達が突入したことは内密にお願いします」
「分かった。公安の中でも六課は秘密主義で胡散臭いからな」

私は肩を竦めてみせる。

「私達を見たら、まぁそう思うでしょうよ」

【2ー13】

事情聴取を先に終え璃瑠を待っていると喉が乾いたので、私はフロントに売店があったのを思い出し一階まで降りる。
リンゴジュースとお土産用の茶菓子を璃瑠の為に、そして私はペットボトル入りのお茶を選んでいると声をかけられた。

「よう。よく会うな」

下井がくたびれた表情で立っていた。

ロビーのソファに腰掛けて下井はタバコを咥えた。銘柄は詳しくないので分からないが久米川のとは違うタバコの臭いがした。

「何もこんなところで自殺することねーのになぁ、おっさん」

しみじみと呟いた言葉を私は拾う。

「自殺だと思う？」

「自殺だろ？　？鍵は閉まってたし、お前らが最初に部屋に入ったとき誰も居なかっただろ？」

警察は自殺として見ているようだ。オートロック式でない部屋の鍵が閉まっていたうえ、鍵は室内にあった。
それに私達以外誰も部屋には居なかった。

「久米川さんが拳銃を持っていたとは思えないよ」

久米川が拳銃自殺するとは思えない。自殺の可能性は否定しないが、拳銃なんて一般の人間が簡単に手に入るものじゃない。

「俺は怖いぜ、おっさんが拳銃なんて持ってたなんて。俺を撃つ気だったんじゃないかとしか思えないからな」

「そこまであんたらが追い詰めてたって事に裏を返せばなるよ」

「おっさんはてめぇに何処まで話したんだよ」

「脱税してるのと、久米川さんがそれを告発しようとしてたことまでは」

しかし、久米川は死んだ。

久米川の自殺の原因として思い当たるのは脱税の一件だけだ。

これをきっかけに調査が入るかもしれない。

皮肉なもんだな。

「あんたどうするの？　？今回の件で脱税のこと露呈するんじゃない？」

「おっさん、最後にやらかしてくれたよ」

「その言い方はないっしょ」

「おっさんの遺留品から資料が出て来たら逃げらんねぇからな。おっさんに花持たせてやるさ」

下井の他人行儀な言い草に私は内心憤慨した。

【２－１４】

「璃瑠、ただいま」

部屋に戻ると璃瑠が寝転んでいた。浴衣から足を覗かせ、バタバタと暇そうに動かしている。

「おまんじゅう買ってきた。食べる？」

「こういうのは、お土産だと思うんですけど」

でも食べると。

リンゴジュースを手渡しながら私は璃瑠の横に座る。

「夕食の時間が３０分、遅れるそうです」

「仕方ないな、ホテルの中にはもう久米川さんの話広がっちゃってるっしょ？　？むしろ、みんな食欲ないんじゃない？」

「私はありますけど」

そりゃお前だからだ。私はまだキツイ。

本当を言うと今も気持ちが悪い。

死体なんて慣れるもんじゃない。ほとんど死体見たことないし。

璃瑠はもう慣れっこになってしまっているのだろうか。

「璃瑠はさ、いつからこういう事をやってるの？

前は作戦部だったんでしょ？　？いつから？」

「忘れました。もう５～６年前ですし」

「だって今、璃瑠１５歳でしょ？　？おかしいじゃん」

「複雑なんですよ」
「話してはくれないんだ」
「私が話したら美樹さんが、鷺ノ宮こよりに固執する理由を聞かせてもらえますか」
「璃瑠には関係ないよ」
「隠し事ばっかりですね、お互い」

璃瑠はお饅頭を二個食べ、ジュースで一息つくと身を起こし座り直す。

「話しを変えましょうか。久米川さんの事件です。鑑識の報告が上がってきてからですが。先程の刑事、小金井（こがねい）刑事によると警察は自殺と見て捜査するようです。おそらく、下井さんと会社側の過失が問われる事になるでしょう」
「私は久米川さんがよりにもよって拳銃自殺をするとは思えないよ」

私が言い切ると、璃瑠は怪訝な顔をした。

「手を出すんですか？　？私達には関係ない話ですし、まず第一に休暇中です」
「知らないよ、そんなの」

【2ー15】

璃瑠はため息を一つしらじらしく吐く。

「美樹さんはどう考えているんですか」

「それを今から考えるの」

久米川は本当に自殺だろうか。

プレッシャーに耐えきれず自殺を選んだ。拳銃も何かのきっかけで手に入れて、護身の為に持っていたけれど下井に使う気にもなれなかった。

いや、下井相手に拳銃など使うだろうか。確かに下井の方が脅しを効かせていたけれど、優位なのは久米川だ。

脱税の証拠を握っているわけだから。

告発に踏み切る勇気が無かったのか。だとしても自殺を選ぶだろうか。

久米川が出来るかは別として、告発しない代わりに何らかの見返りを要求するのが筋では無いのか。

「課長に許可とってくれない？」

「何のです」

「活動許可」

「とれなくても、首を突っ込むじゃないですか、美樹さんは」

璃瑠は少し笑った。

「実は既に話は通してあります。美樹さん首を突っ込むと思ったので」
「さすが私のパートナーだ」
取り合えず璃瑠の頭を撫でた。
嫌そうな顔をして璃瑠は立ち上がる。
「行きましょう」
「やる気じゃん」

【2－16】

先程の小金井刑事に無理を言って公安六課をちらつかせ、好意的に協力してもらう事にした。

「公安の奴らは何だってこんなに……、第一こういうのは公安関係ない仕事だろうが」

ぶつくさ言っているのを聞かない事にして、現場の３０９号室に入る。

室内にはまだ血の匂いが充満していた。

「小金井刑事ー、質問なんすけど」

「なんだよ」

「自殺として捜査するんすかー」

久米川が倒れていた辺りにしゃがみ込む。カーペットに血が染み込んで、毛羽立っている。

「いや、ちょっと状況が変わった」

その言い方に引っかかって小金井の方に顔だけ向ける。

小金井が久米川が倒れていたのと反対側のベット脇に立って指差した。

「ここに血痕がある」

「まじすか」

移動して見ると確かにカーペットに血痕が残っている。量は多くないがハッキリと分かる。

「被害者が死んでいたのは反対側のベット脇。側頭部に一発拳銃を撃ち込んでいるから即死のはずだ」

「飛び散ったとも思えない位置に血痕か」

垂れた様に見える。いや、よく見ると久米川の倒れていた位置からここまで、点々と血痕がある。

「気付いたか」

「ここまで血のついた何かが移動したって事すか」

血の量からして久米川が移動したとは思えない。それとも、ここで何らかの怪我をして倒れていた位置まで移動したのだろうか。

「被害者には側頭部以外、外傷は無かった。つまりだ、これは被害者の血ではあるが本人が落とした物とも思えない」

「鼻血かも」

「俺は返り血を浴びた犯人のものだと思うがな」

「やっぱり自殺じゃないみたい」

久米川のたおれていたベット脇から反対側のベット脇に移動した。ここで点々とした血痕が密集していることを鑑みるに、おそらくここで留まった筈だ。そこからよく見ても、ここから先にはない。ここで立ち止まる理由。

「久米川さんの荷物はベットの上に散乱していたから、何かを漁っ

ていた？」
「貴重品やタブレットＰＣは手つかずだったぞ」
久米川が持っている価値の高い物。
「帳簿データは？　？久米川さんは会計士です」
「鑑識に確認してこよう」
小金井が出ていくと何処かに行っていた璃瑠が戻ってきた。
「トイレとバスルームに何も見当たりませんでした」
「久米川さんは脱税の証拠隠滅の為に殺されたんじゃないかな」
「……美樹さんだったら殺します？」
「悩殺くらいは」
「それならいっそ殺して欲しいと頼みますね」
失礼な。
璃瑠が指で拳銃の形を作って私に向けた。
「目立ちすぎます。現に今、脱税のデータの所在が疑われていますし、会計士が自殺なんてしたら会社側に捜査が入ります」
殺害するリスクが大き過ぎる、と璃瑠は言いたいのか。
となると別の理由による殺人になるのか。
恨みを買う様な人だとも思えないのだが。
しかし、私が久米川から脱税の話を聞かなければ脱税の話は捜査上に浮かんでこなかったのではなかろうか。
第一、これは殺人事件なのか。

だとすれば、犯人はどうやってこの部屋から出たのだ。

【2ー17】

【2ー17】

「私達が部屋に入ったとき、カギは閉まっていた。この部屋のカードキーは何処にあったんだ？」

何時の間にか戻ってきていた小金井が私の問いを引き継いだ。

「カードキーはベットのライトスタンドの下に置いてあった。血液が飛び散っていたから事件当時そこにあったのは間違いない。マスターキーは持ち出すのに許可が居るからスタッフが内密に持ち出すのは不可能。今日の記録もお前達が持ってこさせた時のみ。カードキーの複製はほぼ不可能」

「窓は内側から鍵を閉めるタイプで閉まっていました。また内側からしか開きません。つまりは」

眼鏡の少年探偵が活き活きしそうである。

「密室殺人ってやつかよ」

「オートロックではないから、犯人が居るとしたら中から鍵を閉めてもらった事になる」

それは不可能だ。久米川は即死だったようだし。

しかし、自殺とするには妙である。

「血痕は何処まで続いているんですか？」

「ここで一旦途切れた後、エレベーターに少量。そこから先は無理だった」

「久米川さんが流血しながらエレベーターまで行った？
そんな筈はないから、それが犯人の浴びた返り血だとすると」
「普通にドアから出てエレベーターに乗って逃走した。どうにかして３０９号室の鍵を閉めて」

おかしいよね、うん。
眼鏡の少年探偵来ないかなぁ。どこぞの孫でもいい。

「お前達が部屋に入ったとき何処かに隠れていたんじゃないか」
「ないなーい。それに廊下にはマスターキーを持ってきて貰ったホテルスタッフが居たから、誰か出てきたら気付くし」

鍵を複製したか、マスターキーを盗み出したか。
そういえば、と小金井に帳簿データのことを聞く。

「被害者のタブレットＰＣには帳簿データが確認できた。改ざんされているかは今解析している」

しかし、殺害してからそんな悠長な事をしているとも思えない。
何か引っかかっているのだが、それが何かが分からなかった。

【2－18】

頭を切り替える為にも、と言う璃瑠の提案に従って夕食にすることにした。部屋で二人で蟹をかじる。
箱根で蟹って獲れるのだろうか。

あまり、こういう話はしたくないのですが。と前置きしながら璃瑠は話し始めた。

「魔法だと思います。今回の事件」
「私も思ったけど何の魔法か分からん」

鍋の火が強すぎないか、これ。
あれか、私の美貌を前にして燃え上がっているのか。

「鍵を締める魔法なんてないぜ、ハリーボッチーじゃあるまいし」
「ハリーボッチーだと部屋に引きこもる為に鍵を締める魔法使ってましたね、そう言えば」

あのシリーズはまだ続いているのだろうか。友達の居ないひとりぼっちが魔法学校で頑張る話であるが映画化までされたらしい。

「確かに物質操作の魔法なんかなら鍵を外側から締めるなんて出来るかもしれないけどカードキータイプなんて無理だ」
「部屋の窓は内側から鍵がかかっていました。部屋はオートロックではなく鍵は部屋の中のライトスタンドの所に置いてありました」

血痕はエレベーターでも発見されたから部屋のドアから出ていった筈である。
しかし、私達が部屋に入ったときにはトイレとバスルームも見たけれど誰も居なかった。
廊下にはマスターキーを持ってきたホテルスタッフが居て私達の突入後には誰も出てきていないと言う。

「そう言えばあのホテルスタッフに口止めはした？」
「しました。私達が部屋に突入したのは警察関係者とあのスタッフしか知りません」
「また課長が大目玉くらいそうだな」
「緊急時でしたから仕方ないと思いますよ」

魔法という極秘機密に関わる六課は、あまり目立つわけにもいかない。
いや本当を言うともっと内密に動きたいらしいが、幅広く扱い過ぎて難しいらしい。

そんなことを考えていると璃瑠が蟹を食べ疲れたのか、別の料理に箸を伸ばし始めた。

「美樹さん、見てくださいよ。このタマゴ、黒いですよ」
「ホントだ」

器に殻ごと入っているタマゴは真っ黒だった。割ってみると中から温泉タマゴが出てくる。殻の色に反して中は真っ白だった。

「殻に何かの成分が結びついているんですかね」
「硫黄の匂いがするな」

かすかに温泉の匂いがする。
あとでもう一度温泉に入ろうかな、寝る時は身体から温泉の匂いをさせながら布団に潜りたい。

また何かが引っかかった。

「温泉タマゴっていうのは、黄身と白身が固まる温度の違いから出来るものなんです」
「へぇー」
「黄身は７０℃、白身は８０℃位で固まるんですが、普通のゆで卵と違って温泉は温度が低いですから７０℃手前でタマゴが温められることで黄身から固まるんですよ」

よう分からんが、なんか凄い。

璃瑠が携帯で温泉タマゴの写真を撮っていた。

「旅行の思い出です」

記念写真でも撮ろうか。しかし、状況が状況だし。

写真？
何か忘れていないか、私。

【2－19】

食事を終えて廊下に出ると不機嫌そうな小金井を見つけた。

「何か進みました？」

「このホテルに宿泊している下井拓哉（しもいたくや）という男を知っているか？」

下井なんて知り合いは一人しか居ない。

「久米川さんと同じ会社の？」

小金井は頷いた。

「下井は久米川が担当している下井貿易という株式会社の社長の次男だ」

予想は当たっていた。

あの風貌で会社員なら、コネか何かだろうと思っていたが。

「被害者が下井貿易の脱税の証拠を掴んでおり告発を考えていたという話があった」

「それは確かだと思いますよ、私に話してくれたし」

「となると、下井が脱税の発覚を恐れて被害者を殺害した疑いが出てくるわけだ」

私もそう考える。

「下井には犯行時刻のアリバイがない。正確にはまだ確認出来ていない」
「そういや、ずっと温泉に入ってたって言ってた」
「そうだ。今その時刻に温泉に入ってた人間を探している」
温泉に入っていた人間を探しているっていうのもなかなかにシュールだな。

「脱衣所の前の廊下で私達会いましたけど。４時３０過ぎくらいに」
「銃声が聞こえたのは5時１０分頃、それだとアリバイにならんな」
「次会ったのが、警察到着後だったかな。その時は風呂上がりぽかったけど」

アリバイを証明出来る人間は居るのだろうか。私達のときには女湯に誰も居なかったし、温泉の時に人の顔まで見ているだろうか。
にしても下井は随分と長風呂である。
４時３０分過ぎから、次に私に会う5時３０分頃まで一時間近く入っていたことになる。まあ温泉だからおかしくもないのだろうか。

「下井拓哉は、ずっと浴場に居たと言っているのですか？」
「ああ」
「美樹さんが、会ったときに下井拓哉の様子は？」
「困惑？　？動揺？」

なんかそんな感じ。
璃瑠が黙って首を傾げている。

「外部犯の可能性も考えて聞き込みをしているが、まだハッキリとしないな」

「ああ、それでお願いがあるんですけど」
「遺留品の写真見せてもらえませんか」

【2－20】

【2－20】

鑑識から遺留品の写真データを刑事のタブレットＰＣに送ってもらい見せてもらう。
写真を一通り見て確認出来たのは、
衣服、タブレットＰＣ、携帯電話、財布、充電器、筆記具、携帯用洗顔料、胃腸薬、デジタルカメラ、眼鏡、使い捨てタイプのコンタクトレンズ、ポケットスキャナー、ペットボトルのミネラルウォーター、スーツのシミ抜きとシワ落とし。それと拳銃であった。室内に落ちていた薬莢は一つ。カードキーはベッド脇のライトスタンドに置いてあった。

「遺留品はこれだけすか？」
「あとは備え付けのタオルくらいだよ」

写真を一枚一枚見ていると一つ気が付いた。
私は犯行に使われた拳銃の写真のズームを璃瑠に見せる。小金井も一緒に覗き込む。

「この拳銃はグロック１７　、オーストリアの自動式拳銃だ」
「はぁ」
「さすが公安、詳しいな」
「国内の密造拳銃は日本の警察官が携帯しているニューナンブが殆どだから、グロックだと多分密輸だと思う」

密造も手に入るとも思えないが、久米川のような一般の人間が密輸拳銃を手に入れるとは、より思えない。

「で、このグロックなんだがバレルにネジが切ってある」
「？」
「サイレンサーって分かるか？」
「わかります」

サイレンサーは銃に取り付ける事で銃声を抑制し消音効果がある。銃の先に取り付ける細長い筒のようなものである。

「ただサイレンサーってのは取り付けるのに銃の改造がいるんだよ。私達の使ってるＳＯＣＯＭみたいな銃は除いてな」

銃身の外側にサイレンサーを取り付ける為のネジが切ってあるのである。グロックの場合はそれを改造として行なう必要がある。

「サイレンサーを取り付ける為の改造が室内に落ちていたグロックにはしてあった。だけどサイレンサーは取り付けてなかった」

だから銃声が聞こえた。
サイレンサーの消音性も向上したので、あれほどの銃声は装着していたなら聞こえないはずだ。

「持ってなかった可能性もあるけど、改造が施してある様な銃だしサイレンサーを持っていたと思う。でもそれは使われなかった」
「それが、久米川さんにしろ犯人にしろですね」
「もし仮にだ。サイレンサーを持っていたのに使わなかった理由は何か」
「自殺なら発見させる為。殺人なら……」
「殺人なら銃声を発生させるメリットはない。普通ならな。発見が遅れれば脱出も容易になるし、証拠も隠せる。でもそうしない理由

があった」
「それは？」
「わかんない」
「だめじゃねーか」
「美樹さん、使えないですね」

【2ー21】

【2ー21】

璃瑠は、何か気になることがあるらしく小金井と一緒に何処かに行ってしまった。
浮気者め。

エレベーターから先の血痕が見つからないのは、何故だろう。エレベーターで血のついた何かを脱いだ？
いや、そうなると部屋からエレベーターの間まで血痕が殆ど見つかって居ないのはおかしい。となると、久米川の部屋で脱いだはずだ。
ビニール袋か、何かに入れれば可能だとは思うが。

考えが纏まらないので、階段を地下から最上階の六階まで上り下りして居た。
何かを忘れている気がする。

「こんばんは」

ふと声をかけられて私は顔をあげた。
私より少し年上くらいの女の子二人が笑顔を正確には片方だけが笑顔を私に向けていた。
温泉に入ってきたのか湯気が立っており手にはタオルとポーチを持っている。

「こんばんはー」

片方はロングヘアーの髪にパーマーを当てている。染めているのだろうか、銀髪が肩の辺りから緩やかなカールを描いていた。
彼女が私に声をかけたらしい。

「事件があったんですってね。大変ですわね」

まったくそう思えないゆったりとした口調で言った。
もう片方はセミロングの黒髪を緩いポニーテールにしている。私達の会話を聞いてはいるが、表情に変化はない。

「いや、ホントだよね」
「早く解決すると良いのですけれど」
「警察が来てるからすぐに解決すると思うよ」

私の言葉に彼女は少し笑い連れを促して歩き始めた。
私とすれ違う時に笑顔で軽く手を振りながら彼女は言った。

「頑張ってくださいな」
「へ？」

すれ違いざまに言われた言葉の真意を計らい損ねて私は立ち止まってしまう。そんな私を無視して彼女達は行ってしまった。

ほのかに温泉の香りと整髪料の香りだけが残された。

「良い整髪料使ってる……なぁ……！？」

【2－22】

弘佳（ひろか）は、すれ違った美樹の方を少し見ると美智（みち）に話しかける。

「今の、魔法使いでしたわね」

そう言うと美智は驚いて美樹の方を見た。

「……本当ですか？」
「えぇ、それと懐に何か隠していましたし」
「……ＷＩＥＣＳを持ってました？」
「実銃でしょうかね」

弘佳が後ろを振り返ったのを見て美智も振り返る。美樹は階段の途中で踏み止まったまま、うわの空で何かを呟いている。
そして急に下を向き、また上を向き微動だにしなくなった。

「……何をしているんでしょうか」
「さ、さぁ」

何か見てはいけないものを見てしまった気がして弘佳は目を逸らした。
普段から怯えた表情の美智がより一層怯えている。

弘佳の携帯電話が鳴った。
その音に驚いて美智が飛び上がる。

「慣れてくださいな」
「……すみません」
「メールですわね。あら、珍しい。こより　？からですわ」
「……鷺ノ宮こよりですか？」
「えぇ。幾つかの交換条件と引き換えに入間沙織のデータを渡すと言っていますわ」
「……入間沙織？」
「この前、こよりが拉致した子ですわね。なんでも魔法への抵抗があるとか」
「……魔法への抵抗ですか」
「えぇ。もしかしたら、魔法使いの寿命問題が解決するかもしれませんわね」

【2ー23】

「良い整髪料使ってる……なぁ……！？」

すれ違った二人を見送ろうとした時、私の中で何かが引っかかった。

鼓動が私を深淵に突き落とす。記憶の海に私は深く沈んでいく。もがく程に闇は指の隙間をすり抜け、すり抜けるたびにそれは確かな質量をもって押し寄せる。それが気付けば世界に蓋をして四方を囲んで示し合わせたように一斉に押し寄せる。

記憶が私を呑み込み、そして離れていく。

音は轟となり声は悲鳴に変わる。色は消え、線となり、その線が五本に綺麗に並びその上に匂いが乗り、音を立て始める。

そして静寂が訪れ、遠くの唸りが密やかに忍び寄る。

『俺は返り血を浴びた犯人のものだと思うがな』

『目立ちすぎます。現に今、脱税のデータの所在が疑われていますし、会計士が自殺なんてしたら会社側に捜査が入ります』

『このまま大人しく東京に戻って帳簿データと証拠写真を返せば大事にはしないって言ってるんだよ』

『密室殺人ってやつかよ』

『やっぱりそうだよね。僕はいつも考えが甘いんだ。箱根に逃げて来たのだってただ逃げたい一心。だったのかもしれない。あんな恐ろしい組織と手を結んでいる会社が怖くなってね』

『……美樹さんだったら殺します？』

？『オートロックではないから、犯人が居るとしたら中から鍵を閉めてもらった事になる』

『ずっと温泉に入ってたんだよ。それより久米川のおっさんがなんで死んだんだよ!?』
『お前達が部屋に入ったとき何処かに隠れていたんじゃないか』
『被害者のタブレットＰＣには帳簿データが確認できた。改ざんされているかは今解析している』
『となると、下井が脱税の発覚を恐れて被害者を殺害した疑いが出てくるわけだ』
『あとは備え付けのタオルくらいだよ』
『殺人なら銃声を発生させるメリットはない。普通ならな。発見が遅れれば脱出も容易になるし、証拠も隠せる。でもそうしない理由があった』
『次会ったのが、警察到着後だったかな。その時は風呂上がりぽかったけど』
『そういや、ずっと温泉に入ってたって言ってた』
『自殺だろ？　？鍵は閉まってたし、お前らが最初に部屋に入ったとき誰も居なかっただろ？』
『ないなーい。それに廊下にはマスターキーを持ってきて貰ったホテルスタッフが居たから、誰か出てきたら気付くし』
『しました。私達が部屋に突入したのは警察関係者とあのスタッフしか知りません』
『硫黄の匂いがするな』

記憶の中の映像が連なって襲いかかって来る。受け止めた手に触れた感触が光に変わり絶命の嘆きをあげる。
記憶の中の言葉が綻びを見つけ崩れまた結び付く。そしてまた崩れていく。
それをただただ繰り返す。
正しい姿に、真実の姿に。

鍵はかかり部屋の扉は閉じられた。

それをただ開け放つのは、来訪者。

「ー隠者は待ち続けた」

「ママーあのおねぇちゃん変だよー」

「見ちゃいけません！」

【2-24】

【2-24】

久米川の宿泊していた部屋と同じタイプのホテルの一室を貸してもらい、その部屋のベッドに私は腰かけていた。
璃瑠の電話に寄るともうすぐ来るはずである。
鍵を開けておいたドアを開けて下井が入ってきた。

「なんだよ、話って」
「ちょっと、トリックでも実演してみせようかと」
「は？」
「その前にだな」

私はベッドから立ち上がった。

「まずなぜ久米川さんが殺されたか考えてみよう」
「しらねーよ」
「最初、私は久米川さんの持っていた帳簿データを隠滅するために殺害されたのかと思った。だけど効率が悪い」

もっとスマートな方法がある筈である。
第一、殺害したあとの僅かな時間でそれを行うとも思えない。

「それで忘れてたんだけど。久米川さんが持っていた茶封筒が現場から見当たらないことに気が付いた」

下井と別れたあと、久米川から話を聞いている時には確かに持って

いた筈だ。

「それともうひとつ。久米川さんは帳簿データと証拠写真をあんたに渡せと言われていた。私は写真というのは脱税の証拠だと思い込んでいた」

けれど、それには一つ疑問符がつく。

「でも、脱税の証拠になる写真ってなんだ。帳簿データだけで良い筈だ。まず脱税なんて写真になるようなものじゃない。それで久米川さんがポロっと呟いてたんだけど、あんたらの会社、暴力団かなにかの組織と繋がりがあるだろ」

本当に見落としていた記憶ばかりだ。遺留品の写真をみていても何が足りないのか分からなかった。

写真だ。下井が要求していたという。

「今回使われた拳銃、グロック17。おそらく密輸だが、あんたらの会社は拳銃を密輸し売りさばいているんじゃないか？そしてその証拠を久米川さんに掴まれてしまった」

帳簿データは手付かずで残っていた。なら殺害というリスクを背負ってまで隠したかったものは何か。

脱税が露呈したとしても、隠したかったものは何か。

写真だ。

「だからあんたは、久米川さんを殺害し密輸拳銃に関しての写真を処分した。脱税の件はある種諦めて」

「だから俺が犯人だって？　？見つかってもない写真を理由に犯人にされちゃたまんねぇよ。それに密室の方法も説明されてねーよ」

【2ー25】

私は久米川の撃たれた辺りに立つ。手で拳銃の形を作って宙に向かってバーンと口で言った。

「ここで犯人は久米川を射殺し、反対側に移った」

ベッドの反対側に移動する。そして何もないベッドの上で両手を動かす真似をし、下井に向き直る。

「ベッドの上のキャリーバックから犯人は写真を回収した。そして服を脱ぎ持ってきていたビニール袋か何かに入れた」

血痕が集中して落ちていた場所である。
ここで留まっていたのは間違いない。

「で、この時大事なのは既に部屋のドアは閉まっていたということかな。まあ、当たり前だよね。部屋に入って来た時に鍵は締めるもんね」

「するとあれか。久米川のおっさんは招き入れたみたいじゃねーか」

「で、犯人はここで待っていると銃声を聞きつけて第一発見者が部屋の鍵を開けて入ってくる。サイレンサーなしの銃だから銃声は絶対に誰かに聞こえるはずだったから」

サイレンサーを外したとしても、持っていなかったとして、銃声を響かせることが犯人にとって必要だった。

「そして犯人は第一発見者が入って来る時に鍵を開けているから、開いていたドアから外に出てエレベーターに乗り、部屋に戻る。そしてシャワーを浴びて着替えて何食わぬ顔をしてれば終わり」

簡単なトリックでしょ、と私は付け加えた。

部屋から出ないで開けて貰うのを待ってるだけで密室殺人の出来上がり。

「おいおい、待てよ。トリックも何もそれじゃあ、犯人とてめぇらが鉢合わせるじゃねーか」

「犯人は誰かが部屋に入ってくるまで待っていた。そしてこっそり部屋から出た。確かに見つからずにやるのは不可能だ」

しかし、私達にはそれを可能にするものがある。

「魔法だよ。あんた、魔法使いだろ?」

【2ー26】

【2ー26】

「魔法だよ。あんた、魔法使いだろ？」

私の質問に下井は鼻を鳴らした。

「2．02B-02Mオプティカル・カムフラージュ。魔法使用者の周辺の大気に干渉し可視光線を屈折させることにより、まあ簡単に言うと見えなくなるわけだ。光学迷彩ってやつだよ」

ステルスとは根本的に違う。ステルス戦闘機はレーダーには映らないが目には見える。光学迷彩はレーダーには映るが目には見えない。簡単にいうと透明人間になって部屋に隠れて誰かがドアを開けるのを待っていたわけだ。

「つまり、最初に部屋に入った時にあんたが部屋にまだ居たのに気付かなかった。光学迷彩だから。そしてあんたはこっそり部屋を出た」

メガネの少年探偵に怒られそうな推理である。

「随分な言い草じゃねーか。俺を犯人呼ばわりかよ。証拠でもあんのかよ」

「お決まりのセリフだよね。正直さ、今の段階での推理はかなり強引なんだけど。あんた、事件が起こった時刻に何処に居た？」

「だから温泉にずっと入ってたって言ったじゃねーか」

下井の言葉を私は否定する。

「私があんたに会った時、あんたからシャンプーの匂いはしたけど硫黄の匂いはしなかったんだよね」

「は？　？匂い？」

「私、匂いフェチで鼻が良いんだけどさ。あんたに会った時、確かに風呂上がりだったけど硫黄の匂いじゃなかった」

犯人は返り血を洗うためにシャワーを浴びたはずだ。誰にも見られない様に部屋のシャワーを。

部屋のシャワーは水道水だ、硫黄の匂いがする筈がない。

「まさか硫黄の匂いがしなかっただけで犯人かよ」

「もう一つ。あんたは失言を二度している。

最初は私とあんたが事件発生後に会った時に。あんたはこう言った。」

『自殺だろ？　？鍵は閉まってたし、お前らが最初に部屋に入ったとき誰も居なかっただろ？』

その時に気づけなかった私もお目出度いな。

「そして、今さっき。この部屋で」

『おいおい、待てよ。トリックも何もそれじゃあ、犯人とてめぇらが鉢合わせるじゃねーか』

この二つの発言だけで充分だった。

「あんた、なんで私達が第一発見者だって知っているんだ」

【2-27】

【2-27】

「あんた、なんで私達が第一発見者だって知っているんだ。これはあの場にいた人間以外知り得ない」
「それは、警察に教えてもらったんだよ」

下井の眼が泳いでいる。
私の携帯が鳴っていた。
出ると璃瑠の声がした。頼んでいた仕事は終わったそうで、期待していたものも確認出来たようだ。
私は忍ばせていたハンドガンを引き抜く。そして迷わず銃口を下井に向ける。
照準の向こうに下井の引きつった表情を睨みながら私がは言う。

「私は公安部公安第六課超自然現象及び事件特別対策係所属の魔法使い、伏見美樹。六課課員が武装し介入する事実は決して一般には公表されない。つまり警察があんたに話した可能性はありえない」

私達が部屋に入ったことを知り得るのはあの場に居たホテルスタッフと警察以外あり得ない。居るとしたら、あの場に隠れて居た筈の犯人だけである。
だから、下井が私達を第一発見者だと言い切れるはずがない。私達はただの旅行客だとしか、下井は知りえない。

「それと少々手荒だけど、あんたの部屋に今さっき強制捜査をさせてもらった。金庫から血のついた衣服が見つかった」

璃瑠が金庫を壊してしまったらしいが。
まあ、よくやったと言うべきか。弁償は経費で落ちるだろう。

「下井拓哉、殺人容疑で逮捕する」

【2ー28】

【2ー28】

「ちぃっ！」

舌打ちより早く下井の姿が消えた。姿が背景に溶ける。
そして腹に衝撃と熱い痛みを感じる。
蹴られた。

「っーー光学迷彩か！」

まさかこれ程の展開スピードだと予測していなかった。背後に気配がして、私は飛び退く。耳元で強烈な銃声が轟いた。
鋭い金属音がして流れ弾が跳弾する。

振り向きざまに引き金を引く。鈍い衝撃が手の平に伝わり、叩きつける様な銃声が二発轟く。
当てのない銃撃が壁を削る。
荒い足音が部屋の外に向かう音が聞こえた。

「逃がすか！」

右手を突き出す。ドアからここまでは一直線だ。見えなくても外す筈がない。
大気中の魔力を引き付けるように力を込める。
指先に静電気が走るような熱いものを感じる。身体の中のものと大気中のものとが混ざり合いそれが呼応する。
脳内で式を組み立てる。元素の結び付きを入れ替える。

狙うのは正面一直線。
見えなくとも避けるスペースがないのだから、相手の位置は予測できる。

「3．02A－02Sスタンショット」

振りかぶった。手で宙を横に斬る。
鋭い快活音が空間を歪ませ光弾が打ち出される。
それは何もない空間に当たると弾けその空間を吹き飛ばした。落下音がして空間の色が消えて倒れた下井が露呈して行く。
気絶した下井の手首に手錠をかけていると璃瑠が慌てて走ってきた。

「美樹さん!?」
「遅いよ璃瑠」
「下井は……？」
「スタンショットだよ、気絶してるだけだ」

私が答えると、璃瑠は溜めていた息を吐き出した。

「なんだよ、璃瑠？」
「心配してたんです」

【2ー29】

【2ー29】

高田梨花（たかだりか）は野方（のがた）に呼び出されて都内のとあるビルに来ていた。
エレベーターで最上階の部屋に到着すると秘書が待っていて梨花を案内する。連れられて部屋に入ると野方が居た。

「やあ、呼びだてしてすまないね」

野方は今年で３９才になったという。そうは見えない若々しい男性である。
高い鼻に甘い頬骨のラインにそって背中まである長い髪が艶やかなウェーブを描いている。

「いえ、その平気ですから」

部屋は一面ガラス張りに近く元々広いこの部屋をより広く見せている。
忙しなく瞬く夜の街灯は遠くで消えては表れを繰り返す。
ここから見える夜景だけでも、この部屋に来る価値はあるだろうと梨花は思った。

「仕事の依頼というのはやはり、信頼できる人間だからこそ直接頼むべきだと私は思うのだよ」
「そんな、信頼出来るなんて……。あたしはまだまだ未熟だし言われた事をやるので精一杯で」
「それだけの事が出来る人間がいかに貴重かということだよ」

野方はブランデーのボトルとグラスを持って来ると梨花に向ける。

「どうかな」

慌てて梨花はクビを横にふる。

「その、あたしはまだ未成年ですし」

「いや、そうだったね。すまない、秘書に何かアルコールの入っていない物を持ってこさせよう」

「そんな。わざわざすみません」

「なに、気の効いたもの一つ部屋に置いてなくてすまないね。とりあえず座ってくれ」

「はい」

このソファは幾らするのだろうか。これだけで、自分の報酬金が飛んでしまうのでは無いかと思うとつい浮かし気味に腰掛けてしまう。梨花が座ると野方が正面に座り秘書が梨花の前に紅茶を置いた。

「ダージリンの夏摘みですね」

「詳しいね」

「野方さんが出してくれる紅茶はたいていダージリンですから、覚えたんです」

「いかんせん、私が紅茶を飲まないものでね。とりあえず来客用に買っているんだが」

【2－30】

「それで君に頼みたい事があってね」
「なんでしょうか？」
「とある武装グループの持っているデータが欲しい」
野方の後ろの窓から見える瞬く夜の灯りの中に何人の人間がまだ寝ずに居るのだろうと梨花は思った。
「データ……ですか？」
「どうしても手に入れたいものなのだが、向こうはこちらの交渉に応じる気はないようでね」
野方のグラスの中で氷山の欠片の様な氷が音を奏でた。
「それでだ、君はその武装グループの拠点に潜入しデータのコピーを極秘に行いそれを持ち帰って来て欲しい」
「温和にですか」
「無理そうなら派手にやっても構わない。データさえ手に入ればね」
どちらでも君の好きな様にと野方は付け加えた。それの後始末をする位の余裕はある、と。
「そのデータはなんのデータなのですか」
「気になるかな？」
「あ、その言えない様な物なら構わないんですけど」

「いや、君がそれを理由に気乗りしないと言われても困るからね」
そんなことはなく、ただの好奇心だったのだがと梨花は後悔した。
「リニアモーターというものを知っているかな？」
「えーと、リニアモーターカーとかのですか」
「そうだ。電磁誘導によって推進力を得る技術のことなのだが、これを魔法に転用する実験がどうやら成功したようでね」
リニアモーターカーは数年前に稼働を開始したらしいが梨花は使ったことがなかった。
「この実験に成功したというのは驚くべきことだ。それでこのリニアモーターの魔法転用のデータがなんとしても欲しい」
「それをあたしがコピーしてくれれば良いんですね」
「その武装グループは最近急成長を遂げていてね。どうやら下井貿易という会社のバックアップを受けているらしい。とはいえ君が苦戦するような相手でもないから気にすることもないさ」
「が、頑張ります」
【2章・隠者は待ち続けた完】

【3章・運命は輪となった】

【3章・運命は輪となった】

六課に出勤してみるとオペレーターの八坂皐と璃瑠が温泉饅頭を前に顔を突き合わせていた。
なんだ、饅頭マジックでもやるのか？　饅頭マジックってなんだよ。
私が入ってくるのに気付いて璃瑠と八坂が頭をこっちに向けた。

「おはようございます美樹さん」
「おはよう璃瑠」
「今日も可愛いですね、黒豚みたいで」
「今日から、ベジタリアンにでもなるよ」

ちなみに豚は雑食である。どうでもいいか。
二人の横に座る。

「で、何やってんだ、お前ら」
「璃瑠ちゃんの機嫌が悪いので愚痴を聞いていたんですよ」

璃瑠から負のオーラが漂っている。森の中で会ったら魔女と勘違いしかねないほどに。あぁ、でも魔法使いか。

昨日帰ってきた箱根旅行は殺人事件に巻き込まれたのと、それの後処理で日程は完璧に潰れてしまった。
土産は買えたが、土産話は無い。
悪いのは私だろうか。いやない。悪くない。
でも謝っとく。

「ごめん、璃瑠。旅行ダメにして」
「別に美樹さんが悪いわけじゃないですから」
璃瑠は温泉饅頭を次々と口に放り込みながら不機嫌そうに呟いた。
紙パックのオレンジジュースをラッパ飲みしながら、璃瑠が私を睨む。
それが朝飯ではあるまいな。
仕方ない、と私は思って提案する。
「分かった。じゃあ今度の休みにどっか行こうぜ」
ケーキバイキング以外で。あれには、二度と付き合いたくない。以前一度璃瑠に連れられて付いて行ったことがあるのだが、見てるだけで十分だった。
「私と美樹さんがですか？」
私の提案に璃瑠が慎重に問い返す。
他に誰が居るのさ。
「ほ、……本当にですか？」
「ああ」
妙に嬉しそうだったので、驚いたが機嫌が少し治ったので良しとした。
あと、私の分の温泉饅頭が残ってないのも許し……許した。

【3ー1】

【3ー1】

「武装グループのアジトの襲撃ですか？」

璃瑠は課長の命令に気乗りしないといった感じで答えた。私の方を璃瑠はチラリと見る。意味を図り損ねる。

薄い髪を撫で付けながら課長は言う。

「君たちが逮捕したね、下井拓哉によって株式会社下井貿易が資金援助をしていた武装テログループの所在が割れたんだけど下井拓哉の逮捕と下井貿易の強制捜査はまだ公表されていないんだよね。このうちに武装グループを叩きたいってわけ」

下井拓哉の供述と下井貿易への強制捜査の成果である。

箱根旅行を潰された対価としては十分だ。

課長の提案に不服そうに璃瑠が噛み付く。

「ですが、それは実行班の方に回すべき仕事ではないのですか」

「実行班が今人手不足でね。魔法使いが2～3名必要なんだ」

「それで私達ですか」

魔法使いが必要とされるということは、相手側に魔法使いが居るのだろうか。当たり前か、でなければ六課に回ってくることもない。

「璃瑠君はこういう方が得意だろう」

課長の言葉に璃瑠は不満の意思を隠さずに返す。

「私は問題ありませんが、美樹さんを連れて行くことに反対です」

「信用ねぇなぁ私」

「当たり前です」

一蹴された。前回下井を逮捕したの私じゃん。もっと認めてくれたっていーじゃん。なりたい自分になればいーじゃん。

課長が璃瑠の反対に珍しくめげずに続ける。課長の髪が薄くなったのはストレスが原因だろうか。

「僕は美樹君の能力を評価してるんだけどね。ゆくゆくは班内選抜で実行班への移籍を考えている美樹君にとっては良い経験になると思うしね」

課長が私に賛同を求めるように視線を寄こす。

確かに私としては対テロ班の方に配属を移りたい。

鷺ノ宮こよりに近づくことが出来る。

「そんな軽い気持ちで来られても困るんです」

「それに最近、研究班から黒蛇のデータが欲しいと急かされてね」

「実地で試すならもっと適任が居る筈です」

「黒蛇のテストプレイヤーに選んだのは僕じゃないからねぇ」

課長と璃瑠の口論が白熱してきたので、私は割って入１ｅことにする。当事者が省かれている気がしてならない。

「課長ー、私が行きます」

「美樹さん！」

璃瑠が振り返って言い放つ。続けようとした璃瑠の言葉を遮る。璃瑠の頭に手を乗せて諭すように言う。

「私に断る理由も無いし、陸自訓練生時代に十分経験も積んでる。それに璃瑠も一緒なんだから大丈夫だよ」

【3－2】

【3－2】

東京都大田区に存在する巨大倉庫群。海流物産をはじめとした貿易会社等の保有する倉庫が立ち並ぶ一画である。
その地図が巨大なプロジェクターに映し出される。
数えてみるとミーティングルームには２０人弱確認できた。
結局、璃瑠を説き伏せて私達は六課の対テロ班に合流したのだった。

プロジェクターの前で立って説明をしているのは六課の柳沢（やなぎさわ）である。
聞くところによると恐妻家らしい。テロリストより妻の方が怖いとは世の中分からないものである。
ワイフが怖イフ。
口には出さないことにする。

「武装グループのアジトは倉庫区のＣ４とＣ５。
このＣ４とＣ５は連結している。Ｃ４とＣ５の突入可能経路は三箇所、突入班は１２名を三つに分け時間差での突入を行う。
武装グループの人数は最低１０。魔法使いの有無は不明であるが、魔法研究を行っていたという話もあることから2、3は居ると思われる」

倉庫内の見取り図に映像が切り替わった。

「αチームは正面、βチームはＣ５側から挟撃する形で、γチームは制空権を取り援護に回れ。αには６名、βには４名、γには２名を振り分ける。
作戦開始は今より一時間半後の１３：００。

２０分後に地下駐車場に集合。以上」

席から立ち上がると璃瑠に声をかける。

「璃瑠は正面突入か。気をつけてよ」

「プロを舐めないでください。美樹さんこそ、γが敵を逃したらお終いなんですから逃がさないでくださいよ」

「まぁ適当にやるさ」

装備を取りに行くとするか。

そう決めてミーティングルームから出て行こうとすると呼び止められた。

「おい、そこのちっこいのと馬鹿そうなやつ」

「へい？」

馬鹿そうなやつ、に心当たりは無いがちっこいのと言うと璃瑠しかいるまい。呼び止められた方を見ると先ほどまで作戦の説明をしていた柳沢がいた。

璃瑠の表情が苦いものに変わった。

「お前が伏見美樹か」

「そうかと言われれば、そうだよね」

まあそうとしか言いようがないよね。

別にモノマネとかじゃないよね。

柳沢の顔が楽しそうなものに変わる。

「本当にちっこいのが誰かと組んでいるとはな」

「お久しぶりです、柳沢班長。今は係長でしたか」

ちっこいのと呼ばれているから璃瑠の機嫌が悪いのか。
てか、あれ？　私が馬鹿そうなやつ、ってことなのか。

「久しいなちっこいの。そう嫌な顔をするな。ただお前と組んでいる物好きの顔を見にきただけだ」

柳沢はそう言うと私に手を差し出す。私が手を握ると力強く握り締められた。

「柳沢だ」
「伏見美樹っす」
「六課の捜査班の協力を感謝する。活躍を期待する」
「足を引っ張らない程度には頑張るつもりすよ」

後ろ髪とかは引っ張るかもしれないが。
柳沢が手をほどくと言った。

「それと、ちっこいのと上手いことしてやってくれ。根は良いヤツだから」

【3ー3】

【3ー3】

ロッカールームでキーを解除する。ハンドガンと予備のマガジン。
そして黒蛇のロックを解除する。

魔法の登場は軍事転用が考えられ軍事関係の研究に拍車をかけた。
ＷＩＥＣＳ（ウィークス）と呼ばれるエネルギー運用兵器はその成果の一つである。
高度に圧縮したＭａ元素をカートリッジに内包し、それを一定の要素を与えることで攻撃性のあるエネルギーに変換し撃ち出す。
簡単に言うなら魔力をカートリッジに詰めそれを圧縮し弾丸として撃ち出すのである。

これによって、従来の実弾を用いたものより遥かに高威力な兵器が個人で携行出来るサイズで実現したのである。

黒蛇は要請を受けて作られた次世代ＷＩＥＣＳの試作機の一つである。
その銃身はツヤの無い黒に鋼色。差し色として心ばかりの赤がある。
ベルギーのサブマシンガン、ＦＮモデルＰ９０　ＰＤＷの外観に似ている。長方形から湾曲させながら切り出したような四角くも丸みを帯びた横に長いフォルムをしており引き金が中のほうに、その後ろは長い。

だが、目立つ特徴はそこではない。
銃口の下から引き金のカバーの前の辺りにかけて７０度くらいの角度で銃本体の大きさに負けないくらいの銃身を引っさげている。

サブマシンガンを2つ繋げてそれを中折れ式にしたとでも言おうかその独特のフォルムには理由がある。

銃口の下についた長方形のそれは拡張バレルとジェネレーターとしての機能を持っている。
普段は単発式の銃であるが、銃口下の拡張バレルを連結させることで強烈なエネルギー砲撃を撃つことが可能となる。

これが黒蛇のウリであった。
黒蛇のテストプレイヤーに私が選ばれたのであるが、理由は知らない。5ナンバーだからだろうか。
それを肩から提げて私は地下駐車場に向かうことにした。

【3ー4】

茶髪のツインテールの少女と黒髪のロングストレートの少女が、一室でＰＣの前にかじりついていた。
茶髪のツインテールの方は所在なさ気にウロウロしている。
ツインテール……もとい高田梨花はＰＣが苦手である。故に黒髪のロングストレート……もとい石神佐樹（いしがみさき）に全て任せるより他は無いのであった。

「このデータ……」
「佐樹ちゃん、野方さんの言ってたデータってこれかな」
「おそらくそうね」

ＰＣによく分からない数式を打ち込みながら佐樹は梨花に頷いた。
こういった機械関係には疎いので、佐樹が何をしているのか梨花にはさっぱり分からない。
先程からＰＣに向かう佐樹の後ろで梨花はウロウロするだけである。

武装グループのアジトである倉庫区のＣ４とＣ５倉庫をくまなく二人で探して見付けたこの部屋には所狭しにＰＣが並んでおり梨花はそれだけで頭が痛くなった。

「でも佐樹ちゃんが来てくれて助かったよ。あたし、全然こういうの分からないから」
「この時代に未だに扱えない人が居ることが驚きだわ」
「うぅ……。で、でもなんとかなるよ？」
「そうね、この前メールをやっと覚えたものね」

携帯電話って便利だなぁと梨花は先週実感した。
なんたって電話しなくても良いんだから。
あれ？

「そうそう、あたしだって進歩してるんだよ！」
「技術の進歩の方が速いのだけれどね」
「うぅ……」

電子マネーが使えないので、紙幣を出すと店員に戸惑われる日々は疲れてきた。
最近はご老人ですら、電子マネーになってきたので肩身が狭い。

【3ー5】

「あと、2分位で終わると思うわ」
「なんか、あたし何の役にも立ってない気がするよ。ごめんね」

梨花はもじもじといった感じで言う。
気にも留めず佐樹は画面を凝視したまま返事をする。

「気にすることはないわ。護衛みたいなものでしょう」

佐樹の言葉に梨花は首を横に振る。

「でもでも、あたしなんか居なくても佐樹ちゃんは平気だろうし……」
「そんなに自分を卑下することはないわ。あなたの能力は誇っていいことよ」
「でも、あたしは佐樹ちゃんみたいに凄くないし、入曽さんみたいに仕事も出来ないし」
「あなたにはあなたにしか出来ないことがある。それを誰かと比べることはないわ」
「うん……」
「それに、私はあなたが時々羨ましくなる」
「へ？」

佐樹の口から羨ましいなんて意外な言葉がでて梨花は驚いた。
あたしが羨ましいなんてどういう意味だろう。
梨花には予想もつかなかった。

「それってどういう……」
「そのままの意味よ」
梨花の方を見ずに答える。
「佐樹ちゃんにそんなこと言われるなんて意外だよ」
恥ずかしそうに梨花は言った。
癖で頭のリボンを指で触る。
佐樹がポータブルＨＤＤをＰＣから取り外した。そしてＰＣの電源をきった。
「すごいね、そんな小さな箱にデータ入っちゃうんだ」
「ＨＤＤの方が破損の可能性が低くて良いのよ。タブレットＰＣより」
「？　？へぇー」
無理に理解しなくていいわ、と佐樹が言ったところで、梨花が制した。
そして次の瞬間強烈な爆発音がした。

【3ー6】

スタングレネードを投擲し爆裂音と閃光が発動した2秒後、璃瑠を含めたαチームが突入した。
璃瑠を除いた全員がアサルトライフルを持ち防弾チョッキを着込んでいる。
璃瑠はそれらの中にいては軽装と言えるほど異質であった。
細身のパンツに袖なしのジャケット。

しかし、手には璃瑠の身の丈はあろうかという大剣が握られていた。
辻風。
鋼色の鉈のような無骨な剣。持ち手のグリップを守るように剣は屈曲している。
剣に覆われたようなグリップの所に引き金があった。
刀身は鈍い輝きを放ち、その刀身に打ち込まれたカバーされていない複数の太いボルトは赤い。
刀身の先の辺りに埋め込まれているエンジンは静かな鼓動をしていた。

璃瑠の大剣、辻風は彼女の要望を受けて作られた専用のものである。
対現代歩兵、対魔法使いにおいてどちらに対しても通用する肉弾戦の延長としての攻防一体の武器。
辻風に切断性能はない。璃瑠の腕力と辻風の質量によって打撃としての武器でしかない。
だが、それで十分であった。

倉庫に突入する。倉庫内はかなり天井が高く、コンテナが不規則に

積まれている。

璃瑠は何か違和感を覚えた。

静か過ぎる。そして人影一つ見当たらない。誰も居ないのを班長が確認すると、そのまま奥に向かうこととなった。

C4とC5の連結部分が中心になっている。ひとまず、そこに向かうしかない。

「隊列をとったまま、連結通路に突入する」

「了解」

そのとき、銃声がした。断続した銃声の後に、爆発音と悲鳴が遠くから聞こえる。

無線から怒声が伝わった。

『こちらβ！　敵魔法使い2名と交戦中！』

こちらではなく、向こうに居たのか。

なんにせよ、挟撃を狙える形であることには変わりない。

『了解、αはC5へ救援へ向かえ』

『α1了解』

『β、被害状況を報告せよ』

『……。』

『β？　応答せよ、β！』

【3ー7】

【3ー7】

靴が床を叩く音を心の音が追い越して。自分の影が揺れる度に気持ちは跳ね上がりそうになる。呼び続ける無線の声に答える者など居ない。ただ無機質なノイズが指令の声に重なるだけであった。それが意味する物など一つしかない。

C5に突入した。

C5に入る事で空間は遥かに広くなったが視界は狭まった。焦げた煙が蔓延し、大量のコンテナが瓦礫とかしている。その先に璃瑠が見たのは多数の人間が倒れている映像だった。

βチームと、武装グループと思われる死体が転がっている。

相討ちかと思ったが違う。

武装グループの死体は時間が経っているように見える。

「佐樹ちゃん、ま、また増えたよ」

死体の中に、ただ二人だけ立っている人間が居た。黒煙の中、瓦礫の中。

中学生か高校生にしか見えない。

だが、この状況で。

彼女達は。

絶対的な強者として。

立って居た。

「客人の多い日のようね」

佐樹は突入してきた集団の中に見知った顔があって舌打ちをする。
落合璃瑠がいる。屋内戦だと厄介だ。

佐樹が両手に一丁ずつ持ったハンドガンを璃瑠に向ける。照準の向こうに璃瑠の姿を捉えて引き金を引く。その手の中のハンドガンが跳ねた。紅い光芒が大気を裂きながら直進する。
璃瑠は脚力の限りで地を蹴る。コンテナの上まで一気に飛び上がり弾丸を回避する。

「αチーム散開して当たれ！」
「遅い」

佐樹が両腰から二つ提げた長いレールのような物にハンドガンを直結させた。
そしてそれを持ち上げ構える。

佐樹のＷＩＥＣＳ、星砕（ほしくだき）。
ハンドガンの持つ傾向性と取り回しの良さの反面、威力にかける欠点を補う為にレールのような巨大な拡張バレルにハンドガンを接続することで一時的に瞬間的な火力を高めることを目的としている。
接続時のみであるが、ハンドガンは携行砲台並みの火力を得る事ができる。

「３．０２Ａ－０５Ｍインペリアルバスター」

佐樹は終わりの代わりに魔法名を告げる。その言葉は静かな波紋を呼び、重なり広がる。それは大気の振動へと代わり、星砕は呼応す

る。
光の線が佐樹に雨の様に降り注ぎ一瞬で消える。その瞬間に引き金を引いた。バレルが一筋の線を撃ち出す。それが光の粒子へと変わり、それを追うように膨大な光芒が大気を呑み込みながら爆風を巻き上げる。激流、魔力の膨大な塊は何物も防ぐ事など不可能だった。
魔力砲撃。
悲鳴はその光芒にかき消された。

爆風が璃瑠の髪を巻き上げる。風の音が耳元を去っていく。動から静へ。
砲撃は跡形もなく一瞬で静の世界を作り上げた。
世界の中心で佐樹は憂鬱そうに髪を揺らした。

「砲撃魔法……」
『璃瑠！　状況はどうなってんだよ』

美樹の声が無線から聞こえた。務めて平静に璃瑠は応える。

「敵魔法使い二名によりα、βともに全滅。これより私は敵殲滅に移ります」

【3ー8】

【3ー8】

魔法使いという定義は簡単だ。
魔法が使えればいい、もしくはその才能があればいい。
だが、いまこの場にいる魔法使いはそんな定義によって魔法使いとされた烏合の衆とは次元が違った。

魔法によって歩兵は大きく姿を変えた。近代戦は、新たな時代を迎えた。
それを体現している魔法使いが目の前にいる。

「佐樹ちゃん、あたしが前に出るから援護して！」

佐樹が射撃しながら後退し、それを回避しながら距離を詰めようとする璃瑠に梨花がぶつかっていく。
梨花のＷＩＥＣＳは、銃と呼ぶにはあまりに特異すぎた。
グリップの上下に刃のようなもので形成されている。剣を二つに割りその間にグリップと銃座を挟み込んだと形容できる。
叢雲（むらくも）。近接での射撃手の脆さを解決するために銃に剣としての性能を乗せたＷＩＥＣＳ。
それを振りかぶり璃瑠のところに一気に距離をつめる。
魔法の補佐によって数メートルの距離を一気に接近戦の距離へと変える。

「えぇぇい！」
「ーーっ」

璃瑠は辻風を逆手に持つと梨花が振り下ろした叢雲の一撃を受け止める。散った火花の中で璃瑠は叢雲を受け流すと一気に梨花の懐に飛び込む。得物が大きすぎる為に微妙に遠い互いの距離を更に詰めた璃瑠に梨花は動揺する。

「ーーっ！」

梨花は飛び込まれたので、叢雲で切り返そうとするも璃瑠は剣を振るより早くステップから身体を勢いよく捻った。左足を軸に右足を蹴り上げる。璃瑠の回し蹴りは梨花がとっさに張った魔力の盾に阻まれた。梨花の前で幾何学模様が描かれそれが盾として具現する。それをものともせずに身体をさらに回し辻風を魔力盾に押し込む。その重量からの一撃は、盾の上からも梨花にプレーシャーを与えた。梨花が手を裏拳の要領で手を横に振り切る。辻風を防いでいた盾が消え、梨花が飛び退くと辻風が床を抉った。飛び退いた隙をついて璃瑠は踏み込もうとしたが、それは佐樹の射撃に阻まれる。

ハンドガン二丁の連続した魔力弾をしゃがんで避けると、背中を熱が撫でた。奥歯を噛み締める。
その隙を突かれた。

「そこ！」

飛び退いて着地した梨花が体勢を整えると再び叢雲を構え直す。刃の刀身を水が流れ落ちて行く様に光の粒子が撫でる。それを振り切り梨花の姿が消えた。
璃瑠が辻風を真後ろまで振り切る。一瞬で後ろをとった梨花の一撃を受け止める。ぶつかり合い離反した叢雲と辻風は行方を失い間延びした動きを見せたが、それを二人は引き戻し再び叩きつける。かち合った振動が指先から手の平から、足のつま先まで伝わる。

それを無視して璃瑠は踏み込む、突如梨花は叢雲を引いた。勢い余った璃瑠は一瞬姿勢を崩す。そこを狙い姿勢を低くしながら梨花は剣を横薙ぎに振り抜く。
璃瑠は左足を大地に叩きつけ浮かした身体を空中で捻る。視界の端に叢雲の横薙ぎの煌めきが走る。

叢雲の低い位置の撃を躱すと着地と同時に璃瑠は右足を蹴り上げる。掠めた音がしたが虚しく空を蹴った。辻風を振り切る。それを叢雲でいなして梨花は叢雲を引き、顔の高さで構えると突く。
それを魔力盾を張った左手で璃瑠は叩き落すと、更に一歩踏み込む。璃瑠が飛び込む様に斬りつけるも梨花は引き戻した叢雲で防ぐ。

梨花は歯ぎしりをする。
璃瑠の戦法は接近戦なんてものではない。まるで密着させようかというほど距離を詰めてくる。巨大な得物を持ち腕力にものを言わせて斬りかかってくる立会いだが、絶えず蹴りを中心とした格闘にリソースを残している。
小柄な体格だからこそ、懐に潜られる危険性を常に意識させる。
潜られれば、互いにリーチのある得物同士だからこそ璃瑠が一気に流れを持って行ってしまう。小柄な体格から速い格闘が飛んでくる。

近付かれれば近付かれるほど、佐樹の援護も撃ちづらい。かといって梨花が距離を離せば至近距離での立ち回りに不安の残る佐樹への接近のチャンスを増やしてしまう。
ならば。

【3ー9】

【3ー9】

璃瑠が放った一撃を梨花は魔力盾で防ぐも梨花は後ろに吹き飛んだ。吹き飛ばされながら梨花は魔法を発動する。

「3．02A－04Bサークルエンサークル」

璃瑠の周囲で光の粒子が舞い上がり、それは大きな輪となった。

「これはーー！」

その輪が一気に収束しながら璃瑠に迫る。璃瑠に触れる寸前に跳んで輪を乗り越える。輪は収束し消えた。

消えるとまた璃瑠の周囲で光の輪が形成される。それは中心に居る璃瑠に向かって一気に収束した。

速い。

輪を飛び越えるとその隙をついて梨花が引き金を引く。叢雲の長い刃の狭間をバレルにして鋭い光芒が璃瑠を襲う。

「ちぃっ！」

魔力盾を貼るも一撃の重さに吹き飛ばされる。辻風が床をすり金属音の悲鳴を上げる。その悲鳴は璃瑠が辻風を振り上げると唐突に消える。

辻風を構え直し、腰を落とす。梨花が一直線に璃瑠へ向かう。叢雲の真っ直ぐの振り下ろしをステップで後ろに下がり掠める距離で躱

すと、辻風を下から斬り上げる。梨花が飛び込みながら璃瑠の真横を転がって避ける。空振った璃瑠の隙をついて光の輪が出現し収束する。

輪が璃瑠を挟み込んだ。そしてなお、輪は中心に収束しようと璃瑠の身体を締め上げる。

「かっは……」

佐樹がハンドガンを腰のレールに接続する。星砕の連結砲。
それが璃瑠を照準に捉えた。

「お終いね」

回避は間に合わない。だが、防御の苦手な璃瑠が強烈な砲撃を受け切る余裕は無い。
輪は強烈に絞まってくる。

佐樹が引き金を引こうとしたその刹那、天井から一閃のビームが差し込む。
佐樹と璃瑠の間をビームが通過し爆ぜた。

「!?」
「美樹さん!?」

天井に開けた穴から飛び込んできた美樹は、魔法による落下速度の減衰を使いながら銃を構える。

突入してきた美樹の黒蛇が唸りをあげる。
銃口下に取り付けられた拡張バレルが持ち上がる。

その様から蛇の名を冠する美樹の銃は拡張バレルと接続すると、確かな反応を美樹の手に伝えた。

「3．02A－02D：2．02－02－01Cジェノブレイカー！」

拡張バレル内で形成された力場によって加速され打ち出された膨大な魔力の塊が青白い閃光を散らしながら直進する。金切り声を上げながら光芒は貫く。混戦状態だった二人は一気に飛び退き、その間を砲撃が攫っていく。

璃瑠が輪を叩き割る。

砲撃がコンテナを軽々と吹き飛ばし宙に舞ったのに気を取られた梨花の隙をついて璃瑠が後ろに回り込む。

「速い！？」

「遅いんですよ」

方や剣として銃の機能を乗せたもの。

方や銃として剣の機能を乗せたもの。

辻風と叢雲が激突する。

【3－10】

佐樹の攻撃をコンテナの陰でやり過ごし、一途の間を置いて美樹は飛び出す。コンテナごと吹き飛ばそうと星砕を連結させ構えようとしていた佐樹は虚を突かれた。

引き金を引き続けながら走り寄る。佐樹が地を蹴って宙に舞い上る。それによって美樹の射撃を躱すと連結状態の星砕を構え直す。宙に浮いたまま、姿勢を捻り美樹を捉える。

「3．02A－05Mインペリアルバスター」

バレルが地を鳴らし光の粒子が銃口の辺りで渦を巻き、引き金を引くと同時に星砕が吠えた。

二門同時の莫大な魔力砲撃。

美樹の目の前が光に呑まれる。一瞬で美樹の姿は光芒にかき消された。

轟音をかき鳴らし倉庫の壁に穴を開け五秒ほど継続的に続いた光芒の跡には爆煙しか残らなかった。

「……消えた？」

美樹の姿が見えないことを佐樹はいぶかしむ。跡形もなく消し飛ぶほどの威力ではない。

あの距離で回避したというのか。

警戒をしていた佐樹の後ろの方で金属音が聞こえた。

「いつの間に！？」
「３．０２Ａ－０２Ｄ：２．０２－０２－０１Ｃジェノブレイカー！」

何時の間にかコンテナの上に移動していた美樹の黒蛇が呼応する。
美樹の黒蛇が砲撃形態をとっていた。魔力が収束し砲撃に変わる。
隙を突かれたが狙いは佐樹ではなかった。

「梨花！」
「わぁっ！？」

打ち出された青白い閃光と砲撃が璃瑠と交戦していた梨花に狙いを定め一直線に翔ぶ。
璃瑠が飛び退き梨花が魔力盾を張る。鋭くけれど太い魔力の一撃は盾を抉り、受け止めた梨花の表情が歪む。
璃瑠が辻風を構え直し梨花に突撃する。

「しまっ」
「５．０２Ｂプレッシャーリージョン」

佐樹が呟いた。

【3ー11】

「5．02Bプレッシャーリージョン」

石神佐樹が呟いた。
佐樹を中心に鐘の様な音が響く。鐘は無機質な音を高らかに謳う。
その振動が美樹の身体を通過した途端、美樹は重圧を感じた。
振動が鼓膜にビリビリと伝わる。振動が身体にまとわりつくかの様に。

身体が重いのではない。
空気がまるで押し潰してくるかのように、重さを持った。

魔法を発動した筈の佐樹に向かってすかさず撃つも、魔力弾は弾道が下に逸れ地面に落ち火花を散らした。直線的な軌道を描く筈が、勢いをなくし落ちる。

「な……んだ……この……魔法」

身体が動かない。誰かに押さえつけられているかのようだ。

「5……ナン……バー……か？」
「これは……まさか……！？」

璃瑠が緩慢な動作で腰のコンバットナイフを投げる。その挙動は何かに押さえつけられているかのように鈍重なものであった。
ナイフはその質量からは予想ができないほど、急速に地面に落ちた。

この身動きすら支障の出る中で佐樹は悠々と歩みを進める。璃瑠と美樹を無視して梨花の元へ向かうと梨花は苦しそうに微笑んだ。

「ごめんなさい、あなたを巻き込む気はなかったのだけれど」

佐樹の謝罪に梨花は大丈夫だと言い聞かせる。

「ううん……、あ、あたしは……平気……だから」

「直ぐに終わらせるわ」

そして振り返る。その長い髪がまるで闇を孕んだように揺らめいた。

【3－12】

【3－12】

璃瑠の耳に美樹からの無線が聞こえた。

『璃瑠……この……魔法は……なんだ』

『……おそらく……特殊な力場……です。……下向きの……ベクトル……か……重力場の……どち……らか』

『……だとしたら、……考え……がある……、なんと……崩すか……ら。即座に……動ける……か』

『死ぬ気で……やりますよ』

美樹がゆるゆると首を上げた。何かを探しているように見える。

天井には何も無い。鉄筋に巨大な白熱灯がぶら下がっているだけだ。

天井は高く先ほど美樹が空けた穴からは空が覗く。

佐樹がハンドガンの銃口を美樹に向けた。

「何を考えているのか知らないけど、終いね」

「随分と……、涼しい顔……してる……じゃねー……か」

「それはどちらの意味かしら。私があなたを殺す事？　それともこの魔法発動下の事？」

璃瑠がなんとか、詰め寄ろうとするが足が動かない。一歩一歩を少しずつ擦るようにするも、佐樹までの距離は遠すぎた。

「むしろ、私はあなたがそんな無駄口を叩いている余裕がある事の方が驚きだわ」

美樹は、口角を上げた。
使えそうな物はすでに見つけている。天井までの距離が気になるが、勝算はある。

「理由は……二つあって……さ、一つは……性分」
「もう一つは？」

佐樹の質問で美樹の表情が張り詰めた余裕から真剣なものに変わる。

「……あんたの……隙……を待ってた！」

美樹の言葉と同時にその場にいた誰もが何か、そう言うなれば古いフィルムに入ったブレのようなものが見えた。視界が揺れ影が踊る。
世界がまるでぶれたかのように。

景色が「ずれた」ように見えた。

【3ー13】

バチン！と、何かが切れる音がした。そして鉄と鉄がこすれる様な音が続き、何かを軋ます。
そして、空虚だが巨大な音が上がった。

「！？」
「佐樹ちゃん！　上！」

四人の居る地点の真上の天井の鉄筋の一部がその重さによって周囲の鉄筋との結合を離れ、ずり落ちている。一本だったそれは、崩れ始めていた。
引っかかっているせいか、ゆっくりと。
しかし、鉄筋の一部はガコン、と音を立て一気に崩れ落ちた。

落下する先は四人の居る地点。

梨花が危険と判断し佐樹が魔法を解除する。その瞬間に今までかかっていた重さが消えた。四人はその場を一気に散る。
鉄筋が床に派手な音を立てて落ちた。あまりの勢いに音が質量を持ったかのように響する。細かい破片が飛び散る。
鉄筋の落ちたその衝撃に隙を見せた佐樹に向かって、その機を待っていた璃瑠が飛び出す。

「璃瑠！」
「はい！」

璃瑠が一気に距離を詰める。佐樹が振り向き様に引き金を引くも、放った弾丸は璃瑠の盾の様に構えた辻風に弾かれた。佐樹が地を蹴って飛び退き距離を取ろうとするも、その距離さえも璃瑠は一気に詰めた。
佐樹の懐に飛び込み辻風を腰の辺りから身体を回転させながら振り切る。鈍い音。空を斬るのではなく、抉るような一撃は寸分の猶予も与えなかった。直撃した辻風の勢いに呑まれて佐樹の身体は吹き飛んだ。
そこを狙って美樹は黒蛇を構える。

「３．０２Ａ－０２Ｄ：２．０－１」
「させない！」

美樹が佐樹をロックした瞬間に梨花が真上から強襲した。飛び込みと同時に振り下ろされた叢雲の一撃を魔力盾で受け止めるも、受け流せずに吹き飛ぶ。吹き飛ばしから華麗に連射まで梨花は放った。
二発の銃弾が光を散らし飛翔する。
防御が間に合わず一発が腹を掠め、もう一発が直撃した。

「ぐっ」
「美樹さん！？」

佐樹の元に駆け寄ろうとする梨花を璃瑠が追い詰める。地を蹴って飛ぶ様に走る。
それを見て梨花はその場で踵を返し魔法を発動した。

「３．０２Ｂ－０１Ｃスタングレネード！」

梨花が、白光の球体を空中に生成し放り投げた。気の抜けるような軽い音。そして、何かがはまる様な音。

梨花に近い位置に居た璃瑠が咄嗟に身を伏せる。
倉庫内を炸裂音と閃光が包んだ。

【3－14】

「痛ってぇ」

私は気付くと床の上で寝かされていた。
天井に空いた穴から黒く汚れた雲が見える。
身体が重たくて動かすのが億劫なので寝たまま私は周囲の状況を把握しようとする。
横に誰かが座っていた。

「気がつきましたか？」
「璃瑠か、どうなってんだ」

璃瑠の声が横からした。頭を動かすと璃瑠の顔が見える。私を覗き込む璃瑠の顔が泣きそうな表情にとれて、腕を伸ばす。
私が右手を璃瑠の頬に添えるといつもの璃瑠なら払いのけるのに、今はその限りでなかった。

「撃たれたんです。防弾チョッキでたいした怪我でもないですが、その後のスタングレネードをモロに食らったのでその影響で気絶したんですよ」
「何分くらいだ」
「三分も経ってないです」
「スタングレネードで三分も気絶する方がショックだよ」

半身を起こして確認すると防弾チョッキの一部が避けていた。チョッキを脱いで上着を外して見ても内出血だけだった。

全身打ち身と擦り傷くらいなもので、たいした事が無い。

「あいつらは」
「すみません、逃がしました」
「そうか」

改めて周りを見ていると騒がしく回収班と救護班が走り回っていた。
半壊した倉庫を見て、文字通り無茶苦茶だと思った。
この怪我で済んだのは奇跡だな、私。

「なんだよ璃瑠、泣きそうな顔して」
「美樹さんがあんまりにも不甲斐ないから、涙が出てきたんですよ」
「お役に立てずに申し訳ありませんねぇ」
「ふざけないでください。……心配してるんですから」

【3ー15】

【3ー15】

新宿区のとあるレストランで弘佳と美智は鷺ノ宮こよりを待っていた。向こうが待ち合わせを指定するのは毎回このレストランだった。高いと言える程の店でもないが、品よく纏まっていて落ち着いた雰囲気のため不満は無い。

鷺ノ宮こよりには、何か思い入れでもあるのだろうか。

「……来ないですね」

美智がポツリと言った。

約束の時間は13時30分であったが、10分は経過している。

弘佳と美智がメールでなく直接鷺ノ宮こよりに会うのは、これが三度目だったが今まで時間通りに来た事は無い。

「まぁ、いつものことですし。慣れましたわ」

騒がしくドアを開けて少女が一人入店してきた。

金色に染めた長い髪にパーマをあて、肌が白いためよく似合っている。

頭にはミニハットを付け、全身所謂ゴシックロリータファッションであった。

目立ち過ぎるのは、テロリストとしていいのだろうかと美智はいつも気になる。

「お待たせー、うん遅刻かな」

「お久しぶりですわね。鷺ノ宮こより」
「弘佳に美智、久しぶりだね、うん久しぶり」

【3－16】

【3－16】

席に着くと鷺ノ宮こよりは楽しそうにメニューを広げた。

「二人はもう何か食べた？　あたしはまだ食べてないんだ、そう何も」

「まだですわ」

「あたしとしては、パスタがお勧めかな、パスタ」

といいつつも、こよりはピッツァの写真に心惹かれている。

イタリア料理を出すこのレストランは珍しく南北どちらのメニューを提供している。

イタリアといえばイタリア南部の料理を連想しやすいが北部の料理も魅力的である。

と、こよりは言っていた。

「ピザはやっぱり三人で分けようか、うん分けよう」

どれが良い？　とこよりがメニューを見せたので弘佳は美智に選ばせることにする。

黙って美智はメニューの写真を指差した。

一通りのオーダーを伝え、店員が去っていくとこよりは小型のポータブルＨＤＤを取り出した。

「約束の品、そう例のね」

「中身、ここで確認させてもらっても宜しいかしら」
「心配性だなー、いいよ、かまわないし」

弘佳はこよりから受け取ったＨＤＤを美智に渡す。
受け取るとタブレットＰＣで中のデータを確認するとし始めた。

「最近、二人は何かあった？」
「箱根のほうに二人で旅行に行ってきたばかりですわ」

旅行と聞くとこよりは目を輝かせた。

「旅行？　いいなぁー、旅行」
「羽を伸ばしてきましたわ」
「そっかー、じゃあちょうどいいかな、うんいいよね」
「？」

【3ー17】

【3ー17】

「こっちからの交換条件、そう引き換えの」

こよりの言葉に弘佳は反論する。

「こちらが掴んでいる活動家の所在と、最近の政府の動向、それと資金提供。全てお渡ししたはずですわ」

先に渡すのも条件のうちだった。

フリーに近い活動家のこよりにとって情報は重要であり、それを手に入れるのに苦心しているのも弘佳は知っている。

「いや、もう一個だけ頼まれてくれないかな、一個だけ」

「なんですの？」

「公安六課って知ってる？　公安六課」

最近、活発な警察組織。

「公安の対魔法使い組織ですわね。こちらの一派も何度か接触していますわ」

なかなか、厄介だと聞く。

魔法使いをかき集めているとの話もあるので、頭数が揃ってくると脅威になるかもしれない。

「そうそう。それでさ、公安六課の人間に妙なのがいるみたいなん

だけど、調べてくれないかな、調査ね？」

どうするか弘佳は迷った。
データの受け取り以外の命令は受けていない。
だが、ここで鷺ノ宮こよりに恩を売っとくのも悪くないと思える。

「継続的な人間沙織のデータ引き渡しを約束出来るのなら引き受けますわ」
「いいよ、約束する、うん約束」

それくらい構わないしー、とこよりが言っていると店員が料理を運んできた。
美智がＰＣとＨＤＤの同期を解除し弘佳に渡す。

「……本物です」

それを素早くポーチにしまい、弘佳はこよりに聞く。

「それで、何を調べればよろしいんですの？」

「落合璃瑠」

【3章・運命は輪となった完】

【4章・審判は下された】

【4章・審判は下された】

東京都立西部区第三高校。位置としては練馬区である。
チャイムの音が二時限目の終わりを告げて昼休みの突入にクラスは歓声をあげた。

「村山ー」

村山(むらやま)はクラスメイトに肩を叩かれて身を震わせた。振り返るとクラスの男子三人が笑いながら立っていた。

「今日さー、俺携帯忘れちまってよぉ。金貸してくれないかなぁ」
「で、でも……ま、前貸した分も、か、かか返してもらってないよ。、ね……？」
「そうか。じゃあ貸すんじゃなくて寄越せ」

髪を掴んで村山を押し倒した。
派手な音にクラス中が注目した。

「またやってるよー」
「てか、村山頑張りすぎじゃね」
「なんで、あいつ学校来てんの？」
「でも来てくれないと詰まんないし」
「分かるー。村山おもしろいもん」

うるさい。
腹を蹴られながら村山は呟いた。

「村山さー、俺暴力嫌いなんだよねー。お前のほうが嫌いだけど」
「ヒロキー、村山の携帯あったぜ」
「おう、じゃあメシ食いにいくか」

村山は制服についた埃を払いながら起き上がる。
好奇の視線が突き刺さる。笑混じりの陰口が聞こえてくる。

みんな死ね。

【4－1】

【4－1】

「美樹さん、死んでください」
「やり過ぎだよ！？」
「問答無用です」

六課の冷蔵庫に入っていた高そうなプリンを堪能していた所、璃瑠に殴りかかられた。
とっさに顔を庇ったが普通に痛い。
というか、女の子の顔を狙うか、この非道。

「よくも私のプリンを食べましたね！」
「痛い！　ちょっ、璃瑠は全身凶器なんだからちっとは加減しろ！」
「誰が全身凶器なんですか！」

鋭い蹴りが飛んできた。事実ではないか！
椅子から転げ落ちると、璃瑠が執拗に脛を蹴り続けてくる。弁慶も泣くわ、こりゃ。

「分かったわたしが悪かった！　だから蹴るな！」

そんな私達を見て課長と八坂は談笑している。
和やかな場面じゃないからね、そんな場面じゃないからね。

「分かっただけですか」
「……プリン買ってきます」

私の事実上の敗北宣言に璃瑠は満足そうに頷いた。暴力による解決は何も生まないと思うのだ、私は。
あとプリンくらいいいじゃねーかー。
課長が私達のやり取りが終わったのを見て近づいてくる。

「さて、そろそろ話を聞いてもらえるかな」

課長に手を貸して貰って立ち上がる。
脛が、痛い。

「なんすか、課長。私プリン買いに行く任務があるんすけど。あと領収書の宛名って公安六課で良いんすかね」
「経費で落ちるわけないでしょ」

【4－2】

「昨日君たちが交戦した二人組の魔法使い。片方は、独立派の通称佐樹と呼ばれているテロリストと判明した」

そういえば、そう呼ばれていた気がする。もう片方は梨花だったか。どちらも中学生くらいに見えたが。

「独立派ってのは国内独立運動の極右テログループだよね？」

「まあ、大雑把に言えばですけど」

微妙に人やグループによって考え方は変わるが、目指す所は同じだ。現政府の姿勢を批判し従来の政府を一刷した新規政府の立ち上げ。これらの運動の一部を政府が規制、弾圧したことで今現在の武力闘争へと繋がっているのである。

「で、その佐樹ってのは何者なんすか？」

「5．02Bプレッシャーリージョンを有する5ナンバーです」

璃瑠が引き継ぐ。プリンの欠片をほぼ空になったカップからスプーンで掻き出している。

綺麗にカップから残りをこそげ取るラバーみたいな製品はないのだろうか。売れると思うのだが。

「あの身体が重たくなる魔法か。着衣泳の訓練を思い出したよ」

「私も美樹さんを冬の海に突き落としてみたいです」

それ着衣泳の訓練じゃないからね。

「範囲内に圧力をかける魔法。引力な様な物を発生させている、下向きのベクトルをかけているとの説もあります」

私の撃った弾丸は妙な軌道を描いて下に落ちたし、璃瑠が投げたナイフは不自然に下に落ちた。

人だけでなく物にも作用するようだ。

「まあプレッシャーの様な物を範囲内に発生させて運動を阻害する魔法です」

「分からん」

「５ナンバーですから」

その一言で納得しろと言うのも無理ではないか。検証しようにもデータが圧倒的に足りないのだろう。

「彼女らは、何かを目的に武装グループと交戦し、その後公安六課の対テロ部隊と鉢合わせした為に戦闘となった」

六課の対テロ部隊が一分も保たずに全滅した。

【4ー3】

「あの時、鉄骨が落ちてこなければ死んでましたよ。幸運でした」

璃瑠の言葉に私は頭を掻きながら言い出す。

「あー、あれやったの私」

言ってなかったな、そういえば。

璃瑠が不思議そうな顔をした。

「はい？」

「私の魔法」

「爆弾でも仕込んでたんですか？」

そんなわけあるか。

璃瑠もそれは分かっているようで。

「私の５ナンバー。あの距離まで届くかは自信なかったけど」

「……どんな魔法なんです？」

説明し辛いなぁ。

さっきの５ナンバーの説明に納得出来なかったほどでは無いが、こっちのも理論としては説明し辛い。

何か説明に使えそうな物はないかと思っていると内戦が鳴った。

「どうしたのかな」

内線で課長は何かを聞くと私達の前に立つ。

「ちょっと事件が起きた。今すぐ急行出来るかな？」

「なんすか」

「魔法と思われる反応で施設内に侵入が出来なくなっているらしい。中の状況を確認し、原因を究明。速やかに解決せよ」

施設内に侵入出来ないと言うのはどういう意味であろうか。

璃瑠が聞く。

「現場はどこですか？」

「東京都立西部区第三高校」

嫌な名前が聞こえた。

二度と関わる事は無いかと思っていたのに。

よりにもよってだな。

「美樹君の母校だ」

【4－4】

現場に到着すると学校から５０メートル以上離れた位置から円心状に検問所があり学校だけでなく周辺が閉鎖されているようだった。バンの後部座席のスモークガラスから外の様子を覗いて見る。懐かしい光景だった。

「美樹さんは、この高校に通っていたんですか？」
「中退して陸自の訓練高に行ったけどね」
「陸自の訓練高で、魔法使い相手にあそこまで動けるものなのですか？」

訓練校にいたのは数カ月であるから、璃瑠の疑問の意味も分かる。

「知ってるんだろ？　私は鷺ノ宮こよりっていう魔法使いを追ってるって。対魔法使いに特化してるの」

私としては璃瑠の方が不思議なのだが。
まさか、あれ程とは思わなかった。

「到着だ」

運転手に声をかけられて私達はバンから降りる。
先に現場入りしていた六課課員が出迎えた。
課員に奥の作戦本部まで連れていかれる。

「狭山さん！？」

狭山が居た。一課のしかも運営の狭山が現場入りしている事実に驚く。

「いろいろあってな」
「久しぶりっす」
「久しぶりだな、伏見。色々大変だったそうだな」
「まぁ、色々と」

作戦本部は学校裏門から少し離れた売り出し中の空き地にテントを張っていた。
もう少しまともな所はなかったのだろうか。

「で、状況は」
「結界だ」

【4ー5】

結界。狭山の口からはその言葉が出た。
範囲内を非干渉空間とする魔法。

「結界ですか？」
「現在学校の敷地と外部の間に見えない壁のようなものが出来ていてな、ありとあらゆるものが弾かれているんだな。もちろん人間もだな」

学校全体を結界が覆っているとは信じられない。
結界は所謂魔力の壁だ。フィクション作品において結界と名のつく物は多く登場するが、現実に存在する結界は少し勝手が違う。
私達が使う魔力盾のように魔力を固定化したものを張り巡らす事で一種のバリアーとして周囲に展開するのが結界と言われる魔法である。簡単に言うと透明なバリケードだ。
それは狭い範囲、それこそ魔法発動者の手の届く範囲位しか形成出来ない。
普通ならば、だ。

「だが、今回の結界は学校全体というあり得ない範囲を覆っているんだな」
「５ナンバーですか？」
「どうなんだろうな。結界自体は２．０２だからな」

２．０２Ｂ一の後はなんだっけかな。

「それで、私達が呼ばれた理由というのは」
「内部での状況は不明だがな、少なくとも魔法使いが学校内に潜伏していてな。内部との連絡も取れていないんだな。だが一つ分かっているのは」
「いるのは？」
「犯人は学園内部で殺人を起こしている」

狭山の落ち着いた言葉に璃瑠は逆上した。

「なんで突入させないんですか！？」
「理由は二つだな。一つは結界が突破出来ない。もう一つは昨日のお前達の戦闘だな」
「私達のですか？」
「そうだ。昨日の戦闘でたった二人の魔法使いに１０名の対魔法使い訓練を積んだ隊員が一分も保たずに全滅させられたな。確かにそこらの魔法使いならば、対魔法使い部隊の方が圧倒的に有利だ。だが、昨日の戦闘を見てみろ。
年端のいかない少女に瞬殺されたんだ。
どんなに対策を整えようと、強力な魔法使いには敵わない。魔法使いでないと無理なんだな」

昨日の二人は桁が違った。正直に言うなら私が生きているのは奇跡だ。

「上層部はそれで踏み出せないでいるんですか」
「そういうことだな、残念ながら魔法使いを中心に編成された部隊は今の所自衛隊の連隊があるだけなんだな」

確かにＷＩＥＣＳのように兵器は飛躍的に進化した。魔法によって従来の兵器とは比べ物にならない威力を持っている。引き金一つ、

ボタン一つで誰しも魔法使いになれるのだ。
だがそれを、魔法使いが使った時その相乗効果は計り知れない。
魔法使いもどきの屈強な兵士と魔法使いの屈強な兵士を比べれば、その差は埋めようがない。

「正直に言うならばな、上層部の見たては甘過ぎたな。魔法使いの育成にコスト面から渋り力を入れなかった」
「六課の魔法使いの数はタカがしれています。緊急時に回せる数なんてありません」
「だから私達が、か」

【4－6】

【4－6】

「悪いように取るな。期待しているわけだな。昨日の戦闘で上層部は魔法使いの有用性を見直し始めているんだな」
「何にせよ、私たちのやる事は変わりません。内部に突入し、犯人を確保します」

璃瑠の言葉に頷いて、狭山は高校内の見取り図を広げた。
勝手知ったる場所だ。
犯人の目的は不明。殺害した人数も不明だが、目撃証言がある。結界に阻まれて逃げようとしても動けなかった生徒を殺害したらしい。
少なくとも、十五名。
今だその死体は結界で阻まれなければ手の届く距離に倒れているらしい。
璃瑠が舌打ちをした。

結界は無色透明だ。しかし前述の死体以外、中の様子は分からないらしい。
窓にはカーテンが閉められ中から人が出てくる様子も無いと。犯人が恐らく脅しをかけていると思うが。
犯人は男子学生というのは分かっているが、個人の特定までは至っていない。

「人質の生死、犯人の生死も問わない。魔法を目撃されても構わん。何としてでも犯人を確保しマスコミが嗅ぎ付ける前に解決しろ」

たった二人でか。むしろ動きやすいともとれる。

校内なら記憶が定かだ。
璃瑠が聞く。

「結界の突破方法はどうするんですか？」
「爆弾かロケットランチャーを考えたが」
「私がやる。下手に派手な事をして刺激したくない」

璃瑠が不信そうな顔をした。

「だからどうやって」
「私の５ナンバー実演するよ」

【4-7】

何処から調達してきたのかは知らないが、東京都立西部区第三高校の制服を二着持ってきたので私と璃瑠はそれに着替える。
カムフラージュ位にはなるのだろうか。
あぁ、下には防弾チョッキは着てるけれど。

犯人の所在は分からないが、恐らく校内の何処か。校舎裏の通用口から侵入する事にして、そこまで近い高校の自転車置き場に回った。
柵の辺りに手を伸ばすと、何も見えないが何かにぶつかった。目を凝らすと光が少し歪んでいる。
ガラスの様だ。
これが結界である。

「私と璃瑠が通れる位の穴を結界を崩壊させて作る。自動的に結界が修復する可能性もあるけど通過するには十分な時間がある筈だ」

黒蛇を肩に担ぎなおすと、一歩前に出る。
空間じゃない。そこには確かに魔力の結合がある。そしてそれからなった物質がある。

左手を顔の横に持ってきて肘を突き出す。
眼の裏側に力を込めるように。
脳が沸き立つように。
私を生温いような冷たいような感覚が包み、魔力がみなぎるのを感じる。それが登ってきて私のこめかみの辺りを刺激する。
歯を食いしばる。激動が身体の内側から連打するように響く。

「5．02B－Xスライドシフト」

左手を横に振り切る。視覚に膨大な情報が流れ込んできて、私を通過する。

狙いを定めた辺りが揺れ動くのが見えて、古い映写機のように風景がブレる。幾つもの線が縦に筋を入れて、景色が二重三重になり重なりが崩れる。

目の前の透明な壁の一部が崩壊した。

触れる事なく結界の一部が崩壊した。

空いた隙間から私と璃瑠は身を潜らせる。

中にはいると空気が少し変わったように感じた。

狭山に振り返り敬礼をする。

「健闘を祈る」

「検討しとくよ」

「見当違いですね」

【4－8】

通用口まで璃瑠を連れて走る。
通用口とは言ってはいるが、生徒もよく使う便利な裏口と言ったところなので鍵はしまっていない筈だった。

「美樹さんの魔法、あれは何なんですか？」

通用口の分厚い鉄の扉をゆっくり開ける。軋む音を立てた。滑り込むようにして校内に入った。

「私の５ナンバーの魔法は５．０２Ｂ－Ｘスライドシフト。対象を『ずらす』魔法だ」
「ずらす？　ですか」
「そう、ずらすだけ。瞬間移動とかじゃなくてずらすの」
「便利……ですかね」

そりゃ昨日の魔法使いに比べりゃ地味だけどさぁ。
この魔法のおかげでいろいろ好き勝手にやらせて貰ってるわけだし。

「応用の問題だよ。さっき私が結界に穴をあけたみたいに、魔法の結合を解除できるぜ」
「？」
「決めた範囲しかずらせないからな。結界の一部の範囲をずらすことで魔法同士が結合を崩壊させることが出来る」

先程の結界はそうやって壊した。

「結合しているＭａ元素同士の一部をずらすことで、安定していた状態を崩したということですか？」

璃瑠は理解が早くて助かる。私が頑張って考えた応用方法なのに。ずらすだけ。ってなんだよ。いや便利だけど。

「そこまで、細かくは狙えないけど結果としてそうなったわけ。昨日の鉄骨も似たようなもので、鉄骨を一部をずらすことで周囲の支えから切り離して落としたと言うわけだ」

「荷物を運ぶのが楽そうですね」

「重いものもずらせるから、あの倉庫にあったコンテナを並び替えるとかなら出来るよ」

ＲＰＧゲームとかだと引っ張りだこだと私は思うよ。

念動力（テレキネシス）とも違うが、まあその様なものだと思って構わない。

Ｍａに干渉し運動エネルギーを生じさせるのは違う魔法であるし、まあ５ナンバーだからという説明になってしまう。

「無駄話はこんなところにしておきましょうか」

【4ー9】

リノウムの床の上は思ったより音が響く。
学校の廊下を足音なんて気にして歩くことになろうとは思ってもいなかった。ここに戻ってくるとも思わなかったが。

「どうしますか、犯人の所在は不明です」
「出来れば騒ぎ立てたくないから、集団に突入は無しだ。なるべく隙をつきたいし」

相手の実力は不明。この結界が5ナンバーかも不明。

「ここは一階の廊下だから、教室は無いけど事務室と保健室はある。ひとまず誰か居ないか探して回る」
「そうですね。学生を集めておくなら、恐らく体育館でしょう。逃げ出そうとした生徒が居ましたから、何処かに隠れている可能性もあります。
美樹さん、狙撃用バレル持ってきて居ますか？」
「持ってるよ」

事務室には誰も居なかった。慎重にドアを開けて損した。保健室に向かってみる。ドアを開けると消毒液の匂いが鼻をついた。鼻腔を拡げたのでないかというほどに消毒液の匂いは鼻に通ってくる。
だが、その強烈な匂いの中に確かに違うものを感じた。
結論から言うと保健室にも誰も居なかった。
死体が二つ転がっていたが。
それらを見て璃瑠は不機嫌そうに舌打ちをした。

学生と保険医か、無差別なものと見ていいだろうか。

「お知り合いですか？」
「保険医の方は知ってる。保健室世話になったことないけどさ」
「感傷は禁物です」

どちらの死体も、背中の衣服が破れ切り傷のようなものがある。傷口は焼けただれているが焦げてはいない。
深い傷ではないので、もう一つの刺し傷が致命傷になったようだ。

「深さの割には傷口は綺麗です。鋭利な刃物でないと不可能ですね」
「魔法か」
「恐らくは」

ただ、と璃瑠が続けようとした時、物音がした。
即座にその方向に黒蛇を向ける。璃瑠に顎で指示する。ゆっくりと保健室のベッドのカーテンに手をかける。
合図と同時に璃瑠がカーテンを勢いよく開けた。
銃口を向けた先に見知った顔があって私の手は止まる。

「ふ、伏見さん……？」

【4－10】

保健室に内側からかける鍵があったのでひとまず璃瑠に閉めさせた。

「やっぱり伏見さんでしょ？」

どう答えたものかな、と私は途方にくれているとベッドの上にいた女学生は泣き始めた。

泣き腫らした眼を更に泣き腫らして、涙を絞り出す様に泣く。

どうしたもんかな、と私は途方にくれた。

「美樹さん、足音がします。その人、黙らせてください」

お前も美樹って呼ぶなよ。正解言っているようなものじゃないかよ。

なんで事件に関係ないところで頭悩ませなければならないのだ。まず第一に秘密主義の六課の課員をこんな身元がばれそうな現場に派遣するなよ。制服なんて着てたらまんまじゃねーか。

なんでだ、人が居ないから。

「中井、とりあえず静かにしてくれ」

私は覚悟を決めて、高校時代の友人である中井麻衣を宥める。

「やっぱり伏見さんだ」

「そうだよ。色々あってな」

「美樹さん、足音が去りました」

了解と、言って私は中井に向き直る。

「なんで伏見さんがここにいるの？　鷺ノ宮さんは？」

「色々あった。あと、こよりは関係ない」

あとお前も関係ない鷺ノ宮こよりの名前を出すなよ。璃瑠が反応したが何も言わなかった。空気がたまに読めるやつである。

「それより中井、何があった」

【4－11】

【4－11】

『犯人の名前が判明した、村山隼人。東京都立西部区第三高校の二年生』

マンションの一室で無造作に積み上げた機材の前で鷺ノ宮こよりは眉をひそめながらヘッドホンをつけていた。
窓からは離れた位置に東京都立西部区第三高校が見える。

『犯人は学校内の人間を体育館に軟禁中であり、無差別の殺人を起こしている』
「ふぅん。村山って誰だっけ、うん覚えてない。
……んにゃ、思い出した、うん嫌いなやつ」

記憶を手繰り寄せてると、部屋のドアが開いた。
中年の女性が入ってきた。

「こよりちゃん、お茶を淹れたのよ」
「ありがとう、小平さん」
「こよりちゃん、急に帰って来るからおばさん驚いちゃったわ」

盗聴で警察の無線を傍受していたが、これ以上有意義な情報は無さそうだった。犯人の名前が分かっただけでも充分だが、どうしようかとこよりは思案する。
公安六課が動き出しているようなので、あまり目立つ動きはしたくない。
だが、犯人の身柄確保の為に舞台を体育館に突入させて友人に何か

あっては困る。それに犯人からの危害を受けたかどうかも気になる。美樹は無事だろうか。村山と同じクラスの筈だ。

「ごめんね、ちょっとこっちに来る用事があったから、そうあったの」

本当は現場近くに腰を据える場所が欲しかったのだが。東京都立西部区第三高校で、魔法使いによる立てこもり事件が起きたという情報を聞いてこよりは飛んできたのだった。

そして古い知り合いである小平の家にあげてもらう事にしたのだった。

「こよりちゃん、あの事故の後、急に引越していっちゃったから」

「うん」

「今は、何処に住んでいるのかしら？　学校は？」

「目黒区に住んでるんだよ、そう住んでる」

小平の淹れてくれたお茶を飲む。小平もこよりの前に腰を下ろした。盗聴用の機材について小平は何も聞かなかった。

「それより、小平さん。今、高校の方で事件が起きてるみたいだけど」

「なにかあったみたいで、高校の周りの家は非難させられたようなのよ。心配だわ」

「ここは？」

「二軒隣の勇太君の所まで避難勧告が出たんだけど家は無かったわ。勇太君覚えてる？　こよりちゃんと中学校も同じだった」

「うん。野球部だったよね、そう野球部だった」

「事件って何が起きたのかしら」

情報規制がかかっているようだ。マスコミからは一切情報が流れてこない。
魔法絡みなので当たり前ではあるが。

「美樹ちゃん、無事かな、無事だといいけど……」

本当なら今すぐにでも学校に侵入したい。こよりが歯がゆい気持ちでいると、小平が意外そうな顔をした。

「あら？　聞いてないの？
美樹ちゃん、高校中退したのよ」
「え？」
「てっきり今も連絡を取り合ってるのだと思ってたわ。美樹ちゃん、こよりちゃんが引越したあとに学校辞めたのよ」
「そうなんだ、なんだ」

なら安心ではないかとこよりは苦笑した。ここまでした立場がないではないかと。

「なんでも自衛隊になるとか」

自衛隊？
こよりは混乱した。

傍聴していた無線が騒がしくなった。ヘッドホンを片耳に当てる。

『美樹さん！？　突入は駄目です！』
『伏見止まれ！　落合を潜入させてお前は狙撃ポイントを探せ！』

何の冗談だ、とこよりは思った。

妙に知った名前が聞こえてきた。
考え過ぎだ。
傍受しているのは公安六課の無線だ、だからそんなことがある筈がない。

伏見美樹なんて名前、十分あり得る名前ではないか。

『うるさい！　止めるな璃瑠！』

聞き慣れた声がした。
伏見美樹の声が。

【4－12】

村山が体育館にも戻って来ると整列させた全校生徒の数が減っている事に気がついた。何百人といるが、綺麗に列を作らせたので穴があるとすぐに分かる。

ドアの前に監視役の生徒を置いたのだが、機能しなかったようだ。五人も置いたのに使えない。

村山は集まって座っている五人の生徒に上から声をかける。

「あのあのさ、さぁー、僕、僕らはなんて、なんて言ったけ？だ、誰も外に出すなって、い、言ったんだよ」

「あ、あの止めたの……」

「だ、誰かをもし、そ、外に出したら、こ、殺すって言ったよね」

「だから……その」

「う、う、ううるさいんだよぉぉぉ」

村山は叫ぶと腕を振り上げる。大気が渦巻く音がして振り下ろした腕に沿って空気が唸る。

淡い緑光が刃の様な形をもって出現する。

それを振り切る。一振りで目の前の生徒が吹き飛び血飛沫があがった。

悲鳴があがる。怯えに満ちた表情でこの場所が満たされていく。一つの感情に包まれていく。

最高だ。

村山は、あまりの興奮に笑いが止まらない。

今、ここには絶対的な階層がある。

全てが思い通りなのだ。

「ぼ、僕は今無敵だ、無敵なんだ。だ、れも楯突くことなんて出来やしない。

村山の言葉は高々と響く。否定など誰にも出来ない。それだけの、力があった。目の前でそれを見せつけるだけの。

「美樹さん！」

扉をけたたましく開け放って一人の女学生が肩をいからせながら体育館に入ってきた。一歩一歩踏みしめるたびに床が揺れるのではないかというほどに存在感を誇示しながら。

「村山ぁぁぁ！」

村山は気付いた。女学生の顔には見覚えがある。

いや、忘れられるはずが無い。

顔と声に似合わずに勝ち気な性格。変わり者とされていたあいつ。

ある日急に学校から姿を消した、あいつ。

鷺宮こよりと一緒にはぶられていたあいつ。

村山が、目を離せなかった存在。

伏見美樹だった。

【4－13】

「村山ぁぁぁ！」

私はありったけの声で吠えた。璃瑠の制止を振り切り村山の元に進む。視界のはしに生徒が倒れているのが見えて視界が激情で歪む。

「ふ、ふしみが、なんなんでここに」

村山がまだ何か言っていたがそれを無視して私は村山の襟元を掴みあげる。

「お前は何をしているのか、分かっているのか！？」

村山の表情は二転三転する。思考回路が追い付いていない。数秒の間をもって村山は叫び返した。

「……ふ、復讐だよ。ボ、ボクを馬鹿にしたやつらに復讐するんだぁ！

こ、これは審判……し、審判だよ！」

「馬鹿にしてんのか！」

「ぼ、僕は今、ぜっ絶対的な力を手に入れたんだ！

みて、みてみろよ伏見！　？僕は、今誰よりも強い、強いんだよぉ！」

血走った眼を見開きながら、口から泡を飛ばしながら、村山は吠える。

「もう、もう僕は、いままでのぼ、僕じゃない。山内も本田も佐々木も伊藤も松木も吉岡も、み、みんな僕が、僕がし、審判を下したんだ！
ぼ、僕を馬馬鹿にするやっつは全部！
そ、れを出来るだけの力がある！」
「お前はっ！」
「ふ、ふしみだってわ、分かるだろう！？
みんなク、クズなんだ。こうまで、し、しないと駄目なんだ！」

【4－14】

「ぼ、ぼくらみたいのは、こう、こうでもしなきゃ、みを、みを、ま、守れないんだぁ！」

何故こうなった。

何故こうなってしまった。

村山が無差別殺人を起こすなんて事態に、なぜ誰もブレーキをかけられなかった。

こいつは、気弱で軟弱で篭りがちで。でも誰かが泣くより自分が泣いたほうが良いとまで言い切れる人間だ。

「……村山、投降しろ」

止めるなら私が止める。

「ぼ、僕は悪くない！　悪いのは、腐った奴らの方だ！」

「投降しろ」

「ふ、伏見まで、そんなこと言うのは、信じられないよ！　き、きみだって、こっちの人間だろぉ！？」

「投降しろって言ってるんだ！」

「ぼ、僕は今絶対的なんだ！　口答えするなよぉぉぉ！？」

村山が手を振り上げた。周りの空気を掴む様な動作で淡い緑光が収束する。それは瞬く間に長い刃としての形をとって。

それを村山は振り下ろそうとした。

動けなかった。

「村山！」

後ろから凄まじい力で引き倒されて、私は尾骨の辺りを冷たい体育館の床でぶった。璃瑠が、その私を跨ぐように踏み込んで躊躇なくハンドガンを引き抜く。

乾いた銃声が響いて、思い出したかの様に悲鳴が上がる。仰け反りながら村山は苦痛で顔を歪め身体をかきむしる。

血飛沫はあっという間に血溜まりとなり、村山の流血は制服を汚しながら床の血溜まりへと這っていく。

「璃瑠！？」

射撃姿勢のまま璃瑠は動かなかった。

「何をしてるんだよ！？」

「美樹さんが危険だと判断したからです」

「もっと上手い方法があるだろ！？」

「これが最善です」

村山が苦しそうに身体を丸めた。うがいの様な音を喉がたてて、血溜まりの上で足をふらつかせる。

村山は操り人形の動作で振り返り、歩みを進める。芯の定まらない歩き方で出口から出て行こうとする。璃瑠がハンドガンを構えたまま、それを追おうとした。

それを私は掴んで止める。

「待て、璃瑠！　あいつを撃つな！」

「美樹さんは殺す人間を選ぶんですか！」

【4ー15】

銃口を私に璃瑠は向けた。磨き上げられた銃身に私の目の焦点があって璃瑠の輪郭が滲む。

「美樹さんは殺す人間を選ぶんですか」

「でもあいつは」

「日本は法事国家で、私達はその法の下で活動しているんです。一律の規則を持って私達はその判断に基づいて選択するんです。犯人が可哀想だから、同情できるから。そんなの頭おかしいんじゃないですか。

個人の感情なんていう酷く自己的なもので法の判断を歪ませ抗い変えてみせる。そんなの、私刑（リンチ）と同じです。

馬鹿げてる。私が今、美樹さんに憤って引き金を引いたとしても、誰かが私の事を可哀想だと言ったら美樹さんは私を赦すんですか？」

璃瑠の瞳から目を反らせなかった。視界の端で銃身が消えた。

璃瑠が言ってる事は分かる。

正しいと言う事も分かる。

けれど、私はそれが分からない。

私達は過程を飛ばして見る結論で全てを判断してもいいのか。

村山の至った結論に、過程から辿る事の出来る私はそうであっていいのか。

「先に行きます」

村山の姿は見えなくなっていた。あの出血量なら遠くにはいけないだろう。
駆け足で去っていく璃瑠の背中が出ていくと、私は世界に引き戻された。

無数のノイズが集って、囁きが唸りとなる。
何百という視線が私だけを見ている。
けれどその目は、盲目だとしか思えなかった。
何百という言葉が私に語りかける。
けれどその言葉は、的外れなものとしか思えなかった。
何百という聴覚が私の言葉を待っている。
けれどそれは、私には意味の無いものとしか思えなかった。

その目は、その耳は、その口は、どこに繋がっているんだ。
技術がいくら発展したところで、人の心は進化しない。

「なんだよその表情はさ。なんで、お前らはいつも同じ事ばかり繰り返してるんだよ。
なんで進歩が無いんだよ。イジメなんて、どうして出来るんだよ。
なんでお前らは、先に進めないんだよ。」

【4章・審判は下された完】

【5章・死刑囚は変わり果てた】

【5章・死刑囚は変わり果てた】

遅れた課題の提出をしようと、担当の教師を訪ねたのだが見当たらず探し回っているうちに随分時間が経ってしまっていた。
小言をお釣りに貰いながらも、無事課題を提出した私は、校門に向かった。

「5時過ぎてるし……、あーどうすっかな。こよりは先帰っちゃったし、バス5時半まで来ねーし」

あと20分以上は待つ事になる。面倒な事になった。暇だ。
自転車置き場を突っ切るようにして行くとバス停留所は近い。まあ、今日に限っては近道をしても仕方ないのだけど。

そこで、不審な男子生徒を見かけた。自転車の前でなにかゴソゴソやっている。
自転車泥棒か。

「おい、そこのお前。何やってんのさ」
「え、あぁ、あ、べ、別に」
「別にじゃないっしょ……って、お前どっかで見たな」

この冴えない感じの顔には見覚えがある。何処で見たんだっけかな。

「ふ、伏見と同じ、く、クラスだから」
「あれ？　？だっけか？　？私と同じ？」
「む、村山。ま、窓際の一番前に、座ってる」

「あー分かった。お前ＰＣの壁紙がいつもアニメだろ？」

斜め後ろの方に座っているので見える。そういえば村山なんて名前だった気がする。

「そ、そうだけど」

「今のは魔法少女まじか☆マジカだったろ」

「へ？　？そ、そうだけど、し、知ってるの？」

「深夜暇だから観てるんだよ。それより、お前何をしてんのさ」

村山は自転車の後輪に取り付けられたチェーン錠を指差した。

「だ、だれかが、チ、チェーンつけ、つけちゃったんだ」

「は？」

「や、山内のし、わざに間違いないんだろうけど、は、外せなくて、か、帰れないんだ」

「なんだってまた……。」

「い、虐められてるから」

「まぁいいや、ちょっと貸して？」

チェーン錠を見てみると四桁のダイヤル式で、簡単には外せそうになかった。

適当に番号を合わせてみたが、さっぱりである。

少し思案して、私は村山に聞く。

「外して欲しい？」

「そ、そりゃまぁ」

「ちょっと目を閉じて。あと、この事は誰にも言うなよ」

「へ、へ？」

いいから、とっとと目を閉じてろと言い聞かせると、私はチェーン錠を左右の手で強く引っ張りしっかりと張らせる。
そして左右の手の間の辺りを睨んだ。透明なビニールに覆われた鎖を凝視する。
見えてる世界が少しぶれて、チェーン錠が切れた。

「ほら、取れたよ」
「へ？　？ど、どうやって」
「秘密」
「あ、ありがとう」
「そうだ、お前後ろに私を乗っけてけ。駅前までで良いから」
「え、で、でも」
「いいだろ？　？外したお礼代わりだよ。バス来ねーし」

【5ー1】

【5ー1】

非常用階段の陰に居た村山に私は声をかけた。ここに人が来るとは思っても居なかった様で酷く狼狽している。

「え、あ、……ふ、……伏見？」

「よう」

「……な、なんでここに？」

「私の特等席だから。むしろこっちの台詞だよ」

村山の座っている階段の一段上に腰を下ろす。ビニール袋を漁って村山にパンを一つ投げた。

「うわっ」

「間違ってクリームパン嫌いなのに買っちゃったんだけど、食べてよ」

「え、……い、いいの？」

「あげる。お前弁当捨てられてたし」

気にしてみると村山の受けているイジメは酷いものだった。自転車にチェーン錠なんて可愛いものなのかもしれない。

「あ、ありがとう」

「このメロンパン、中にクリーム入ってないタイプじゃねーか。間違えたぜ」

新商品だったから買ってみたら失敗した。

「メロンパンの中にクリーム入ってないのとか、口パッサパサになるんだよなぁ。ねぇ？」

「ぼ、僕はクリーム入ってない方がす、好きかな。い、異論は認めない」

「中にクリーム入ってないとか、やる気ない商品だと思うよ」

メロンパンの表面の形を作るだけで満足してるんじゃないよ。

仕方ないが、とりあえずかじる。

口の中パッサパサ。

「あ、あの」

「んー？」

「じ、自転車の鍵はどう、やっては、はずしたの？」

「だから秘密だって」

「ご、ごめん」

「魔法みたいなもんだよ」

【5ー2】

「魔法みたいなもんだよ」

私の携帯がなった。こよりからのメールだった。委員会が終わったので今から来るらしい。

「こよりが来るぜ」
「こ、こより……鷺ノ宮？」
「そうそう」
「じゃ、じゃあ僕はこ、この辺で」

立ち上がろうとする村山を引き止める。

「ハブられてる同士、仲良くやろーぜ？」
「は、ハブられてる？　ふ、伏見、が？」
「私の美貌に嫉妬してだな」
「そ、そうなんだ」
「今の冗談だぜ、笑うところだぜ」
「ご、ごめん」
「私にもいろいろあるんだよ」

やべぇ身体中がパッサパサ。
なんでこんなにパッサパサ。
パッサパ……バタバタと足音を立ててこよりがやってきた。

「遅かったじゃん」

「うん、そうだね、遅くなっちゃった。って、あれ？
村山君がなんでここに、うんなんで？」
「え、そ、そのごめん」
「謝らないでよ、あたしが怒っているみたいじゃない、怒っているみたい」
「ご、ごめん」
「だーかーらー」
「お前ら漫才でも始めるのか」

こよりは納得がいかないようだったが、ひとまず私の横に腰を下ろした。
リンスの匂いがいつもと違う。変えたのだろうか。
誰も知らない陽の差し込まない日陰の階段で私達は何を語るわけでもなく。何を見るわけでもなく。

何処かカビ臭いこの場所は心が安らぐ。この場所には私達しか居ない。煩わしいものなど何もない。
学校は窮屈すぎる、だから誰もが日向を取り合って誰かを追い出そうとするのだ。そんなクサイ事を考えていた。

「美樹ちゃん、そろそろ戻らないと、うん戻ろ？」
「だな。村山、昼休みに行く場所ないならここ来いよ」

【5ー3】

昼休みに非常用階段にいつも通り来ると村山が居た。村山の横に腰を下ろす。
村山が来るようになってから二週間。気づけば普通の光景になっていた。

「ようす村山」
「ぁ……ふ、伏見」

「あ、あの……さ、鷺ノ宮は？」
「こよりは早退した。あいつ出席大丈夫かな」
「そ、そう」
「なんだ？　ショックだったの？」
「い、いや。そ、その、鷺ノ宮はぼ、ぼくのこと嫌いみたいだし」
「考え過ぎだぜ」

やべ、このメロンパンも中に何も入ってないタイプじゃねぇか。モッサモサ。口の中がモッサモサ。
またもやこんなにモッサモサ。

「あ、あの、聞いていいのか……わ、わかんないんだけど」
「なんだモサ」
「い、意味が分からないよ」

私も分からないよ、なぜ中にクリームを入れないのか。

「ふ、伏見はなんで、あんなに、そ、そのクラスと仲が良くないって、いうか」
「ハブられてるか？　ってか」
「い、いやその」
「いじめってか差別というのは異質な存在に対する拒否反応だという人がいる。異質なものを叩いてる時は叩いてる側は一時的な同質なものとなれるんだと」

集団を形成し、維持するのに必要なのは同質なものが集団の中に根底としてあることだ。

「ふ、伏見は異質なの？」
「なんだろうね」
「そ、それは……さ、鷺ノ宮さんと……」
「そう。こよりと私の関係が特殊だから」

もし集団が何らかの同質性を持った人間の自発的な理由による形成ならば問題はない。だが、それが外的要因による形成ならば、同質性が欠けているならば集団の維持に問題が生じる。だから、集団心理として異質な存在を「創造する」。

「いじめに理由なんてねぇよ。集団の自己防衛だ」
「そ、そんなの」
「って言ってみても辛いもんは辛いよねぇ。ちょっとめげてきたぜ」

【5－4】

「なんだ、村山。暗い顔して」
「ま、前にふ、伏見は言ったよね。いじめっていうのは、い、異質に対する、し、集団の、ぼ、防衛だって」
「言ったな」
「美樹ちゃん、あたしの言葉丸々パクったでしょ、パクったー」
「私が使った方が輝いてたよ」
「うるさいハゲー、ハゲー」
「フッサフサだよ！」

非常用階段の踊り場の窓を開けながらこよりは口を尖らせた。窓から季節に似合わない冷たい風が流れ込んでくる。カビ臭いのも嫌だが、寒いのも受け入れたくない。

「な、なら同質に、なれば、いじめられなくなるの？」
「難しい問いだな」
「か、変わりたいんだ。こ、こ、んな自分、い、嫌だから」
「良いね！　人は進化すべきだよ、そう進化」
「ま、周りをな、詰ってても、し、仕方ないんだ。す、進まなきゃ」

村山から思いもよらぬ前向きな言葉が出てきて私は少し驚いた。

「な、何を変えれば、い、いいかな。ふ、伏見」
「へ？　私？」

少し考えてみる。改めて上から下まで村山を眺め回してみた。

「別に変えなくても良いと思うけどなー、私は」
「いいや、駄目だね、駄目ね」

こよりが指を鳴らした。なんのポーズなんだよ。
髪から持ってる物までこよりは村山に指摘し始めた。次々と村山に口を出していく。村山は真剣にメモを取り始めた。

ただ、最終的にこよりの言う事を全部聞くと大変な事になるぞ。こいつ、私服がゴシックロリータだぞ。いや似合ってるけど。村山までそんな格好にする気ではないだろうな。いやこよりは似合ってるけど。

「まぁ、村山がそう言うなら頑張れよ」
「う、うん」
「でも私は今のままのお前が好きだけどな」

【5ー5】

「なあ村山」
「な、なに」

非常用階段の窓からは中庭が見えた。覗き込むと、暇そうにしている学生たちが見えた。時間の過ごし方は様々だった。

「こうして見下ろして見ると、世界はちっちゃいな」
「な、なにそれ」
「なんか私達がもがいて苦しんで嫌っている世界は、こっから見えてるわけだけどさ」

四階から見る景色は思ったより鮮明ではなかった。顔まで正確には分からないは当たり前として、中庭で時間を過ごしている生徒の一人一人の見分けすら付かない。多分、目を離した隙に彼等の立つ場所が変わっていたら私は気付けないに違いない。

「誰が異質なのか、なんてこっからじゃわかんねぇよ」
「い、異質な人が、い、いないだけかもよ」
「それは違うぜ。私達は完全な同質であることは不可能だ。全く同じ人間なんていない。見方次第で立つ場所次第で私達はいくらでも差異を産んでいく」

そういった意味では異質な人間など居ないのかもしれない。同質なんて定義すら揺らぐのだから。

「私達はどうなれば満足なんだろうな」
「へ？」
「どんな世界が欲しい。村山ハーレムでも作るか？」

クラスの女子全員がお前に好意をもって接してくる。まさしく、それなんてエロゲだよ。

「は、ハーレム……」
「想像すんな、気持ち悪い」
「ご、ごめん」

中庭で数人が何処からかサッカーボールを持ってきて蹴り始めた。
今だにスポーツに熱中出来る人種が一定量居ることに少し感動を覚える。
いくら技術が進歩しても、肉体の直接的な快感には勝てないのか。

「おかしな話だけどさ、あいつらに同情したくなってきた」
「ど、同情？」
「もし今、私が消えたらさ、またあいつらは新しい異質を探し回る。創り出そうと躍起になる。そうして同質の仮面を被っていた誰かを引き摺り下ろして異質のレッテルを貼って、同じ事の繰り返しだ」
「……。」
「それはこの地球上の何処でだって起こってる。移民問題、民族紛争、宗教戦争、人種差別、貧困。異質としてきたものなんて見方を変えたら酷く不安定でしかない」

「そんな世界で何を願えば良い？」

【5－6】

「ねぇ、なんでかな、なんで」

夕陽が窓の端に少しばかりのオレンジを置いて時の推移を教えていた。非常用階段に腰を下ろし、私の膝に縋るようにしてこよりは泣いていた。
遠くから学生の声が聞こえる。それに負けそうな位か細い声でこよりは訴える。

「なんで？　あたしは美樹ちゃんが好きなだけなのに、好きなだけ」
「気にすることなんてないよ」

夕陽が差し込まないのでＬＥＤの余所余所しい光だけが私達を照らしていた。

「こんなのおかしいよ、おかしい」

こよりはいつだって自分に言い聞かせるように言葉を吐き出す。こよりの髪を指先で丁寧に撫でる。触れた側から絡む事なく指はすらりと走った。
スカートの布越しに熱い物を感じる。こよりは泣きじゃくり、その証拠が私のスカートを汚した。

「気にする事なんてない。私とこより以外関係ない」
「でも……あたしはこんなの耐えきれない、無理だよ」

「こよりは誰の言葉も聞く必要なんてない」

こよりは顔を上げた。泣き腫らした目から更に絞り出すように涙が零れ落ちた。

「あたしはこんな世界嫌だよ……嫌」

もう逃げるのも、立ち向かうのも、もがくのも疲れた。そうこよりは呟いた。

私達の生きる世界はどうしてこんなに狭くて息苦しい。

どうして私達が苦しまなくてはならないのだ。

私達はこんな事すら許されないのか。

こよりは手を延ばし私の上着の肩の辺りを掴む。身を起こしてこよりと私は向かい合う。そっと引き寄せられる。こよりの睫毛が涙で濡れて涙の結晶で飾っていた。瞳の向こうに私の姿が見えてその私の瞳にこよりが見えて。吸い込まれるように私はこよりの唇に口付けをした。甘い香りが鼻腔を満たして、唇に触れた柔らかい感触からこよりの鼓動が伝わってきた。

「こんな世界間違ってるよ、うん間違ってる」

【5－7】

停留所でバスを待っていると村山に声をかけられた。走ってきたのか息が乱れている。

「ふ、伏見！」

「……村山」

「ふ、伏見が、そ、その学校を、やめる、って聞いて」

「うん、やめる」

「な、なんで。こ、この、ま、前の事故で、け、怪我したから……？」

「もう治ったよ。松葉杖必要なくなったし」

バスが停留所で停まった。ドアが陽気な音と一緒に開く。空気が噴射するような音がする。

「村山、ちょっと後ろに乗せてけ」

自転車の荷台に乗せてもらっている間、私達に会話は無かった。村山は二人乗りに慣れていないせいでひどく不安定なので会話を振る勇気は無かった。

一つだけ村山に私が言ったのはとある行き先だった。

数年前に改修工事が済んだ石神井公園に着くと自転車は砂利で揺れた。私は飛び降りる。砂利が私の着地を音で伝える。

「いやーついたついた」

人工揚水を行っているものの、この公園に池がある。池を中心に沼沢植物群や雑木林といった自然の景観で溢れていた。

池のまで歩いていって、池を囲う木風の手すりにおぶさる。

村山は、少し迷ってから後ろのベンチに腰掛けた。

「な、なんで、が、学校を辞めるの」

「あの鴨、なんか色変じゃね」

「ぼ、僕ならとも、ともかく……ふ、伏見が、や、やめる理由、な、なんてなないじゃないか」

「鴨ー。おい、そこの鴨だよ、アホそうなお前だよ」

私は振り返る。

村山の動揺に私は明確な答えを出さなかった。

無言が時間をまたぐ。村山が言葉を絞り出す。

「さ、鷺ノ宮は、どうするんだよ」

「こよりはもう学校には来ないよ」

「そ、それはどういう」

「私はこよりを止める。方法なんか分からないけど、こよりを止める。だから学校なんか辞める」

「と、止めるって、な、なにを」

「革命」

村山が固まる。

革命なんて言葉が出たことに村山は困惑していた。

「だからもう、多分会うことは無いと思う」
「……。」
「今までそれとなく楽しかったよ。じゃあね」
「あ、ふ、伏見！」
「なんだよ？」
「ぼ、僕は、その、伏見が、そ、そのなんていうか、伏見の、伏見のことが……。……ご、ごめん、なんでも、なんでもない」
「そうか」

思い出して、鞄の中の小ポケットのファスナーに括り付けた小さな巾着を取り外す。それを村山に向かって投げ渡す。

「匂い袋。記念に渡せそうなものそれしか無いからさ」

京都で買った良いやつだせ、と付け加える。

「村山、立ち向かえ、あきらめの現実を享受するな。立ち向かうということを履き違えるなよ」

【5－8】

【5－8】

璃瑠に追い付いて血痕の跡を共に追う。リノウムの床の上に零れた血液は空気に触れて、役割を果たしていた頃の姿はもうなかった。空気の色なんて見える筈がないのに、薄汚れているように見える。いつだってこの廊下は好きになれなかった。廊下も教室も、どこだって学校は窮屈過ぎて私達はその世界の境目をを意識してしまう。

前を行く璃瑠は何も言わず、私はそれを追いかける。どうすればいい、私は。

非常用階段まで血痕は続いていた。記憶の隅にあったこの場所は寸分違わず、血の匂いだけが新しく上書きされた。呻きが聞こえて璃瑠がハンドガンを構えたまま、階段を駆け登る。

「村山！？」

踊り場の窓の下に背中を預けるように、村山が床にへたり込んでいた。先程までの姿からは想像も出来ない。

「ふ、……伏見」

村山が掠れた声を出した。
私は銃を構えた璃瑠を手で制す。

「動くな、喋るな、応急手当をするから。璃瑠、回収班を呼べ！」

「……。」
「早く！」

出血が酷い。撃たれたのは腹か。制服のシャツのボタンを外す。
止血が先だ。
撃たれてから何分経った。
ウエストポーチから応急セットをぶちまける。そこから即時性無痛薬と塗布性止血パッドを引っつかむ。六課のハンドガンは４５ＡＣＰ弾だ。非常にまずい。
即時性無痛薬を投与すると、村山の表情が少し緩んだ。

「……ぼ、ぼ、ぼくは……ふ、……伏見の言う……と……お……た、立ち向かったんだ」

塗布性止血パッドを使う。半透明のジェルを腹に塗りたくる。数秒の内にジェルは凝固し、半透明のジェルの下に血が滲んで行くのが見えた。

「立ち向かうという意味を履き違えるなって言ったじゃねぇか」

【5ー9】

私が立ち向かえと言ったのは、そんな意味じゃない。
私が享受するなと言ったのは、こんな結末の為じゃない。

お前が変わろうとしていたのはこんな姿じゃなかった筈だ。
私たちが直面していた世界は、私たちが逃れようとしていた世界は、
私たちがもがいていた世界は、こんな形に変われば満足だったのか。

「イジメにイジメで立ち向かうな。暴力に暴力で立ち向かうな。それじゃ何も変わらない」

凝固した塗布性止血パッド。その上から脱いだ私のワイシャツで胴体を巻くように強く縛る。
応急セットで使えそうな物。こういう時は何を使えば良かったんだっけ。落ち着け、習ったじゃないか私は。
安定剤を注射器で投与する。止血は済んだが、出血量が多すぎる。
床に落ちた血が乾き始め私の床についた手に張り付く。
視点の定まらない村山の目が何かを探して動く。歯の隙間で息が漏れる度に村山の胸が微かに上下する。

「なんでお前は……」

馬鹿なんだ。私たちが一番嫌った事をどうしてお前まで選んでしまう。

村山が伏せていた眼を開いた。ひそめた眉を少し緩める。乾いた唇

をずらす様に開いて、掠れた声をあげる。

「ふ、ふしみ……や、やっぱ……り、僕は駄目な……んだ。……ぼ、僕は、強く……なりた、かった……のに」

「そんな強さなんて、お前に似合わないよ」

「……ふ、ふし……伏見を、守って……あげ……られるくら……い、つ、よ、くなり……たかっ、ただ……けなの……に」

守ってもらうほど私は弱くない、そんな言葉を私は飲み込んだ。

村山が目を閉じ咳き込む。血糊が器官から押し出され村山の口から溢れ出る。赤が村山を染め上げていく。

「お前は本当に馬鹿だよ」

「そう……だね。ふ、ふし、み」

村山の手が私の手首を掴んだ。掴んだという表現は似つかわしくない。力なく触れた。

触れた手に熱は無かった。村山が唇を力なく動かす。まぶしそうに瞼を薄く開いた。

「やっぱり……僕は伏見が好きだ」

力なく触れていた手が静かに降りて行く。村山の頭から崩れるように力が抜けて首だけを支えに頭は倒れた。

「おい村山!?　目を開けろ!　村山ぁ!」

魔法なんてただの兵器でしかない。この世界に、御伽噺の様な素敵な魔法はない。

だから、幸せな結末など起こり得ないのか。

私たちは何を望めば良かったのだ。

【5ー10】

回収班が担架に乗せて村山を運んだ後に私と璃瑠だけが非常階段に取り残された。
慌ただしく緊急隊員が駆けていったが私は追わなかった。そんな私を見て璃瑠は目を逸らす。

璃瑠は何も言わない。私は何も言えない。
誰も知らない陽の差し込まない日陰の階段で私達は何を語るわけでもなく。何を見るわけでもなく。

この場所はいつだって何処かカビ臭い。けれど今は血の臭いが混ざっていた。

「あちゃー間に合わなかったか、うん残念」

あまりに場違いな声がした。私達は即座に振り向いて上の踊り場に銃口を向ける。

見知った顔が、いる筈のない人間がそこにいた。
白のはしごレースで飾られた黒のワンピース。フリルのついた黒のハイソックス。頭の上から爪先まで黒と白で統一されており、肌も白い。
長い金糸の髪が揺れた。何処か日本人離れした顔。カラーコンタクトをいれている為に瞳の色は嘘の様に青い。

ようやく見付けた。

「鷺ノ宮こより……！？」
「イジメられたから復讐って古いよねー、うん古い」
こよりは階段を悠々と降る。璃瑠が辻風を構える。
こよりが階段を一段一段降りる度にレースで縁取られたスカートの端が踊る。
「なんでここに居るかって？　そりゃ美樹ちゃんを心配してだよ？　うん心配」
私達のいる踊り場の二つ上の段差でこよりは立ち止まった。璃瑠は構えたまま動かない。私達とこよりの距離は2メートルもない。璃瑠なら一瞬で制圧出来る距離だった。
こよりはそれを気付いていないかのように無視して私に笑顔を向ける。
「でもでもー、なんで美樹ちゃんが公安六課にいるのかな？　うん、なんで？」
「……こより。このまま大人しく私に逮捕されろ。頼むから」
私は言葉を絞り出す。ようやくこよりに、声が届く距離にきた。探し求め追い続けたこよりの影を踏める処まで来た。
「うーん、それは出来ないよねー？　出来ない出来ない。あたしはやらなきゃいけないことが一杯あるからさー、そうあるからさー」
「……なんでもいい。私と一緒に来い、こより」
「それはあたしのセリフだよー、逆逆。なんで公安にいるのか理解出来ないなー、うん無理」
「お前を止める為だよ」

「止める？　なんで？　美樹ちゃんにとっても悪い話じゃないんだよ、むしろ美樹ちゃんの為だもん」
「なら私の為に捕まってくれ」

どうしてこんな事をしているのか、問い掛けたかった。けれど、いざこよりを前にして言葉は出てこない。
こよりに向けた銃口の先は変えない。人差し指をトリガーガードからゆっくりと引き戻し引き金に触れる。
それを見てこよりは泣きそうな表情に変わる。

「ねぇあたしを撃つの？　撃つの？　ねぇ？　なんで？あたしを撃つの？　美樹ちゃんが？　あたしを？　美樹ちゃんが？　おかしいよね？　おかしいよ？　だってあたしだよ？」

【5－11】

【5－11】

「おかしいよ、うん、おかしい」

こよりが、足を踏み出した瞬間にワンピースのスカートの下に仕込んでいたホルスターからハンドガンを引き抜く。こよりの細い指が銀の銃身を撫でるように握る。
それを見て璃瑠が踏み込む。

「美樹さん！」

璃瑠が辻風を踏み込みながら叩き下ろす。大剣、いや金属の塊というべき辻風が空さえも巻き込んで一閃を煌めかせる。
それはこよりに到達する寸前に阻まれた。
鎖であった。硬く張られた太い鎖が蜘蛛の巣のようにこよりの前に張り巡らされ、こよりと璃瑠を阻んだ。

「鎖……3．０2Ｂ－０４Ｕリアクトチェーン……？」
「だーいせーかーい」

無数の鎖を断ち切るのは容易い事ではないと璃瑠が辻風を引き戻すと同時に、こよりがハンドガンの引き金を引く。璃瑠の頬を細い閃光が掠め血が沙華のように散る。踊り場の窓ガラスが割れ弾け飛んだ。
璃瑠が辻風を盾のように構え、銃弾を防ぐ。
その辻風に鎖が絡み付いた。
鎖が鞭の様にしなり、璃瑠ごと窓の外へ吹き飛ばす。

「っぁぁ！？」

美樹は動けなかった。

どうしてこんな事になっているのか、という気持ちが心を掴む。

吹き飛ばされた璃瑠は飛行魔法を発動し、空中で姿勢を制御する。

そこに銃声が響く。窓から飛び出したこよりがハンドガンを連射する。引き金を引く度に銃身がスライドし、閃光を撃ち出した。

空中で璃瑠は大きく回避運動をとり、飛翔する。

大きく回避する軌道を描きながら璃瑠はこよりまでの距離を詰める。

緩慢とした大きな回避から軸を合わせると璃瑠は今までの数倍以上のスピードでの直線飛翔を見せる。

こよりが左手を突き出し魔法を発動する。

「３．０２Ｂ－０４Ｕリアクトチェーン」

空中で突如形成された魔力の鎖が三本連なって璃瑠に向かう。鎖の先は槍の様になっておりそれが璃瑠の張った魔力盾に突き刺さる。

腕を振り払い魔力盾で薙ぎ払うと同時に盾を解除し、璃瑠はこよりまでの距離を一気に詰める。魔力盾の幾何学模様が空中で消失すると鎖は行き場を失い空中で漂う。

振りかぶり鋭く下した辻風はこよりが一気に距離を離した事で虚しく空を斬る。

空中で後ろ跳びをしながらこよりは鎖を更に射出する。それを旋回し璃瑠は再び距離を詰めに行く。璃瑠の真後ろから鎖が出現して璃瑠に向かって行った。振り向き様に叩き落とすと真下と斜め上から

更に鎖が向かってくる。それを叩き落とし、一気に加速して鎖から距離をとる。そこを狙ってこよりが引き金を引く。魔力弾が次々と空を裂きながら正確に璃瑠を狙う。璃瑠の張った魔力盾に直撃し魔力弾が爆ぜた。

鎖の出現位置が予測出来ないのが思っていた以上に厄介であった。そう璃瑠は唇を噛む。

完全な至近距離型の璃瑠にとって空戦は不利になる。直線的に距離を詰めていきたい璃瑠に対して、３６０度全方位に立体的に動ける為にこよりが捉えられない。更に鎖が何処からも飛んでくる。

だが、璃瑠のスピードは圧倒的だった。

璃瑠は鎖を身体を捻り寸前で躱すと、矢のように飛んでいく。

「だぁっ！」
「っーー」

こよりが魔力盾を貼り辻風が打ち付けられる。その瞬間に鎖が璃瑠の足首と首に絡み付いた。

「！」

こよりが距離を離す。引き金を引こうとした。
二人の狭間を縫う様にして閃光が降り注ぐ。張り巡らされた鎖が次々と撃ち抜かれていった。鎖が断ち切られ空中で離散し光の結晶へと変わり風に流されていく。
一発の誤射もなく、鎖を美樹は撃ち抜くと二人の間に舞い降りる。

【5－12】

鎖が撃ち抜かれた。璃瑠とこよりが上を仰ぐと黒蛇を構えた美樹が居た。空中で三人は視線を交差し合う。

「美樹ちゃん……」

美樹と二人の間の距離は数メートルしかない。だが、飛行制御を行ったまま正確に目標を撃ちぬくのは決して簡単な事ではない。
こよりは美樹に悲しそうな瞳を向ける。
もう、そんな所まで来てしまったのか、と。

高度を調整して美樹は二人の間に舞い降りる。空中で静止した璃瑠とこよりの間で美樹が黒蛇を下ろした。

「……なんで戦わなきゃいけないんだよ。なんでお前らが戦うんだよ」
「何を言ってるんですか」

美樹が言うとこよりは悲しそうな顔をした。

「美樹ちゃんは、なんでそんな、ねぇなんで」
「こより、私はお前と戦いたくなんかない」
「なら退いてよ。退いて。美樹ちゃんが、こんなところにいちゃいけない」
「でも私は……。お前がテロリストになるのなんて私は嫌だ！」

美樹の叫びにこよりは悲しそうに首を振る。
こんな歪んだ世界が変わらないのなら、自分で変える。こんな歪んだ世界を形成する要素を駆逐する。
もう二度とあんな悲しみは生み出さない。
人が変わる時が来た。
こよりはそう思っていた。だからこそ、美樹が立ちふさがることに、こよりは酷く傷付いた。
美樹も、それを望むはずなのに。

「人が謳い人が望み人が求めた進化の為だよ。あたしは決めたの、そう決めた。こんな世界なんていらない。あたしが変える」

【5ー13】

「美樹さん、どいてください」

【5ー13】

璃瑠が静かに、しかし、強く言った。
鷺ノ宮こよりと美樹の間にどんな関係があるかは分からない。事情があるのも分かる。
だが、今、璃瑠に出来るのは自身がすべきことを成すだけだった。

「璃瑠！　こよりと戦っちゃ駄目だ」

美樹はこよりに背を向けて璃瑠の前に立ちふさがる。

「こよりと戦うのなんてーー」

璃瑠の右手が美樹の言葉を聞き終わる前に美樹の頬をぶった。鋭い音が響く。

「何処まで甘いんですか……あなたは」

今この場所で、この状況で、何を思えばそんな言葉が吐けるのだ。

それを見てこよりが逆上した。魔法を発動する。
周囲の空間が揺らぎ光彩で彩られる。水に色を落としたように揺らぎ広がり薄くなり。
璃瑠が辻風を構え辻風のグリップの近くに仕込まれた引き金を引こ

うとする。それを美樹が止める。

「駄目だ！　璃瑠！　こよりを撃っちゃ」
「あなたという人は！」

空間が動いた。

「１．０２Ａ－０２Ｃチェーンエクスプロージョン」

爆発。色が歪んだ空間が爆発しそれが次々と連なっていく。熱気が肌を刺し、美樹は魔力盾で衝撃を防ぐも、爆風で吹き飛ばされ空を舞う。視界が二転三転する。空中制御で姿勢を保つが、爆炎でこよりと璃瑠を見失う。
銃声が轟いた。黒煙を切り裂いて璃瑠が飛び出す。

「美樹さん！　後ろ！」
「！？」

美樹の足首に鎖が絡み付いて、勢いよく振り下ろされた。耳元を風が切る。反応する間もなく、地面が目の前に見えた。
身体を鈍い衝撃が襲う。真下に落ちていた筈が真横に吹き飛ばされた。いや吹き飛ばされのではなかった。
飛んできた璃瑠が美樹が地面に落ちる寸前に抱え受け止めたのだった。
その事実に美樹が気付いた時に銃声が轟いた。
璃瑠の眼が見開き、口が開き空気を吐き出す音がした。
美樹を支えていた璃瑠が体勢を崩し低空飛行は一気に高度を落とし地面に転がるように落ちる。地面に投げ出された美樹は砂埃を立て口の中を噛んだ。

「璃瑠！？」

こよりが地面に降り立つ。倒れた璃瑠に銃口を向ける。

「やめろ、こより！」

うつ伏せのまま黒蛇をこよりに向ける。それを見てこよりは心底理解出来ない、と美樹に問いかける。

「……ねぇ？　美樹ちゃんは、何をしたいの？　わかんない、全然わかんない」

「私は……。」

「……あたしは行くよ、うん止まらないから」

こよりが向けていた銃口を下ろして、地を蹴った。一気に上空まで飛び上がり、光の粒子で軌跡を描きながらその姿は遠くの空に消える。

何をやってるんだ、と自らにあたりながら美樹は涙を呑んだ。

「美樹さんの……馬鹿」

【5章・死刑囚は変わり果てた完】

【6章・月は繋げた】

【6章・月は繋げた】

目に見えて、今日のこよりは不機嫌そうであった。弘佳は慎重に言葉を選ぶ。鷺ノ宮こよりは優秀だ、魔法使いとしても、活動家としても思想家としても、だが冷静さに欠ける点がある。不機嫌そうな一挙一足に、横の美智は度々萎縮する。度胸をつけて欲しい。

「で、何？」

「頼まれていた落合璃瑠のデータですわ。といっても月並みなものしかありませんが」

「ホント月並み、ホント」

公安部所属。近接型魔法使い。詳細不明。

目についた単語を拾っていく。有益なものはなさそうだった。

報告データを不機嫌そうに見ていくとこよりは一つのキーワードに引っかかった。

「なに？　？アルカナって、なに？」

「落合璃瑠に関連する情報全てが秘匿情報ですが、一つだけ共通するワードがありましたの」

「それがアルカナ？」

アルカナはタロットカードの組の事を言う。タロットは一組７８枚であり、この内の２２枚は寓意画の描かれた世間一般でイメージされるタロットそのものであり、それを大アルカナ、残りの５６枚の組を小アルカナと呼ぶ。

何か関連性はあるのだろうか。

「アルカナのヒントどっかにアルカナ？　？ごめん、なんでもない、ないよ」

「い、いえ……。とりあえず、今回はこれ以上のデータはありませんわ。もう少し突っ込んで調べてみないことには」

「あたしのギャグを？　？ギャグを」

「調べませんわよ」

「渾身なのにー、ちょー渾身」

「あれで？」

「アルカナかー。少なくとも落合璃瑠は並の人間ではなかったね、うんなかった」

前回の戦闘で確信した。スピード、魔力運用、反応速度、技術、力。どれをとっても高レベルだった。

だが、何か違和感があった。どこか余力が残っているような、なんと言うか全力ではない気がしたのだ。

美樹の横に璃瑠が居る。近いうちにまた璃瑠との衝突は避けられないこととして、起こるだろう。

記憶の中の美樹の顔が浮かんできて、こよりは顔をしかめた。

「とりあえず、今回はここまでですわ。ではこれで」

「うん、ありがとう、じゃあね」

こよりが店を出ていくと美智が弘佳に聞く。

「……良かったのですか？」

「構いませんわ」

「……ですけど」

「あなたは関係ない。関係ないことですわ」

【6－1】

【6－1】

目を覚ますと病室の時計は１９時を示していた。窓の外は既に暗く月が出ていた。璃瑠は半身を起こす。寝過ぎたようだ。夕食の時間は過ぎているだろうに起こされる事もなかった。その事に璃瑠はため息を吐いた。

身体の何処も痛くない。明日には退院出来るだろうか。
ナースコールを押そうとすると一人用の病室のドアが開いた。
病室のドアが開いて八坂が姿を見せた。ベッドの上で璃瑠は首を向ける。

「何しにきたんですか」

病室のベットの上から璃瑠は八坂に言った。
八坂が病室に入ってきた。八坂は手から提げていたビニール袋から缶ビールを取り出し振ってみせる。

「ね？」
「いや、本当に何しにきたんですか！？」

八坂が、ベッドの横の座椅子に座った。
プルタブを引くと快活音がした。

「璃瑠ちゃんはどう？　ビール」
「怪我の具合とか聞いてくださいよ」

未成年です、と璃瑠は断わると八坂は勢いよく飲み始めた。それを璃瑠は呆れながら見ていた。

「なんで飲んでるんですか」
「六課は課長も伏見さんも暗いから飲みづらくて」
「論点はそこじゃないですよ。あとお見舞いじゃないんですか」
「あー、お見舞いの品？　ほら、イカの燻製が、ほら」
「それ、ただのツマミじゃないですか」
「病院って消毒液臭くていまいち気分が乗りませんね」
「いやだからって、イカの燻製開けないでくださいよ！　くっさ、いかくさっ！」
「イカ臭いって、入院してるから溜まるのは分かりますけど」
「八坂さん最低ですね！」

八坂が燻製を噛みながら身を乗り出した。

「璃瑠ちゃんが負傷するなんて珍しいね」
「たいした怪我じゃないですよ。防弾チョッキ着てましたし。明日か明後日には退院出来ると思います」

問題なのは身体の方じゃない、と八坂は思った。

「今、外で伏見さん待たせてるんだけど、連れてきても良い？」
「嫌です」

璃瑠が即答する。その気持ちも分かるけれど、と八坂は前置きして話す。

「私は踏み込んで聞けないですけど、璃瑠ちゃんにはそれが出来る

んです。今ここで話さなきゃ」
「聞いてどうするんですか」
璃瑠は八坂を睨む。そうすべき相手は違う人だと分かっていても璃瑠は八坂に気持ちをぶつける。
「次、もし鷺ノ宮こよりと遭ったら私は彼女を斬ります。その事実に変な色をつけないでください」
「それじゃ、きっとみんなが後悔しちゃいますよ」
「関係ありません」
「璃瑠ちゃんはそう言ってるけど、怖いだけなんでしょう？　踏み飲むのも踏み込まれるのも」
「当たり前です！　だって私は……」
そこで璃瑠は口をつぐんだ。八坂が璃瑠の腕を掴んだから。
八坂が真剣な目をしてるから。
璃瑠は目を逸らして言った。
「……私の事に構わないでください」

【6ー2】

八坂が部屋から出てきた。私が質問しようとすると八坂は黙って私の手首を掴んだ。
そして私の背中を乱暴に押して病室に入れる。私の背中で八坂が乱暴にドアを閉めたのが分かった。

璃瑠が私に背を向けてベッドに寝ているのが分かる。ベッドの脇に置いてある座椅子に座る。
無言の時間が幾ばくか流れた。

「ちょっと話しても良いかな？」
「私は寝てますからご勝手にどうぞ」
「なら、それに甘えて」

何処から話せば良いのだろうか。

「私と鷺ノ宮こよりは同じ高校のクラスメイトで友達で親友で。……恋人だった」

出会ったのは高校の入学式の日だった。こよりは私を見た時、運命を感じたとクサい事を言っていた。

「美樹さん、男だったんですか」
「違うよ、馬鹿。まぁいわゆる同性愛だよ。でも、私達はそんな事どうでも良かったし、性別なんて意識もしなかった。なんて言うのかな、性別とか関係なしに好きになったんだよ」

「それで？」

「高校生がそんなこと言うの笑われるかもしれないけど、私もこよりは本当に愛し合ってた。それなら、なんの問題も無いと思ってた。でも世間はそうじゃなかった。学校で私達は奇異の目で見られたし、それでハブられもした。両親にもめっちゃ怒られた。でも私は気にしなかった。周りが認めなくても、私はこよりが好き、それで良いと思ってた」

世界の中で私達は小さな世界を創ってそこに居ようとした。けれどそれでは駄目だった。

村山に親しみを覚えたのは、彼もまた自分の世界に閉じこもろうとしていたからかもしれない。

けれど、小さな世界は脆くいつだってヒビが入り続けていた。

「でも、こよりはそれに耐えられなかった。しょっちゅう泣いていた。こんな世界はおかしいと言ってた」

「２０１３年に宣言された同性愛者の人権に関する国連宣言を日本は許諾し批准しています」

「だけどそれで個人レベルの意識が変わるわけじゃない。それで解決したら人種問題が今でも続いてるはずがないよ」

異質性に気付いた時、それを受容出来なければ差別は生まれる。決して形にしなくとも、それは確かに何処かに潜む。

人類の歴史のうちに差別というものが登場しなかった時など存在しない。

「どんな目で見られようと、どんな言葉を浴びようと私は負けないって思ってた。こよりが耐えられないなら私が守ろうと思ってた」

けれどそうすれば、そうするほど。私達は世界から拒絶されていく。

「そんな時だった。私達を決定的に変えた出来事が起きた。
新宿大規模爆発事故。私とこよりは、あれの被害者だよ」

【6ー3】

「佐樹ちゃん？　？何を見てるの？」

佐樹がポータブルＰＣを見ていたので梨花は覗き込んでみる。佐樹が傾けて画面を見やすくした。
黒い背景に刺々しい赤い文字のＨＰだった。デザインが一昔前である。
掲示板のログをまとめたサイトらしい。

「新宿大規模爆発事故の真実……？　？なんかもう懐かしい気がするよ。一年経ってないのにね」
「こんな陰謀論が囁かれる位には風化したということよ」

とはいえ、未だに立ち入り禁止の封鎖領域が新宿区の一部にはある。

新宿大規模爆発事故。直下型の震度４強の地震により地下ガスが噴出し、これによる爆発で死者数百人にも上る犠牲者を出した大規模な事故であった。
しかしながら、震度４強で地下ガスが噴出するほどの地割れが起きるのか、まず新宿区にそれほど大量の地下ガスが眠っているのかといった指摘や、政府がこの事故に関して厳しい情報規制をかけた事でネット上では様々な陰謀論が語られてきた。

「実際には、地下ガスではなくＭＡ元素によるものだと言われているわ」
「そうなんだー。ってえぇ！？」

「何らかの理由により高濃度の魔力が充満したことにより魔力爆発とその魔力によって急性中毒になったことがあれだけの被害者を出したんだわ」
「へぇー」
「推測だから本当の所は分からないけれどね」

だが、確証はある。
だが、不明な点もある。
それだけ高濃度の魔力が生み出される理由だ。新宿区には何かがあるのだろうか。
佐樹の思考は梨花によって中断された。

「ふーん。でも、なんで急に新宿大規模爆発事故の記事なんて見てるの？」
「広報部が今度、この事件について記事を書くらしいわ。だからその下調べみたいなものよ」

佐樹は広報部に所属している。普段は中学校の中で起きた些細な事件やニュースを定期的に記事にしているのだが、文化祭に向けて大掛かりなものを準備しているのだった。
帰宅部の梨花にとっては遠い話である。

「あたしも、佐樹ちゃんと一緒に広報部入れば良かったかなぁ」
「あなたＰＣが使えないじゃない」
「えへへー。あ、でもでもカメラの使い方は覚えたんだよー」

ポータブルＰＣを制服の胸ポケットから梨花は取り出した。写真データを佐樹に見せる。
佐樹の写真がスライドショー形式で映し出されていく。どれも、少し遠巻きのものだった。撮られた覚えのない写真に佐樹は動揺した。

「あ、こ、こんなのいつ撮ったのよ！？」
「いやー撮るものなくて、ついつい佐樹ちゃんばっかり」
一歩間違えれば、というより間違えなくても盗撮ではないか、と佐樹は憤慨した。
「ご、ごめんね。でも佐樹ちゃんって写真撮らせてくれないし」
「これからは撮らせることにするわ……」
流して見ながら佐樹はため息をついた。何十枚と撮られた（一歩間違えれば、というより間違えなくても盗撮）写真は一枚のブレもなく佐樹が中央にいた。
「あ、そうだ。この写真なんかは凄いよ」
「？」
ポータブルＰＣを梨花は横から操作して一枚の写真を選んだ。
「佐樹ちゃんの着替え写真」
流石に佐樹は梨花を引っ叩いた。

【6－4】

「私とこよりは新宿大規模爆発事故に巻き込まれたんだよ」

忘れもしないあの事故で、私達の運命は狂い始めた。
あの日、あの時、あの場所で。

高濃度の魔力が充満し、大爆発を起こした。それをきっかけに鷺ノ宮こよりは自身の内に存在する力に気付いた。魔法だ。
魔法を自覚し、自己流で運用出来るようになるのは非常に難しい。
だが、こよりは才能があった。
あの崩れた街の中で。死体に埋れた街の中で。
こよりは笑っていた。

「あの事故で、こよりは魔法に目覚めた。その力をこよりは受け入れ喜んで。世界を変えることに決めた」
「世界を変える、ですか？」
「詳しくは分からないけど、こよりは私達を差別する社会を憎んでいた。それを変えるって」

あの日、黒煙に包まれた新宿でこよりは歓喜した。魔法という存在を知り、その圧倒的な力を手にしてこよりは言った。
この世界を変える力だ、と。
あたしが、この世界を変える、と。
そういってこよりは私の前から姿を消した。

「こよりがテロ活動を行いその声明をネットに出した時、私は初め

てこよりの言っていた意味が分かった。私は初めてこよりがとんでもない道に足を踏み入れた事に気付いた」

「鷺ノ宮こよりの初めてのテロ活動は確か……」

「反部落差別運動団体幹部の誘拐。次は文部科学大臣の誘拐。それから幾つかの施設破壊と要人誘拐を繰り返し、この前の人間沙織の誘拐だ」

「でもなぜ、反部落差別運動団体幹部の誘拐をしたんですか？彼等は差別される側を応援する団体でしょう？」

「反部落差別運動団体は自分たちは差別されていると差別をあえて煽ることで、私腹を肥やしているからだよ。彼等にとって差別は飯の種なわけだから」

差別に反対していると活動していれば、その為の資金援助や税制面での優遇、賠償金など金が彼等のとこにはやってくる。だから、彼等は差別撤廃を謳いながら誰よりも差別を望んでいる。火のない所に煙を立てに騒ぎたて、彼等の私腹を肥やしていく。それをこよりは憎んだ。

その幹部を誘拐し、こよりはネット上に声明を出した。それによって私はこよりが犯罪に手を染めた事を知った。

「当時の文部科学大臣は同性愛者への批判発言を行ったことでバッシングを受けていたんだけど、それに便乗する形でこよりは誘拐に至った」

「それをきっかけに鷺ノ宮こよりという名前は広まりました」

「活動家として名を売ろうとした節はあったね。その頃を境に幾つかの活動グループと手を組むようになったし」

公安も鷺ノ宮こよりという人物を危険視しはじめた。だが、特定の陣営につかないことから、捜査は困難を極めると思われた。しかし。

「鷺ノ宮こよりという名前は本名だ。何故かは知らないけど本名のまま声明を出した。だから、私の所に公安部が接触してくるのも当然だった。その頃の私は混乱してたけど、一つ公安に提案をした」

「なんですか？」

「私をこよりに会わせてくれって頼んだ」

【6ー5】

本来なら軽くあしらわれる筈の私の提案は思わぬ形に進展した。
狭山の元に呼ばれて私は事情を話した。そして、私はこよりを止めたいと言った。
狭山は私が魔法使いであることと、私の魔法に興味をもった。のちに5ナンバーであると発覚して、狭山は陸自の試験的な運用をしている連隊に来ないかと誘った。魔法使いのみで構成された特殊部隊に。

「狭山の口添えもあって私は特別に陸自の訓練校に入学しそこを卒業して陸自の魔法使い連隊に入隊する予定だった。だけど、こよりと接触したい私の希望と公安上層部が5ナンバーを欲しがったことで私は嘱託扱いで六課に来たわけ」

ここで私は一息ついた。

「それが私が六課に来るまでの話だ」
「……鷺ノ宮こよりと美樹さんの関係は分かりました。それで、美樹さんはどうしたいんですか」

璃瑠の問いに私は答える。
こよりとあの時接触して分かった。璃瑠と交戦しているのを見て強く確信した。
私は決意は揺らがない。いや揺らいではいけない。

「こよりを止めたい。あいつが踏み入れた道から引っ張りあげたい」
「だから、鷺ノ宮こよりと戦うな、ですか」
「協力して欲しい、璃瑠。あいつは間違ってる、だから止めたいんだ」

声が届くなら、話が出来るなら説得出来る筈だ。そう思った。
私の言葉に璃瑠はため息を吐いた。

「……自分が何を言っているのか分かっているんですか。目の前にテロリストが居て銃口を向けられてるときにあなたはノコノコ出て来て私に戦うなと言ったんですよ。
あの人は私の大切な人だ。だから撃ちたくない。協力してくれ。
そんなの馬鹿げてる」
「馬鹿げてるってなんだよ、私は真剣にーー」
「コンビを組むということはどういうことが分かっているんですか!?

特に近接特化の前衛の私と、射撃特化の後衛の美樹さんの場合、私は背中を預けて戦ってるんです！　それなのに、美樹さんは戦いたくない、恋人なんて撃てるわけないなんて言ってるんですよ!?
それで信頼なんて出来るわけないじゃないですか！　いつ私が美樹さんに背中を撃たれてもおかしくないんですよ!?
死ねとでも言いたいんですか!?　死んで、説得する時間でも作れとでも!?」
「そんなこと言ってない！」
「村山の時だって、どれだけ危険な事をしてるのか自覚はあるんですか!?　あの時、どれだけ危険だったか分かっているんですか!?
私が引き倒さなかったら死んでたんですよ!?　それをまるで、私が殺したとでも言いたそうにする！
説得、えぇ結構です。不殺、えぇ立派です。友情、感動的でしょう

とも。そして、そんな寝ぼけたこと言ってあなたは死んで、私にもそれを要求するんですか！？」

「村山は止められた筈だ！」

「あなたのその勝手な判断でどれだけの危険を生んだか分かっているんですか！？　村山を私が殺した？　そうですよ！　それが私達の仕事です！　それが出来なくては意味が無いんです！　絵空事を綺麗事で謳ったところでなに一つ解決しない！　自分の弱さを着飾らないでください！」

璃瑠は叫び終わると俯いた。布団に顔を押し付け啜りを上げる。白い布に、シミが出来ていく。

先ほどまでの強い語調は何処かに消えて、璃瑠は泣きながら言った。

「……もっと大人になってください」

【6－6】

『人が諞い人が求めた進化の為だよ。あたしは決めたの、そう決めた。こんな世界なんていらない。あたしが変える』

けれどそれは青い正義感でしかない。
私達はどこかで世界と折り合いをつけていくのだ。

「進化、か……」

病院を後にした私は家に帰る気がしなかった。時計を見ると２０時を過ぎた辺り。どこかで夕食を食べようかとも思ったが、そんな気もしなかった。

駄目だな、私は。誰一人救えない。
私が強ければ村山は救えたのだろうか。
私が強ければこよりを止められたのだろうか。
私が強ければ璃瑠が傷つかなかったのだろうか。

着信音がしたので携帯を取り出した。かちょーと表示されている画面を見て少し迷ったが、出る事にする。

「なんすか、課長」
「六課のオフィスに来てくれないかな？」
「今からっすか？」
「待ってるから」

六課のオフィスに来てみると残業中の何人かの課員がいた。奥に課長が居て手を振ったので、私はそっちに向かう。課長の正面に座る。

「遅くにすまないね」
「なんすか」
「迷っている目をしてるね」
「そりゃまあ、少し」
「鷺ノ宮こよりの事かな」

それもあるけど、と前置きして私は答える。
自信が持てることが見つからない。

「もし、私が今よりもっと強ければ村山を璃瑠が撃つことなかったのかって。もし、私が今よりもっと強ければこよりと璃瑠の戦闘を止められたのかって」
「難しい問いだね。でも一つ言えるのは、美樹君が必要としている強さは銃の腕前でも魔法の扱いでもなく、心の方だと思うね」
「……、分かってます」
「正直言うと鷺ノ宮こよりと君が接触すること自体公安部としては避けていた。前回のイレギュラーな事態が起きて公安の懸念は現実のものとなった。君と鷺ノ宮こよりの関係は公安にとっては不安材料でしかないとね」

私は動けなかった。こよりを前にして引き金を引けなかった。それがどれだけ危険だったかも分かっている。
けれど、言葉で止められるのではないかというひとひらの希望を捨てられなかった。

「……六課から外されるんすかね」

私の質問を課長は止めた。

「でもね、僕はもし君が彼女を止める事が出来るならそれを信じたいと思う」

「え？」

「君も彼女もまだ若い。踏み外した道を迷っている道を、選び正せるチャンスはまだ無限大にある。もし君が鷺ノ宮こよりを救う事が出来るなら、僕はそれを止める気はないよ」

「救うですか」

「罪を裁くのは簡単だ。でもね、裁かれる罪の陰に必ず救われる人が居なくてはならないんだ」

「……。」

「迷うなら好きなだけ迷ってもいい。だけど、誰も笑わない結末を迎える事があってはならない」

課長の言葉に私は笑う。

「課長、クサいっすね」

「加齢臭が最近酷いって娘にも言われてねぇ」

「でしょうねぇ」

「美樹君まで？　酷いなぁ」

枕がね、臭うんだってと嘆く課長に私はたまらず噴き出す。会った事もない課長の娘の姿を想像する。課長は家でもこんな感じなのだろうな。

「誰も笑わない結末を迎える事があってはならない、か……」

「だって、その為に、君は公安六課に来たんだから」

【6ー7】

【6ー7】

野方に連れられて、梨花と佐樹は都内のとあるレストランに来ていた。絢爛というのはこの事かと梨花は思う。メニューが全てフランス語だったのも、梨花の頭を痛くした。照明は暗いのに何故か眩しい。

「鷺ノ宮こよりという名前を知っているかね」

「鷺ノ宮こよりですか？」

佐樹ちゃんは良いな、高い服が似合って。梨花はそんなことを思う。野方に貰ったパーティードレスはどうも窮屈だった。

「革新派の活動家よ」

「佐樹ちゃんはなんでも知ってるね」

「鷺ノ宮こよりは特定の陣営につかないし、右派左派も気にしない。まあ革新派というポーズをとってはいるがね」

「はぁ……、」

「ただ独立派とは仲が悪くてね、どうやら彼女としてはこちらの主張は受け入れがたいらしい」

「そうなんですか」

「鷺ノ宮こよりはなかなか優秀な魔法使いでね、彼女の文部科学大臣誘拐の手口には感動したものだよ」

文部科学大臣誘拐と聞いて梨花は思い出した。その事件ならニュースで見た覚えがある。

「あ、それ知ってます。ヘリコプターで吊り上げたやつですよね」
「ビルから出てきたところを報道陣に取材攻めされている文部科学大臣を上から魔法による鎖で吊り上げるという大胆な手口だった。しかも、上にいたヘリコプターは囮で実際はそのビルの１５階まで吊り上げてそこで監禁し声明まで出していた。単純だがそれだけの実力があると、鷺ノ宮こよりという名前は知れ渡った」
「あの時の犯人が鷺ノ宮こよりって人だったんですかー」
「それで、何故急に鷺ノ宮こよりが？」

佐樹の問いに野方は話を戻す。

「そうだね、本題に戻ろうか。この鷺ノ宮こよりを資金援助している立川（たてかわ）という国会議員が居るんだが、どうやら事情が立て込んで居るようでね。立川はこちらに話を持ちかけてきた」
「？」
「こちらと手を組みたいらしい」
「鷺ノ宮こよりは革新派なら、それを支援していたなら立川も革新派なのでは？」
「そうだねー。野方さんは独立派なんですから」
「彼女としてはそういった信念はないのだよ。彼女の利益になるならね」
「そういうものなのかな」
「大人というのは汚い生き物でね、君たちのように若い真っ直ぐな感性では理解出来ないかもしれない」

野方が汚い大人とも思えないのだが、と梨花は考える。こんなに立派な人なのに。

「それでだ、立川はこちらを手厚く保護するという提案をしてきた」
「保護？」

「献金と組織票を見返りに野方さんの会社を議員として応援するということよ」
「汚い話だ。で、彼女としてはこちらと手を結んでもいい、その代わりに言うことを聞けと言ってきたわけだ。どうやら鷺ノ宮こよりが邪魔になったようでね。鷺ノ宮こよりの暗殺を見返りとして求めてきた」
「それを、あたしがやればいいんですね？」
「いや、そうじゃない」
「？」
「君に立川を暗殺して欲しい」
「へ？」
「こちらとしては立川と手を組む気はないのだよ。だが、色々あってね、無視するより消してしまいたい」
「よく分からないんですけど分かりました」
「立川には、護衛の為とでも言って君を忍び込ませる。後はうまいこと消してくれ」
「うまいこと……」
「君の５ナンバーがあれば問題ないさ」

【6－8】

私は家に着くと制服を脱いで洗濯乾燥機に投げ入れた。コンビニで買ってきたカップ麺にポットでお湯を注ぐ。
空気が淀んでいる気がしたので窓を開けた。少し肌寒い風が入り込んでくる。冬も近くなってきたという事だろうか。

１ＬＤＫの部屋には最低限の家具しか置いてなかった。
陸自は寮生活であったし、公安部に来てからは色々と大変で部屋に物が増える暇もなかった。
服もたいてい制服だし。
タイマーが一分を報せたので私はいそいそとカップ麺を取りにいく。
料理しなくても良いという現代文明の進化に感謝の気持ちを示してから蕎麦をすする。
私は甘かった。カップ麺のきつねそばの油揚げより甘かった。ていうか、これ甘！？

こよりに会えば、言葉をかければ止められると思ってた。だけど、それは無理だった。
私の言葉は無力なのだろうか。

部屋で一人愚痴る。
撃てるのか、私に。こよりが。
まず勝てるのか。
璃瑠のスピードに対抗出来る程の機動性。射撃も正確で、近距離においても防御面の不安もない。距離を選ばず、多方向から生成することで立体的に狙えるリアクトチェーンもある。

私は近中距離を得意とする射撃特化型。
単純に撃ち合いになった場合リアクトチェーンの多方向からの攻撃がある分こよりの方が有利になる。私の機動性は高いとは言えないから、こよりに追い付くのも難しい。
なおかつ、こよりを気絶か昏倒させる為に非殺傷性のスタンショットで倒さなくてはならない。威力も性能も不安が残るスタンショットで渡り合う自信は無い。

「きっついなぁ……」

私はまだこよりのことが好きなのに。

だけどこよりは私の言葉を聞こうとしない。

蕎麦の汁を飲み干しても良い考えが思いつかなかった。少し肌寒くなってきたので窓を閉めようとすると、夜空の月が煌々としていて私はしばらく惚けて見ていた。月の明るさに目が慣れてくると細かい星が微かに光っているのが見えた。

「月は良いなぁ、悩みがなさそうで」

【6ー9】

【6ー9】

ショーウインドウの服が気になったので立ち止まって眺めている風を装いながら、こよりは辺りに神経をとがらす。
酔っ払いの集団が歌いながら歩いて行き、それを気にも止めず人の波は歩みを止めなかった。
夜の街並みのネオンに紛れて誰かが見ている気配がした。
やはり尾行されている気がする。
このまま隠れ家に向かうわけにはいかない。尾行してきているのが魔法使いでないなら、飛行魔法で撒いても良いのだが分からない以上は下手な事をしたくない。

仕方ない、そう思ってこよりは歩みを進めた。交差点を渡り切ると同時に走り出す。通行人を縫うようにしてこよりは全速力で走る。
チラッと後ろを確認するとスーツの男が走っているのが見えた。

一人、いや二人か。

急遽真横に方向転換して路地裏に入った。それを追って男達が路地裏に入る。路地裏は思ったより広く、男達は走るスピードを変えない。その時だった。彼らの足元に突然鎖が真横に張られそれに足をとられ彼らは転んだ。
立ち上がろうとした彼らの首に鎖が巻き付く。
その鎖に引き倒され、そこに鎖が無数に絡みつき動きを奪う。

「こんばんはー、何の用かな？　そう何の用？」

こよりは笑顔で男に近付くと一人の首元に銃口を押し付け引き金を引いた。青白い電流が男の身体を這い男は大きく身体を仰け反ると気絶した。
そしてもう一人の男に向き直る。

「スタンガンって便利だよねー。一発で気絶させられるレベルの物が出来ちゃったからね、そう一発。でも残念な事に一回しか使えないのばっかりなんだよねー」

そう言ってこよりはスカートの下からハンドガンを引き抜く。それを気絶していない方の男の首元に押し当てた。

「だから、こっちは実銃、そう実銃。死にたくないよね、あたしだったら死にたくないなぁ」
「た、助けてくれ！」
「でもあたしとしてはここで殺したいんだけどなぁ、殺したい」

銃口をねじるように押し付ける。男の恐怖を極限まで煽る。引き金を指先でコツコツと弾く。

「誰に雇われた、誰に？」
「い、いえない！」
「じゃあ死のうか？　死んじゃう？」
「た、立川だ！」
「立川……？　誰だっけ？」
「議員の立川さんだ！」
「あー。あのおばさんが、やっぱりこういう手で出てきちゃったかー。頼まれた仕事は、今回の」
「あ、あんたの跡をつけろと」
「それだけ？　だけだけ？」

「そ、それだけだ」
「他に知っている情報は？　情報情報」
「ほ、ほかは何も知らない！　あんたの名前すら知らないんだ、」
こよりは銃口を下ろす。そして笑顔で言った。
「オジサンさー、こんなんで死ぬなんて淋しい人生だね、ホント淋しい」
下ろした銃を胴体に押し付けて引き金を引いた。青白い電流が流れ男は気絶した。
「スタンガンの予備くらい持ってるよー、良かったね、良かった良かった」

【6－10】

「遅かったじゃないのぉ」
「ちょっと野暮用だったの、野暮用」

隠れ家に着くと入間沙織の処置を任せている研究員の通称おネェがこよりを出迎えた。本名はもちろんあるのだが、喋り方がそれらしいので皆おネェと呼ぶ。ちなみに女性である。
隠れ家は、とあるオフィスビルの一フロアを借りているのだが、案外ばれないものだな、とこよりは思った。

「入間沙織は？」
「まだ起きているわよぉ」

備え付けてある広い防音室にこよりは入った。オフィスビルの一室であるが、防音室がついていた。どういった目的で設計したかは知らないが、役に立っているので良しとする。
防音室に機材とベットを持ち込んで、ここに入間沙織を軟禁していた。

「こんばんはー、沙織ちゃん」

こよりの挨拶には答えず、入間沙織は頭を下げた。一緒に入ってきていたおネェが入間沙織を叱る。

「こよりちゃんに挨拶しないとダメじゃないのぉ！」
「別にあたしは構わないよ、どうでもいいし、うんどうでもいい」

ベットに腰掛けている入間沙織を見上げるように床にこよりは座った。沙織はこよりに鋭い視線を向ける。怒った顔をしてても、美人は美人だなとこよりは惚けた。

「何か生活に不満は？　　そう不満」
「家に帰して」
「あー、それ以外でね、それ以外」
「実験動物扱いはやめて」
「えーと、それ以外で、もっとこう生活面で。生活面」
「歯磨き粉の種類を変えて」
「なんでまた」

少し恥ずかしそうに沙織は声を小さくした。

「辛いから」
「分かった、おネェ明日買ってきておいて。あたしも甘い方が良いし、甘いのが」
「二人ともお子ちゃまねぇ」
「まだ、子供だもーん、子供子供」

【6－11】

「沙織ちゃんについての観測結果が出たんだよね、観測結果。まあ何となくは聞いてると思うんだけど」
「私は魔法なんて知らない」
そっけない沙織におネェは口をとがらした。
「前話したじゃないのぉ」
「元素Ｍａによる特殊な科学反応。これを起こす方法とＭａによって引き起こされる現象を総称して魔法と呼んでいるんだよね、魔法ね。
魔法っていうのは凄くて従来の科学では説明出来ない程のエネルギーと可能性を秘めているんだけど、そうエネルギー」
新たなエネルギーとして魔法は注目されている。個人携行レベルでエネルギー兵器が出来る（量産出来るかは別として）程に魔法は従来の科学を超越した。
「でもでもー、魔法も幾つか問題があってね？　問題がね。人体に有害なんだよね、チョーゆーがい」
メカニズムは詳しく解明されていないが魔法エネルギー、いわゆる魔力に長時間、もしくは大量に晒されると人間の細胞は破壊され、魔法中毒や症候群を引き起こし最悪の場合、というよりかなり確実に死に至る。時間の程度はあれど、だ。

「これが、魔法を代替エネルギーとして大規模に実用化したり魔法使いを大量に養成して軍事利用したりをしない理由なんだよね、危険だから。まあ軍事に関しては魔法を使えるかは個人差が大きいのもあるけど」

個人差がある以上魔法を教えても使えるようになるかは定かでない。脳波によってＭａを操作する魔法は個人の脳波性質や量に影響される為、一般の兵士を、魔法使いにしようとしても半分は賭けになる。それに育てても魔法によって死ぬのでは意味がない。
故にＷＩＥＣＳのように魔法をエネルギー兵器を実用化する為の技術として、利用するのに留まっているのだ。ＷＩＥＣＳも試作兵器でしかない。

「なら、あんたも魔法使いなんでしょ？　死ぬの？」

【6－12】

「なら、あんたも魔法使いなんでしょ？　死ぬの？」
「そうだよ、すでに魔法はあたしの身体を蝕んでるし、いつ死んでもおかしくないね、おかしくない」

薬によって症状は抑えているが、いつ悪化するかも分からない。
それを聞いて入間沙織に動揺の色が見えた。

「魔法が人体に影響及ぼすメカニズムは解ってないけどね、うんわかんなーい。Ｍａ自体がダメなのか、Ｍａを反応させて利用可能なエネルギーにした状態のいわゆる魔力がダメなのか、そこら辺ははっきりしないんだよねー。
発症や影響が出るまでの量も個人差で収まりきらないくらいに幅があるし、魔法使いは魔法に抵抗があるっていう人もいるけどそれは、たまたま抵抗があったから魔法使いになれたのかもしれないし。抵抗なかったら魔法使った瞬間に死ぬかもしれないからね、お陀仏お陀仏」
「そうなのよねぇ。こよりちゃんがいつぶっ倒れるか不安なのよぉ」
「お見舞いにはイカの燻製が良いなぁ、燻製ね燻製」
「いやよぉ、匂いつくじゃなぁい」

無駄話はとっととやめてこよりは説明に戻る。

「で、沙織ちゃんの話なんだけど。沙織ちゃんは普通の人と違うって事が分かった、そう分かったの」
「違う事？」

「沙織ちゃんには魔法に対して絶対的な耐性がある。完璧ではないよ？　でも普通ではあり得ないくらいだよ、ありえなーい」

薬師寺早苗の魔法の影響下に居ながら、殆ど影響を受けていなかった。

「この部屋を定期的に高濃度魔力で満たしていたのよぉ。でもあなた、なんの影響もないでしょぉ？　普通の人なら下手したら死んでるレベルなのよぉ」

「そ、そんな」

「ごめんね、でも沙織ちゃんの体質は調べる価値がある、そう価値が。もしかしたら、魔法の有毒性を解明して防ぐ事が出来るようになるかもしれない、いやなるよ」

「わ、わたしそんなの！」

「ねぇ分かる？　沙織ちゃんによって人類は次のステップに進むことが出来るようになるんだよ、次のステップ。想像も出来ないよ、生身の人間が機械も使わずに大量のエネルギーを生み出せる。エネルギー問題どころか世界中のあらゆる問題が解決する、解決出来る」

「わたし死にたくない！」

「これはまさしく進化だよ、進化。人間が人間を超越する。エネルギーは無限に生み出せるから後進国の問題も一気に解決するし、人間の活動領域は大幅に広がるから土地も食料も解決する、石油枯渇どころか下手したら石油が要らなくなるね、生活様式は大幅に変わって価値観も変わる」

「死にたくない！　もう家に帰してよ！」

「従来の価値観が変わることで、社会問題も片付く。古いものを全て捨て去って人間は進化するんだよ」

「いや！　いや！　わたし死にたくない！」

「だーかーらー、死なないんだって沙織ちゃんは、死ななーいの」

「だってあんたは死ぬんでしょ！？」

「そうだよ？　だから、あたしは今出来る事をやるの」

【6－13】

【6－13】

ヒステリーを起こした沙織が疲れて寝たのをカメラで確認して、こよりとおネェは一息ついた。おネェがコーヒーを淹れたのでこよりは受け取る。

「そんなにミルク入れたらコーヒー牛乳になっちゃうじゃなぁい」
「あぁー、溢れたぁ！　ちょー溢れたぁ！」
「ちょっとなにやってるのよぉ！　誰か布巾持ってきて！」

とりあえずこよりがティッシュで拭こうとするとおネェが止める。

「もったいないでしょぉ！？」
「だったら早く布巾持ってきてよ！　布巾！」
「布巾、どうぞ」
「ありがとう！」

服に付く前に溢したコーヒーをふき取ると、こよりは顔を引きつらせた。それを見て布巾を持ってきた沙織は首を傾げる。

「なんで、部屋から出れてるの？　え、なんで？」
「もともと鍵かかってない」
「え？」
「沙織ちゃんの出入りは自由なのよぉ。あの部屋トイレもないしねぇ」
「なにそれ、いやほんと、なにそれ」

寝てたのじゃなかったのか。

「大丈夫よぉ。このフロアからは出られないしぃ、あの部屋に監禁しっぱなしじゃあ滅入るでしょぉ？」

聞けば部屋の出入りは自由。置いてあるお菓子も好きな時に食べられるし頼めば雑誌データも購入してもらえる。ネット閲覧も自由。そりゃ、生活の不満が出ないわ、とこよりは思った。

「いや、おネェに一任するとは言ったけどさぁ、随分フリーダムだね、フリーダム」

「定期的にデータさえとらせて貰えばこちらとしては問題ないのよぉ。沙織ちゃんの機嫌も良くなるしぃ」

「随分、落ち着いたみたいだね、うん落ち着いた」

「考えたら、わたし死なないんでしょ？　魔法も効かないし、データを取る為に生かすでしょ？」

この子は賢いな。こよりは感心する。

成績優秀で美人。美樹ちゃんでないと敵わないな、なんて考えていた。

「だからわたしが一日でも早く帰れるよう協力する」

「いいね！　ならこっちも頑張っちゃうね、ね、おネェ」

「もともと沙織ちゃんは協力的だったわよぉ。あ、コーヒー飲むぅ？」

「ミルクと砂糖多めで」

【6ー14】

【6ー14】

「ふたりはテロリストなんでしょ、なんでそんなことしてるの」
「世界を変えたいから、うん変えたい」
「世界を変える？」
「この世界の抱えている問題はもう人間が人間である以上解決出来ないレベルになってるんだよ、そう解決出来ない」

ミルク足りなかったな、と思いながらコーヒーに口をつける。沙織もそれに釣られるようにして飲んだ。

「あたし達の魔法はおとぎ話みたいに綺麗なもんじゃないよ、じゃない。でも少なくともあたしにはこの世界を変えるだけの力があると思ってるよ」

世界中のみんなを幸せに出来るように、なんて素敵な魔法があれば良いのに。

「従来の価値観に囚われてるから人は分かり合えない、そう進化しなきゃ、進化。あたしは魔法によって人類を次のステップに導く」
「そんなの、無理」
「かもね。でもそうじゃないかも、かもかもー」

沙織は言葉に詰まる。荒唐無稽な話であるし、不可能だろう。こよりが人を進化させる権利などないし、人がそう簡単に変わるとも思えない。第一、中学生の考えるような陳腐な発想だ。
しかし、と沙織は付け加える。

この人は本気なのだと。

おネェが思い出したように言った。

「そういえば、今日は月が綺麗だったのよぉ、来る時に見たぁ？」

こよりは首を横に振る。尾行を撒くので忙しかった。

「月なんか見る暇も無かったよ」

【6ー15】

【6ー15】

「課長！」

殆ど人の居なくなった公安六課のオフィスで八坂が鋭い声を上げた。並ならぬ雰囲気に課長の大塚が急いで腰を上げる。

「どうしたの？」

「革新派を名乗る一派から警視庁に接触があったとの報告が」

「内容は？」

「幾つかの交換条件で鷺ノ宮こよりを支援している国会議員を教える、と」

交信メッセージのログが転送されてきたので、八坂のＰＣを大塚は覗き込む。

「立川裕子（たてかわゆうこ）衆議院議員」

「よりにもよって与党ですか」

「支援期間、支援金額の情報まで……もしかしたら、本当かもしれない」

「向こう側の要求についてはログ消されてますね」

「裏取引ってやつかな。どっちにしても、六課が出張ることには変わりないけど」

鷺ノ宮こよりは革新派ではあるが、フリーの活動家に近い。よく組んでいる活動家はいるものの、フリー故に尻尾が掴みづらいのである。

だからこそ、大塚としては鷺ノ宮こよりが接触してくる可能性の高い美樹に期待していた。美樹が騒げば騒ぐほど鷺ノ宮こよりが姿を見せるかもしれない。

実際に村山の事件の際には美樹に接触を図ってきた。

なんにせよ、フリーの活動家である鷺ノ宮こよりの資金面を叩けるのは大きい。このリークは有益だと思われた。しかし。

「情報の差出人の名前が……」

「鷺ノ宮こより……ですか」

【6章・月は繋げた完】

【用語】

今まで出てきた用語

魔法

近年初めて観測された元素Ｍａ（正確には元素ではないとされる）を用いた特殊な化学反応。本来はＭａ自体で反応は起こしづらいが一定値以上の人間の脳波に反応するので可能な人間には自由な操作が出来る。これを利用し莫大なエネルギーと特殊な化学反応を得るのが魔法である。

人体に有害であり急性魔法中毒や重度魔法障害などを引き起こす可能性がある。

魔法分類番号

魔法を系統ごとに桁の数字とアルファベットで分けたもの。確認、申請されているものには全てにこれが振られている。番号に優劣はない。

１が反応、２は干渉、３は生成、４が独立となっており、分類不可なものには５が振られる。

例　？２．０２Ｂ‐０２Ｍオプティカルカムフラージュ

？？　？　３．０２Ａ－０２Ｓスタンショット

ふぁいぶなんばー　？５ナンバー

魔法分類番号の頭の数字が５になる魔法、またそれを使える魔法使いのこと。分類不可。従来の魔法とは一線を画すといわれる。理論自体、解明できないものも多く、それ故に使える人間は偶発的な産物である。その性能から各組織は５ナンバーを重視している。

例　？５．０２Ｂプレッシャーリージョン

公安部公安第六課
公安の対魔法を目的とした課。魔法が秘匿事項の為、公安の中でもより秘密主義。大塚は係長でなく六課の課長。

公安部公安第六課超自然現象及び事件特別対策係
超自然現象と銘打っているが実際は魔法を用いた犯罪のみを扱う。犯罪捜査検挙抑止が基本であるが魔法使いとの軍事的接触に対処も出来る。対テロ班までは必要ないと見られる事件等を扱う。捜査班には、この係の事を指す事と他の係などでテロリストの身辺調査などを行なう班の二つの意味合いがあるが、美樹達の言う捜査班は大抵前者。

魔力
Ｍａを運用して生じたエネルギーの総称。または利用可能な状態にあるＭａのこと。

まりょくのたて、まりょくじゅん　？魔力盾
魔法によりつくる魔力の塊のこと。自分の前方に展開することで盾として使う。

魔力弾
魔力によって形成した質量を伴わないエネルギー弾のこと。実弾を魔法によって飛ばすことも可能だがそれを魔力弾とは呼ばない。誘導性や誘爆性などを持つ場合もある。

砲撃
莫大な魔力を放出し攻撃すること。数秒、照射出来るものはこう分類される。

独立派

極右テログループ。現政府と社会構造への反発を示しており新規政府の立ち上げを主張している。

革新派

魔法によって人類の次なる進化を目的とする。違法性のある実験などを政府が取り締まったことで武力闘争となった。

Ｈ＆ａｍｐ；Ｋ　ＭＡＲＫ　２３　ＳＯＣＯＭ

六課課員に支給されているドイツ製の自動拳銃。

特殊な改造無しでサプレッサー、また銃口下部には可視レーザー、赤外線レーザーを照射できるＬＡＭを装備する事が可能。

美樹はＬＡＭのみを装着している。

ＦＮ　Ｐ９０（ファブリックナショナル　プロジェクト　ナインティー）

ベルギーのＦＮ社が開発したＰＤＷ。人間工学に基づいた設計が行われている。

新しい形態の火器として１９８０年代末に開発され、「ＰＤＷ（Ｐｅｒｓｏｎａｌ　Ｄｅｆｅｎｃｅ　Ｗｅａｐｏｎ：個人防衛火器）」という分類で発表された。

サブマシンガンの一種として分類される場合もある。黒蛇のモデル。

うぃーくす　？ＷＩＥＣＳ

魔法によって可能となった実弾を使わないエネルギー兵器の総称。

銃内部で特定の魔法を引き起こすことで、引き金を引くだけで魔力弾の発射が可能となる。誰でも魔法使いになれるもの。次世代の兵器であるが、魔法が人体に有害である為正式配備はまだ決定されていない。

魔法が有害であることを配慮し、ＷＩＥＣＳだけでなく通常の銃を持つことが多い。

くろへび　?黒蛇
美樹のもつＷＩＥＣＳ。サブマシンを二つつなげて中折れにした、と美樹に形容されている。銃口下に銃本体と同程度のサイズの拡張バレルを装着しておりこれを連結させることで短時間のチャージで砲撃を行なうことが出来る。取り回しがいまいちであるが、単射、連射、砲撃と三種類の撃ち分けが出来る為戦力面の選択肢が多い。拡張バレルを連結するときに蛇が首をもたげるように見えることからこの名がついた。

つじかぜ　?辻風
璃瑠の持つ鉈のような大剣。射撃機構を持ち合わせており簡易的があるがエネルギー弾の射撃も可能。
剣であるが切断機能はなく鈍器としての武器である。

むらくも　?叢雲
梨花の持つＷＩＥＣＳ。
ライフル銃の上下に長く分厚い刃を装着した様な独特の形状。非情に大振りで持つと刃が腕を覆う。
近接戦闘での射撃手の脆さを補う為に銃に剣としての機能を持たせている。フルオート射撃と単射を撃ち分ける事が可能。
刀の内側にはサーキット形成機構があり、砲撃形態に移行することも可能。

ほしくだき　?星砕
佐樹の持つＷＩＥＣＳ。ハンドガンとレールのような拡張バレルを二つ合わせて星砕とする。
ハンドガンの取り回しを持ちながらも、腰から提げた拡張バレルを接続する事で砲撃も可能であり威力と両立した。佐樹は二丁同時に使用している。

【人物】

人物

ふしみみき　伏見美樹

公安六課の新人。見た目、声に似合わず勝ち気な性格。楽観的で璃瑠には「軽い」と思われている、それと馬鹿。敬語は苦手であり、男言葉が出ることも多い。無意識下の記憶も含めて脳内で再生できるほどに記憶力がいい。
革新派のテロリストとして非合法な活動をしている鷺ノ宮こよりを止めるために公安六課に来た。

おちあいりる　落合璃瑠

公安六課の魔法使い、美樹のパートナー。真面目な性格で冷静な態度をとってはいるが、めんどくさがりで怒りやすい。自分に優しく、他人に厳しくがモットーでルールや規律を乱す人間が嫌い。
絶えず敬語であるが、敬意が見える事はない。
個人情報は秘匿とされており詳しい事情は明らかにされていないが１０才頃から既に政府の指令を元に活動を行っていたとされる。

おおつかあきお　大塚昭夫

六課の課長。美樹の扱いを一任されており直属の上司のような扱いである。
温和だが決断力を秘めており面倒な六課をまとめ上げている。が、美樹に言わせればただのエロオヤジ。
美樹の事情を深くは知らないが本人のしたいようにはさせたいと思っている。

やさかさつき　八坂皐月
六課のオペレーター。暇な時は事務。
璃瑠と仲がよく、同じお菓子を分け合っている姿が見られる。

さぎのみやこより　鷺ノ宮こより

テロリスト。魔法使いとしても優秀であり公安六課も危険視している。美樹の恋人であったが、そのことを祝福されない世界に嫌気が差し、魔法によって旧来の価値観を捨て去り人類を次のステップに導くことを目的とする。
金髪にゴスロリと派手な格好をしている。

いるまさおり　入間沙織
聖マリア学園の女学生。学園内から失踪した。
魔法の毒性に抵抗があり、そのデータのためにこよりに拉致された。

いしがみさき　石神佐樹
プレッシャーリージョンと呼ばれる5ナンバーを所有する独立派のテロリスト。3章で美樹達と戦闘を行う。

たかだりか　高田梨花
佐樹と行動を共にする少女。何か特殊な魔法を有しているようだが……。

あらいひろか　新井弘佳
鷺ノ宮こよりと協力関係にある。

いぐさみち　井草美智

弘佳と行動を共にする少女。無口。

【人物】（後書き）

前半終了。

ここまで読んでいただいていること、またお気に入り登録、評価ありがとうございます。

【7章・女帝は残された】

【7章・女帝は残された】

立川裕子（たてかわゆうこ）の自宅は一言で言うならデカイ。私としては見るだけで蕁麻疹が出そうなのだが、貧乏性だから。

綺麗に刈り込まれた庭木が庭を囲い、石畳から足を踏み出せば一面のガーデニングに圧倒される。新築の洋風の家屋は外から見ていて部屋数に検討がつかなかった。

公安六課にリークがあり、国会議員の立川裕子が鷺ノ宮こよりに資金援助しているという情報が入った。支援期間、金額、鷺ノ宮こよりの情報も共に添えられていた為、情報の出処に不安は残るが六課は立川裕子の調査を決めたのだった。

鷺ノ宮こよりが絡んでいることで、私に白羽の矢が立った。反対の声も上がったが課長は押し切ったのだった。

感謝感激雨なんとかである。

「お休みのところを申し訳ありません。公安六課より派遣されてきました伏見美樹です」

「立川裕子と申します」

「しばらくの間ですが、あなたの身辺警護を担当します」

「そこまでの心配もいらないと思いますが」

「まあ、念の為ということで。岩崎を逮捕するまでしばらく詰めることになると思います」

実際は岩崎という男は存在しない。あくまで口実だ。岩崎という男が立川を狙っているので公安が身辺警護を行うという理由で私が立川に近付き、六課の別の課員と協力して探ることになっていた。

時間をあまりかけたくないということか。

「移動はこちらが車両を用意します。買い物などの雑用もこちらで。仕事の際も私が随伴します。窮屈かと思いますが」

「いえよろしくお願いします」

スケジュールの打ち合わせをしていると、リビングのドアが開いた。中学生くらいの女の子が入ってきた。

茶色の髪をリボンでツインテールにしている。つぶらな瞳は大きく年相応の子供ぽさがあった。

セーラー服はおろしたてのようにシワ一つない。

なんか、どっかで見た気がするのだが。

「親戚の子を預かっているんです」

「こんにちは」

「こんにちはー」

中学生の子を預かっているのはどういった理由なのだろうか。どうでもいいか。

「梨花です」

「ご丁寧にどうも。伏見美樹です」

【7－1】

私は自宅を警護の為と称して見て回らせて貰っていた。
気付いたのは、部屋の壁紙や小物などが魚模様で統一されていた。
熱帯魚か何かが趣味なのだろうか。

鷺ノ宮こよりを援助していた証拠を何処からか見つける事が出来れば良いのだが、立川のＰＣに触れる機会があるだろうかと思い悩む。
書斎の引き出しを漁ってみるも、万年筆が転がっているだけだった。
書斎の棚の書物も空きが目立つ。

タブレットＰＣを一人一台持ち歩く事が当たり前になった今、紙の資料は殆どなく、書籍も電子化が当然となっているのでこのような書斎自体が珍しかった。
書斎を後にして部屋を回るがテロリストと手を組んでいるという、それらしい証拠は見当たらなかった。
にしても広い家だ。９ＬＤＫで１００坪あるらしい。
立川裕子は衆議院議員で、親は著名な資産家。年は４６、結婚はしておらず独身。先程の中学生の子は親戚の子を預かっていると言っていたが、どういった事情なのだろうか。
にしても、どこで見たんだっけかなぁ。誰かに似てるだけだろうか。いや、確かにどこかで見た覚えがある。

携帯電話がなったので表示を見ると八坂だった。廊下に誰も居ないのを見てから部屋に戻り電話に出る。

「はい、伏見」

『状況はどうですか』
「特に。とりあえず家中見させてもらってるんすけど、証拠になりそうなものはないっすね」
『パソコンは？』
「普段持ち歩いているタブレットＰＣとデスクトップＰＣだけです」
『そっちにデータが入っていると思いますが、なんとか、なりそうですか』
「努力はするけど」
『こちらからハッキングかけたいのですが』
「それで解決するなら早いんだけど、保護プログラムくらい入ってるでしょ。ちょっと遠回りだけど盗聴器仕込むかな」
『そうですね。進展がありしだい連絡してください』

【7－2】

『そうですね。進展がありしだい連絡してください』

私は電話を切って長い息を吐き出す。

璃瑠の事、聞けなかったな。

病室での一件でどうも気まずく璃瑠と顔を合わせずにいた。今回の仕事も私とバックアップの八坂だけであるし。明日にはもう一人六課の誰かが来るはずだった。

璃瑠と組まない仕事なんて初めてだ。

考えてみれば六課に来てからずっと璃瑠と組んでいたのだから。

大丈夫だ、璃瑠が居なくても私はちゃんとやれる。

そりゃ、用心棒みたいなとこもあったから居ないと居ないで不安にはなるけれど。けれど、璃瑠に頼ってちゃ駄目だ。こよりを私一人で止めようとしてるんだから、これくらいのこと。

だけど、この何かが欠落したようなこの気持ちは何だろうか。

「伏見さん、でしたっけ？」

「え？　ああ、はい」

いつのまにか立川が後ろに立っていて私は素っ頓狂な声を上げてしまう。

「家の中はもう、よろしいのかしら？」

「ええ、ありがとうございました」

立川が首から何か提げているのに気付いた。白いポーチのようなものに紐がついている。

「あぁ、これですか？」

立川がポーチを振ってみせた。口を開いて中を私に見せる。ペンの様な物が見えた。

「ペン……じゃなくて注射器ですか？　糖尿病でしょうか？」

「えぇ、そうなんです。毎日4時にと、決まっているんですけれど忙しいと忘れかねないので首からこんな風にして提げているんです」

インシュリン自己注射か。経口タイプで全て済むように後数年でなるとの話も聞いた気がする。

「それで、先程、お伝えするのを忘れていたんですけれども後で一人お客様がいらっしゃるのですが」

「仕事の関係でしょうか。不安でしたらこちらで手を打ちますが」

「いえ、古い知り合いですから。一応、話して置いた方が良いかと思いまして」

「ありがとうございます。何かありましたら遠慮なく言ってください」

「はい。私は基本部屋におりますので」

その知り合いがこよりとかなら仕事終わりなんだけど。

にしても、立川はこよりを支援していたということは革新派なのか。

革新派は元々、ヒトの遺伝子操作の合法化を求めた

集団である。
現在、ヒトのＤＮＡへの介入は遺伝子治療のみ許可されており実質的に産まれる前の段階では不可能である。
これに対し、「遺伝子治療を行い産まれる前に人間としてよりよい方向へと舵取りをする」事を理想としヒトのＤＮＡへ介入すべきと主張していたグループの一部が法に触れる実験などで摘発を受け武力闘争化した。
この様に人間の種としての進化を主張しており、武装化しているグループを特に革新派と呼んでいる。

魔法の存在はテロの急増を促した。理由の一つは魔法が武力として手軽な存在であること。人間の身一つで莫大なエネルギーを生む魔法は従来の実弾兵器を遥かに凌駕し（一概に比較出来るものではないとはいえ）、銃刀法の施工されている現代日本において魔法使いであるのなら最も手軽に手に入る兵器である。
能力さえあればいいのだから。

現時点において魔法の存在は政府見解で肯定してる国は主要国の中にはなく秘匿扱いであり、日本も例外ではないが、漏洩とネットにより着実に魔法利用は増加している。

【7ー3】

日本において武力闘争が顕著化した理由として、もう一つの理由は中道左派の現政権が政府に批判的な言論に対して弾圧的であることも、あげられる。

まあ経済が下向きなのが一番の問題だろうか。

この政府に批判的で新規政府立ち上げを主張する独立派と前述の革新派が武力闘争にまでもつれ込んでいる主なグループである。

私が詳しく知っている中では革新派はこより、独立派は以前交戦した5ナンバー「プレッシャーリージョン」を所有する佐樹と。

と、そこまで思考が及んで私の顎は重力に負けて開いた。

さっきの中学生の子何処で見たか思い出した。

忘れていい相手じゃない。

佐樹と一緒にいた魔法使いではないか。

私が撃たれた相手じゃないか。

「私の馬鹿！」

自分の頬を叩いて踵を返す。

失態だ。もし彼女が何らかの目的をもって立川に近づいていたなら。

独立派の彼女が反目している革新派のこよりを支援している立川に接触してきている理由なんて肯定的な筈がない。

長い廊下を走り通しリビングに急いで向かうと梨花がテーブルに座って一人で黙々とオセロをやっていた。
あ、……うん？　あれ？

「よ、よう。……なにやってんだ？」
「オ、オセロ」
「ひ、一人で？」
「あ、相手が居ないから……」
「でも、一人でやるか？」
「で、でも、やる気は二人分くらいあるよ」
「……わ、私とやる？」
「で、出来たらいいな……」

梨花の対面に腰掛ける。ボード形式のオセロ盤なんて久しぶりに見た。子供の頃以来だ。今はＰＣでのネット対戦が主であるしなぁ。懐かしい気持ちになりながら黒と白の石を四つ初期位置に置いた。

「って何でだよ！」
「うわぁ！？」
「なんでお前一人でオセロやってんだよ！　おかしいだろ！あれか、一人でやってるのに劣勢になっちゃう方に肩入れしちゃったりして、応援して少しズルして片方で手抜いたりして白熱の勝負を演じたりするのかよ！？」
「な、なんで分かったの！？　エスパー！？」
「魔法使いだよ！　てかオセロはどうでも良いんだよ！」

私が睨むと梨花はおずおずと自分の石をマスに置いてひっくり返した。

「いやだから普通に始めんなよ！　あと先攻勝手にとるなよ！」

「ご、ごめんね？」

【7ー4】

右上の角が取られたので少し危機感を覚えながら次何処に置こうか考える。角をとって喜ぶようじゃ初心者丸出しだな。型もしらないようだし。
まぁ、私も知らないんだけど。
石を起きながら私は聞く。

「目的は何だ？」
「左上の角取りたいなぁって」
「オセロの話じゃねーよ！」

こいつ本当にテロリストか。他人の空似じゃないだろうか。不安になってきた。

「お前独立派のテロリストだろ？」
「そんな感じだよ」
「私の顔を見て何か思い出さない？」
「……あー！？」
「忘れてたのかよ」
「冷蔵庫の豚肉、今日が消費期限だった！」
「知らねぇよ！　てかなんで私の顔見て豚肉思い出すんだよ！　豚に似てるからか！？　そうなのか！？」

璃瑠にも豚みたいと言われたのを思い出した。
黒豚だっけか。
こんなにも美少女なのに、失礼な言い草である。

「鷺ノ宮こより絡みか？　　パス」
「そっちだって何を考えてるんですか？　あたしを逮捕するの？」
「やろうと思えば出来るけど、返事次第だ。立川に接触する目的はなんだ？　　あ、またパス」
「だから立川さんは親戚だって」
「分かりやすい嘘をつくなよ。……パスだよ」
「あたし嘘とか、苦手で」

最後の石を梨花が置いて沈黙が続く。
こいつからは並ならぬ実力を感じる。圧倒的なプレッシャーだった。
オセロが。

「強いなオセロ」
「あたし、一人でずっと練習してたから」
「……ネット対戦って知ってるか？」
「あたし、パソコン苦手で」
「携帯電話くらい持ってるだろ？」
「あたし、そういうの苦手で」
「貸せ。入れてやる」

【7ー5】

「んで、これを押したら戦績が保存出来るから」
「おー、すごーい」

梨花の携帯電話にオセロを入れてあげて、私は一息ついた。

「ってだから何でだよ！」
「うわぁ！」
「なんで私はお前とキャッキャッウフフな感じになってるんだよ！」

そういう相手じゃないだろ、と私は私を叱る。
なんか調子狂うなぁ。
私は自分の中の決心を固めて梨花に向き直る。

「あのなぁ……？」

梨花の顔色が悪いことに気付いた。蒼白に変わり呼吸が荒い。瞳孔が開き視点が定まっていない。
力なく唇を開き息が上手く吸えないのか胸ではなく口の中だけで呼吸をしているように見えた。

「おい、どうした！？」

私の声に梨花は反応しなかった。
癲癇か何かかと思ったが、私は気づく。梨花は魔法使いだ。ならこの症状は。

「魔法中毒か。おい聞こえてるか!?　薬は何処だ!?」

反応が無い。梨花の目が白黒し、口から泡を吹く。椅子から力なく崩れた。

私は制服の胸ポケットに入れていた手のひらサイズの緊急セットを取り出す。

中から小型の注射器を出すと梨花の腕を持ち上げて薬を投与した。

そうしてから、梨花の身体をなんとか持ち上げてソファまで運び寝かせた。

応急的に緩和剤を投与したから大丈夫だとは思うのだが。

「どうかしました?」

立川が顔を出した。私の大声に驚いたらしい。

少し悩んで私は答える。

「ああ、いえ。大丈夫です、なんでもありません」

ソファに寝ている梨花をちらっと見て立川は言う。

「先ほど言ったお客様が参りましたので」

「そうですか。分かりました」

立川がリビングを出ていくと遠くで来客者の声が聞こえた。こっそり陰から覗き込む。

背の高い男性だった。頬に何かの跡がある、火傷か何かだろうか。

携帯電話のカメラで顔を撮影しておく。

見つかりそうになったので、私は思い切って顔を出した。

「ん？　立川さん、彼女は？」

男性が私に気付いた。

こうオブラートに包んで言って欲しいなぁ。

「親戚の子ですよ」

「どうも」

男性が軽く頭を下げて立川に連れられ二階に上がっていった。それを見送って私はリビングに引っ込んだ。

八坂に男性の写真をメールで送る。前科か何かがあれば公安のデータベースと合致する筈である。

梨花の容態は落ち着いており、今は寝息に変わって居た。寝顔を見てもただの中学生にしか見えない。

この子にはどんな事情があるのだろうか。

とにかく、と気持ちを切り替える。梨花は寝ているし立川は来客者と部屋に行った。好機と思いリビングのデスクトップＰＣの電源をいれた。

最新とまではいかないがそれなりに新しい機種であった。

「やっぱりロックされてるか」

ＰＣの周りを探してみたがパスワードのメモなどは見当たらなかった。立川裕子の情報を携帯電話で検索して、生年月日などをいれてみるがどれもハズレだった。

私のタブレットＰＣを接続してクラックソフトを起動する。時計を見ると１５時１０分になる頃だった。

立川の客がどれくらい居るのか分からないが、１０分かそこらで帰るとも思えない。
クラックソフトが解析するのを待っていると携帯電話が鳴った。

「もしもし」
『伏見さん。先ほどの写真ですが、公安のデータとは合致しませんでした』
「そっか、じゃあただの知り合いかな」
『ただ、一つ気になることが』
「？」
『課長がこの顔を何処かで見た事があるって言うんですよ』
「何処で見たんすか？」
『今、思い出してもらってます』

【7－6】

後ろで呻き声がしたので、私は電話を切った。振り返ると梨花が目を覚ましたのが見えた。クラックソフトを停止させ、ＰＣの電源を急いでおとして私は寝かせておいたソファに近づく。
瞬きを繰り返して梨花の目が私を捉えた。

「あれ……？　あたし？」
「気がついた？　気分はどうだ？」
「大丈夫そう」

半身を起こして梨花は私をぼんやりと見た。私は梨花の横に腰掛ける。
頭が回っていないのか眠たげであった。髪が頬に張り付いている。
えずいたので、私はハンカチを差し出した。

「魔法中毒の発作だよ」
「魔法中毒……？」
「魔力が身体を蝕んでるんだ。……知らないのか？」
「知らないわけじゃないけど、あたし、気絶したの？」
「発作を起こしたんだ。発作を起こしたのは始めてか？」
「うん、多分」
「薬は？」
「毎日飲むようにってのは貰ってたけど。佐樹ちゃんがそれ飲んでおけば大丈夫だって」

佐樹……５ナンバーの佐樹か。

自分の名前と何処か被る感じがして嫌だな。こいつも梨花だし、梨花と佐樹。璃瑠と美樹。
なんかちょっと似てる。

「病状が悪化してきてる。発作用の携行薬を持ち歩いた方が良い…って、ちょっと待て。お前はどこで薬を手に入れてるんだ。政府筋でないと魔法の治療は出来ない筈だ」
「秘密にしろって」

何かツテがあるのだろうか。魔法の存在が秘匿であるため、一部の国立病院と政府病院でないと魔法の診断すら出来ない。

「お前、魔法についての知識は？　有毒だって分かってるのか？」
「なんとなくは」
「悪化してきてる。今すぐに政府病院に入院した方が良い。経口薬を飲んでいるのに発作が出るなら経口薬だけじゃ抑えきれない」
「そんなことしたら、あたし捕まっちゃう」

梨花の心配に私は少し怒りを露わにした。

「そんなこと言ってる場合じゃない。お前死ぬぞ」

少なくとも魔法を使い続けることは良くない結果を招く筈だった。魔法による戦闘は負担が大きい。確実に寿命を削る行為だった。前回戦闘した時の梨花から察するにかなりの場数を踏んでいると思われた。

私の死ぬぞ、という警告に梨花は少し項垂れて呟いた。

「あたしなんか、死んでもいいんだよ」

【7ー7】

「あたしなんか、死んでもいいんだよ」

梨花は暗い声を出した。自虐でも戯けでも落胆でもなく、ただ真実として捉えているかの様に。
何の色も迷いもない。

「何を……言ってるんだよ」

何を悟ったようなことを言っている。

「死んでも良いなんて気楽に言うなよ」
「美樹ちゃんは刑事なんだよね？」
「み、美樹ちゃん……」
「公安部って普通はなれないよね。頭も運動神経も良くないとなれないんでしょ。すごい才能があるんでしょ？　この前の時だって魔法を使うのも上手だったよね」

いや、私は刑事じゃないしなぁ。刑事だけど。嘱託でもいいのか。
あれ、でも嘱託ってヘッドハンティングってやつなわけだ。試験受けてなるより凄いよね、君には才能があるー。って感じで。
でも公安部って基本、引き抜きじゃん。あれ？　引き抜きなのか？
あー、でも私は外部から引き抜かれたわけだからもっと凄いのか？

「私はすっげぇっ！」
「じゃあ、あたしと違うよね」

「？」

「あたしは、頭も悪いし運動も出来ないし才能もなくって自分の事がずっと嫌いだった。でも、あたし魔法の凄い才能があるって言われて、今までの嫌いだった自分から新しい自分になれたの。魔法があればあたしは強くなれる。誰かに頼られる自分になれる」

「それは間違いだ」

「魔法がないあたしなんて、嫌いだった自分に戻っちゃう。そんなの嫌だもん。そんな自分に戻るなら死んだっていい」

そんな理由で魔法使いになったのか。

そんな理由で命を魔法と交換することが出来るのか。

私達魔法使いはおとぎ話のように綺麗な存在じゃない。魔力は有毒で身体を蝕む。そのリスクを背負ってまで叶えたい願望なのか。

「そんな理由でテロを起こすのか！？」

「魔法じゃなきゃ、あたしは認めてもらえない……認めてもらえないんだよ」

【7－8】

「魔法じゃなきゃ、あたしは認めてもらえない……認めてもらえないんだよ」

それはきっと誤解だ。誰だって必ず必要とされ認められ想ってもらえる人がいる筈なのだ。
その事実は魔法なんてものではない。
けれどそんな綺麗事を信じるにはきっと彼女は若すぎる。

「なんでそんなに思い詰めてるんだ……」

階段を降りる音がして私は口をつぐんだ。何処か慌ただしい音が一人分。
リビングに男性が入ってきた。さっき来た立川の客だと気付く。
近くで見るとやはり背が高い。１８０越えてそうだ。
頬の跡はやはり何か怪我の跡のように見えた。

「あら、お二人さんは」
「親戚です」

便利だな、親戚の子供っていう言い訳は。便利過ぎて信用出来ないくらいだ。

「立川さんにこんなお嬢さんがいたとはねぇ。上井博彦と言います、お見知り置きを」
「美樹です、こっちは梨花」

「立川さんにこっちでしばらく待つように言われましてねぇ。ちょいとお邪魔しますよ」
「立川さんはまだ部屋ですか？」
「えぇ。十分かそこら時間が欲しいって話でして」

時計をチラッと見ると四時になる五分前だった。
にしても、なんだ、この人。落語家か何かなのか、この喋り方は。
いや、確かに私だって敬語間違ってたり使えてなかったり男みたいな喋り方とかも出たりするよ。
でも、これはレベル高いよ。

「あの、上井さんは立川さんとはどういった知り合いで」
「いやなに、大学時代のサークル仲間でして。熱帯魚愛好会なんてのにね」
「熱帯魚愛好会？　？変わってますね」

部屋の至る所が魚模様で統一されているのはそういうわけだったのか。

「立川さんの部屋は凄いですよ。あれだけ見事なものは専門店でも見れませんねぇ」
「そうなんですか」

何か横文字が文頭から文末まで入る話を上井は続けた。装置の名前なのか魚の品種なのかさえイマイチ分からなかった。
なんでも、プレコなる種類が好きらしい。水槽のコケをとってくれるのだとか。
後で立川に自室の水槽を見せてもらおうかな。

梨花は私達の会話には加わらず携帯電話を触っていた。さっき入れ

たオセロをやっている気がする。

上井の話が一段落つくと上井の携帯電話が鳴った。上井が携帯電話を開いて見ると腰を浮かせた。

「急用が出来まして、ここらで失礼します」

「何か立川さんを待っていたんじゃ？」

「いえ、急ぎでもないもんで」

立ち上がって帰ろうとしたので、私は出口まで送ることにした。上井と並んで二人で玄関に向かう。リビングから玄関まではなかなかに距離があった。玄関で腰掛け上井はのんびりと靴紐を結ぶ。何故か指先の動きが鈍く上手く結べていなかった。何か別の事に気を取られている感じだ。

その時、二階の方から物音がした。

何か重い物を勢いよく落とした様な音が続いて、ガラスが割れる様な音も聞こえた。

【7－9】

上井と共に二階までの階段を駆け上がった。
物音はまだ続き、質量のあるものをぶつけるような鈍い音がしている。立川の自室の前まで来るとガラスを割るような音を最後に音が止んだ。私はドアをけたたましくノックする。

「立川さん！　どうかしましたか！　立川さん！」

応答がない。意を決してドアを勢いよく開いた。
立川の自室は上井の言うとおり熱帯魚の水槽があった。幅1メートルは越えている水槽が二つ壁際に置かれている。その一つが割れていた。水が床を汚し鮮やかな体色をした熱帯魚を床で跳ねていた。またデスクのバインダー類が倒れており、物が散乱していて部屋は乱雑そのものであった。
部屋の真ん中辺りに立川が倒れていた。近寄ると呼吸をしておらず、脈がなかった。首には細い赤い跡が残っている。顔面は青紫に変色している。

「上井さん！　救急車と警察を！　早く！」

首の赤い跡。絞殺か。
部屋の窓ガラスが割れていた。割れたといっても、穴が空いたようになっている。
犯人はここから逃げた？　いや、にしては割れているのは直径1メートルもない。
部屋を見渡してみる。天井に何かシミが見えた。真っ白な天井でな

ければ見えないようなシミだった。

犯人は何処から逃げたんだ。私がドアの前まで来た時には物音がしていた。

窓を見てもガラスは割れているものの人が通れるような穴ではないし、鍵が閉まっていた。

窓から下を覗いてみる。庭には誰も居ない。

「美樹ちゃん、何かあったの！？」

階段を慌てて上がって来た梨花が部屋の惨状と立川を見て息を呑んだ。

「そんな……」

【7－10】

「被害者は立川裕子、衆議院議員。第一発見者は私と上井博彦。発見時刻は16：10頃。死亡推定時刻は15：40～16：10の間。紐状の物による絞殺。それと遺体には複数箇所痣」

私の連絡に璃瑠は頷いた。所轄の警察が捜査している間に璃瑠がこっちまで来て合流したのだった。

璃瑠の様子はいつもと変わらなかった。逆にそれが怖い。

「分かりました。美樹さん達が部屋に入った時には誰も居なかったんですね？」

「当たり前だ」

「部屋の状況を見るに犯人と激しく争ったようですが、その物音が聞こえて美樹さん達は立川裕子の部屋まで行ったんですよね」

「部屋のドアの前で物音は途切れた」

「美樹さん達が入ってくる直前まで音がして、入ったら居なかったんですよね」

「そうだよ。多分4時10分位だった」

ていうか、問題はそれではなく。

「分かりました。……で、彼女について説明してもらいましょうか」

不機嫌そうに璃瑠は言った。目線も凶器になるのではなかろうか。

梨花は今さっき璃瑠が六課に引き渡した。後ろから近付いて殴って

気絶させるとは悪魔のような所業であった。
いや、本来なら私がすぐに梨花を取り押さえるべきだったのかもしれないが。しかし、私の任務はあくまで立川とこよりの繋がりを見つけることであったわけだし、どうすれば良かったのだろうか。

「どういうことですか。独立派のテロリストが居るなんて」
「私が知りたいよ」
「六課に報告も入れてないなんて」
「ちょっと色々あったんだよ」

今はまだ璃瑠にしか話してないが、どうなることやら。
どうすりゃいいのよ。

「何にせよ、彼女は確保します」
「うん……てかもうしたしね」
「それに彼女も5ナンバーの可能性がありますし」
「そうなの？」
「前回の戦闘で妙な魔法を使ってきましたから」
「妙な？」
「消えたんです。気付いたら後ろにいて」

消えるとなると光学迷彩だろうか。でも光学迷彩は5ナンバーじゃないし。

「瞬間移動ですよ」

【7－11】

【7－11】

「瞬間移動？」
「テレポーテーションとでも言いましょうか。とにかく消えた瞬間に後ろにいたんです」
「瞬間移動ねぇ。ずいぶんＳＦチックな話だな。え、ていうか瞬間移動からの攻撃を防いだの？」
「はい。気配がしたので」

私的にはそっちもなかなか末恐ろしいのだが。
瞬間移動とは一般的に空間を飛び越えて瞬間的に自分や物をを転送する事である。
ＳＦ作品毎なんかには良く出てくる。理論としては作品毎に幾つの違いが見られるため、一概には言えないものの転送先と前の空間を入れ替える、空間を飛び越えるのどちらかの種類に分類される事が多い。
マジック（手品としての）でもよく使われる概念である。

「瞬間移動の存在自体は以前から指摘されていました。実証はされていませんが、存在する可能性は極めて高いと」

いいなぁ。最も便利な魔法だと思う。通勤ラッシュに巻き込まれないし、遅刻もない。遊びにも簡単にいけるし。

「瞬間移動かぁ。私も欲しいよ。なんだよ、スライドシフトって。ズラすだけの魔法って。もっと派手なのが欲しいよ」
「まだ彼女が瞬間移動を持っていると決まったわけではないですけ

ど。あと私としては5ナンバー自体が手の届かない領域なのでどちらにせよ羨ましいんですが」

5ナンバーは才能に寄るところが多分にあるしそう思うのも頷けるが、5ナンバー＝強いとか便利、というわけでもない。あくまで解明できない魔法を指すものなので、豆腐を手から無限に出す魔法なんかがあっても説明がつかないので5ナンバーという事になる。豆腐を手からだせたら便利かと思う人もいるやもしれないが。

5ナンバーである私とそうでない璃瑠が戦っても私が勝てる可能性も低いだろうし5ナンバーであることは一種のステータスではあるが戦闘での絶対的要因でもない。
他の魔法と違って対策しずらいという面はあるが。

【7－12】

【7－12】

警察に話をつけてきます、そう言って璃瑠は去ってしまった。事情聴取もひとまず終わってしまったし、私はどうしようか、と璃瑠に聞くと璃瑠は、美樹さんは馬鹿ですか。と私に言った。

「六課の担当する事件でしょうが、これは」

璃瑠の言葉を反芻しながら、私は現場である立川裕子の部屋に足を踏み入れた。

思うにね、公安六課の評判が悪いのは魔法が絡んでると分かるや否や色々と無理やり追い出しにかかるところだと私は推測するわけだ。さっきまで動いていた所轄を追い出しにかかるんだもの。そりゃ反感買うよ。あと、私と璃瑠だけじゃ、現場検証すら出来ないのだが。一通りは終わっているらしいので、まあいいか。

部屋は生臭かった。水槽が割れて中が溢れているせいだ。

「美樹さん」

「璃瑠、どうした？」

璃瑠がこの部屋まで上がってきていた。

「いえ、高田梨花の収容を完了したとの報告がありました。準備が整いしだい立川裕子殺害容疑で事情聴取になるかと」

「そうか……ぁぇ？　？立川裕子殺害容疑？」

「？」

「なんであいつが？」
「はい？」
「いやだって、あれ？　？もうそんなに話が進んでたっけ？」
私まだ何の推理もしてないよ。
「いや、犯人と被害者が争っていた時間に家に居たのは第一発見者の上井博彦と美樹さんと高田梨花だけですよね？」
「うん。霊体とかカウントしないなら」
「見えるんですか」
「第六感どころか第八感くらいまであるよ」
「余ってるなら分けてくださいよ。それで争っている物音がした時にアリバイがないのは？」
「私と上井さんは一緒だったから、……なるほど、そういうことか。梨花アリバイねーよ！」
「馬鹿かな、この人」
「璃瑠、思考が漏れてる、漏れてる」
「第八感じゃないですか？　？それで、高田梨花の5ナンバーは瞬間移動の可能性があります」
私と上井が玄関に居た時に梨花はリビングに居たはずである。その時に犯人と立川が争う物音がして、私と上井は部屋に向かった。部屋の手前で物音が止んで中に入ると立川が絞殺されていた。
もし仮に梨花が瞬間移動を持っているなら私と上井が玄関にいる間に立川の部屋に瞬間移動して殺害し私達が部屋に入る前にリビングに瞬間移動で戻ったことになる。
梨花にアリバイはない。
「なるほど」
「私達はこの事件が瞬間移動であるという立証をするための証拠を

見つけましょう」
「あるのかねーそんなもの」

【7－13】

【7－13】

瞬間移動。
もしこの魔法が本当に存在するのなら非常に厄介である。
便利だなぁなんて思ってもみたが、犯罪に転用されたら堪ったものではない。どこかから突然現れて殺害して現場から消えてしまう。
完全犯罪も不可能ではないな。

部屋の中は乱雑なままであるので足元に気を付けながら私と璃瑠は証拠になりそうなものを探すことにした。無いと思うけどなぁ。

横幅1メートル以上ある巨大な水槽は二つ並んでおり、片方はラックごと倒れていた。それが床を汚していた。
デスクの上に置いてあっただろうバインダーの類いは床に散乱し、液晶テレビが落ちてヒビが入っていた。
インテリアか何かだろうか、よく分からないオブジェが並んでいたようだがそれも散乱している。よく分からん。

「あれ？」
「何ですか？」
「いや、天井にシミがあった気がしたんだけどなくなってる。気のせいだったのかな」
「幽霊か何かじゃないですか」
「璃瑠が死んで幽霊になったら天井に張り付きたいか？」
「いえ」
「じゃあ幽霊じゃないよ、きっと」
「私が張り付きたいって答えたらどうする気だったんですか……」

「ポルターガイストでも起こしてくれ」

確かにあったような気がしたんだけどなぁ。あの少し天井にくぼみがある辺りに。

「水槽大変な事になってるな。床が水まみれ？　だぜ」

「水まみれってなんですか。あ、窓ガラスも割れてますね」

部屋の窓ガラスに直径数十センチの穴が空いていた。最初、ここから逃げたかと思ったよ。

窓ガラスの下に床にガラスの破片が少し落ちていた。

「鍵は締まっているようですね。やはり犯人と揉み合った時に割れたのでしょうか」

「なぁ、璃瑠。なんか変じゃないか？」

「はい？」

「立川と犯人はそんなに争ったのか？」

【7－14】

【7－14】

「立川裕子には痣が幾つかありました。犯人とかなり激しく争ったのは間違いないかと思いますが」
「うーん、なんか引っかかる」
「凹凸のない身体なのにですか」
「お前が言うと自虐にもなるよ」

部屋の惨状を前にして私は少し考えを整理することにする。
璃瑠は梨花が瞬間移動を可能としており、この部屋に瞬間移動し立川と争い絞殺し、瞬間移動でこの部屋を離れた。
立川には幾つもの痣があり、部屋も荒れていたことから犯人と争ったのは間違いない。

窓ガラスが割れるくらいに。水槽が倒れるくらいに。

「璃瑠は梨花と交戦したんだよね？　どうだった？」
「？」
「強かった？」
「はい」

璃瑠と渡り合えるくらいの実力を持つ魔法使い。魔法の実力だけでなく戦闘能力も優れている。
そんな魔法使いが立川を絞殺しようとしたとするならば。
やはり妙だ。

「立川を殺害したのは梨花じゃないんじゃないか？」

「じゃあ誰ですか？」
「が、外部犯？」
「どこから入ってどこから逃げたんですか」
「窓から？」
「鍵が締まってるのに？」
「いやガラスに穴が空いてるだろ？　そっから手を入れればターン式錠なんて」

璃瑠がわたしの顔を見て、タブレットＰＣを開いて何かを見て、そしてもう一度私の顔を見た。
え？　何と見比べたの？

「美樹さん、なんか今日は妙ですね？　ガラスの破片を見てくださいよ。量が絶対的に足りません。つまり部屋の内側でなく、窓の外側に飛び散ったんです」
「ふむ」
「なら中からの衝撃で壊れたわけですが、窓から侵入しようとしているのにどうやって部屋の中から壊すんです？」
「玄関から入ってきて窓から逃げたのかも」
「なら窓ガラス割る必要なんてないじゃないですか」
「第一窓ガラスが割れてるのがおかしい。犯人と争ってるときに割れるか、普通」
「そこの床に落ちてる奇妙なオブジェを見てください。それを護身の為に投げたとは考えられませんか？」
「うーん」
「思いっきり投げれば窓ガラスくらい割れますよ」
「そりゃ肩が、強いお前ならね」

私は見たぞ、この前オフィスの端から端のゴミ箱に空き缶投げてシュートしてたの。

「……何が不満なんですか？」
「璃瑠が全力の私相手に素手で挑んだら勝てる？　私は銃器禁止で、魔法は使用可能で」
「瞬殺かと思います」
「頼もしいが恐ろしいな。梨花は璃瑠を苦戦させるくらいの実力があるんだろ？　で、立川は多分、私より遥かに弱い筈だろ？」
「でしょうね」
「なら、こんなに激しく争うことになるのか？　もっとスマートに片付けるんじゃないか？」
「何かしらの要因があったのでは」
「なんか収まりが悪いんだよ」

「本当に梨花が犯人なのか？」

【7章・女帝は死した完】

【8章・正義は遺した】

【8章・正義は遺した】

SFにカテゴライズされる作品には瞬間移動はさも当たり前のように登場している事が多い。離れた場所へ一瞬の内に移動するその能力は多くの人間の憧れとして存在していた。
おそらく解明されれば社会構造は新たな進化の日を迎えるだろう。

「ただ厄介極まりないな」

突然現れて突然消える。使ってみたいが使われたくないものである。
面談として顔を合わせてみると、高田梨花は少しばかりやつれているように見えた。
昨日は捜査を切り上げて、今日は朝から梨花の面会を取り付けたのだった。
政府病院のベッドの上にベルトで固定されているというのは精神的にもキツそうだ。
はめ殺しの窓にはきっちりとカーテンが閉められベッドの周囲は柵で囲まれており病室なのか牢屋なのか分からなくなりそうだった。

柵越しに私は梨花に声をかける。

「よう」
「こんにちは」
「面会時間は20分だから手短にいくぜ」

守衛の目があるのは気になるが別に問題を起こすわけでもない。

「立川裕子殺害については否認しているな？」
「やってないもの」
「これを否認してもテロ絡みでどうせ求刑は間逃れないぞ」
「やってないことまで責められたらたまんないから」
「これは正式な取り調べじゃないから嫌なら何にも答えなくていい。ただ真相究明に協力してくれる気があるなら答えて欲しい」
「美樹ちゃんのいう真相ってのは、あたしが犯人なの？」
「いや、6対4くらいでお前が犯人じゃないと思ってるよ」
「分のいい賭けだね、じゃあ」
「お前、武器なしでどれくらい動ける？　普通の成人女性相手に素手で挑んだら何なく勝てるか？」
「魔法は？」
「ありだとしたら」
「何なく」
「なしだとしたら？」
「厳しい」

立川裕子の死因は紐状の物による絞殺だ。武器か何かを使ったとは思えない。
もし仮に璃瑠の言うとおり梨花が犯人だとしたら素手の状態では大きく争う可能性はあるということになる。
だが、梨花は魔法使いだ。何かしらの戦闘能力はある。
だから梨花が犯人なら何故、魔法を使わなかったか、が問題となる。

「立川裕子との関係は？」
「ノーコメント」
「あの家にいた理由は？」
「ノーコメント」

そこはこっちで調べるか。

「お前の5ナンバーが瞬間移動のようなものだという指摘は否定する？」

「否定しないかな」

【8－1】

「おはようございます、美樹さん。どこいってたんですか」

立川裕子の自宅に来てみると璃瑠が既にいた。板チョコを咥えたまま立川のＰＣを抱えている。

「梨花に面会してきた。そのＰＣどうするんだ？」

「朝からですか。六課で押収するので運ぶの手伝ってるんです」

「朝から私に会えるなんて清々しい一日になれそうじゃんか。ＰＣだけ？」

「私だったら寝直しますね、気分悪くて。証拠になりそうなのがＰＣだけなんです」

ＰＣを段ボールに詰め込んで他の課員に手渡すと璃瑠が私に向き直る。板チョコが咥えた端から少し溶けていた。

「どうでした？」

「瞬間移動に関しては否定しなかった。あと、素手だと成人女性に勝てるか分らないって」

「そうですか。ああ、それと課長から伝言が」

「なんじゃらほい」

「あの顔ニュースで見たんだよ、確か。だそうです」

「どの顔だよ」

課長とそんな話をしたっけかなぁ。

ふと思い出した。八坂に、上井の写真を送った際に課長が何処かで顔を見たと言っていたが、その話だろうか。
ニュースで見たとなると、なんだろうか。

上井博彦は立川と大学のサークル仲間と言っていた。
それ以外の個人情報は持ち合わせていない。事件当日に立川を訪ねた理由も聞いていなかった。何にせよ事件に巻き込まれたのは彼としては災難に違いない。

梨花が立川の家にいた理由はなんだ。まず、殺害に至った動機はなんだ。
立川が革新派のこよりを援助しているから、といった理由はいまいち釈然としない。殺害にまで至るにしては理由としては弱過ぎる。
第一、梨花は何故あのタイミングで殺害に至ったか、だ。もし仮に梨花が犯人だとして立川殺害を目的として近付いたとして、あのタイミングを選ぶ理由がない。
確かに私も上井も玄関にいて、立川は部屋に一人だったのは好機かもしれない。

だが、梨花は立川の親戚という名目で（それが真実なのか嘘なのかは別として）立川の家に居る事が可能であった、現にいた。ならば、あの機会は本当に梨花にとって選択に値する機会だろうか。

あの機会でなければならない理由がある筈だ。
私が来たから急かされた？
可能性としてはあり得る。
だが、一つの疑問点が浮上する。
瞬間移動を持っている梨花がなぜ、あの家に留まり捕まったのだ。
殺害後に逃げればいい。もともとテロリストとしての余罪が幾つもある。

瞬間移動を知られていないという自信があったからだとしても、
留まり続ける意味はあるのだろうか。

【8－2】

立川の部屋に入る。
花瓶が床に落ちて割れてこぼした水は昨日より減っていた。日当たりが良いので蒸発したのだろうか。蛍光灯をつけなくとも部屋は明るかった。

「日当たりいいな。床の水が、結構乾いてる」
「美樹さんも蒸発すればいいのに」
「雨となってお前に降り注いでやる」

キャスターのついた台は斜めに傾きそこからテレビが倒れたのだろう。部屋にはクローゼットの類いは無かった。それ用の部屋があるらしい。
テレビに水槽にデスクによく分からないオブジェ類。それと六課が持っていったＰＣ。改めて部屋を見てみるとシンプルだと思った、部屋が荒れているからそんな感想はなかなか出なかった。

「にしても、このオブジェはなんなんだ」

どれもが金属製の不可思議な形をしている。
璃瑠が床に落ちたオブジェの数を数えながら言う。

「井草って人の作品らしいですよ。気鋭の若手芸術家だとか」
「きえー。随分と豊富なコレクションだな」
「美樹さんは、芸術に興味ないんですか？」
「鏡を見たら芸術品が見れるからな」

「キュビズム的ですよ」
「褒めてないだろ」
「庭にも落ちていたそうです、そのオブジェ」

となると、璃瑠の言うとおりオブジェを護身の為に投げて窓ガラスを割ったという事か。
コントロールが悪かったか梨花が瞬間移動で避けたのか。

「ただオブジェに指紋は無かったので、もしかしたら高田梨花が投げたのかもしれませんが」
「指紋が無かった？」

立川は手袋の類いをしてなかった。梨花が犯行に及ぶにあたって手袋をしていたのなら指紋が出ないのも分かるのだが何故、梨花が投げるのだ。どれだけ苦戦したのだよ。

床のフローリングについてる傷はオブジェを投げた際についたものだろうか。随分と投げたな。
床の傷を探してみると、ふと天井が気になった。天井にへこみ傷がある。確かあの辺りにシミがあった筈なのだがやはり見間違いだったか。

「妙なオブジェに熱帯魚と、多趣味だな」
「上井博彦とは熱帯魚仲間なんでしたっけ」

【8－3】

「上井博彦とは熱帯魚仲間なんでしたっけ」
「そうそう。大学が一緒らしい」

そういえば、上井をニュースで見たと課長が言っていた。
試しに上井博彦でネット検索をかけてみることにした。
似た名前の役者が検索で出てきたが関係は無いようだった。他のページを眺めていくと一つのニュースサイトに引っかかった。

東日本ビル火災事故訴訟、遺族側の勝訴。
そんな見出しであった。集団訴訟遺族側の代表者の名前が連なっている中に上井博彦の名前があった。課長が見たというニュースはこれだろうか。

「璃瑠、東日本ビル火災事故って分かるか？」
「えーと、いつ起きた事故ですか？」
「書いてあるのは、五年、いや六年前かな」
「ちょっと分からないです」

東日本ビル火災事故で検索をかけてみる。
東京都の東日本ビルで起きた大規模な火災事故。死者、５６名。負傷者１２０名。
かなり大きな事故だったようだ。
六年前というと私は小学生か。

「その火災事故がどうしました？」

「上井博彦はこの事故で身内を亡くしたらしい」

オーナーらは業務上過失致死罪で地裁から有罪判決が出ている。民事で遺族側に計１０億円以上の支払い。
消防法違反が被害拡大を招いたとしてかなりのバッシングを受けたようだ。

「帰ったら課長に聞いてみるか」

上井を見たのは多分これでだろう。
東日本ビル火災事故について書いたサイトを流し見ていく。上井博彦の名前はこれ以上見つからなかった。

さらに流し見ていくととある記事が目を引いた。
ルポルタージュを載せたサイトだった。こういうサイトにかぎって何故読みづらい構成なのだろうか。
東日本ビル火災事故裁判で裁かれなかった影のオーナーがいるという趣旨の記事だった。立川総一郎なる人物が影のオーナーだというのだ。
まあこういう記事はより刺激的な事を書いた方が感心を引くしなぁ。

「裁かれない影のオーナー……立川総一郎、ねぇ」
「美樹さん。ちょっと気になったんですけど」
「なに？」

璃瑠に制服の袖を引っ張られて部屋から出た。隣の部屋に連れ込まれる。ベッドルームらしい。

「なにさ？」
「そこの電気スタンドと小物いれが倒れてるのは何でですかね」

【8－4】

ベッドルームの壁際に置いてある電気スタンドと小物いれが倒れていた。小物いれからは中の物が散乱している。

「本当だ。何でだろう」

隣の部屋が現場である立川の部屋だが。横で激しく暴れたらこっちの部屋の物まで倒れるだろうか。

考え辛い。他の原因がありそうだが。

「美樹さん、これ何ですかね？」

璃瑠が小物いれから散乱している物の一つを指差した。携帯用の注射器だった。

「あぁ、立川は糖尿病だったらしい。それの薬だよ」

「糖尿病？」

知らないのか。

簡単に言うと血液中のブトウ糖の濃度が異常に高い病気である。名の通り尿が甘くなるらしい。

「その治療の時に自分で注射するんだよ。だから注射器を持ち歩いてる」

「そういえば、立川裕子の身につけていた遺品リストに未使用の携帯用のインシュリン注射セットというのがありましたが、それです

か」
「それそれ」

自分で自分に注射を射つというのはなかなか慣れるものではない。
そんなに経験もないが。他人に射った方が多い気がする。
魔法中毒の発作も私は出た事がないし。
梨花は大丈夫だろうか。あの時、緊急セット持ち歩いといて良かった。
発作を起こした時に自分で自分に注射を射つのは難しい気がする。
璃瑠に任せても大丈夫だろうか。
璃瑠も持ち歩いている筈だが、胸ポケットにいつも緊急セットを入れているのを、璃瑠に教えといた方が良いのかもしれない。
そういえば梨花に使ってしまったから新しい注射器に変えとかないと。

「……あれ？」

【8ー5】

何かが引っかかった。何だろう。大切な事を忘れている気がする。

「何か出かかってるのに出ない」

「そういう時は初心に帰れ、ですよ」

今朝送ってもらった捜査資料を開いてみる。

私が立川を発見したのは4時を10分位過ぎたころ。自室にうつ伏せに倒れており紐状の物による絞殺。身体には痣が幾つかあった。発見時には顔面が青紫に変色しており、心拍停止していた。部屋に入る前まで大きな物音がし、犯人と争っていた可能性が高い。だから瞬間移動を持っている梨花が犯人の可能性が高い。

「……違う、あれは死亡直後の状態じゃない」

「え？」

「窒息死の死亡直後はまだ心臓はかすかに動いてる」

「見落としたのでは」

「血色もあそこまで悪くはならない」

そうだよ、基本じゃないか。直前まで物音がしてたから勘違いしていたが、窒息死直後の状態にしては血色が悪過ぎる。

「なら、部屋の物音は何なんですか。立川裕子が生き返ったとでも？」

「絞殺した後に部屋を荒らすのなら、何かを探していた……いや、それにしては荒れ方がおかしい」

「となると、第三者と梨花が争った、でしょうか」
「第三者？」
立川の部屋に第三者がいた。しかも梨花と争うような人物が。
「いや、そうじゃない。私と梨花は直前までリビングで上井と話していた。私が梨花から目を離したのは数分だ」
その数分で殺害したにしては状態が古過ぎる。
梨花が部屋に瞬間移動した時には既に立川は殺害されており、その犯人と鉢合わせて争うことになった。
だが、その第三者は誰だ。何処から侵入した。
それに何故、梨花は助けを呼ばなかったのだ。呼べなかったのか。
瞬間移動がバレるから。
もし犯人が……。
「梨花に会ってくる」

【8－6】

梨花に私の推理を語って聞かせた。
そして、もし当たっているなら正直に答えてほしい、と。

「どうだ？」
「あの美樹ちゃん？　あたし、あの部屋に瞬間移動したりしてないよ？」
「正直に答えてくれ」
「だから、あたしはずっとリビングでオセロやってたから」

携帯電話にオセロゲームをインストールしてあげたせいで、私はオセロ中毒者を生み出してしまったのかもしれない。
いや、もともと病的だよ。
病室のドアが空いて看護士が入ってきた。

「伏見さん、困ります。面会時間外に押しかけないでください」
「すいません。緊急だったんで」
「出て行ってください。投薬の時間なんです」

銀のトレイに注射器が載っていた。それを持った看護士の横に護衛の為か男が二人ついていた。

護衛の為についでに私が居てもいいじゃん。

「投薬の時間……？」

何がさっきから引っかかっているんだ。
立川裕子が犯人と争っている物音で私達は部屋に向かった。けれど立川裕子はもっと前に殺害されており、争っている物音は第三者と梨花の物だと思った。
けれど梨花は否定した。梨花が居ないなら第三者は何故あれ程の物音を立てたのだ。
逆に考え直せ。物音を立てる必要があったのだ。
久米川殺害事件の時は犯人は物音を立てることによって擬似的な密室を作り出した。

なら今回の事件もあれだけの物音を何かの目的をもって立てたのではないだろうか。
それはなんだ。立川をあの時間に発見させなければならない理由。

それに犯人の逃走経路も分からない。瞬間移動だと思っていたから逃走経路は必要無かった。
だが、梨花が犯人でないとするなら犯人は何処から逃げた。
犯人も瞬間移動を所有して居たとしたら?
なら物音を立てる理由は何だ。梨花が嘘をついていて梨花と接触したのか?

「看護士さん。あたし逃げないから拘束具外してもらえませんか」
「それは出来ません」
「だって痣になっちゃう」

【8ー7】

「だって痣になっちゃう」

痣。

「そのうち消えますよ」
「外さなきゃ消えないじゃないですか」

消える。
現場から消えた犯人。

「そのうち消える……」

視界が暗転した。
脳の端から端へ電気信号が疾走し、私の記憶を巻き上げて行く。記憶が崩れ落ち粒に変わり、それは言葉にぶつかり斑を広げる。言葉が確かな形を持ち磁石のように粒に変わった記憶を引きつけて行く。記憶領域の映像がぶれて階層に分かれてまた積み重なって行く。
それを掴もうとすればするほど、それはヒラリと躱し私の指先で踊ってみせる。言葉が色を持ち色が音になり音が香り立ち匂いが触覚を刺激し触覚が記憶を呼び覚まし記憶は雄弁に語り始める。

私を諭しあざ笑い、軽視する。私の指先で舞い踊りながら。
いつからだろう。記憶が語りかけるようになったのは。
いつからだろう。記憶が五感になったのは。
いつからだろう。記憶が記憶としての形を変えたのは。

『課長がこの顔を何処かで見た事があるって言うんですよ』
『立川裕子には痣が幾つかありました。犯人とかなり激しく争ったのは間違いないかと思いますが』
『日当たりいいな。床の水が、結構乾いてる』
『えぇ、そうなんです。毎日４時にと、決まっているんですけれど忙しいと忘れかねないので首からこんな風にして提げているんです』
『部屋のドアの前で物音は途切れた』
『立川さんにこんなお嬢さんがいたとはねぇ。上井博彦（かみいひろひこ）と言います、お見知り置きを』
『立川さんにこっちでしばらく待つように言われましてねぇ。ちょいとお邪魔しますよ』
『そうだよ。多分４時１０分位だった』
『瞬間移動ですよ』
『そのうち消えますよ』
『いや、犯人と被害者が争っていた時間に家に居たのは第一発見者の上井博彦と美樹さんと高田梨花だけですよね？』
『ただオブジェに指紋は無かったので、もしかしたら高田梨花が投げたのかもしれませんが』
『瞬間移動ねぇ。ずいぶんＳＦチックな話だな。え、ていうか瞬間移動からの攻撃を防いだの？』
『……違う、あれは死亡直後の状態じゃない』
『裁かれない影のオーナー……立川総一郎、ねぇ』
『そこの電気スタンドと小物いれが倒れてるのは何でですかね』
『分かりました。美樹さん達が部屋に入った時には誰も居なかったんですね？』
『いや、天井にシミがあった気がしたんだけどなくなってる。気のせいだったのかな』
『水槽大変な事になってるな。床が水まみれ？　だぜ』
『部屋の状況を見るに犯人と激しく争ったようですが、その物音が

聞こえて美樹さん達は立川裕子の部屋まで行ったんですよね』
『美樹さんも蒸発すればいいのに』
『投薬の時間……？』
『璃瑠、東日本ビル火災事故って分かるか？』
『その治療の時に自分で注射するんだよ。だから注射器を持ち歩いてる』
『美樹さん達が入ってくる直前まで音がして、入ったら居なかったんですよね』
『な、なんで分かったの！？　エスパー！？』『上井博彦はこの事故で身内を亡くしたらしい』
『そういえば、立川裕子の身につけていた遺品リストに未使用の携帯用のインシュリン注射セットというのがありましたが、それですか』
『余ってるなら分けてくださいよ。それで争っている物音がした時にアリバイがないのは？』
『出て行ってください。投薬の時間なんです』
『あたし嘘とか、苦手で』
『ポルターガイストでも起こしてくれ』

記憶が私の指先で踊る。それを放り投げて掴む。
砕けた記憶が粒子に変わり私に舞い戻る。
それは形を変えて。
それは真実となって。

捕まえたー。

【8－8】

六課のオフィスで私は調べ終わったデータの山を前に机に突っ伏しながら璃瑠に声をかける。

「なぁ、璃瑠」
「何ですか」

「私達は正しいのか？」
「えぇ、少なくとも法律という尺度に当てはめたら、という話ですが」
「当てはめたくねぇなぁ」
「犯人に同情でもしたんですか」

肯定。
璃瑠は小鍋にチョコレートを溶かして、溶かしたチョコレートにチョコレート菓子をつけて食べていた。チョコチョコフォンデュとでも言うのだろうか。気持ち悪い。

「私はさ、こよりを止める為にこの世界に足を踏み入れた。罪を犯した者を私の力で裁けるなら、それも良いと思ってた。それが本来の目的ではないけどさ」
「揺らぎました？」
「うん」

璃瑠の横に移動して腰掛ける。溶かしたチョコレートをかけるほど

の気も無かったのでチョコレート菓子だけをつまむ。

「みんな、何かしらの理由と意味を持ってるんだよね。それを無視して結果だけで判断を下して良いのかな？　そりゃ犯罪はいけない事だけどさ」

「残念ながら私達は現代の法整備を享受し受領しています。それが嫌ならば法か国か人を変えるしかないんですよ」

「そう簡単には変わらないよ」

「それは何故でしょうか？」

「何故って」

「大多数がそれを望まないか、考えていないからです」

少なくとも璃瑠の味覚は少数派だろう。

「少なくとも現代の法律に国民の多くは納得しているわけです」

「そこに民意はあるのか？」

「難しい質問ですね。民主主義は突き詰めれば多数決ですから少数意見が反映されないのは確かですし、選挙によって選ばれた議員、及び彼等が行う選挙に対しての賛否が直接的ではないのは確かです」

「？」

「法案一つ通すにしても、国民の賛否はその一つ一つの法案に対してではなく議員に対しての評価でしかないんです」

「もうちっと噛み砕いて」

「私も美樹さんも未成年ですので選挙権があれば、という仮定になりますが、美樹さんが投票できるのは議員だけで法案に対しては不可能なんです」

「ふむ」

「それを良しとするかそうでないとするかは難しい事です。私達はその議員の行う活動全てを含め投票するわけですし、一つ一つの法案に対して毎回国民投票するわけにもいきませんから」

そうなると議員自体要らないね。誰かが意見を出して全員がそれに対して賛否を出せば良い。

「国民の意見がダイレクトに通るようになれば国政がよくなるとも言い切れませんし、現状維持を続けているわけです」

それを望まないのが独立派か。

新規政府の独立ねぇ。

梨花にも彼女を独立派に駆り立てる何かしらの信念があるのだろうか。

「璃瑠は何の為に戦うの？　どうしてこの仕事についたの？」

「選択肢がないからです」

【8－9】

【8－9】

「選択肢？」
「私が六課にいることに私の意志は関係ないですし私が選択したわけでもありません。それ以外の選択肢が無かったからです」
「それってさ、璃瑠としてはいいの？」
「はい。不満も不備もありませんから。他に行くところもないですし」

璃瑠は何者なのだろうか。
私でさえ特例につぐ特例で六課にきたというのに。それよりも年下の時には六課に居たという。
魔法使いとして。

「何の為に戦うか、それは大事な事ですか？」
「大事だと思うよ」
「結果は一緒ですし。それに相手がどうであれ私のやる事は変わりませんから」
「もし、そうしなければ地球が破滅するとして罪を犯す人間がいても璃瑠は躊躇しないの？」
「随分と極論ですが、その人間を斬れ、と命令が出れば私はその人を斬ります」
「私はそれを迷うタイプみたいだよ」

正義なんてものは幾らでも、そこいらに転がっていて私はその一つ一つを気に留めてしまう。

こよりのしている事は間違っているのは分かる。けれど、こよりには、それを駆り立てるだけの理由と意義がある。
村山がした事は間違っていたのは分かる。けれど、村山には、それへと駆り立てられるだけの過程と原因があった。

「大人になって下さい。どこかで割り切らないと」
「分かってるよ。分かってても彼等の言う事も分かるんだ」

私は彼等の前に立つ資格があるのだろうか。

「私は何の為に戦ってるんだろう」
「思いつめない方がいいですよ。あくまで美樹さんの仕事は魔法犯罪の検挙、それでいいじゃないですか」
「分かってるよ」

【8－10】

【8－10】

上井博彦は立川裕子の葬式会場となっているホテル、プリンストーキョーの最上階までエレベーターで上がった。
部屋は既に調べてあったし、後で伺う事も伝えてあった。
廊下は静まり返り葬列でさえもう少し賑やかだろう。
ホテルの部屋のインターホーンを押す。

「先ほど約束しました上井です」

ガチャリとインターホーンが切られて、部屋のドアロックが解除されたのがランプと音で通知された。
ドアを開けて中に入ると、電気がついていなかった。

どういうことか、と上井は訝しむ。
大きな音がした。暗闇の中から叩くような音が。それが三回ほど続いて上井は身構える。
すると突然部屋の明かりが点いた。

部屋の真ん中で美樹が立っていた。手には大きな模造紙を畳んだような物を持っている。

「そちらさんは確か立川さんの親戚の……」
「美樹っす」
「一体全体、部屋の電気もつけねぇで何をしてるんで？」

美樹は上井の質問には答えず手に持っている模造紙を折り畳んだ物

を見せた。

「これ知ってます？」

「紙鉄砲……ですか？」

「そうそう。これをこうしてやって、思いっきり振ると音がなるんすよね」

紙鉄砲を鳴らして美樹は笑ってみせた。

破裂音は大きいが、こうして聞くと大した事はない。

まさか、自分を驚かす為だけに部屋の中に潜んでいたのかと上井は悩む。

「ポルターガイストって知ってます？　？心霊現象としてよく言われるんすけど、物が飛んだり音がしたりするやつです。

「立川総一郎さんは何処ですかね、会う用があるもんで」

「いやー、まぁその話は後で。それより、私の話を少し聞いてかない？」

「急ぐ用事なんで、行かせてくれませんかねぇ」

「恨みでも晴らしにいくのか？」

美樹の一言に上井は反応する。

立川裕子の親戚だというのは本当だろうか、と疑う。この子は何者だと。

「立川裕子を殺害して、さらに立川総一郎まで殺す気か」

【8－11】

「立川裕子を殺害して、さらに立川総一郎まで殺す気か」
「なんのことでしょうかね」
「私とあんたが立川さんを発見したのは１６：１０頃。部屋に向かったのは大きな物音がしたからだ。だから私達は部屋に犯人、もしくは第三者が居ると思い込み立川さんがその時間に殺害されたと思い込んだ。だけど違った」

私はポケットから携帯用のインシュリン注射器を取り出した。

「糖尿病のインシュリン注射。これ立川さんは１６：００にするよう決まってたみたいなんだけど、立川さんが持ってた物は未使用だったんだよね。
もし立川さんが発見直前に殺害されたならインシュリン注射は行われていた筈。つまり１６：００以前に殺害されたと言う事になる」

１６：００以前に殺害されたなら遺体発見時に梨花のアリバイが無いのは関係なくなる。少なくとも殺害に関しては。
逆にアリバイが揺らぐのは上井だ。
１５：５０頃より前は上井は立川と二人きりだった。

「あんたのアリバイは１５：５０以降のみ。立川さん殺害がそれ以前なら」
「いや、ちょっと待ってくだせぇ。仮に立川さんがその時に殺されていたなら、あの物音はなんです？」
「ポルターガイスト」

部屋から物音によって私達は錯覚した。その物音は犯人と争っている物音だと。
だから、その場に犯人が居ると思い込んだ。
だから、その場の犯人が消えたと思い込んだ。
けれど、違った。
その場には誰もいなかった。犯人も瞬間移動を持つ梨花も。

「あの場には誰も居なかったんだよ。誰か居ると物音で錯覚させられただけだ」
「いや、ポルターガイストって言われてもねぇ」
「ポルターガイストは幽霊の仕業ではなく、念力、つまり物質に干渉する超能力の一種が原因とされてきた」

だが、私達は超能力に関しては肯定する事ができない。
出来るとするならば。

「魔法だ。あんた、魔法使いだろ?」

【8－12】

【8－12】

「2．01B－01Aテレキネシス。物質に対して魔力を流し込み自分のコントロール下に置く魔法だ。念動力って言われる超能力はだいたいこれにあたる」

「魔法……ですかい」

部屋に置いてあったオブジェに指紋がついてなかったのも、天井に水槽内の水によるシミがあったのも、立川が窒息死なのに至る所に痣があったのも、理由は一つだ。

私達がその場に犯人が居たと思わせる工作。それにより犯行当時でなく発見時のアリバイを重視させる工作。

物音によって誰かが居ると私達は思い込んだ。

「あんたは魔法によって室内の物を操作し部屋を引っ掻き回した。それが私達が犯人と立川さんの争う音だと勘違いした物音だ」

隣の部屋の物まで倒れていたのは現場が見えないから闇雲に魔法を発動したから隣の部屋まで巻き込んでしまったからだ。

室内で魔法によって飛び回ったオブジェは窓を突き破り外にまで飛び出した。幾つかは立川にぶつかり斑を作った。消えた天井のシミは水槽内の水で、蒸発したからだ。

水が天井についたのはオブジェが床にこぼれたものがついたのか水が飛び回ったのかは定かでないが。

「証拠はないけど、あんたのアリバイもない」
私の目を上井は睨み、そして直ぐにその表情を緩めた。
「見事な推理で。いや、雑なトリック過ぎやしたかねぇ」
「発想は良かったと思うよ」
「まあ時間さえ稼げれば良かったもんで」
私は迷った。私に踏み込む勇気があるのかと。
けれど、きっとここで聞かなければ後悔する。
「立川裕子を殺害したのは東日本ビル火災事故が原因か？」
「……。」
「いろいろ調べてもらった。立川裕子の父、立川総一郎が東日本ビルの影のオーナーで法によって裁かれる事はなかったこと。あんたが東日本ビル火災事故で妻と娘を亡くしたこと。あんたは裁かれるべき人間が裁かれていないと賠償金を受け取らなかったこと」
だから、今復讐に走るのか。
暴力によって。
「そこまで知っているなら、見逃しては貰えませんかねぇ」
「暴力じゃ何も解決しない。ただ哀しみを生むだけだ」
「法じゃ駄目なんでさぁ」

【8－13】

【8－13】

「この国は平等なんかじゃなく、力こそ全てな国になっちまってる。力にも色々ありまして、金、権力、地位、諸々。裁かれるべきものが裁かれなくなってるんでさぁ」

上井は続ける。

「立川総一郎が大手マスコミのスポンサー企業の株主であることも手伝って彼自身はメディアのバッシングさえ受けなかった。それどころか娘の立川裕子が国会議員にすらなっているんでさぁ。悔しいことにね、マスコミの匙加減一つで国民はコロッと意見を変えちまう。そのマスコミの匙加減を左右するのは金、結局、金か権力か地位か何か。それは時に法律でさえ届かぬ領域を作ってしまうんですよ」

ならそこに届くものは何だ。

「だからって暴力に走るのは違う」

「そうでしょうか。そりゃ何度も立川総一郎を批判する声を上げやした。けれどそれは捻り潰されちまう。弱いもんは死ぬ気で喉仏に食らいつくしかないのがこの国の真実と申しましょうか」

現代日本の社会構造に批判の声を上げたなら、それを聞くものがいるだろうか。

それを受け止めるものがいるだろうか。

「誰もが批判的な眼を持ち自分自身で考えていれば当時の報道に疑問を持った筈で。立川裕子が当選するのもあり得ない筈で。でもね、誰もがそれをしないものなんです」

「それでも日本の法は、選挙制度はそうなっているんだよ」

民主主義は、多数決でしかない。絶対的な多数決だ。

少数意見は排除され、それはいつしか前倣え、右倣えの精神を生み出す。

けれど、その構造を選んだのも多数の誰かなのだ。

それを許容できないことを、それを恨むのを正しいのかどうか私には分からない。

「法が捌けないのなら自分で裁くしかないんでさ。おそらくこの事件も立川総一郎に同情的に報道されるでしょうよ。自分が正義だとは思いません、悪でしょうとも。けれどね、世間には比べ物にならない位の悪が蠢いているんです。その毒牙には毒牙でなければ敵わないんでさぁ」

「それは哀しみの連鎖を呼ぶだけだ」

「えぇ、その鎖は断ち切れません。腐り切ったこの世界じゃ救いなんてないんです。それだからこそ、自分で裁く。だから行かせてくだせぇ」

【8－14】

「立川総一郎はもう居ない。私達の保護下に移動した。もう諦めろ、上井」
「お嬢さんは一体何者で」
「魔法使いだよ」

上井がポケットから何かを放り投げた。野球の硬球だった。下手投げで飛んできたそれを身をそらして避ける。硬球は後ろで間の抜けた音を立てた。

「傷付けたくないんですが、許して下せぇ」
「いや、傷付くもなにも」

耳元で風の切る音がして、何かが私の顔の横を通り過ぎた。耳が熱くなる。
私の真横を通過した硬球が上井の前の空中を何かの意図を持つかのように浮いていた。
突然、硬球が弧を描き私に向かってくる。
念動力で操作しているのか。

「そうまでして、なすべきことなのか、殺人が」
「許してくれとは思っちゃいません」

硬球が動いた。白い残像を残しながら硬球が眼前まで迫った。咄嗟にかばった左手に沈み込むように硬球がぶつかった。

跳ね返った硬球がまた急に軌道を変えて私の真横に回り込み勢いをまして向かってきた。
それを躱した時、気付けば上井が目の前に居た。
上井が黒い何かを突き出して私に押し当てて。

「許してくだせぇ」

スタンガンで気絶した美樹を放置して、上井はホテルから逃げ出した。アスファルトの夜道を通行人を突き飛ばしながら走り抜けて行く。
まだ捕まる訳にはいかない。
立川総一郎に裁きを下すまでは終われない。

立川裕子の死は世間に同情的に伝わるだろう。
志半ばで凶刃に倒れた国会議員。そしてその娘を亡くし哀しみに暮れる父、と。
そこには、同情と涙を誘う色付けだけが先行し、隠された事実は明かされない。

それでは意味がない。全てを白日の下に晒すには、立川総一郎の死と上井の独白が必要となる。
資産家と国会議員の殺害は大きな関心を引く。その大衆の関心をメディアの色付けだけでは誤魔化しきれない。必ず上井の独白は求められる。

立川総一郎の全ての責任は死をもって償われる。
上井は己の高揚を抑えきれなかった。

ようやく仇がとれる。

【8－15】

工事現場を突っ切ろうとする上井の行く手に闇に紛れて一人の少女が立っていた。
それが美樹だと気付いて上井は足を止めた。

「なぜ」
「スタンガンの有効範囲は電極から数センチだ」
「確かに押し当てた筈ですが」
「微妙にずらしたんだよ。あれは気絶したフリだ」

美樹の行動の意図が読み取れず、上井は怪訝に思う。

「ちょっと悩んだ。あんたは確かに犯罪者だけど、あんたの言葉は少し……そのなんて言うか、響いた」

けれど、それは違法行為を肯定する理由にはならない。誰かを殺した罪を帳消しに出来るものを美樹は知らない。
だから上井は撃たなければならない存在だというのも分かっている。

その正義（上井は否定したが）を語る言葉をこよりと重ねてしまう。
もしこの社会が孕んだ構造が、その構造の生んだ歪が、作り出してしまった罪に立ち向かうなら。その社会構造に基づいた正義では不可能なのだろうか。
社会はパーソナルな存在ではありえない。個人の何かを犠牲として社会は成り立つ。
だからその犠牲を受容できないのなら、犠牲を強いる社会に立ち向

かうなら、社会構造から外れた、いやむしろ弾かれるものでしか立ち向かうしかない。

けれども、と美樹は否定する。

それはエゴイストの言い分でしかない。こよりの言葉はエゴでしかない。

こよりの言う人類の進化を人類が望み求めない限り、こよりのしている事はエゴだ。

けれども、と美樹は混迷する。

「……でもやっぱり、私はあんたを止めなきゃ」

美樹が動いた。

室内での接近戦は美樹にとっては不利だ。だが、近接格闘術に不安が残り銃撃戦か狙撃を得意とする美樹にとって屋外は好条件だった。

上井が積んであった資材に手を伸ばす。鉄パイプが数本宙に舞い上がった。上井の念動力の支配下に置かれた鉄パイプは糸に引かれたようにその身を漂わせる。

上井が手を振り下ろした。その動きに引かれるようにして、鉄パイプが美樹に向かって飛ぶ。縦に回転しながら勢いよく飛ぶ鉄パイプを美樹は撃ち抜いた。

弾かれたように撃ち抜かれた鉄パイプは軌道を変え地面に叩きつけられる。

美樹がそれを飛び越えてハンドガンを構え直す。引き金を引こうとした瞬間、美樹の手のハンドガンは大きく暴れた。

向けようとして居る方向とは違う方向に何か見えない力で引っ張られるように銃口が向けられる。

「テレキネシスか！」

鉄パイプが二本飛んできた。空を切るような音を立てて勢いよく向かってくるそれを美樹はギリギリで避ける。

上井が次々と鉄パイプを舞いあげ勢いよく飛ばしていく。

無数の飛び交う鉄パイプを撃ち落そうとするもハンドガンの向ける先は定まらない。

「止めろ上井！」

「この憎しみが誰かに理解できるものか！？」

【8－16】

「妻も娘も、あの事故で死んだ！　？その責任をとるべき人間が何の裁きも受けずに生きているのが憎くて何が悪いんでさぁ！？」
「それでも、あんたは！」

張った魔力盾に鉄パイプがぶつかる。軽い音だが確かな振動を伝えてくる。
空を切る音が四方八方から聞こえる。盾で弾いた鉄パイプは再び浮かび上がり美樹に飛んでいく。

飛びのこうとした美樹の足を何かが掴んでバランスを崩す。
テレキネシスで干渉され身体のバランスを崩された美樹を狙って鉄パイプが飛んでくる。空中に張った盾がそれを弾き返す。

「裁かれないのなら、自分で裁く！」
「それは私刑（リンチ）でしかない！」
「そうでもなきゃ、救われない人間が居るんでさぁ！」

走る脚を見えない手が掴んでくる。美樹は身体のバランスを崩し地面に転がる。起き上がろうとした美樹は首を強く絞められる感触を感じた。喉元に何かが強く押し付けられる。

「ーーかっ！？」

テレキネシスの見えない手が美樹の喉元を締め上げた。目の奥に熱い物がこみ上げる。呼気が締め付けられ狭まった気道の隙間を通る

度に、壊れた笛のような音を鳴らす。
視界が揺らぐ。視線の先が上を向く。
上井が鉄骨を持ち上げた。上井の背後で一本の鉄骨が浮かび上がる。

「怨むな、とは言いません」
「い、や……それは、い、たいじゃ、すまないって」

鉄骨が上井の斜め後ろの辺りで浮かびあがり、上井が腕を振り下ろした。鉄骨が上井の真横を通り美樹へと向かおうとした。

「5．02B－Xスライドシフト」

美樹の呟いた魔法は世界を塗り替えた。
世界がずれた。一瞬にして、ほんの些細に。世界はずれた。
飛ばされた鉄骨の位置が横にずれる。上井の横を通り美樹に向かう筈だった鉄骨の位置がずれ、鉄骨は上井に直撃した。

「!?」

上井が吹き飛ばされ美樹の首にかかっていた圧力が消えた。
美樹は咳き込みながら上井の側へ駆け寄る。

「諦めろ上井」
「……これで、あなたは納得するんですかい」

その問いに美樹は答えなかった。
一人の犯罪者を逮捕し、それを法が裁く。そして殺される筈だった一人が助かる。
それは確かに正しいのだと誰かは言うはずだった。
それは頷ける事なのかと言う問いに答えは出せなかった。

私が教えてもらいたいよ。

【8－17】

とある研究室の一室で佐樹は人を待っていた。しばらくすると白衣の男が入ってくる。

「待たせましたかなね」
「いえ」
「この者達を連れて行くよう指示が出てますいた」

男が連れてきた12人は何も言わずに並んでいた。そのどれもが漆黒のマントを着込み、目深にフードを被り顔の見分けはつかない。男性だというのはわかった。

「……気乗りしないわ」
「戦力は多い方がよろしいかとな」
「魔法使いもどきに何ができるというの」
「小型マギア機関の性能実験は成功しているよます」

マギア機関。WIECS（ウィークス）を越える科学の新たなる発展。特殊な負荷を空間に固定することで、人体を媒介と背ずに魔力を生み出す事に成功した特殊な機関、マギア。
佐樹としては怪しい産物にしか見えない。

「マギア機関が安全だとは思えないわ。しかも小型化だなんて」
「この者達が魔法使いと同程度、いやそれ以上の能力を有する事は確かだです」

梨花を救出する。それは即ち政府組織との対立になり得る。
遅れを取るとはおもえなかったが梨花の状態がもし悪ければ万が一の事態が起こりかねない。

「分かった、好きにすればいいわ」
「出来るだけ壊さないでくださいよです」
「彼らに言いなさい、私には関係の無いことよ」

小型マギア機関によって擬似的に魔法使いとなった人間。魔力を利用したエネルギー兵器であるＷＩＥＣＳ（ウィークス）とは根本的に違う。魔力をあらかじめカートリッジという形で仕込み引き金を引くことで魔力弾を撃ち出すＷＩＥＣＳと違い、マギア機関は魔力そのものを生み出す。
そのマギア機関を利用して魔法使いとなった彼らが佐樹には気味が悪い。
しかし、公安六課とぶつかるなら、あの落合璃瑠が出てくる可能性もある。用心するに越したことはない。

兵士として使える魔法使いは少ない。マギア機関が何だろうと使えるものは使った方が良さそうだった。

「必ずあなたを助ける……梨花」

【８章・正義は遺した完】

【9章・死神は舞い降りた】

【9章・死神は舞い降りた】

「つまり、どういうことなのかな、うんどういうこと」

新宿区のとあるレストラン。こよりと弘佳が会うのはいつもここであった。

店内の隅で、こよりは不機嫌そうに弘佳に尋ねる。美智はその張り詰めた空気に気圧されていた。

「ですから、入間沙織をこちらに引き渡せ、と」

「断る、うん断るね」

「上が痺れを切らしてますの。そちらからの情報は少なすぎると言うのですわ」

「こっちとしては最大限の譲歩をしてるつもりなんだけど、つもり」

こよりは溜息をつく。革新派の中でももっとも大きい一派である弘佳達の要求はかなり一方的なものであった。

こよりは手を組みはしたが、傘下に入るつもりもなかった。

「こちらの方が施設も人も資金もありますわ。より有意義で迅速に研究が進むとは思いますが」

「せっかくの上客を手放す気はないよ、ないね」

「それなりの資金も約束しますわ」

「無理、無理」

こよりは一蹴する。

弘佳が身を乗り出した。

「正直な話、入間沙織はあなたの手には余る存在だと私は思いますわ。魔法に対する圧倒的な抵抗体質、これほどの逸材を一個人が保有するというのは荷が重すぎますわ」
「あたしは交渉に応じる気はないよ、ないから」
「いち早く研究を進める為にもより良い環境に移すべきですわ」
「……あたしとそっちのグループとは根本的な物は同じでも、目指すゴールは違う、違うよ。そっちのグループのゴールじゃ、あたしの目的には届かない」
「入間沙織によって多くの命が救われるのですよ？　それを私利私欲の為に使うと言うのですか？」
「そうだよ。みんな自分の為に生きるんだから、そう自分の為」

こよりはグラスに残った最後の一口を飲み干した。

「それに……そっちは何を隠してるのかな、ねぇ？」

こよりは席を立つ。
店を出て行ったこよりを見ながら美智は、聞く。

「……どうしますか？」
「プランBを取らざるを得ませんわね」
「……良いのですか？」
「誰もが自らの為に動く、そうなのですから」

【9ー1】

【9ー1】

こよりは弘佳と美智の会話に苛立ちながら新宿地下通路に降りた。革新派が最近きな臭いことをしているのは知っている。露骨に入間沙織を要求してきたことから、入間沙織が彼らが今秘密裏に動いている何かのために必要なのだろうというのも分かる。

だからこそ、入間沙織は手放す気はなかった。

そうこよりは納得しようとしても苛立つ。本当なら革新派に渡すべきだった。彼らとやり合うのはどう考えても得策ではない。そう分かっていても、こよりは損得でなく感情で入間沙織を渡さない選択肢を選んでしまってたことに、自分自身で気づいていた。

「あの子はあたしが勝手に利用しているにすぎない……だから、こう思うのは間違ってるんだよね……！」

こよりの視界がぐらついた。

魔法中毒のせいだと嫌でも気付いて、こよりは女子トイレに入る。

地下通路は改装したばかりで、トイレも例外ではなかった。新宿の地下通路の暗いイメージはなかった。

こよりは個室のドアを開けて中に入ろうとすると誰かに肩を押されて腕を取られた。

「！？」

「静かにしろ、抵抗するな」

個室のドアが閉まって鍵の閉まる音がした。

油断した。誰かにつけられているなんて。それに気づかないなんて。
顔を壁に向けたまま、後ろでこよりの腕をとり拘束している誰かに
こよりは、声をかける。

「どこの組織？」
「公安六課」
「……この声は……まさか」

腕を離されてこよりは自由になる。振り返る。聞き覚えのある声に
こよりは心臓が止まりそうになる。

「美樹ちゃん……」
「よう、こより」

伏見美樹がそこに居た。

「美樹ちゃん、なんで……なんで？」
「鷺ノ宮こよりと見られる人物がとあるレストランに現れると六課
に情報が入った。で、跡をつけてた」
「……その情報は今日現れるって？」
「ああ。漏れてるみたいだな」
「そっか。革新派のリークかな」
「お前が会っていた二人にも跡をつけさせてる。革新派なのか」
「さあね」

美樹が居る。目の前に。手を伸ばさなくても届く距離に。
こよりの視界がまたぐらついて倒れそうになる。こよりの手を美樹
がとって支えた。

「ありがとう、美樹ちゃん。薬のんでもいいかな」

「手伝おうか？」
「大丈夫、大丈夫だよ」

【9－2】

「で、捕まるの？　あたしは」
「もう、こんなことやめよう？　こより」
美樹の声は震えていた。その理由が理解出来ずに、こよりは押し黙る。

「私はこよりと戦うことなんて出来ないよ。だから、もうこれ以上私を苦しませないでよ」
「あたしは美樹ちゃんの為、美樹ちゃんの為に頑張ってるんだよ？」
「私はそんなの望んでない」
「どうしてそんなこと言うの？　ねぇ、どうして？」
全ては美樹との関係の為だった。こよりが願ったのは美樹とこよりとの関係が祝福される、認められる世界。それ以外の何も要らない。そして、その為には魔法という新たな概念で人類を次のステップに導くことが最適だと信じていた。

「誰かを傷付けては、その先に求める世界はないよ」
「あるよ、ある」
けれど、美樹はそれを理解してくれない。一番の理解者であるはずの美樹がこよりの言うことを信じてくれない。
時間も交わす言葉も少なすぎたせいだろうか、と思う。テロという言葉に囚われて美樹は正しい判断が出来なくなっているのだとこよりは考える。

「多色強引じゃなきゃ人々の意識は変わらない、変わらないよ」
「それは押し付けだ」
「そうだよ。でなきゃ彼らは理解しようともしないんだから」

旧来の価値観から人は変わろうとしない。それは必ず悲劇を招く。
こよりと美樹の様に、価値観から外れたものは社会から排斥される。
その社会から逃れれば認識されなくなる。
認識されなければその存在はひどく不安定なものとなってしまう。
その存在はひどく揺らぐ。
そんな社会は変わる必要があると、長く続いてきた悪しき社会にテコを入れなければと、こよりは強く信じている。

「社会がどうであったて、私はちゃんとこよりの事を見てる、愛してる。それじゃだめなの？」
「美樹ちゃんの言ってること……ちゃんと分かってるのに……分かってるのに、あたしはやっぱりそれじゃあ満足出来ないよ」
「こよりはまだ抜け出せないのか」
「そうかもね、そうかも。あたしはずっと縛られちゃった。でもね、だからこそあたしは世界を変える」
「……そんなの駄目だよ。このままじゃ、私はまたこよりに銃口を向けなきゃならなくなっちゃう」
「……ねぇ、あたし達はどうしてこうなっちゃったのかな」

けれど止まれない。
けれど止めたい。
そんな二人を隔てるものは何もなかった筈なのに。
社会に立ち向かい変えようとした少女と社会を気にしないことにした少女。

こよりはそっと美樹に手を伸ばす。その白い指で美樹の髪を撫でて頬をなぞる。指先で触れるとかたちを変える頬を手のひらで柔らかく掴まえて視線を逸らす美樹をこよりの方へ向かせる。

「美樹ちゃん、キスしていい？　　いい？」
「……駄目だよ」
「そしたらもう少しだけ頑張れるから」
「頑張られたら困ーー」

美樹の言葉を遮ってこよりは美樹を引き寄せる。背伸びしなくても届く距離。唇の柔らかさと温もりを唇で感じて。
鼓動が速くなる。
全てを吸い取ってしまいたくなる。
全ての神経が集まって相手を感じようとしている。

誰も知らないこの場所で唇を重ねて。

【9ー3】

【9ー3】

「あら、おかえりぃ」
「ちょっとメンバー集めて、今すぐ」

こよりは隠れ家に戻ってくると、帰りを迎えたおネェに言う。突然の指示におネェは訝しむも、メンバーを呼び集めた。
総勢6名のメンバーと入間沙織を前にこよりは立つ。

「革新派のとある一グループとの交渉が決裂した。これにより、向こうが何らかの行動をとる可能性がある、てかとるだろうね」
「向こうの目的は何なのよぉ」
「入間沙織の確保」
「私!?」

沙織が驚きの声を上げた。

「そう、沙織ちゃん。あたしとしては、入間沙織を渡すわけにはいかないし、する気もない。ただ、向こうが強行作戦をとると思われる以上、手を打たないと、めっちゃ打つよ」

こうなってしまった以上はやるしかない。
弘佳と美智の所属するグループは過激であり、力づくで入間沙織を狙ってくる可能性もある以上対策を取らざるを得なかった。

「隠れ家は移転、2日以内には機材含めて完全移行。それから情報交換は新規の暗号通信回線を使用。それと盗聴警戒のために筆談を

行うこと。各員、あたし達に関する情報は完全抹消、電話番号は憶えて。沙織ちゃんに関するデータもメインサーバー以外からは消去すること。
それと、対魔法使いの為に何人かの護衛を雇う、あたしだけで守りきれるか自信はないし。それと沙織ちゃんはあたしから一時も離れないように。トイレまで着いていくから」
「……。」
「それと、PCはあたしだけが起動できるようにセキュリティを組む、起動の際には毎回あたしを呼ぶこと、あたしが立ち上げるから」
「メンバーにも立ち上げ方法を教えないということぉ？」
「そうだね」
「それはメンバーを疑っているのかしらぁ？」
「敵がおネェ達を狙わないようにだよ。あたしが居ないと立ち上がらない以上、おネェ達をどうこうしても仕方ないからね。不便だろうけど我慢して。
今から移転の準備に各自取り掛かって。夕方には裏にトラックを回すから」

こよりが手を叩くと全員が立ち上がり動き始めた。
落ち着きのない沙織にこよりは声をかける。

「沙織ちゃんを危険な目に合わせるつもりは無かったんだけど」
「どうなるの？」
「穏便にはすませようとは思ってるよ、思ってはね」

【9ー4】

「あれ、美樹ちゃん？」

【9ー4】

こよりを「取り逃した」私は梨花の病室に来て居た。鉄格子の中なのは相変わらずなのだが、拘束具の数は減っていた。協力的だからだろうか。

「で、取り調べって何なのかな？　事件は解決したって聞いたけど」

「おかげさまで解決したよ、今日は取り調べっていう名目での面談だから気にすんな」

「あれが美樹ちゃんの魔法なの？」

「あれ？」

「突然、ぶつぶつ言い始めてなんか心ここにあらずみたいになっちゃったやつ」

そういや見られたな。目の前で。

恥ずかしいよね。

「あれは魔法じゃなくてだな、なんていうか記憶の中にトリップしたっていうか」

説明し辛い。

私は記憶力が良い。人とは違ったベクトルで。

私の五感と意識は何かのきっかけがあると記憶と直結することがある。脳内に無意識下に蓄えられた記憶の中へと私は溺れてしまう。

その中では全ての記憶に自由にアクセスし、全ての記憶を自由に感じ取れる。膨大な記憶の海の中では私は自由だった。シナスタジア（共感覚：刺激に対して通常の感覚だけでなく違う種類の感覚を得る特殊な知覚現象）のようなものにも目覚める。

「よくわかんないんだけど」

「まぁ、秘密ってことにしといてくれ。映像記憶能力みたいなもんさ」

「？　ふぅーん」

まぁ、分かってもらわなくても良いんだけど。

鉄格子の、前に座椅子を置いて私は腰掛けた。

「で、面談っていうのは……？」

「ちょっと事件は関係なしにおしゃべりしに来た」

「……へぇ？」

「取り調べの映像化だとか保存だとか言われてるけど、そういうの無視できるのが公安って感じがするよ。誰も聞いてないし何にも残さないから、下手に警戒しなくていいよ」

私の言っている意味が理解出来ないのか梨花は混乱しているように見えた。

「聞いてみたいことがあってさ……お前はなんで戦ってるんだ？」

上井もこよりも村山も、自らの中の信念をかけて魔法という力をふるっていた。

「魔法という武器を手に何を求めてテロを行う？　行き着く果ては何だ？」

「あたしは、魔法でしか認めてもらえないから。って言ったよ」
「本当にそれだけなのか」
「美樹ちゃんみたいに凄い人には分からないよ」

自己の存在意義に思い悩むことは思春期にはより顕著に見られる。
それが思春期特有のものなのかという結論は出せないけれど、私は一つの考えは持っている。
自己の存在意義は思春期を脱却すれば見つかるというものではない。
おそらく誰もが長きに渡って悩み続ける筈だと私は思う。
結局は忙殺されてしまうのだ。忘れてしまうだけなのだ。経験則からそう私は考える。

けれどその答えは、おそらく梨花には届かない。欲しい答えはそんなものではないだろうから。

魔法でしか認めてもらえない、か……。

「それはテロという犯罪行為を行ってまで達成しなきゃいけない事なのか？」
「あたしでも誰かの役に立てる、それって魔法じゃなきゃ出来ないから」
「……。」

【9ー5】

【9ー5】

線香の匂いはいつもの家の匂いを追い出しながら天井の隅まで昇っていた。和室の奥に鎮座した仏壇の回りには何処か乾いた花束が並び仏壇の前の空間を嫌というほど強調していた。そこに座ると写真の中で笑う姉の視線と向き合わなければならなくなってしまう。写真の中の姉はこんな時でも写りがよく梨花は少し萎縮してしまう。

その写真と向き合う事はほとんど無かった。仏壇の前にはいつも母が居た。

「ただいま……お母さん」

そんな母に梨花は小さく声をかける。部屋の灯りを点けて窓を開ける。家中の淀んだものを追い出そうとする。

姉が死んで一ヶ月。

母は目に見えて生気を失い棺の中に見た姉の最後の姿より黄泉に近いように見えた。

学校に行っている間の母の行動を梨花は知らないが家に帰ってきてみるといつも母は仏壇の前で姉のバイオリンケースを抱え泣いているのであった。

梨花は慣れない手付きで夕食を作り母に食べさせる。まだ３０台後半の世間から見れば若い母親だった。しかし、中学生の梨花が世話を焼くその光景はとてもそうは見えなかった。

「お母さん、晩御飯食べよ?」

「……要らないわ」
「だって昨日から何も食べてないでしょ？　食べなきゃ駄目だよ」
母を立たせて梨花は居間へと連れて行く。椅子に座らせると梨花はその正面に座った。いただきます、と一人手を合わせて梨花は箸を伸ばした。
アジの干物に、ほうれん草のおひたし、味噌汁。梨花の用意出来る最大限の物だった。色の沈んだほうれん草に梨花が箸を伸ばすと母は呟いた。
「……不味い」
「え？」
「不味いわ」
母は両手を机に叩きつけた。指の先の箸がひしゃげる。食器が揺れ金音を鳴らす。
「どうしてこの程度の料理も上手く出来ないの！？　お姉ちゃんならもっと上手く出来たわ！　」
「ご、ごめんなさい」
食卓の端には伏せられたお椀と箸が写真立ての前に置いてあった。写真の中の姉は笑顔のままだった。
「お姉ちゃんじゃなくて、あなたが死ねば良かったのよ」

【9-6】

【9-6】

梨花にとって姉はいつでも近いようで遠い存在だった。容姿、才能、全てが姉の方が上だった。母は出来の良い姉を溺愛し、姉の写真とコンクールの賞が増えて行く事を喜んでいた。
梨花は要領が良いとは言えなかったし、バイオリンが弾ける気配も無かった。学校の成績も良くはない、というよりも悪かった。羨ましくはあった。しかし、遥かに上の方に居るせいで梨花は嫉妬すら覚えなかった。けれど姉はいつも梨花に言った。

「梨花の方が凄い事沢山持ってるよ」
「あたしにあるかな」
「あるよ。梨花はすぐ誰とでも仲良くなれるし、誰にでも優しいから」

そう言って姉はいつも梨花の頭を撫でた。
それは姉の姿はその姿かバイオリンを弾いているときの姿しか思い出せないほどに印象的だった。

そんな姉が交通事故で死んだ。
飲酒運転のトラックに轢かれて即死だった。
梨花はその光景を確かに憶えていた。姉と並んで歩いていた時の光景を、梨花の目の前いっぱいにトラックが迫った事も。
けれど気づいた時には梨花トラックから離れた場所にいて横に居たはずの姉がトラックに轢かれて居たのを見ていた。車体の隙間から血に塗れた顔だけをこちらに向けていた姉の表情を今でも梨花は鮮

明に思い出す事が出来る。

姉が死んで姉を溺愛していた母は衰弱し、日々の生活がままならないほどだった。

それの世話をしても母は梨花を拒絶していた。姉の死んだショックのせいだと分かっていても梨花にはショックだった。

「お姉ちゃん……なんで死んじゃったの……」

泣きたくてもそれを見せる事の出来る相手がいない。梨花は一人布団のなかで涙を噛む。

物音がして梨花は目を覚ました。気づかないうちに寝てしまっていたようで制服のままだということに気が付いた。シワになってしまう、と梨花は少し落ち込んで布団から這い出す。

母が居た。

両手でポリ容器の中の液体を振り撒いていた。梨花の部屋で母は一心不乱に。

無言でそれを続ける母の姿に何か得体のしれない気味の悪さが重なって見えた。

母の撒いている透明な液体が鼻を突く異臭を放っており、それが何なのか梨花は気付いた。ガソリンだ。

「何をしてるの、お母さん」

ポリ容器のガソリンの残りを母が頭から被った。

「ねぇ……何をしてるの……」

母がライターを取り出し指で弾く。その赤色が揺らめいて空気を撫でて。

「やめて！　お母さん！？」

その火は母の撒いたガソリンに引火した。

【9ー7】

六課のオフィスに戻ってくると璃瑠がホールケーキの前でフォークを一心に動かしていた。

「どうしました、美樹さん。顔色の悪いゴリラみたいな顔をして」
「ゴリラに顔色とかあんのか」
「さぁ？　？どうなんですか、美樹さん？」
「あたしはゴリラじゃねぇよ！」
「現在の学校教育を根底から揺るがしかねませんね」
「私がゴリラとか教えないだろ！　？なんの授業だよ！」

璃瑠の失礼極まりない挨拶に私は憤慨しながら璃瑠の前に腰を下ろした。
ベイクドチーズケーキ1ホールをフォークで崩しながら璃瑠は頬杖を突く。

「で、どうしたんですか？」
「梨花と面会してきた。嫌な話を聞いた」
「凹んでいる美樹さんに、特別にケーキを半分あげましょう」
「いや、半分もいらない、一切れでいい、てかケーキはホールで食うもんじゃねぇよ」

そんな優しさ要らない。重い。腹に溜まるという意味で。
紅茶をティーバックで淹れながら呟く。

「認められることって、そんなに大事なのかな」

「なんですか、それは？」
「梨花は他人から認められることを戦う理由にしてる。魔法という毒をもってしてでも梨花は誰かに認められたいと思ってる。……それってそんなに大切な事かな？　？命をかけてまでやることかな？」
璃瑠は私にケーキを一切れ切り分けて私に寄こした。

「私達という存在を概念としてではなく実体とするのは何だと思いますか、美樹さんは」
「もうちょっと分かりやすく」
「ちょっと納得の行く話になるかは微妙ですが。
私達を構成しているのはたんぱく質とあと何かと、というように考える事が出来ます」
「お前、科学を苦手とし過ぎてる」
「ですが、そこから更に突き詰めれば私達は物質を構成する最小の物質、『素粒子』の集合体として見る事も出来ます。そこまで分解した場合、空間と物質と、私達を隔てる物はありません」
「極論じゃないか？」
「えぇ。ですが、そうとも考えられますよね。そうした場合、私達と世界の境界線はひどく曖昧なものではないでしょうか」

この考え方は誰が提唱した物だろうか。量子論に近いのかしら。
それともエカタス理論か。

「境界線ねぇ」
「そこに存在する何かは何者かが観測して始めて存在する。そうすることで、その何かと世界ははっきりとした境界線を持つんです」
「観測者か」
「観測者が居なければ美樹さんを世界と区別するものが存在せず、美樹さんは存在しないということになります」

「でも、私が鏡を見たら私を見るぜ？」
「その時は美樹さんが観測者になるわけです」
「なら、おかしくね。私が観測されるまで存在しないとするなら、私は私を観測出来ないんじゃないか？」
「そうですね。正しくいうならば境界線がないので存在しているかどうか曖昧な状態と言いますか」
「シュレディンガーの猫ちゃんか。シュレディンガーの猫ってそういう考えへの批判として提案されたものだけど」
「私の話はエカタス理論になるのでしょうか」

エカタス理論。
我々をその存在として確立し得るのは観測者による認識によるものである。逆説的ではあるが、観測者に認識されるものならばその観察物は存在するものである。観測者が観測しているならば、それが実在しないとしても存在として確立する。それを否定する術を観測者は持たない。
故に観測者の内に共通の認識を抱かせる事が出来れば、無より有を確立すると等しい。それは即ち現代の魔法となり得るのではないか。

これがエカタス理論である。

【9ー8】

「エカタス理論って、観測者に共通の認識を抱かせる事が出来れば、現代の魔法となり得るのではないか。だろ？」

私が言うと璃瑠は意外そうな顔をした。

「知っているとは思いませんでした」

「そういうのが好きなやつが居たんだよ」

こよりが熱弁を奮っていたのを覚えている。

エカタス理論は理論と呼ぶには少々弱い、哲学的命題と言った方が近いのかもしれない。

私達が共通の認識を観測によって抱くことで、それが存在していると証明できるが、実際には存在しなくともその場にいる観測者が存在しているという認識を抱けば存在しているに等しいというものであるらしい。

つまり見えているものは本当は存在していると思い込んでいるだけかもしれず、それが嘘かは分からない。またそう思い込むことによって、存在していないものを存在させる事が出来る、というのだ。

故に自身の見えている存在の証明は共通の認識でしかなし得ない。

しかし、共通の認識自体が正しいかも分からない。

上手く説明出来ないな。

まあ認識ってあやふやだけれど、その認識がなければ更に存在ってあやふやになるよ、みたいな？。

「エカタス理論はぶっ飛んでるよね。共通の認識は現代の魔法となり得る、だからなぁ」
「エカタス理論はかなりの矛盾と問題点を孕んでいます。このチーズケーキが私達があると思い込んでいるだけでチーズケーキはないかもしれない。そんな乱暴な論ですからね」
「思い込んでるって言われても、食べる事が出来てるしな」
「その食べたという認識も実は嘘かもしれないって話ですからね。そういったら、私達自体も存在しているか怪しい訳です。無茶苦茶ですよ」
「でも、それを否定する術を観測者は持たない、だろ」

観測者は自身の観測したものの真実を証明出来ない。何故ならそうとしか見えていないからだ。自分と他人が見えている世界が違おうとも、それを確認する術はない。
言ってる事は分かるが同意しづらい内容である。

「まあ、つまりです。私達は認識されて始めて自己の存在を確立出来る。そう考えたら認められたい、という欲求は的外れなものとは思えませんが」
「そうだけど」
「誰にも認められないなら生きている価値なんて見つけられないんですよ。誰からも存在を認識されなければ、それは存在出来ないんです」

私は誰かに認めてもらいたいと渇望してるだろうか。
私は誰かに認めてもらっているのだろうか。

「認めてもらう、か。私にもそんな欲求あるのかな」
「……私は美樹さんを認識し、尊重し、大切に思っていますよ」
「なんだよ、急に。照れるよ」

「冗談です」
「いい話だったじゃん、今」

璃瑠が笑った。この瞬間も私達は互いを認識しあってると言えるのではないだろうか。
難しい言葉でなく、それは簡単なことなのではないだろうか。

「……私だって、誰かに認めてもらいたいと思ってますよ」

【9ー9】

【9ー9】

「何やってんの？　トラック出ちゃったけど」

沙織が空になった隠れ家の隅に腰を下ろしているこよりに声をかけた。おネェ達は隠れ家の機材を載せたトラックにこよりと沙織以外の全員を載せてすでに出発していた。

「あたしたちはー、後で合流、そう後で。何かあった時、沙織ちゃんと二人っきりの方が戦いやすいからね」

「向こうの人達は守らなくていいの？」

「優先順位が違う違う。こっちにしても敵にしてもねー」

ペットボトル飲料を沙織に投げて渡し、それを受け取ると沙織はこよりの斜め前に腰を下ろした。

時計を少し見てこよりは再び壁にもたれかかる。

こよりが何も喋らなかったので沙織は口を開く。

「あんたの言ってた人類の進化って具体的にどうする気？」

「わかんなーい」

「え？」

「魔法という新たな可能性を手に入れた事で人類は古い価値観を捨て去る、っていうのにかけてるよ、うんギャンブル」

「ギャンブル……」

ギャンブルといっても、手放しなものではない。

必要なものは与えよう。しかし、それを受けてどう変わるかまでは

こよりには予想出来なかった。

魔法は新たな価値観を生み出す。魔法は社会の構造を変える。
その先に人間が見出すものは何かは分からない。
だが、そこにこよりの願うような場所があることをこよりは願っている。

「もうちょっと考えてるのもあるけど、そっちも夢物語だからね、夢物語」
「……あんたは、その……好きな人と一緒になりたいってのが夢なんでしょ。なんで進化なんて」
「誰かに認めてもらいたいから、だよだよ」
「認めてもらいたい？」

沙織の疑問にこよりは答える。

「あたしとその人が一緒になってもそれを祝福してもらえなきゃ意味がないから」
「？」
「人間ってさ、間違ってばかりだよ、間違ってばかり。人間って、認識したものを必ず何処かで線を引くんだよ。性別、容姿、人種、身分、そんなもので人間は互いを自ら区別してしまう」
「……。」
「区別の幾つかは差別に繋がり、差別はいつしか悲劇を生む、生むね。旧来の価値観で人は分かり合うことを、上っ面の奥にあることを理解しようとすることを拒否してる」
「でもそれを捨て去るなんて」

旧来の価値観では、こよりの愛は報われない。世界から祝福されない。

「あたしね、好きな人って女の子なんだ」

【9－10】

「あたしね、好きな人って女の子なんだ」
「はい？　え、え？」

沙織は困惑する。

「今、沙織ちゃんはあたしを区別したでしょ？　区別。否定はしなくていいよ」
「え、女の子が好き？　え？　え？」
「人間ってね、誰かから認められなきゃ生きていけないんだよ。それは自我が芽生えたせいかもね、自我ね」
「好きってのは恋愛感情として……え？　え？」
「あたしと彼女の関係が誰かに認めてもらえないのは、あたしには堪えられないんだ。誰かが認識しなくちゃ、それは存在しないと同義なんだよ」
「……。」

誰も認めてはくれなかった。こよりと美樹の関係を。
拒絶、嫌悪、奇異、不理解。
そこから逃げ出そうともした。しかし、この世界で生きていくには決して逃れられないのだ。誰かがこよりと美樹の関係を必ず観測するのだ。
なら、彼らの意識を変えるしかない。

「古臭い価値観があたし達の関係を認めてくれないなら、あたしはその価値観を変える」

「……あんたと、その彼女が幸せなら他人なんてどうだっていいんじゃ無いの？」

「そうして、あたし達は何処に行くの？　誰にも観測されない世界？　そんな場所はないよ。誰かが居る限り、あたし達を認めない限りあたし達の関係はひどく不安定なものになっちゃうよ」

「価値観ねぇ……」

人間の価値観は簡単に揺らぐ。世界さえ変わるのなら。

魔法は人類を新たなものへと進ませるはずだとこよりは信じていた。

こよりはメールが来たことに気が付いた。

「これは……本当にやったんだ」

「なに？」

「とある筋に頼んでハッキングを依頼したんだよ。まさか情報を手に入れてくれるとは思ってなかったよ、思ってなかった」

ファイルのタイトルはアルカナ計画となっていた。

内容量は対したことがない。だが、その密度は濃かった。

一気に目を通して、こよりは深い溜息を吐く。

「アルカナ計画……なるほどねー。

……みんな狂ってるよ」

【9ー11】

【9ー11】

「狂っているのは本当にその者たちなのでしょうかね」

声がしてこよりは素早く身構えた。

弘佳と美智が立っていた。気がつかない内に目の前にいた二人組に沙織は腰を抜かす。

「!?　来たんだね」

「その者たちが狂っている、そうあなたが認識しているだけでそうであるとは限りませんわ」

「観測者の問題はその事象がミクロなものであればあるほど関係がなくなるよ、なくなる。それとも、弘佳が言っているのは主観と認識の問題の方かな」

こうも早く動き出すとは思っていなかった。

弘佳と美智との距離は3メートルもなかった。気配に全く気付けなかったことに、こよりは動揺する。

「最終警告ですわ。おとなしく人間沙織を渡せばなんのーー」

「断るって言ったよね?」

「それが意味する事を分かっているのですわよね?」

「えーわかんないかなーあたし頭悪くてー手癖も悪いからさ!」

弘佳と美智の足元から鎖が出現し、二人に絡み付いた。地面から伸びた鎖は張り詰め二人の身動きを封じる。

こよりは沙織の手を引くと窓から飛び降りた。

風が下から吹き上げる。窓から飛び降りたことに気が付いて沙織は悲鳴をあげる。

「嫌ぁぁぁ！？　落ちるぅぅぅ！？」

「少し黙ってて」

沙織を抱きかかえこよりは飛行魔法を発動する。減速し近くのビルの屋上き着地すると、こよりはハンドガンを引き抜いた。

こよりの後ろで沙織はぶつぶつと呟く。

「飛んでた……あたし飛んでた」

「どうしようかなぁ、これは」

こよりは悩む。さて、どうする。

相手は二人だけという保証はない上、二人相手に勝てるかも分からない。沙織を抱えて飛んでもおそらく追い付かれる。

それに、まだ夕刻で一目もあるというのにこんな街中で仕掛けてくるというのか。

「やるっきゃないかな、やるっきゃ」

沙織を下がらせると弘佳がこよりの前に飛び降りてきた。弘佳の後ろに控えるようにして美智も続く。

「早いね、来るのが。それより良いの？　こんな街中で戦闘なんか起こして？」

「ならこんなビルの屋上でなく街中に降りた方が良かったのではなくって？」

「空から女の子が降りてきたらパニックってレベルじゃないよ」

「ならこの屋上で勝負をつければよろのしいかしら。美智、任せましたわ」

こよりがハンドガンを構えた。引き金を引く直前に、こよりの視界を影が遮った。美智がこよりの目の前に飛び出し提げた刀に手をかける。刀の柄でこよりの手を突き上げ、中段から横凪に刀を払った。こよりは吹き飛ぶ。左肩に鈍い痛みが突き刺さる。

美智の手には漆黒の刀身を持つ刀が握られていた。
黒夜叉。
刀身から柄まで黒一色の刀。

「痛っーー」

こよりは立ち上がる。
刀の一撃が見えなかった。
咄嗟に魔力盾を貼ったが防ぎきれなかった。
立ち上がったこよりを見て、美智は再び刀を構え直した。

「……外しましたか？」
「じゅーぶん、決まったと思うよ、決まってる」

でなければ、血はでるまい。
こよりが足を踏み鳴らした。美智の足元から鎖が飛び出す。魔力で構成された鎖は空を凪ぎながら美智に向かって蛇の様に飛びかかる。それが体に触れる寸前に美智が飛び出した。その行く先を新たに出現した鎖が防ぐ。
美智は足を止めない。刀を勢いよく振り切った。
紙を切るかの様に刀が触れるだけで無数の鎖を断ち切っていく。こよりが引き金を引いた。美智が放たれた銃弾を刀で弾く。

「！？」

切っ先が踊るように一閃を描く。美智が低い姿勢から刀を突き出した。

躱してこよりは魔法を発動する。鎖が四方から美智に向かう。その鎖を刀で振り払うと鎖は砕け散った。砕け散った鎖を吹き飛ばし美智は一気に距離を詰める。

こよりの貼った魔力盾を美智は一太刀で切り裂いた。魔力の塊を無数の欠片の状態へと還し、その欠片が放つ光の煌めきの中で美智は刀を引く。

「魔力盾を切り裂いたーー！？」

「……１．０２Ａ－０２Ｒダストエクスプロージョン」

美智が踏み込む。刀が空を撫でた。刀の軌跡が空を滲ませ膨らんだ。こよりの目の前で爆発が起きてこよりは宙に放り出される。爆風がこよりを傷付ける。

美智が地を蹴って跳び上がり黒夜叉を上段構えなら振り下ろした。こよりが咄嗟に魔力盾を貼る。空間に二重の魔力の塊が生成される。

「３．０１Ｂ－０１Ｆディフェンスシールドデュアルストラクチャ」

「……ごめんなさい」

二重に貼られた盾を一閃で砕き黒夜叉はこよりを貫いた。

【9ー12】

【9ー12】

梨花は目を覚ました。病室のはめ殺しの窓が割れて夜風が流れ込んできていた。ガラスの破片を音を立てながら踏みしめて、佐樹が立っていた。
月を背に立つ佐樹の表情は梨花からは窺い知れない。

「佐樹ちゃん……？」

佐樹は梨花の拘束具を外す。梨花の身体を抱き起こしベットから立たせた。

「ありがとう」

警報が鳴り響いた。病室のドアが破られる様に荒々しく開き警備員が入ってきた途端に撃ち抜かれる。
佐樹はハンドガンを構えたまま、梨花を急かす。

「気付かれたようね。そこの窓から脱出するわ」
「うん、分かった！」

窓の縁を蹴って梨花と佐樹は外へ飛び出した。飛行魔法を展開し二人は地上数メートルの高さに浮く。空を蹴って横のビルの屋上まで移動した。
二人の眼前を閃光が走り抜ける。

「！？」

「この程度で警備を突破されるとは思いませんでした」

ビルの屋上に一人の少女が着地した。佐樹は星砕の銃口を向ける。

小柄な身体。それに似つかわしくない左手に持った巨大な鉈の様な大剣。

璃瑠がそこに居た。

「落合璃瑠か……」

「今すぐ武装解除して投降してください。そうでなければ身の安全は保証出来ません」

「断ると言ったらどうするのかしら？」

「斬ります。上からは逃走は断固死守せよとの命令が出ていますので」

「梨花、ここは私に任せてあなたは離脱して」

「で、でも」

「ＷＩＥＣＳ無しでは厳しいわ。離脱しなさい」

「……分かったよ、佐樹ちゃん」

璃瑠が動く前に梨花の姿が消えた。二つ先のビルの屋上に梨花がいつの前にか移動していた。

璃瑠が追おうとすると、それを佐樹の射撃が阻む。

「３．０２Ａ－０５Ｍインペリアルバスター」

佐樹が腰から提げたレール状の拡張バレルにハンドガンを連結し持ちあげる。引き金を引くと同時に光芒が璃瑠を襲う。地を蹴って宙返りで璃瑠は空中に舞い上がる。

空中に舞い上がった璃瑠を狙い二門同時発射された光芒が瞬く。その隙間を縫って落下していくように璃瑠は佐樹への距離を詰める。佐樹は拡張バレルとの連結を解除するとハンドガンの銃口を璃瑠に向け引き金を引いた。空中に居る璃瑠に向かって閃光が走る。細い光弾が数発放たれそれを璃瑠は躱し光弾は夜空の黒に呑まれて消える。

落下の勢いを利用して璃瑠は空中から辻風を叩きつけた。

佐樹の張った魔力盾が辻風を受け止める。金切り声の様な金属音が響いて火花が散る。

防がれた辻風を璃瑠は引き戻しバク転で飛び退く。眼下を佐樹の放った閃光が走り抜け地を砕いた。

「見事なものね」

「どうも」

【9ー13】

【9ー13】

魔力盾は堅固な壁だ。自由に作り出せる魔力の壁。その防御方法の存在により魔法使いは圧倒的な防御方法性能を誇る。
あるものは撃ち出す物に仕掛けを。
あるものは防ぎ切れない程の魔力を。
魔法使いとの戦闘の為に、その盾を抜く為の様々な方法が考察されてきた。

だからこそ、佐樹は璃瑠の戦闘スタイルに疑問を抱く。
確かに巨大な得物を用いた格闘戦はプレッシャーもダメージも大きい。射撃に頼る佐樹のような相手に対して懐に潜り込めれば戦局を有利に運べるのもわかる。
だが、それでは魔力盾を抜けない。
壁をいくら殴っても壊すことは難しい。

だからこそ、盾を抜くか、破壊するような射撃や、防ぎ切れない程の魔力を放出する砲撃が選択されてきた。魔法使いの格闘戦は魔力盾の存在がある限り軽視される。
璃瑠のような格闘特化型の魔法使いは珍しいのである。
梨花のような格闘寄りの万能型魔法使いにおける格闘戦の意味合いと、璃瑠のような格闘特化型魔法使いの格闘戦の意味合いは違うのである。

「（だから、何か奥の手がある筈だわ）」

佐樹が地を蹴った。璃瑠の方を向いたまま飛び退いて空中に舞い上

がる。璃瑠が天高く飛び上がり辻風を構え直す。佐樹は射撃を放った。放たれた閃光を璃瑠は辻風で叩き落とす。
佐樹は魔法を発動する。

「３．０２Ａ－０４Ｑアサルトビット」

佐樹の周囲で光の粒子が舞い上がる。それは集束し、無数の閃光と変わり放たれた。それらはてんでばらばらな方向へ飛んでいくと急に向きを変え璃瑠に向かって一斉に飛んでいく。
数十の魔力弾をばら撒き、目標に向かって波状攻撃を仕掛ける。威力は低いが命中率は高い。

璃瑠が空を蹴る。後ろに飛んで距離をとるも放たれた無数の魔力弾は璃瑠に向かって飛んでくる。
璃瑠は防御力が低い。魔力盾の性能が人より低いのである。
だからこそ、回避の難しい攻撃は脅威となる。
扇状に広がった針のような魔力弾は璃瑠に向かって集束していく。
回避は不可能と判断した璃瑠は辻風を腰の後ろに回すようにして中腰の構えをとる。

「だぁっ！」

璃瑠の元に降り注いだ魔力弾が連鎖的な爆発を起こした。月夜の闇を爆炎が撫でた。広がった爆発が煌々と輝く。
直撃を確信した。

「！？」

佐樹の横に高速で何かが回り込んだ。
辻風を構えた璃瑠が向かってきて居た。

右手のハンドガンを即座に向けて引き金を引く。
佐樹の射撃は正確に璃瑠を貫き璃瑠の姿は撃ち抜かれた箇所から崩壊し光の粒子に変わった。

「な……？」
「でぇぇぃっ！」

その虚を突いて璃瑠が死角から飛び込んだ。膝を曲げて辻風を身体の前で縦に構え下に貫く様に落下の勢いを利用して飛び込む。反応の遅れた佐樹は咄嗟に魔力盾を張るも璃瑠の一撃を受け止めきれず盾は砕け辻風は佐樹の胴体を強く打ち付けた。
そこから身をひねり璃瑠は回し蹴りを叩き込む。空中で体全体を回転させるような回し蹴りが佐樹の首元にヒットし佐樹を大きくよろめく。
佐樹がハンドガンの引き金を引いた。璃瑠が盾の様に辻風を構え閃光が辻風にぶつかり火花を散らす。
その隙に佐樹は距離をとる。

辻風を構え直し、何も言わずに見つめてくる璃瑠に向けて佐樹はハンドガンを構え直す。

「今の攻撃が鈍器でなく真剣だったなら」
「……。」
「終いだった、そう言いたいのかしら」

【9ー14】

【9ー14】

佐樹は苛立ちを隠しきれない。格闘特化型魔法使いなどという色物に砲撃特化型魔法使いでなおかつ、対接近戦に絶対的な性能を誇る５ナンバー、プレッシャーリージョンを所有する身として二撃も入れられたのは屈辱だった。
しかも二度目。

「幻影魔法によって相手の隙をつき格闘戦に持ち込む。短時間で生成する幻影は体した精度ではないけれど、高速から放たれることで一瞬の動揺と隙を作ることができる。けれど、そんなこけおどし、二度も通じないわ」

２．０２Ｂ‐０３Ａイリュージョン。空間に干渉し、幻影を投射する魔法。
璃瑠の幻影魔法はそこまで精密ではない。だが璃瑠のスピードによる撹乱から突然放たれる幻影はそのスピード故に一瞬では見分けがつかない。
幻影により隙を作ることで格闘を叩き込む。
張られた盾を破壊するのではなく盾を張らせない。
それが璃瑠の戦略だった。

「ふざけないで」

佐樹がハンドガンの引き金を引く。
それよりも速く既に璃瑠は動く。
ビルの隙間を縫って璃瑠は飛翔する。死角に移動した璃瑠を佐樹は

加速をつけて追う。ビルのすれすれを飛びながら璃瑠は後をつけてくる佐樹を見た。
佐樹がハンドガンを二丁続けてぶっ放した。璃瑠はローリングしながら高度を下げ回避行動に移る。
高速で動き回る璃瑠を照準に捉えようとしながら佐樹はその後を追う。

璃瑠が急ブレーキをかけた。加速してきていた佐樹との距離をそれにより一気に詰める。

「舐めないで。５．０２Ｂプレッシャーリージョン」

５ナンバー、プレッシャーリージョン。範囲内のものへ下向きのプレッシャーをかける魔法。
佐樹の告げた言葉が空間を振動させそれは巨大なものへと共振していく。鐘を打ち鳴らすような音が佐樹を中心に広がっていく。空間が振動した場所からくすんだ色へと変わっていく。

「くっーー！」

璃瑠は急降下して距離をとる。くすんだ色へと変わっていく空間が迫り璃瑠は加速してプレッシャーリージョンの範囲から逃れようとする。そこを狙って佐樹が砲撃を放った。

「３．０２Ａ－０５Ｍインペリアルバスター」

星砕が光芒を撃ち出す。大気を揺らし膨大な魔力の塊が光を散らしながら全てを飲み込んでいく。璃瑠が振り返りざまに魔力盾を張るもそれごと光芒は飲み込んだ。
佐樹の後方で空を切る音がし、プレッシャーリージョンを発動する。

後ろをとった璃瑠は飛び退き発動範囲から一気に逃れた。
夜という条件は璃瑠にとって有利に働いていた。暗い為に幻影は見分けがつかず、高速移動によって行き先を見失う。光芒に呑まれた幻影は消え去っていた。
佐樹の前に璃瑠は立ちはだかる。

「見事なものね。これだけのスピード、並の人間には不可能だわ」
「……あなたのそれだけの才能も、他に使い道もあったでしょうに」
「少なくとも私は後悔していないわ」
「テロによって国が変わることなんてありえません。馬鹿馬鹿しい」
「国なんてどうでもいいわ」
「……あなたは独立派なんですよね」
「えぇ。けれど得だと思ったから協力しているだけ。私にとっては些細な事よ」
「……あなたは……？」
「私にとって正しいものの為に戦うの。あなたの様な政府の犬とは違うわ」
「信念で勝てるなら、あやかりたいですよ。あなたの目的が何にせよ、私のやる事は変わりません」
「この数を前にしてそれを崩さないのは感心に値するわ」
「数……！？」

気付けば周囲を囲まれていた。黒のマントに身を包んだ物たちが数えてみれば十二人。その手にはサブマシンガンが握られており、璃瑠と佐樹の周囲を囲い浮遊していた。

後続の部隊が居たというのか。
璃瑠は舌打ちをする。今までの報告では佐樹は単独行動が中心の為であった、それ故に油断していた。

完全に失態だった。

「魔法使い１２人を相手にするつもりかしら」

「……。」

【9ー15】

黒のマントの一人が佐樹に近寄り何かを耳打ちする。佐樹は頷いて宙を蹴った。
一気に璃瑠との距離を離すと、背を向けて飛んでいく。

「な、待て！」

その刹那、黒マントの手に握られたサブマシンガンの銃声が轟いた。
璃瑠は急降下する。連射されて打ち出された弾丸が璃瑠を追う。銃弾がエネルギー弾だと璃瑠は気付いた。

璃瑠の後ろを三人の編成が追う。銃弾の嵐をかいくぐり璃瑠は翔ぶ。
直線飛翔では璃瑠のスピードは、圧倒的だった。
斜め前からも銃弾の嵐が闇夜を裂いて飛んでくる。
急停止して、宙を蹴り上げ旋回して射撃を回避する。暗闇の中、足元から魔力弾が無数に飛んできて璃瑠は反応が遅れた。
魔力盾を貼るも幾つかの魔力弾が璃瑠を直撃した。

「っーー！」

魔力弾が着弾と同時に爆ぜて璃瑠は吹き飛ぶ。

「３．０２Ａ－０５Ｍインペリアルバスター」

頭上から佐樹の放った光芒が轟音を立てて降り注いだ。
璃瑠の眼前を光が通過する。直前で回避したものの余波で璃瑠は態

勢を崩す。
黒マントの魔法使いは長い棒状の物を振りかざした。その先端にパルスが走り光る刃を作り出す。魔力の刃を焼き付けた槍だった。

槍を構え魔法使いが璃瑠に突撃する。それを援護して無数の弾がばら撒かれる。サブマシンガン無数の一直線の弾だ。しかし、それが一斉に放たれることで線ではなく、面となっていた。
銃弾の嵐を旋回して避けるも槍を持った魔法使いに接近を許した。貫くような一撃をとっさに辻風で受け止めるもその勢いに押し込まれる。
槍を振り払うと頭上から狙い澄ました魔力弾の一撃が璃瑠の股を貫いた。

「ぁっーー！」

細かな血飛沫が舞う。痛覚を押し殺そうと歯を食いしばる。再び魔法使いが槍を突き出す。魔力の刃を
受け止めるが、魔法使いが槍を即座に引いて槍の柄で璃瑠に一撃を入れる。

璃瑠は、よろめいてそこへ魔力弾の雨が降り注ぐ。

「璃瑠！」

弾幕を呑み込んで砲撃が放たれた。闇を切り裂いて光の洪水が天を貫く。
美樹が砲撃を放ちながら璃瑠の側へ駆ける。

「なんで美樹さんこっちにいるんですか！？　高田梨花を追えと！」

「瞬間移動なんて追いかけられるわけないだろう！」
「職務放棄です」
「お前を放棄する方が問題だろが」
「え……？」
「１３人相手にするのも無理だ。撤退するぜ」

敵は梨花の撤退を援護しようとする気はないらしい。ここで包囲網を張ってこちらを潰そうとしてきている。

「璃瑠、なんか手はないのか。こういう時にぴったりの魔法とかさ」
「フリーモジュールシールド、アクセラレイトチャージャーサーキット、エアコントロール、ディフェンスシールド、アクセラレイト、スカーレットスキャーダ、イリュージョン。私の手持ちはこれくらいです」
「正面突破しかなさそうな手持ちだなーー！？」
「美樹さん！？」

それは一瞬の出来事で、けれど璃瑠には永遠のような長さに見えた。雷光が美樹を貫いた。
力なく四肢は揺れ身体は落下していく。落ちていく美樹に手を伸ばしてその手首を掴んで抱き上げるように美樹の身体を捕まえる。

「美樹さん！　しっかりしてください！　美樹さん！」
「っ……ぁぁ」

身体を支えている璃瑠の手に生温いものが伝う。

「……ぁぁぁ

「ああ！！！

【9ー16】

【9ー16】

魔法使いの一撃は美樹を貫いた。撃たれた美樹を支えた璃瑠の手を血が伝って行く。

魔法使いの一人が突撃した。槍の一閃が璃瑠に迫る。それを寸前で躱すも刃の切っ先が璃瑠の頬をなぞった。

「っーー」

「3．02A－05Mインペリアルバスター」

璃瑠の真後ろをとって佐樹は至近距離からの砲撃をぶっ放す。回避が間に合わず璃瑠は直撃を受けた。莫大な魔力を一点にねじ込まれ璃瑠の身体はきりもみ落下していく。ビルの屋上に叩きつけられ骨が軋む。美樹を寝かせると爆煙を貫いて璃瑠が飛び上がり佐樹へと斬りかかる。璃瑠の剣は魔法使いの槍に阻まれて、ぶつかりあった得物が振動をかち鳴らす。

阻まれた一撃は届かず、璃瑠を狙って魔力弾が集束する。璃瑠の張った魔力盾を貫いて魔力弾が璃瑠を襲った。

身体を貫かれる度に痛覚が悲鳴をあげる。血が熱を生む。視界が赤く染まる。

木の葉のように璃瑠の身体は力なく舞った。

佐樹が砲身を構える。引き金を引き魔力の奔流が璃瑠を飲み込む。

全身が焼かれるような痛みにすり減る。

璃瑠の意識が遠くなる。痛みに引かれて意識が遠ざかる。

「……あぁぁぁ

璃瑠の振り抜いた右手には一振りの剣が握られていた。その刀身は長く、複数の鋭利なフレームをボルトで締め付け、その組み合わせて成り立っている。鋼色の刀身を縁取るのは紅。
幅は一番太いところで６０ｃｍはあるだろうか。
中央には小型のエンジンのようなものがはめ込まれていた。
そこから伸びる蛇の腹のような細長いチューブ。
辻風に収納されていた剣、霧風は一人の犠牲をもってしてその威力をしらしめた。

「あの大剣は鞘だと言うのか！？」

【9ー17】

【9ー17】

辻風はただの剣ではない。その巨大な刀身には一振りの剣が収納されている。剣であり鈍器であり、「鞘」でもある。
それに仕込まれた剣、霧風は小型魔力生成エンジンを積む特殊な剣。近接特化の璃瑠にとっての秘密兵器にして最終兵器。全てを斬り裂き、全てを砕き、全てを貫く剣。
振るった後には何も残さず、存在だけが語られていく。故に「霧風」の名を冠する。

「……霧風ぇぇぇ！」

紅い弧を描きながら璃瑠は一気に接近する。魔法使いは魔力盾を張る。辻風が魔力盾に衝突し一撃は防がれる。だが璃瑠は突進の勢いを利用して盾に衝突した辻風を軸に魔法使いの上へ身体を持ち上げて宙返りをした。身体を捻り霧風を振り切り璃瑠は落下の勢いを利用して斬った。
そこから身を捻り霧風を真横に斬る。

血飛沫が上がり力尽き魔法使いが倒れてくるより先に璃瑠は次の目標の前まで移動していた。構えた槍を辻風をぶち当てて打ち上げると霧風を斜めしたから振り上げる。

「三っーー」

斬った相手を蹴り飛ばすと、即座に移動する。降り注ぐ銃弾の雨に向かって霧風を振り切ると光の粒子が刃のように飛んでいき銃弾を弾き飛ばしながら一人の魔法使いを貫いた。
それを追うように璃瑠は宙を蹴る。敵が魔力盾を貼るよりも速く璃瑠は切り抜けた。
璃瑠の姿が消えた。
魔法使いの後ろに突如出現し、魔法使いは慌てて引き金を引いた。
銃弾が璃瑠を貫き璃瑠の姿は瓦解する。

「幻影!?」

そう言い切る前に頭上から舞い降りた璃瑠が両手の剣を振り切った。

「六っーー!」

璃瑠が剣を構え直す。右手には霧風を、左には逆手で持った辻風を。
サブマシンガンが銃声をけたたましく轟かす。闇夜を切り裂いて閃光が連なって飛ぶ。
その隙間を縫って璃瑠は飛び出した。
璃瑠の突撃で魔法使い達は散開する。後退しながら引き金を引き続けるも、璃瑠は一向に捉えられなかった。

「ぁぁあああああああああぁぁあぁぁぁぁぁぁあああ!!!」

璃瑠の一振りが紅い閃光のように瞬きサブマシンガンを砕きそのまま斬撃となり血飛沫をあげる。
即座に翔び通り抜けざまに、二人まとめて斬った。
璃瑠の雄叫びが続く。

「急になんだっていうの、あれは！」

【9－18】

【9－18】

佐樹は自身の内の魔力を練り上げる。手のひらへそれを集めて巨大な魔力の塊と変える。周囲の魔力が集束し光の粒子が鼓動する。光の粒子が舞いそれらが大気を振動させていく。光の粒子は近付き離れ、互いの進路を妨害せずに舞い踊る。粒子はいつしか線になり、線はいつしか粒子になり。それを繰り返しながら鼓動を続ける。

全てを屠る光。

「3．02A－05Tインペリアルジャッジメント」

それはまさに壁だった。一点を貫くものではなく、一面を制圧する光芒。闇夜に沈んだ街の景観を明るく映し出すほどの光。

壁のごとく迫る魔力の塊に璃瑠は霧風を突き立てる。魔力の奔流を切っ先で貫く。

璃瑠の姿は光の奔流に呑まれた。

「はぁ……はぁっ。やったの？」

佐樹は勝利を疑った。その期待は舞い上がった血飛沫に塗り潰される。魔法使いが一人斬り裂かれ無惨な姿に変わる。

「っ……撤退！」

残り二人となった魔法使いに佐樹は退くよう指示を飛ばす。ハンド

ガンを拡張バレルに接続し、砲身を構え引き金を引く。バレル内で生成された膨大な魔力が砲撃として打ち出される。その光芒を璃瑠は斬り裂いて粒子となった砲撃の欠片を後にして佐樹へと距離を詰めにいく。距離にして数メートル。

「ぁぁあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「っ……5．02Bプレッシャーリージョン」

佐樹の5ナンバーが発動する。佐樹を中心に周囲の空間を彼女の支配下へと変えていく。璃瑠は即座に空を蹴って直線飛翔の向きを変える。

雨の様に魔力弾が降り注ぐ。璃瑠は落下しながら距離を取り辻風を盾にした。辻風にぶつかり爆ぜた無数の魔力弾が璃瑠の視界を奪う。爆ぜるたびにフラッシュを焚いたように眩い閃光がはしる。

「ぁぁあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……はぁっ……はぁっ」

ようやく開けた視界の遥か彼方に佐樹が見えて璃瑠は唇を噛みしめる。

取り逃した。

璃瑠は負傷した美樹の元へ急ぐ。

目の前に降り立った璃瑠を見て美樹の目には動揺の色が見えた。

敵を倒しても、報われない。

こんな自分じゃ届かない。

「美樹さん？　？……私……気持ち悪いですよね」

「……璃瑠……お前……」

「こんなの、変ですよね」

血が滲む。

「だって普通の女の子じゃないから」

「私はアルカナ……第一次高次元接触計画の一環で生み出された強化人間です」

【9章・死神は舞い降りた完】

【10章・星は意味をもった】

【10章・星は意味をもった】

「帰りたくないな、うん帰りたくない」
「……そっか」

こよりと美樹の乗っている観覧車は徐々に高度をあげて、夕日も差し込んできている。大地は段々と遠くなり一日中遊び尽くした遊園地を一望出来た。

「こっから私の家は見えないかなぁー、無理ぽいかな」
「美樹ちゃん」
「ん？」
「この観覧車の中は、あたし達以外の誰も居ない、誰も知らない、誰も言わない。ここなら、あたし達の関係は何も言われない」

差し込んだ西日にもたれかけて、こよりは言う。

「でも、観覧車はいつしか地上に着いちゃうんだよね。着いちゃう」
「……誰も知らない場所まで二人で逃げちゃうか」
「それもいいかな、いいかもね。でも、あたしはそれじゃあ嫌だな。あたしはみんなに祝福される世界がいいよ」
「私たちが祝福される、ねぇ」

遥か下に見える人の影は、男女の区別もつかない。
それに目をやりながら美樹はこよりの話に耳を傾ける。

「誰かに認識されなくちゃ、あたし達の存在は意味のないものになっちゃう、意味のないものに」
「……それは違うよ。私は、世界の果てでだって、誰からも認識されない場所でだって、こよりの事ちゃんと見てる。それじゃあ駄目なのかな」
「それは嬉しいよ。嬉しい。でも、それじゃあ世界で生きていくのには辛すぎるよ」
「どんな世界だって構わないよ。私はこよりを見てる、こよりは私を見てる。それで、充分なんじゃないかな」
「それは美樹ちゃんが強いからだよ、強いから」

こよりのこの渇望からは彼女は抜け出せないのだろうか。
今まで周囲からの賞賛を一身に受けてきた彼女にとって、周囲から認めてもらえないことは、そんなにも彼女を苦しめるのだろうか。
こよりのその意識は変えられないのだろうか。
そう美樹は思う。

「あたし達は理解されないのかな」

「こよりちゃん、目が覚めたのねぇ」
「……あたし……あれ？　あたし、あれ？」

こよりは目をさました。いつかの記憶を夢に見ていた気がする。
おネェが覗き込んでいるのに気付いた。

「負傷したのよぉ。昨日の夜、回収して……」
「……沙織ちゃんは？」
「あなたが倒れていたところには居なかったわぁ」

「……革新派に奪取されたかな、奪取」
「……どうするのぉ？」

入間沙織が奪取された。
革新派がそうまでして彼女を求めた理由は分らない。だが、好意的な事態とは言えなかった。

【10-1】

【10-1】

狭山はPCに数種類のデータを表示させた。

「魔法は人体に有害、かつ使いこなすには不安定だ。脳波が関わっているとは言われているがはっきりとしない、まぁ才能としか言いようがないな」

狭い一室で狭山と美樹は向かい合って座っていた。

不機嫌そうに美樹は顔をしかめる。

魔法は元素Maによる特殊な化学反応だ。元素Maは一定の脳波に反応するという性質を生かし、莫大なエネルギーを得る。

だがしかし。

「魔法というのは未知のものだ。元素Maによる化学反応だなんて説明をつけた気になっているが、Maは元素ではないし、それだけではあれだけの反応を起こせる説明すらつかない」

だが、魔法は確かに存在する。

私にはその力がある。

けれど、説明はつかない。

「今は解析が進んでいるとはいえ魔法発見当初はまさしく未知との遭遇だった。いち早く魔法を人類の手に、それはこんな無謀な物を生み出してしまった。魔法を使えるようにする方法として考えられたのが人体改造だ」

狭山が璃瑠の個人データを美樹に見せる。
アルカナ。
薬品と洗脳、訓練によって調教された子供たちをそう呼ぶという。
淡々と羅列された文字列で感覚を麻痺させそうになる。そこに書かれた言葉には同情も罪の意識も何もない。ただひたすら、行われた「調整」と「結果」の経緯を書きつらねているだけである。

「落合璃瑠はアルカナと呼ばれる強化人間の成功例だ。魔法、身体能力共に並の人間を超越している」

美樹が舌打ちした。狭山は続ける。

「だからって強化人間だなんて、と言うかもしれんがな、それが手っ取り早いとかつて考えられたんだな。原理も分らない、使える人間に共通性もない。そして魔法による毒性で魔法使いは早死にする。使える人間を探すより作った方が早いとな」

理屈は分かる。けれど、理解できるわけでない。
魔法の魅力に取り付かれ、狂った彼らの生み出した結果に賛成なんてできるわけがない。

魔法はおとぎ話のように幸せで綺麗なものではない。新しい時代のエネルギー兵器でしかない。
彼らが夢見たとしても、その行き着く先は理想郷でもなんでもない。
だから、こんな、こんなものになってしまっているのだと。そう美樹は思った。

【101-2】

私は課長に住所を聞いて璃瑠の家を訪ねていった。マンションの一室のインターホンを連打していると、チェーンをかけたままドアが開いた。

「璃瑠、こんなとこに居たのか」
「……なにしにきたんですか？」
「お前を探しにだよ」
「住所、課長に聞いたんですか」
「私は鼻が利くんだよ。……入っていいか」

一度、ドアが閉まってチェーンを外す音がした。

璃瑠の部屋は殺風景だった。備え付けの薄いカーテンと、部屋の隅にベット。小さなタンスの傍には電子機器が散らばっていた。

「……アルカナの事、聞いた」
「……気持ち悪いですか？　気持ち悪いですよね」
「薬品と洗脳、肉体改造と特殊な訓練。正直者言うとそんな物、薄気味悪いし、理解出来ないし、許せない」
「でしょうね」

それは正直な気持ちだった。非現実的な事実を私としては容認したくない。強化人間だなんて計画、受け入れられるわけがない。

「でも、私は璃瑠を知ってる」

アルカナだとか関係ない、落合璃瑠という人物を知っている。落合璃瑠という人物を好意を抱いてるちゃんと璃瑠として認識してる。些細な差異があったて、璃瑠を知ってる。

「何が言いたいんですか」

璃瑠の目を見つめて、私は言葉を探す。

「私達という存在も観測者によって確定されるなら、全ての人間は無数の側面を見せる。何人が何百人が何億人がお前を観測したって、何億の側面が生まれたって、何億の観測者がお前を決定づけたって私は私の目でお前を見てる。

どんな言葉で飾ったって、私は本当の璃瑠を知ってる。
どんな事実で隠したって、私は本当の璃瑠を知ってる。
どんな虚言で逃げたって、私は本当の璃瑠を知ってる。
私は璃瑠を知ってる。だったら全部、些細な事じゃんか。
アルカナだろうとなんだろうと、璃瑠は璃瑠だろ」

「世界がどうあったって、私は璃瑠をちゃんと見てる。だから、そんな些細な事で泣くなよ」

【10ー3】

私の携帯が鳴った。横で寝ていた璃瑠が目を覚まして私に怪訝な目を向ける。
出る気にはなれなかったが、発信主が六課であったので私は渋々と通話ボタンに指を伸ばす。

「はい、伏見」
『今何処です！？』
「なんすか」
『革新派と見られる武装グループが都内各所で武装蜂起しました！』
「え？」

状況は思った以上に切迫していた。
都内5箇所で、革新派の武装グループが一斉に武装蜂起。同時多発テロ。

なぜ、このタイミングで。

『声明は出ておらず、襲撃施設の関連性も不明です』

今まで割とおとなしかった革新派が一気に動いた。
何かの機会を待っていたとでも言うのか。
緊急招集の電話を切った私の手を璃瑠が掴んだ。

「私も行きます」

「わかったよ」

璃瑠の目が揺らいでいないことに気付いて、わたしは頷く。そこでまた携帯が鳴った。

「もしもし!?」

『……美樹ちゃん?』

「こより……?」

電話の先の声は聞き間違えようのない声だった。

私の携帯電話の番号は変えていない。こよりはまだ私の番号を覚えていたことに喜びを覚えた。

「こより!?　どうなってんだよ」

『聞いて。革新派のグループが都内各地で同時多発テロを起こしたけど、彼らの狙いはそれじゃない』

「なに?」

『そっちは陽動で本丸は別にある』

『新宿で二度目の門を開くつもりだよ』

【10ー4】

【10ー4】

ボックスカーの後部座席で黒蛇を磨きながら、課長からの無線を聞く。

『現在新宿東永井ビルは革新派のテロリストによって占拠されている。人質の数は不明だが、都内各地で同時多発テロを起こした革新派が、そこまで大量の人員を投入できるとも思い難い。そのため、最上階の73階から63階の間に集中していると思われる』

「作戦は？」

『SWATが屋上からヘリ2機によるヘリボーン（ヘリによる兵士降下）と平行し、地上より最上階まで駆け上がる。公安六課はそれに随行する』

六課からこっちに回せるのは私と璃瑠だけ。

こよりの言うことが事実なら、こっちで革新派は何か大それたことをやろうとしているらしい。

「私は73階とか無理っすよ、駆け上がれないって」

「流石に魔法使いでの垂直上昇飛行も無理ですね」

璃瑠と顔を見合わせる。武装グループによってエレベーターは固定されていることを考えると、駆け上がるしかないが、私には無理だ。

73階ほどの高さとなると、そこまで翔ぶのも時間がかかる。

『近くのビルの屋上から一気に取り付け。100M圏内に40階建

てのビルがある。まだマシだろう』

ビル風が吹き抜ける。ここからは高層ビル群さえも見下ろす事が出来た。
新宿で最も高いビル、新宿東永井ビル。その屋上で弘佳は立ち吹き抜ける風に流される髪を抑えていた。

後ろでは着々と準備が進む。半円状の透明なドームから無数のコードが伸び、大小の機械に繋がれていた。
そのドームの中で、入間沙織は俯いて座っていた。

「……下が静かになったようです」

美智が弘佳の元に歩いてきた。屋上に佇む弘佳を美智はぼんやりと見つめる。

「襲撃の時が迫っているようですわね」
「……間に合うでしょうか」

この計画発動までにはまだしばらく時間がかかる。

「そこは革新派の信念とやらに期待しましょうか」
「……」

押し黙った美智の目を弘佳は覗き込む。

「降りるなら今のうちですわ。おそらくこれが失敗すれば革新派は保っていられないでしょう」

「いえ、これで良いんです」
「敵が来ましたわね……！」

【10-5】

まるで弾丸のように飛び出した璃瑠の後ろを追いかけるように美樹は跳ぶ。空を蹴ると後ろでつむじ風へと変わる。

右手の方で閃光が走ったのが見えた。続いて爆音が轟く。

『武装ヘリ2機撃墜されました！　？屋上より魔法攻撃と思われます！』

『璃瑠、美樹。別働隊を待つな、一気に屋上に取り付いて敵魔法使いを制圧しろ』

「了解」

「上は無茶を言うもんだな」

美樹と璃瑠の接近に気がつかれ、ビルの窓から狙撃手が二人に向かって銃を連射する。

「美樹さん！」

「力押しはどうかと思うよ、私は！」

美樹が黒蛇を振り上げる。拡張バレルが接続し、すエンジンが鼓動を打ち、粒子が集束する。狙いをつけて、引き金を引く。魔力の砲撃が、ビルの表面を削る。爆煙が噴出し、視界を遮蔽する。

その隙をついて、璃瑠が爆煙を切り裂いて突っ込む。美樹がそれに続く。

突っ込んだ先は企業のオフィスの一角だったようだ。

オフィスデスクを飛び越えて、着地と同時に璃瑠が辻風で敵兵を斬る。

美樹が引き金を引き続ける。魔力の弾丸が連射されて、針のような閃光が規則正しく無数に翔ぶ。敵兵を撃ち抜いて、即座に振り返る。銃を構えた敵兵が見えた。

視界の映像がスローになる。

銃口の先が、弾丸の軌道が、引き金を引く指が、見える。

美樹がスライドシフトを発動する。自身の位置をを一気に「ずらす」。

弾丸が直前まで美樹がいた位置に突き刺さる。一瞬で美樹が移動したことで動揺した隙をついて、美樹が撃ち抜く。

部屋のドアが開いて敵兵がアサルトライフルをぶっ放しながら突入してくる。

美樹は目の前のオフィスデスクをスライドシフトでずらし上げる。物理法則を無視してオフィスデスクが弾かれたように突然浮かび上がり美樹の壁となる。

「ぶち抜けぇ！」

黒蛇が拡張バレルを蛇のようにもたげて、接続すると砲撃を放つ。オフィスデスクごと貫いて光芒がビルの一室を横切る。敵兵をまとめて吹き飛ばす。

「美樹さん、屋上へ向かいます」

「援護するぜ」

【10ｰ6】

弘佳は物音に気付いて振り返る。屋上のドアが乱暴に開いて、何か小さいものが飛び出して来たのが見えた。

「グレネード！」

手榴弾だと気付いて咄嗟に魔力盾を貼る。緩やかに放り投げられた手榴弾を美智が跳んで、蹴飛ばした。

蹴飛ばされた手榴弾が離れた位置で爆発した。美智が着地すると同時に彼女の刀、黒夜叉を振り抜く。

地をなぞる様に刀を振り上げた。振り切った刀から飛ばされた衝撃波が大地を這う。

屋上のドアへ向かった衝撃波は飛び出してきた璃瑠が切り裂いた。

「！？」

璃瑠が鞘の辻風から霧風を引き抜く。

霧風が鼓動し、紅い粒子が吹き上がる。

美智が地を蹴った。美智の黒夜叉と璃瑠の霧風が激突する。

火花を散らし金切り音が響く。

「……落合璃瑠！」

「だからなんですか……！」

美智が飛び退く。それを追って璃瑠が跳んだ。空中で璃瑠は辻風を叩きつける。美智がそれを防ぐと、璃瑠は半回転から右手の霧風を

斬りつける。それを仰け反って交わし美智は姿勢を低くして飛びのいた。着地と同時に黒夜叉を地面に叩きつけると、衝撃波が翔ぶ。それを飛び越えて璃瑠は再び距離を詰める。美智が衝撃波を二発飛ばし、璃瑠がそれを切り裂く。その隙をついて刀を水平に突き出して美智が突撃した。鋭い一閃を辻風を盾の様に構え防ぐとその衝撃が璃瑠の身体を通り抜ける。

「1．02A－02Jフラクタル」

刀の切っ先から一閃の衝撃波が走る。璃瑠の身体は吹き飛んだ。

着地点に向かって美智が刀を振り切り斬撃を飛ばす。
衝撃波は璃瑠の辻風に防がれると離散した。離散した衝撃波が璃瑠の髪を翻して行く。

美智が飛び込む。速いと呼ぶには速すぎた。
常人であれば、おそらく目で捉えることすら難しいスピードだった。踏み込む足が立てた音と切れ目すらなく美智が一瞬で璃瑠の喉へ刀を突き出す。
身構える隙すら与えず美智の一閃は璃瑠を刺し貫きかけるが、その刀を握る手を璃瑠は蹴り上げた。

振り上げた足を叩きつける様に地面に降ろして、それを軸に逆手で辻風を突き上げる。その重厚な鋼の一撃を美智は生身の左手で受け止める。

「な！？」

美智が刀を突き出す。その鋭い突きを璃瑠は飛び退いて避けた。突きの姿勢から美智が飛び込む。飛び退いた璃瑠までの距離を一気に

詰める。咄嗟に横薙ぎに璃瑠は剣を払う。その一撃を美智は垂直跳びで飛び越えて刀の切っ先を振るう。

刀が掠めて璃瑠の頬から一筋、血が伝う。

「何なんですか、あなたは」

「……アルカナ」

【10-7】

「何なんですか、あなたは」
「……アルカナ」
「な!?」
「……分かるはず、お前も同じアルカナなら」

美智の言葉に璃瑠は動揺する。アルカナ計画は璃瑠以外の生き残りは破棄したと聞いていた。

「まさか……そんな……!」

美智が飛び込む。目で追いきれない。日差しが刀の刃に弾かれて視界のすみで光が瞬く。
細く研ぎ澄まされた刀の見かけに似つかわず、璃瑠が受け止めた美智の一撃は重い。

「アルカナ計画は全て凍結、破棄されたはずです」
「……落合璃瑠以外は」
「なら、あなたは!」
「……奇跡的に生き残ったイレギュラー」
「なにを」
「……アルカナの成功体……ならここでつぶす価値があります」
「私には潰される価値はないのですが!」

璃瑠が地を蹴る。美智の足元を狙って辻風を横凪に払う。重厚な鋼の塊の一撃を美智は蹴り返した。

「っ！？」
「……生温いです」

美智が刀を振り抜いた。当たる距離ではなかった。しかし、刀の振り抜いた軌跡にそって衝撃波が飛ぶ。至近距離で放たれた高速の衝撃波を璃瑠は霧風で受け止める。剣に受け止められた衝撃波は無数の風へと変わり璃瑠の目の前で爆散する。

「……アルカナの成功体、この程度ですか……？」
「あまり人を舐めないでもらいたいですね」

璃瑠が地面に剣を叩きつける。地面を這う様にして紅い衝撃波が美智を狙い飛ぶ。
地を蹴って宙に浮かびそれをやり過ごした美智を狙って璃瑠も跳んだ。

叩き落とすように璃瑠が霧風を斬りつける。それを美智が受け止めるも璃瑠は加速をし、そのまま一気に押し通す。

ビルの屋上から空中に飛び出した二人は互いに距離を取りながら空中戦へともつれ込んだ。

「……アルカナであるならば何故革新派の理念に同調出来ないのです？」

【10ー8】

弘佳が何かを構えたのを見て美樹は魔力盾を展開する。
魔力盾に勢いよく何かが衝突した。
その勢いに負けてよろめく。衝突したそれは、銛のようなものだった。太く長い銀の円柱の先に刃渡り３０ＣＭ程の刃がついていた。
その円柱の尻には矢尻のような、形状となっていた。

「弓矢！？」

弘佳が弓の弦に矢をつがえる。
アーチェリーの弓の形状に似ていた。
ただ一つ違うのは巨大で重厚なこと。その純白の身を握りしめ弘佳が矢を引く。

「穿て」
「っ、スライドシフト！」

美樹が視点の先に力を込めて左手を払う。弓から放たれた矢の位置をずらす。

「高速移動？　いや、違いますわね。矢の位置をずらした？」
「でぇい！」

美樹が引き金を引く。拡張バレル内で力場が生成される。それによって加速されて打ち出された魔力が空間を呑み込みながら突き進む。
弘佳が矢をつがえ弦を極限まで張り詰めさせる。

「穿て、２．０１Ａ－０２Ｖヴァンデッドブリンガー」

弘佳の引いた矢に光が集束する。美樹の放った砲撃に呑まれんとした一瞬で弘佳は指を離す。矢は美樹の砲撃を切り裂いて跳んだ。放った砲撃を切り裂いて翔んできた矢を見て咄嗟に魔力盾を美樹は貼る。矢が魔力盾に触れた途端魔力盾を通過して矢は翔んだ。血飛沫が視界の端で舞い上がった。右肩を掠めた矢と、遅れてきた痛み。

美樹は顔をしかめる。

「魔力盾を貫通した！？」

強固な壁である魔力盾を一撃で貫通するとは。しかも、魔力砲撃すら貫いてだ。

「どんな威力してんだよ！？」

「２．０１Ａ－０２Ｖヴァンデッドブリンガー」

弘佳が限界まで絞った弦を放つ。開放された矢が推進力をバネに、飛翔する。

魔力盾を貼る。指先で幾何学模様が踊り、その光の奇跡に沿って魔力が凝固し壁となる。

美樹の貼った魔力盾に矢が激突する。

薄い紙を切り裂くかの様にいともたやすく矢は盾を貫いた。

「っーー！」

「穿て」

「３．０２Ｂ－０４Ｕリアクトチェーン」

弘佳の矢を引く手に何処からか出現した鎖が絡みついた。

「！？」

「こより！？」

【10-9】

【10-9】

蜘蛛の巣の様に鎖が張り巡らされる。鎖を引き連れて、サブマシンガンのエムピー・セブンを肩から引っさげて、こよりが立っていた。弘佳が顔だけをこよりに向ける。

「気付かれるのが早すぎると思ったら、あなたが情報を流したんですのね」

「ここ空気薄いね、薄い」

こよりは弘佳に銃口を向ける。

「なにが狙いなのかな、なにが。二回目の新宿大規模爆発事件を起こしてなにをするの？」

「次元の扉を開きますわ」

弘佳の答えに美樹は判断に迷う。こよりも電話口で同じような事を言っていた。扉を開く、と。

「次元の扉だと？」

「新宿大規模爆発事件は何かの影響により高濃度の魔力が爆発したせいだと、言われていますが実際は違いますわ。別次元との接触。それによる結果ですわ」

「別次元って何だよ、それ」

美樹に弘佳は答える。

「わたくし達の認識している世界よりもう一つ上の段階の次元があるはずですわ。わたくし達はそのステップへと進まなくてはなりません」

「なに言ってんのかワカンねぇ」

ただのテロリストかと思ったら夢想家だったか。

私達の認識しているより上の次元だと。

「新宿大規模爆発事件は別次元との接触により莫大なエネルギーがこちらに流入したせいで起きたものですわ」

「そんな根拠もないオカルトを」

「別次元の存在自体は確認されているものですわ」

「その根拠は？」

「アルカナ」

璃瑠の事が唐突に話に出てきて美樹は動揺する。アルカナは魔法使いを人工的に生み出そうとした強化人間計画の筈だ。それがなぜ、この別次元だとかういう途方もないＳＦ話に関わってくるのだ。

「アルカナとは本来、高次元接触の際に確認された生命体につけられた名称です。アルカナ計画とは、本来それに近づくためのものですわ」

こよりが弘佳の話を引き継いだ。

「今の人間という枠から進化して次のステップへと進む。高次元との接触を行うための次の人類を作り出すのがアルカナ計画だよ」

高次元との接触を行なう為の人間を作る。それが革新派のいう人類の進化だというのか。

高次元の接触に耐えうる存在が人類の進化なのか、それとも高次元の接触の先に何かがあるというのか。
まず第一に高次元との接触とはなんだ。

「高次元との接触で何が起きると言うんだ」
「新宿大規模爆発事件、この別次元との接触はある結果を残しましたわ」
「？」
「魔法使いの大量発生。あの日を境に魔法を認識し、会得したものが大量に現れた。新宿を中心に」

あの事件に巻き込まれたこよりは、あの日魔法に目覚めた。
５ナンバーであった美樹は、より一層の能力向上を得た。
因果関係は十分あると思われた。

「魔法使いは人間の次のステップと言えますわ。別次元との接触は人類を次のステップに導くはず」
「そのために次元との接触を自発的に起こそうというのか。あんたが、ここで！」
「えぇ。」

【10-10】

【10-10】

高次元だとか、人類の進化だとか、弘佳の言っている言葉の意味も真偽も美樹には分からなかった。
ただ一つ言えるのは、彼女達のやろうとしていることは、新宿大規模爆発事件の再来は、また誰かを犠牲にするということ。
あの日、美樹とこよりの世界は崩れた。世界から消えた人だっていた。
あの日の悲劇をまた繰り返す気はなかった。

「なら、沙織ちゃんは何の関係がある？」

こよりが視線を周囲に這わせながら問いかける。
聞き覚えのある名前に美樹は怪訝な顔をした。

「沙織……入間沙織？」

こよりが拉致した少女の筈だ。それが今、何故この会話に絡んでくるのか分からなかった。

「入間沙織は魔法の影響を受けない。彼女が人より上の段階に居るということに違いありませんわ」
「それは早計だよ、うん早計」
「アルカナの目的は魔法の無害化、魔法が別次元の物である以上、わたくし達の次元に持ってきたときに魔法はエラーとしてこの世界に受容されるのですわ」
「エラー？」

魔法は確かに人体に有害ではあるが。

「この世界の理では魔法は起こり得ないものですが、魔法はそれを引き起こします。その世界のエラーは、人体にも悪影響を及ぼすと考えられますわ」

起こり得ない物が世界の中でエラーとして受容される。そのエラーを人体が許容出来ない。

高次元の存在である魔法が低次元である私達の世界に発現する事で、この世界は大きな歪みを抱えることとなる。その歪みが小さな人体では耐え切れない。

弘佳の言わんとすることはこういうことか。

「そのエラーの影響を人間沙織が受けないのなら、彼女は別次元の莫大なエネルギーをものに、そして魔法を完全にコントロールできる筈」

私達がエラーとしてでしか魔法を受容出来ない故に魔法は人体に有害であり、本来の性能を引き出せて居ない。その結論はいささか乱暴に思えた。

「つまり、魔法をエラーとしてではなく彼女は魔法を受容できる、出来ちゃうね」

「なら高次元の存在となる可能性、つまりアルカナに近づく事ができる筈ですわ」

高次元生命体、かつて確認されたとされるそんな不確定な存在が人類が行き着くべき先だとでも、

「それがあんたらのいう進化かだとでも言うのか」

【10-11】

【10-11】

「それがあんたらのいう進化かだとでも言うのか」
「えぇ。」

魔法使いのその先へ。弘佳達の言う進化は今私達のいる次元より上の存在へと昇華させるものだと言う。だが、それには一つの疑問が生じる。

「鷺ノ宮こより、あなたも人類の進化を目指すのに何故わたくし達を拒むのです？」
「あたしの望んだ進化はそういうものじゃないよ、じゃない。魔法による意識改革。魔法による社会の変動。あたしが望んでいるのはそういうものだよ」

私達は今いる次元と、今いる次元より一つ下の次元しか認識出来ない。つまり高次元、４次元は認識出来ない。
これを前提とするなら、弘佳達はどうやって高次元への接触を可能とするのだ。

「さて長い話に付き合っていただき有難い話ですわね」
「そんなペラペラしゃべっちまって良かったのかよ」
「えぇ、時間を稼げましたし」
「……ちっ」

こよりが引き金を引いた。地面から魔力で形成された巨大な刃が次々と飛び出してこよりの撃った弾丸を弾く。張り巡らされた鎖を切

り裂いて刃がこよりと美樹に向かう。
地面から突き出してくる刃を美樹は撃ち抜いた。

「あんたの言うことの是非はともかく、止めなくてはならないってのはよく分かったよ！」
「もう止まりませんわ、次元の階層は既に歪み、接触する」
「世迷いごとを」
「しかし事実ですわ」

こよりが無数の鎖を具現化させると束ねて、それを背中から振り下ろす。

「いっけぇ！」

派手な音を立てて叩きつけられた鎖が地面から突き上がってきた魔力の刃を砕く。地面に叩きつけられ跳ね上がった鎖の行方をこよりは指示し直す。

「術者であるあなたを倒せば止まる、うん止めて見せる」

【10ー12】

【１０ー１２】

鎖が四方に伸び、宙を蛇の様に舞うと鎖の先端に付けられた刃が弘佳目掛けて一直線に飛んだ。
弘佳へと向かった鎖を見て、弘佳は手を突き出す。

「２．０１Ｂ－０１Ｆニュートライジェイション」

弘佳の手から半透明の光が伸びる。それが空中に留まると、巨大な円へと姿を変えた。鎖がその円へ突き刺さると突き刺さったそばから瓦解していく。

「魔力盾……？　？いや、あれは」
「３．０２Ａ－０２Ｄ：２．０２－０２－０１Ｃジェノブレイカー」

美樹が黒蛇を構え引き金を引く。魔法によって形成した力場が加速し、魔力の塊が歪み打ち出される。
それは一閃の眩い尾を引き砲撃となる。

「無駄ですわね」

弘佳が作り上げた半透明の円へ直撃したジェノブレイカーはその威力とは裏腹にあっけなく消えた。円へぶつかったはしから、花火のような火花へと姿を変え宙に消えていく。

「なんだ、あれ」
「２．０１……干渉系の魔法かな、うん魔法」

弘佳の作り上げた半透明の円はその姿を変えた。弘佳の周囲を泳ぐかの様に白っぽいなにかは動き回る。

「3．02A－02D：2．02－02－01Cジェノブレイカー！」

再び美樹の放った砲撃を見て、弘佳は指を動かす。その身をくねらせていた細長い物体が弘佳の前で円へと変わる。それに呑まれるようにして砲撃は消えた。

「なんだあれ……蛇？」

まるでとぐろを巻くかのように白い物体は円へと姿を変え、そしてまた細長い状態へと変わった。

「2．01B－01Fニュートライジェイション……貫け、2．01A－01Xグランドヴァイパー」

蛇、美樹にそう形容された弘佳が生み出した白いそれは、弘佳が魔法名を告げるとまた姿を変えた。

白い刃へ研ぎ澄まされた蛇は地面を這いながら美樹とこよりを貫こうと進む。地面から魔力の刃が次々と飛び出しながら空を割く。

「こより、あいつを倒せば阻止出来るんだな！？」

「その筈だよ、その筈」

美樹は迷わずに選択肢を選んだ。それ以外は眼中になかった。

「協力しろ、こより」

【10ー13】

【１０ー１３】

「協力しろ、こより」

弘佳を止めなければ尋常で無い被害が出る。人類の進化だとか次元の接触だとかそういったものはどうでも良かった。
あの悲劇を繰り返す気はない。またあれにより誰かが死に傷付くのを看過など出来ない。

「協力しろ、こより」
「援護して」

地面から飛び出してきた刃を飛び退いて避けると美樹が黒蛇の引き金を引く。

「同意ととるぜ、３．０２Ａ－０２Ｄ：２．０２－０２－０１Ｃジェノ……ブレイカー！」

一本の太い砲撃は漏れた閃光を散らしながら一直線に翔んだ。それを阻むように地面から刃が飛び出す。
魔力砲撃は純粋に魔力を攻撃エネルギーへと転用する魔法の中で最も威力が高いカテゴリーである。
単純ゆえに強力。
だがそれは地面から飛び出した刃にやすやすと切り裂かれた。

「あの魔法……やっぱり？」
「２．０１Ａ－０２Ｖヴァンデッドブリンガー」

弘佳が矢をつがえ弦を引く。弘佳の周囲を漂っていた白の物体は弓の目の前の空間でくねると、輪を作り出す。
その輪を通り矢は加速した。
矢は無数に張り巡らされた鎖を裂きながらそのことを物ともせずに進む。その威力は変わらずにこよりの貼った魔力盾を紙のように切り裂いた。
盾が砕け散りその衝撃でこよりは吹き飛んだ。

「きゃあ!?」

魔力盾をやすやすと砕き、鎖と美樹の砲撃さえ打ち破った弘佳の魔法を見てこよりは一つの仮説に行き着く。

「何なんだよあの威力」
「2．01A－02ってこういう系統の魔法じゃないよ、違う」
「え?」
「このナンバーなら干渉系の力場を生成する魔法の筈だよ、そうその筈」

こよりの足元に蛇の様な白の物体が忍び寄り突然刃へと姿を変える。飛び出してきた刃に向かってこよりは魔力盾を貼った。刃は盾に直撃すると切っ先の触れた部分から盾を溶かす様に貫通する。

「魔法結合への干渉力場があの様に振舞っているというの?」

【10-14】

【10-14】

「どういうことだよ？」
「おそらくあの白い物体は特殊な力場が視覚化したものだよ。力場はナンバーから推測するに干渉系の力場」
おそらく魔法結合へと干渉し魔法を無効化するものだった。だから魔力の塊である魔力盾や砲撃、鎖が簡単に崩壊した。
「あの力場を矢で飛ばしたり刃の様に使うことで盾や砲撃では防げない一撃としてるんだ」
「ちょっと待てよ、力場を飛ばしたり刃にするなんて聞いたことないぜ」
弘佳の周囲を蛇の様にただようそれは、時折すがたを変えながら獲物を待ち構えていた。
「力場があんな風に振る舞うなんて」
「本来は力場を作り出すだけの魔法なんだと思う。それを彼女はああやって昇華させた、うんそうだよ」
私達がエラーとしてでしか魔法を受容出来ない故に魔法は人体に有害であり、本来の性能を引き出せて居ない。
そう弘佳は言っていた。
この魔法が本来のチカラというやつを発揮した姿だとでもいうのか。
「なんにせよ、魔法を無効化してくるわけかよ」

ならば、と美樹は腰のホルスターからハンドガンを引き抜く。

「実弾なら……！」

引き金を引くと今までの魔法の轟音で張り詰めた空気が抜けるように軽い音がして銃弾が発射された。

弾丸は弘佳の周囲を漂っていた力場の具現化した白の物体が盾となり防がれた。

「！？」

「その程度で届くと思わないでくださいな」

「こより！」

美樹はそのまま引き金を引き続ける。銃弾が盾を叩き爆音を巻き起こす。

弘佳の目の前を黒煙が流れる。視界が一瞬阻まれた。黒煙を切り裂いて美樹の砲撃が突如現れた。

砲撃は弘佳の力場が形成した盾に阻まれた。砲撃は防がれ二手に分かれ消失していく。

「掴まえたーー！」

弘佳の足元から突如鎖が飛び出す。

背後に回り込んでいたこよりが鎖で弘佳の足をとった。続いて鎖が弘佳の身体を拘束する。動きが止まった瞬間をついて、美樹とこよりが弘佳を挟んだ。

「くっ！？」

「いっけぇ！　３．０２Ａ－０２Ｄ：２．０２－０２－０１Ｃジェノブレイカー！」
「３．０２Ａ－０５Ｖベイオネット！」

美樹の黒蛇が鼓動する。粒子を巻き上げ美樹の構えた銃口へと集束する。美樹の指が引き金を引くと膨大な魔力の光芒が噴き出す。それに続いてこよりが目の前の空間を手で掴む。掴んだ空間を引き延ばす様に手を引いた。その軌跡にそって空間が歪む。魔力が集束する。
細長い槍の様に魔力が固定化されると、こよりはそれを撃ち出した。

「ベイオネットなら！」
「ジェノブレイカー、ぶち抜けぇ！」

二人の放った砲撃が弘佳を中心に着弾した。轟音と光の洪水が屋上を覆う。
二つの砲撃がぶつかり爆発し、天へと昇る。
跡形もなくすべては消し飛んだ。

その爆心地の中心で。

「次元の扉が開く」

弘佳は高らかに笑った。

【１０章・星は意味を持った完】

【11章・魔術師は夢見た】

【11章・魔術師は夢見た・前編】

「あの落合先輩？」
「なんですか」

まだ履き慣れていない真新しい革靴の爪先で床を叩きながら一人の新人は自分よりも随分小さい先輩に不安そうに聞いた。

「私は本当に公安でやっていけるんでしょうか。無理を言って、いろいろやってここまで来ましたけれどまだ不安です」

璃瑠は曇り空を眺めながら口の端についたチョコをなめとる。
ここからは新宿の街並みが見渡せる。無数のビルに切り取られた一部分の街並みが見渡せる。

新人は妙な処遇だということは聞いていた。陸自の訓練学校から修了前に公安に引き抜いてきたらしい。

「私は先輩の様になれるでしょうか？　私みたいな新人の素人の半人前が公安なんかてやっていけるんでしょうか。私、早く先輩の様になりたいんです」

後輩の不安そうな質問に璃瑠は振り返る。

「無理ですよ」

きっぱりと言い放った璃瑠の返事に後輩は少ししょげてみせた。

自分だって変わった境遇だ。
それは共通していようと、璃瑠と彼女の間には大きな差がある。
だからこそ、後輩の羨望は璃瑠からして見れば的外れに見えた。

「ですから、あなたはあなたになれば良いんです。他者ではなく、自分の求めるものに。
誰かと比べる必要なんてないんです。
あなたはあなたです。」
「はぁ……？」

璃瑠の言葉に少し首を傾げる姿を見ながら璃瑠は残りの板チョコを口に放り込んだ。

「迷っても悩んでも人はその人自身にしかなれないそうですよ」
「私は私自身にしか」
「あなたはあなただから。だからそうあれば良い」

その言葉は璃瑠にとっては言ってもらいたい言葉だった。
人と違う。
完璧な魔法使いとして、その為だけに育てられてきた強化人間という処遇の中で璃瑠はその事実に否応なしに直面する。
そんな自分を目指す必要などない、と。そう思った。
自分の様な不幸な存在になることなど決してない、自分とは違う道を進めば良いと。

「だからあなたはあなたとして、誰かと比べる必要なんてないですよ。ね？　伏見美樹さん」

【11ー1】

【11ー1】

「なぁ、璃瑠。何故、春先に私達はおでんを作っているんだ」
「食べたいって言ったの美樹さんじゃないですか」
「いや食べたいとは言ったけどなんで、六課のオフィスで作るんだよ」

六課の給湯室の一角を占拠しながら、私達はおでんを煮込んでいた。
馬鹿じゃないのか。

「どうせ暇なんですし、いいじゃないですか」
「いや暇じゃないよ。前回の始末書書いてないからね？」
「私、関係ないですから。美樹さんのミスですし」
「お前から始末してやる」
「10年はかかりますよ」

大根が煮えない。私は煮え切らない。

「今日は春にしては暖かいですね。夏頃の気温になるとか」
「より、おでんを作るのが馬鹿らしくなるな」
「美樹さん馬鹿ですもん」
「お前、餅巾着抜きな」
「餅巾着の入っていないおでんなんて、ほうれん草の入っていない酢豚みたいなもんですよ」
「酢豚にほうれん草は入らないだろ」
「美樹さん貧乏ですもんね」

人が出払い静まりかえった公安六課のオフィスに私達の声だけが通る。もはや留守番役とかした私達新人コンビはたいした仕事もないままだった。

「いや貧しくてほうれん草買えなかったとかじゃなくて、普通酢豚にほうれん草はいらねぇだろ」
「美樹さんも要らないです」
「酢豚に私入ってたらおかしいだろ。あれか、私が豚とか言いたいのか」
「いや、酢豚でなく、私の人生に要らないって意味です」
「一生付きまとってやる」
「ゴリラじゃないんですから」
「ゴリラは別に付きまとわねぇよ。お前、私にゴリラって言いたいだけじゃねーか」
「よくぞ見破った、ゴリラよ」
「ゴリラリアット決めてやる」

璃瑠に放った拳が簡単にあしらわれながら、私はぼんやり考える。璃瑠とも随分打ち解けたもんだと思う。
落合先輩なんて呼んでた頃が懐かしい。考えてみれば私が璃瑠程度から教わることなどない。

「お前と漫才をやってる暇はない」
「でも暇ですよ、私達」
「とっとと、私達に仕事を回せってんだ」
「美樹さん、ど新人ですから」
「だからといって仕事回してくれないと新人のままだぜ」
「陸自の訓練校あがりで、捜査のイロハも知らず。かといって腕っぷしに頼ろうにも頼りない、どうしようもないじゃないですか」

ボロクソ言うね。確かに事実だけれども。

【1-2】

【1-2】

アルカナ計画は、我々が認識している次元とは違う次元との接触の際に確認された生命体へ近付くための、つまり人類の更なるステップアップのための、計画であった。

我々が認識している現在の次元（ここでは便宜的にγ次元とする。）の内包する法則では魔法の存在は説明出来ない。
故に一つの仮説が立てられた。
魔法はγ次元より上の次元（ここでは便宜的にΣ次元とする。）のものではないかと。
この一見夢想じみた仮説はメビウスの帯や、クラインのつぼの様に、次元間の認識齟齬を根底としている。

魔法という結果を我々は認識出来るも、そこに至るプロセスを我々には理解出来ない（Ｍａ元素という仮説により整合性をとろうとしているが）。

故に魔法は別次元の産物であるという仮定が生まれた。この仮定はとある出来事により大きな力を持つこととなる。

Σ次元との接触である。これにより、上記の仮説は一気に真実味を帯びた。これを受けて行われたのが
アルカナ計画。

強化人間による完璧な魔法使いを生み出すというこの計画に素体として選ばれた一人の少女がいた。

『心拍数安定圏内。室内Ｍａ元素濃度平常値。』
『了解した。被検体０６、始めろ』
「……了解です」

ガラスの向こう側からのスピーカー越しの指令に美智は返事をした。
身体中に取り付けられた計器を少し鬱陶しく思いながら、美智は手をかざす。

指先で空をなぞった先から光の線が散らばる。

「……。」

美智がその手に力を込めると空気が踊ったように見えた。光の線は崩壊しながら爆発した。それは連鎖し美智の周囲で爆風が踊る。
魔力盾を周囲に張り巡らせ爆風の真ん中で美智は更に力を込める。

イメージのままに。誰に教わるわけでもない。
自らの期待する結果になるように手探りでＭａ元素を動かす。

『ＯＫ。データは取れた。終わっていいぞ』

締めに一度大きめの爆発を起こして美智は魔法発動をやめた。

「……焦げ臭い」

晴れていく視界の向こう側で重厚な防護扉が開くのが見えた。
扉から歩いて向かってきた白衣の女性が手招きをした。

「被検体０６、いや美智。２０６フロアへ移動……いやまずシャワーを浴びてこい。焦げ臭い」

【11ー3】

「こより、話がある」

そう呼び出されて、こよりは美樹の家へ向かった。出迎えた美樹の表情は暗くそれを見てこよりの気は萎えた。

「話って何かな、話って」
「こより、私達別れよう」
「何それ、ホント何それ」

美樹の顔を正面から覗き込むと、美樹は視線をずらした。

「なんで」
「なんで、ってそりゃ」
「あたしの家のせい？」

こよりの質問で美樹は外した視線を戻した。
妙な沈黙が流れてから、美樹は口を開く。

「あれだけ反対されて、お前が勘当されるなんて聞いたら」
「そんなの関係ないよ」
「なくない。それに鷺ノ宮家は」
「どうせ分家だから、たいした名前でもないよ、ないない」

美樹は強いと思う。
こよりはそう思う。

けれど、彼女は自由奔放に破天荒に振る舞うそぶりを見せながらいつも根底には常識を抱え込んでいる。

だから、二人の関係に美樹は他の問題を絡めてしまう。
こよりは例え勘当されようと構わなかった。美樹との恋人関係が原因で勘当されようと家などどうでもよかった。
ずっと嫌いだった。

鷺ノ宮という姓が。
鷺ノ宮という家が。
鷺ノ宮という人が。

いつからか反発を抱き。
いくつもの反抗をして。
その一つで普通高校に行き、美樹と出会った。
だから、これはきっと運命だと。

それは許されない関係だった。？
同性愛という事実はどうしても周囲から認めてもらえなかった。社会も周囲も家も。

鷺ノ宮という存在が自分を認めなくても構わない。
けれど、世界が自分を、自分達の関係を認めないのはこよりには耐えられなかった。許せなかった。

こよりが黙りこくったのを見て、美樹は言葉を続けることが出来なかった。
例え周囲がどう見たって、周囲にどう見られたって、美樹は構わなかった。
けれど、美樹とこよりの関係で、こよりの人生を曲げてしまうのは

怖かった。

好きならそれ以外はどうでも良い。

そんな言葉でこよりを何度も慰めて、気付けばそれは美樹を裏切る。

【11ー4】

【11ー4】

「弘佳は何をしたい」
「人類を進化へ導きますわ」

それはいつか交わした言葉。誰かと交わした言葉。
弘佳の決意は変わらない。変わったことはない。人類を進化へ導く。
それだけだった。

「弘佳は何をしたい」
「人類を進化へ導きますわ」

もし、誰かの命を呼び戻すことが叶うなら。
もし、いつかの時へと帰ることが出来たなら。
それをきっと願った。

「弘佳は何をしたい」
「人類を進化へ導きますわ」

兄は死んだ。異国の地で。中東の片隅で。
恐らく日本人の１００人のうち１人も、１０００人のうち１人も、
１００００人のうち１人も生涯のうちにその国に踏み入れることはないだろう国で死んだ。
そんな国の平和を願い、その為に働いた。
その兄は祖国解放を謳うテログループの凶弾に倒れた。皮肉にも平和を願ったものは、平和の為に戦うものによって死んだ。

「弘佳は何をしたい」
「人類を進化へ導きますわ」

誰を恨んでも仕方がなかった。きっとこの問題は、誰も悪くないのだと思った。だから、きっと解決策などない。
人が人である以上。

「弘佳は何をしたい」
「人類を進化へ導きますわ」

だから、弘佳は人類の進化を願った。この悲劇など起こり得ない世界へと向かうことを願った。
人が、世界がこの段階にいる限り全ての問題は終わらない。誰もが笑顔になれる魔法なんてものはこの世にない。
この手にあるのは魔法。誰かを幸せになんて出来ない魔法。
ぶつける場所のない憤りの突き動かされて。

「弘佳は何をしたい」
「……泣きたい。」

【11ー5】

【11ー5】

この人は哀しい人だと、沙織はこよりと何度も話すうちに気付いた。

家というものに認められなくとも世界は自分を認めると信じ、それを目指してきた。家という存在から逃れるために。

けれど、世界が彼女を認めない時がきた。

女性を好きになってしまったから。

それが拒絶を生み、理解を拒み、世界から認められなくなってしまった。それは孤立だ。そして彼女の言葉を借りるのなら、それは存在してることにはならない。

沙織は、こよりが何故女性を好きになってしまったのかは知らない。どんな相手なのかも知らない。

けれど、その話を聴いて沙織は確かにネガティヴな感情を抱いた、と思う。その程度がどうであれその事実は揺るがない。

それを否定はしない。

けれど、こよりは言う。

同性愛者（こより自身はそうではないと否定しているが）と接触することになんの被害があるのかと。

「あたしは、沙織ちゃんに恋愛感情を抱かないだろうし、仮に抱いたとしてそれは男性と何が違うの？」

「ぜんぜん違う」

「もし沙織ちゃんが、あたしに言い寄られるのが嫌なら断れば良いだけだよ？　？それって男性の時と一緒でしょ？」

その答えは沙織には出せなかった。こよりがそれを望んでいるとも思えなかった。

その意識の根底から変革しようというのだ、こよりは。

けれど、そのきっかけも、理由も、終着地も、哀しいことなのだと。誰かに認められなければ存在してることにはならない。そんな言葉を言うこよりは矛盾する。

その恋人とやらは認めてくれるはずだろう。それだけではダメなのだろうか。

【11ー6】

話せない。気持ちなど話せない。真実など言えるわけがない。アルカナ計画なんてもの気持ち悪い。その結果の体現が存在することすら。許されない。苦しい。本当ならば死んでしまいたい。こんなの耐えきれない。誰がこんなものを認める。薬品と肉体改造されたこの身体を誰が。その結果で誰が喜んだ。何もかもが泣いた。それで終わり。社会の片隅に何気ない顔して溶け込んで。そんなフリをして。気付けばここまで来た。後戻りも出来ず。手を汚し。ようやっと居場所を見つけた。その場所も余所余所しい。そこでもがいて、何食わぬ顔して。何も掴めず、何も選べず。気付けば誰かが横に居た。必死な顔して取り繕い。無心なふりして手を伸ばし。その人は何も無かった。裏側に。その姿に一時惹かれ、一時自らの何もかもを忘れ。いつしか側に居ることに安心を見出した。理由も分からない。けれど、その事実に縋った。失うことを恐れた。きっと自分の事を知ってしまったらそのひとも離れて行くだろうと。だから安らぎの反面で安らぐ事など無かった。苦しかった。いつ消えてしまうのかと。いつ失うのかと。その為に何もかもを封じ込めようとして。そして崩れた。その先に待つのはきっと終わりだと思っていた。けれど、その人は簡単に切り捨ててしまった。私がずっと悩んで来た事を。ずっと背負って来た事を。簡単な一言で。欲しかったのは多分きっとそんな言葉ではなくて。その言葉に憎しみすら覚えて。けれど、その言葉で何処か救われて居る自分が居た。張り詰めて居たものが緩んでしまった。

私は。

私は。

私は好きなんだろうか。
伏見美樹という人物が。

けれど、その感情は許されるのだろうか。
アルカナである私に。

【11-7】

光景が浮かんでは消えた。無数の映像が連なり細い線となり集束して消えた。何かが伸し掛かるような重圧が身体中を満たして消えた。

【11-7】

脳の一部をごっそり持っていかれたような喪失感と同時に現実感が入れ替わりに戻ってくる。私は手を見た。自分の、そう認識している筈の手を見た。

指。

薄汚れた指。引き金を引き続けたことで、荒れた手。確かに私の手のひら。手のひらに合わせた焦点の後ろで風景が揺れる。

何だよ今のは。

幾重もの時間を過ごした気がする。映像に呑み込まれた。記憶のフラッシュバックのように。けれども、あんな記憶は無い。それに私の存在はそこには無かった。あっても、私の視点では無かった。

周りを見渡すと光景は変わっていなかった。ビルの屋上で私とこよりが弘佳を挟み込んで砲撃をぶっ放したあの瞬間と同じ。

「何だよ、何なんだよ」

「美樹ちゃんも見えた？　？見えたの？」

「何ですの、今のは」

あの映像は。

誰かの。

過去だ。
過去の記憶だ。
誰かじゃない。
私の。
こよりの。
弘佳の。
璃瑠の。
美智の。
沙織の。

記憶だ。
その記憶を共用したのか。いや違う。覗き見た。覗き見えた。
記憶というのは脳細胞の電気信号だ。それを映像化し、なおかつなんの機材もなく互いの脳に伝達した。
あり得ない。こんな事が起こり得る筈がない。
記憶の共有化。他人の心理的状態の視覚化。人の電気信号へと介入したというのか。

仮定が一つ生まれた。

「次元の扉が開いた結果だと言うのか」

【11ー8】

何が起きた。弘佳の目指した高次元との接触が起きたと言うのか。
そして何が起きた。
目の前に広がる光景は何も変わっていない。しかし、何かが起きたのは確かな筈だった。
何も変わっていない？　何かが違う。何かが。
視界がぼやけているような何かが。

『……伏……伏見……、……応答しろ！』

無線から漏れるノイズの向こう側からどなり声が響いた。

「伏見、現在ビル屋上にて敵魔法使い2名と交戦中！」
『今の膨大なエネルギー反応は何だ！？』
「詳細不明！」

なんて説明する。まず第一にそんな大規模な魔力放出があったと言うのか。
私達は動けなかった。微妙な距離感を保ったまま牽制状態のまま。
それを破った音。

「あ……あぁ！」

それは悲鳴だった。人間沙織の悲鳴であった。渇いた空気の中で存在を叫ぶ音であった。その悲痛な叫びの元へ視線を向ける。

「！？」
「なにこれ、何よこれ！？」
「どうなってんだ！？」

入間沙織が居た。
確かに彼女だった。しかし、その姿は何かが違った。一拍置いて違和感が押し寄せる。その理由を脳が訴える。

入間沙織の姿の向こうに数メートル先のビルの地平線が見えた。ビルの地平線はぼやけ、視界に霧がかかったようで見え辛い。
透けていた。彼女の身体は。光とそれに乗った視覚情報が彼女の身体をすり抜けていた。

「透けてる……？」
「なにこれ、ねぇなにこれ。私一体……ねぇ、答えてよ！？」

動けなかった。入間沙織が、その身に起こっている事態が理解出来なかった。
人の身体が透けている。
沙織がゆっくりと歩みを進める度にその身体は更に薄く消えそうになって行く。

「こ、こここ……わ、わわわわたたわたわたわたしは」

沙織の足元すらも透け始めた。まるで実体が無いかのように。目を離せなかった。
沙織の身体の先にビルのぼやけた地平線が見える。屋上に設置された室外機か何かがぼやけて見える。

沙織の足元が歪んだ。沙織の周囲が薄れた。
ビルの屋上全体が薄れて行くように見えた。
気付けば私の足元も透け始めていた。

「消える……！？」
「美樹さん！」

私の手が取られ、後ろから必死な声がした。

「璃瑠！？」
「離脱します！」

視界に映る何もかもが薄れて行く。私の胴に後ろから璃瑠が腕を回すと璃瑠が地を蹴った。璃瑠に引っ張られ宙に浮く。

「消える消える消える……！？　私消える！？」

沙織のその言葉で全てが。
消えた。

【11ー9】

璃瑠に抱えられるようにして高高度に急上昇した私の眼下に広がっていた光景が消えた。ビルの屋上が。さっきまで私達がいた場所が。そしてビルすらも。

「消えた……？」

夢でも見ているのか？

「何もかもが消えた」

眼下に広がる景色は何もなかった。そこにあるのは、新宿の街並みに一箇所空いた空間。東永井ビルが消えていた。今まで何もなかったかのように。

私を抱えて飛ぶ璃瑠に声をかける。

「璃瑠、もういい離せ。私一人でも飛べる」

「嫌です」

どんな駄々をこねているんだ。

璃瑠が私の背中に顔を押し付けて呟いた。

「今離したら美樹さんまで消えそうで」

「……馬鹿いうなよ、私は消えないよ」

「本当ですか」
「消えねぇよ」

何も残っていなかった。ビルの破片すら。まるで存在していなかったかのように。そして、入間沙織も消えた。
璃瑠が私を後ろから強く抱きしめる。その存在が確かな安らぎを伝えてくる。私と璃瑠は消えずにここに居るという事実でほっとする。

「一体何が起きたんだ?」
「分かりません」

わかる筈が無い。だが、誰かに答えて欲しかった。不安に飲まれてしまいそうで、そのまま私達まで消えてしまいそうで。
他の人はどうなった。

「3．02A－05Jフェーズフローズ」
「!?」
「下からの攻撃!?」

咄嗟に私は盾を貼る。盾に白い何かが勢いよく直撃し、盾が砕けた。
美智だった。それに気を取られた隙をつかれ私たちのギリギリを矢が通過する。

「この状況でまだ戦うっていうのか!?　あんたたちは!」

何故戦う。
弘佳達の目的は、高次元との接触だ。

「穿て、2．01A－02Vヴァンデッドブリンガー」

何のために。
そしてそれは果たされた。

「美樹さん！」

抵抗なのか。
それとも。

何が。

「５．０２Ｂプレッシャーリージョン」

何処かで声がした。

【1-10】

「5．02Bプレッシャーリージョン」

【1-10】

のしかかるような重圧。空気が一気に張り詰める。空気が水中の中のように重たくまとわりついてくる。体が重くなり、飛ぶ事すら難しくなる。
この感覚は知っている。
このプレッシャーは。

「この感じ……佐樹か！」
「えぇ。」

佐樹が居た。長い黒髪を靡かせて。この空域で悠然と。
弘佳と美智も戦闘を中断し佐樹に対し警戒していた。
佐樹に向けて美樹は黒蛇を構える。
美樹の疑問は尽きない。何故、佐樹が介入してくるというのか。
独立派である佐樹が革新派である弘佳達に助太刀するとも思えない。
現に弘佳達は佐樹の出方を伺っている。

「現空域、及び新宿東永井ビル周辺5ｋｍ圏内全ての戦闘員、非戦闘員に通達。これよりこちらは東永井ビル及び周辺5ｋｍ圏内を制圧する。速やかな離脱を求めます」
「何を」
「従わなければ、如何なる暴力行動も厭わない」

独立派の、佐樹が制圧に来た。革新派の妨害の為だとすれば遅すぎ

る。ならば他に何の理由があるというのだ。
単騎で全ての勢力を相手にしてまで、ここを抑えようとする理由があるというのか。

弘佳が弓に矢をつがえたまま、佐樹に言う。

「随分とぶっそうな事を仰るんですのね」
「少なくとも平和的に退いてくれるのを期待はしてるわ」
「ここを制圧することであなたに得があるといいますの？」
「公安六課と革新派を相手に回してお釣りがくる程度にはあるわ」

パッとみれば４対１。だが、そう動くとは限らない。美樹達から見れば弘佳達と佐樹は何としても捕らえたい相手であるし、弘佳達から見れば美樹も佐樹もどちらも厄介である。そして佐樹は全ての勢力を相手にしようとしている。
どう動くか決めあぐねていた。

美樹は悩む。

「こちら伏見、司令部こっちに回せる戦力は」
『現在突入部隊全てがロスト！　一体そっちの状況はどうなっているんだ！？』
「……見ての通りっすよ。全部消えた」

突入部隊すら消えたのか。あのビルごと全てが。

「１０秒以内に撤退行動に移らなければ敵対組織と判断する」
「一体そっちは何しに来たんだよ、記念撮影でもとりにきたのか？
　だったらシャッター切るのは私に任せてくれよ」
「残念だけど、私には時間がないの。手加減は出来ーー！？」

静寂を切り裂いて銃声が轟く。佐樹に向かって発砲したのは美智だった。放たれた弾丸は佐樹の元に到達する前に急速に下に逸れた。

「……なに？」

「どうしてそうあなた達は……！　５．０２Ｂ－Ｆプレッシャーリージョン・オーバードライブ」

それは悲鳴だった。終末の悲鳴。

甲高い悲鳴が頭の中へと入り込んでくる。その悲鳴の様な音が全身を駆け抜け佐樹の周囲に広がって行く。音が衝撃波の様に美樹にぶつかる。

衝撃波の通った後から空間が重くなった。

空気の一粒一粒が全身にのしかかる。身体中が軋む。空気がまるで降りてくる様だった。

深海では金属すら水圧で潰れひしゃげて行く、そんな映像を思い出した。

あれと同じだ。潰される。

「ぁ……かっは」

飛ぼうとしても重い空気が潰そうとしてくる。

落ちていく。

【11-11】

抵抗すら出来ない。ただひたすらに押し潰される。
５ナンバーとはここまでなのか。
本気の佐樹はこれほどなのか。

全ての勢力を相手にするという選択肢が彼女にはあった。それが可能であった。
現に全ての魔法使いを無力化させてみせた。

「これは……これほどとは」
「３．０２Ａ－０４Ｑアサルトビット」

佐樹の周囲を眩い光が走る。光の軌跡が零れるようにしながら結晶へと変わっていく。光の線が液体へ、液体が結晶へ。
佐樹が左手で無数の結晶へ天命を伝える。

「貫け」

無数の結晶が射出された。それは美樹をはじめとし四人の魔法使いへと向かう。
このプレッシャーの下で満足に動けない以上回避は不可能だった。
美樹が魔力盾を張る。

「ちぃ！」

佐樹の魔法が魔力盾に直撃した。
細い針の様な無数の魔力弾が盾に突き刺さる。突き刺さった魔力弾に後続の魔力弾がぶつかり爆発を起こす。

「ーーっ！」

息が苦しい。飲み込もうとする空気が重い。飲み込めば重たく身体を沈めようとしてくる。吐き出す空気が口から出ていかない。
重たい空気で身動きを取ることすら許されなかった。

「全て堕ちなさい、３．０２Ａ－０５Ｔインペリアルジャッジメント」

佐樹が自身の前に巨大な光球を生成した。それは周囲の魔力を吸収しながら鼓動し巨大になっていく。
それに向かって佐樹は腰から提げたレールにハンドガンを直結させる。
星砕が起動する。

「終いね」

星砕のレールバレルの銃口から閃光がはしった。
魔力砲撃が光球へぶつかると、光球は破裂し無数のビームをばら撒いた。

「圧縮した魔力同士をぶつけて爆発させたのか！？」

雨の様に閃光が降り注ぐ。それはゆっくりと、いや悠然と。身動きの取れない物達へ見せつけるかの様に。
雨の如く大量の魔力が全てを塗り潰した。

「状況終了。現空域に戦闘反応なし」

佐樹が無線に対してこう告げた。

圧倒的な強者として、彼女は一人佇んでいた。

【1-12】

【1-12】

「状況終了。現空域に戦闘反応なし」

『了解。下はこっちに任せていい。マギア兵の実地テストも兼ねる』

マギア機関。小型動力炉による人口的に魔力を生成する機関。それを利用した魔法使い「もどき」をマギア兵と呼んでいた。

手も金も掛かった代物、独立派の野方グループの虎の子であった。

「（実際大したものだとは思うわ）」

梨花奪還の際に引き連れて行ったが、魔法使いと謙遜ない能力を有している。魔力生成サーキットがどのような仕組みかは知らないが、普通の人間でも魔力生成能力さえあれば魔法使いに近い存在だというのがわかる。

だが、しかし魔力というものは人間の一定周波数以上の脳波に反応する筈だった。マギア機関により生成された魔力を操作出来るのなら、何故魔力を生み出すことは出来ないのか。

魔力生成と魔力操作には根本的な違いがあるのだろうか。脳波の周波数が違うのか。

佐樹はそこで考えるのをやめた。魔力生成も魔力操作もそこまで考えてやったこともない。

自分が考えることでもないし、考えても分からない。

「マギア兵が居れば戦力も十分整う。あとは、時間との戦いだわ」

『佐樹ちゃん』

「梨花？」

無線の先から梨花の呼びかけが聞こえた。梨花は後方待機の筈であったが、何かあったのかと不安になる。

「なにかあったの？」

『ううん。そうじゃなくて、お疲れ様って言いたくて』

「たいしたことじゃないわ」

『それと、佐樹ちゃんと戦ってた魔法使い逃しちゃったんだけど平気？』

あれだけの魔力砲撃を直撃させた。無事だったとしてもまともに動けないと思ったが、逃げ失せたのか。

『なんか魔法使いがもう一人居て、その人に邪魔されちゃった』

「別に構わないわ。目的とは関係ないことよ」

魔法使いがもう一人。鷺ノ宮こよりか。

革新派であるが、公安六課の二人も助けたというのか。

そんなことはどうだっていい。

今優先すべきことは梨花を救う。

それだけだ。

そのためだけにここにいる。

「（あの子の寿命がくる前に）」

【11-13】

【11-13】

『突入部隊、人質、テロリスト、そしてあのビル全てがロスト。これを全滅と言わずしてなんというのかね！』

『独立派の武装グループは今も事件現場を占拠しています！　直ちに部隊の派遣を！』

『まずは真相解明が先でしょうが！』

『部隊を出そうにも何処のや！？　六課はアテにならんで！？』

私は無線の音声を切った。

「んで、何を始めようってんだよ。反省会か？」

「美樹さんなら手慣れたもんですね」

「そうそう、毎日が反省会だからな。っておい」

「緊張感の欠片もありませんわね」

こよりの助けで現場を脱出した私と璃瑠、弘佳と美智。そしてこよりの五人は現場近くのビルの一室で睨み合っていた。

互いに銃口を向けたまま、口だけを動かす。

「とりあえず武装解除しないか。このまま撃ち合う気はないんだろ？　話し合うなら武器捨てたほうがいい」

「でも落とし所がないよね、ないなーい」

「話し合いで何を解決するんですか、この状況で」

「武装解除すれば、そこの落合璃瑠が圧倒的有利ですわ。その手には乗れませんわね」

「……まず、鷺ノ宮こよりはなにがしたいのですか」

「おお、あんたのハンドガン、ＳＩＧ　Ｐ２３９か」
「美樹さん、銃マニアの趣味は今は抑えてください」
「Ｐ２３９は有名だから、割とみんな知ってるんじゃないかな、うん知ってる知ってる」
「私は銃マニアじゃねー！」
「緊張感の無さは余裕の裏返しですわね」
「……もう帰りませんか？」
「そうですね、塀の中に帰って欲しいですね」
「あたしは帰らない、帰らない帰らない帰らない」
「捕まったことねーだろ」
「今ここでやりあえばただでは済みませんわよ」
「……試してみますか？」

一瞬だった。璃瑠が美智の放った弾丸を掻い潜り、弘佳の喉元へ辻風を突き付ける。弘佳はそれを受け止め璃瑠へ銃口を突き付ける。璃瑠を狙って美智がとびこもうとし、それに立ちふさがるように私は美智へ銃口を突き付けた。

「あれ？」

一瞬の光景。互いに仕留め損ねたまま、動けない。そんな中、間の抜けた声がした。
あぶれるようにして、誰にも狙われず自由になったこよりが笑顔を作る。

「３．０２Ｂ－０４Ｕリアクトチェーン」

【11-14】

【11-14】

鎖で全員を縛り上げてこよりが腰掛けた。

「というわけで本題に入ろっか、入ろー入ろー」

「……。」

「ノリ悪いね」

「そういうわけにもいかんでしょ」

「あれは何だったの、ねぇ、何？」

こよりの語調が変わった。

「何もかも消えた、あれは何？」

人もモノも全て消えた。まるで、存在していなかったように。

私達の目の前で為す術もなく。

「莫大な魔力エネルギーにより消し飛んだという見方は出来ませんか？」

「いやそんな消え方じゃなかったし、私達は無傷だったよ」

目の前で入間沙織が消えた。身体が透けていき最期は跡形もなく文字通り消えた。そしてそれと同時に東永井ビルとその中にいた人間も消えた。

生き残ったのは、私と璃瑠、弘佳と美智、そしてこより。

私達だけは消えなかった。傷一つ負っていない。魔力による爆発とかそんな理由では説明がつかなかった。

次元の扉が開いた結果だというのだろうか。

「答えられないの？　それとも答える気がないの？」

こよりの苛ついた問い掛けに弘佳は眉を上げた。

「あの結果について、知っていることは何もありませんわ」

「あれだけの人間を殺しておいてそんな言い草？」

次元の扉を開く。それが一体何を指すのかは分からないが、その結果によって全てが消えたと考えるのが妥当だろう。だがしかし、何故消えた。どうやって消えた。

「消える、という結果は予想外だったの？」

「えぇ。」

「なら、あんたが考えていたシナリオは何だ、そして何をしたんだ」

私の問いに弘佳は口を閉ざした。こよりが銃を引き抜き弘佳に向ける。

「答えて」

「言った通りですわ、次元干渉を起こし上位次元と接触。それにより生じる魔力流入により入間沙織を次のステップ、つまり上位次元の存在であるアルカナへと進化させる。」

「まず次元干渉とは何なんだよ」

私のぼやきに今まで静観していた美智が横槍を入れる。

「……私には見えます」

「はい？」
「……次元の接点が」

【11-15】

こよりが銃口を弘佳に向けたまま言う。

「知ってること洗いざらい話して、そしたら解放するから」

弘佳は観念したように語り出した。

「本来アルカナ計画とは、上位次元との接触の際に確認された上位生命体へと近づく為のものですわ。完璧な魔法使いならば、上位次元との接触もアルカナへの進化も可能とする考えを根底としていますわ」

「……計画は思った以上の成果を上げれず、もう一つの派閥が生まれました」

「内部で意見が割れたってこと？　こと？」

「アルカナへの進化の為の完璧な魔法使いではなく、兵士としの完璧な魔法使いの完成を目指すべきとの意見が出たのですわ」

「……その完成型が」

私の横で璃瑠が小さく舌うちをした。

落合璃瑠。アルカナ計画の唯一の成功例。

「ですが、本来の計画である次元干渉を可能とする魔法使いも生まれていたのですわ。それが美智。けれど完璧な兵士としての魔法使いの完成を目指す方向へシフトしていたため、落合璃瑠を成功例としか認めず、その後計画は上層部の判断で破綻させられると落合璃瑠だけを残しその他を処分し計画は封印させられたのですわ」

「処分って……」
「……殺された。たまたま生き残った私を除いて全員が」
美智は憎しみのこもった声を漏らす。
美智の璃瑠へと向かう異様な殺気はこのせいか。
本来なら成功例として認められた自分は認められず、璃瑠だけが認められ。それだけでなく殺されかけた。
人類を次ぎなる進化へと導くという矜持もあったのかもしれない。
それを否定されたのか。
「アルカナ計画の成功例である美智なら次元干渉が出来るってこと？　出来る？」
「……現にしてみせました」
その結果、全てが消えた。しかしその結果は弘佳や美智にとって想定外のものだった。莫大な魔力エネルギーが流入したのは確かだ。だがそれによって全てが消えるという結末は確かに理解出来ない。
起こるとすれば前回の新宿大規模爆発事件と同じように消し飛ぶだけだ。
それにあの時の記憶の交錯は何だ。他人の脳を直接覗いたかのようなあれは。
「じゃあ、あの記憶が見えたのは何だ？」
「ですから、あの場で起きた結果は全て想定外だったと言ってますでしょうが」
「美樹ちゃん、ちょっと話逸らさないで。次元干渉ってどうしたら出来るの」
「……次元の接点が見えるから、そこを中心に術式を組んで崩壊さ

せます」

さっきからオカルトくさい。いや、魔法自体もだいぶあれだけど。

「もう十分でしょう？」

「最後に一個だけ」

こよりが鎖を解除した。

自由になった弘佳と美智が立ち上がる。

「まだ続ける気なの？」

「わたくし達は降りませんわよ」

「沈みそうな船でも？」

「なら泳げば良いですわ」

【11ー16】

【11ー16】

「止めなくて良かったのか」
「そんな権限もやる気もないよ、なーい」

去って行く弘佳と美智をこよりは見送って私の方に向き直る。鎖は未だに私達に絡み付いたままだった。
スライドシフトで突破は出来るが、どうするか。

「私達はいつ解放してもらえるんだ？」
「……美樹ちゃん。あたしわかんなくなっちゃった」

こよりが膝をついた。私の顔を下から覗き込む。
上目遣いのこよりの目元に波だが浮かんでいるのを見て私は言葉に詰まる。

「魔法であたしは人の意識を変えていけると思ってた。新しい局面を迎える事で人は古い価値観を捨てれると思ってた。
でも弘佳に裏切られてわかんなくなっちゃった。
おんなじ目的の筈なのにこんなにも食い違う。
おんなじモノを見てるのにこんなにも分かり合えない。
あたし達もそうでしょ。
どうして何だろう。どうしたら良いんだろう。
それがわかんなくなっちゃった。
あたしね、世界を変えたいって言ってるけどそんな大それたことじゃないんだよ、本当に欲しいのは。
美樹ちゃんと、あたしの関係が祝福される世界であるなら、それだ

けで良いんだよ。
でもね、それは何をもってして達成されるのかな。
どこがゴールなのかな。
途方もなく長い道の真ん中で迷子になっちゃったみたい。
そうして迷って、何の関係もない沙織ちゃんを巻き込んで。
殺した。あたしが殺したんだ。彼女は何も関係無かったのに！
あたしの身勝手な理由で巻き込んだ！　それで望む結果なんて手に入る訳がない！
誰かを犠牲にしたらそんなの意味ないじゃない！
弘佳はなんであんなことしたの！？
あんなのあたしは望んでない！　あの結果の先に望むものが手に入るの！？
あたしどうしたら良いのかな。人は変わるのかな。
どうしたら変えれるのかな。
魔法をより解明出来れば社会に還元出来ると思ってた。
それで社会構造は変わって世界は変革して、人々の意識は価値観は次へと向かうと信じてた。
旧来の問題が解決すれば幸福へと近付けると思ってた。
でも違うんだよね。多分人は変わらないんだよね。
美智のように、璃瑠のようにその存在になれたとしても多分また新しい不幸が生まれて。
そして根本は変わらないまま表面だけ変わって行くんだ。
あたし達が認めてもらえる日なんて来ないんだよね。
変えて行くのなんて無理なんだよね。」

「そうだとしても、私はこよりを愛してる」

「それじゃあ、あたしは満足出来ないんだよ。
認めてもらえないなんて耐えきれないよ。
それって社会からあたし達抹殺されたようなものだよ。

それって存在しないと同義じゃない！」

「……そんな寂しいこと言うなよ。私一人じゃ駄目なのか」

「……ごめん。ちょっと考えさせて」

【11-17】

【11-17】

「ねぇこの前のやつは何か分かったのかなぁ」

梨花の問いに佐樹は首をかしげた。

質問の意図が伝わってない事に気付き梨花は付け加える。

「ほら、ビルが消えちゃったところ調べに行ったでしょ？」

「さぁ。野方さんからは何も聞いてないわ」

野方は何か勘付いたように佐樹には見えたが、彼は特に何も明言しなかった。

あの場所で何か見つける気は無かったという事か。

だが、野方は確かに言っていた。

梨花を救う為への大きな前進となる、と。

押し黙った佐樹を見て梨花はポツリと呟く。

「……ねぇ、あたしいつ死んじゃうのかな」

その問いに佐樹はどきりとする。

「……魔法の毒性は個人差が出るわ。いつ悪化するかは検討もつかない。一年かもしれないし三十年生きるかもしれない」

「嘘でしょ？　佐樹ちゃんの嘘はすぐ分かっちゃうから」

梨花の見つめる目が真っ直ぐ過ぎて佐樹は誤魔化せなかった。

「……一ヶ月はもたない、と」

「そっか。一ヶ月かぁ」

「……。」

「次の作戦を遂行したらどうなるのかな」

「おそらく政府との戦いは最終決戦を迎えるといってもいい」

「そっか。あたしの寿命それまで持つと良いなぁ。あたしが死んだら戦力減っちゃうもんね」

明るく言う梨花を見て佐樹は溜め込んでいた気持ちを吐き出す。押さえつけていたものが零れてしまう。

「……あなたはこれ以上闘うべきではないわ。戦えば戦うほどあなたの寿命は縮む。だからあなたは」

「それじゃあ駄目だよ。あたしは最後までみんなの役に立ちたい。じゃなきゃあたしなんで頑張ってるのか分からなくなっちゃうよ。それがあたしのやるべきことでしょ？」

「あなたは少しでも生き永らえるべきよ。あなたがこれ以上戦うなんて！」

「どうしてそんなこと言うの！？」

「あなたに生きて欲しいから！」

「矛盾だよ。戦わなきゃ必要とされないのに、必要とされてるから戦っちゃいけないなんて」

佐樹は梨花を抱きしめる。

「私はあなたに生きて欲しい。そんなこと言わないで」

【11-18】

【11-18】

梨花の家庭事情は悲しいものだった。交通事故で姉を亡くし、それによって梨花の母は精神的に壊れてしまった。
そして、出来の良かった梨花の姉が死んだ事を拒絶し、梨花の姉でなく梨花が死ねば良かったと願うようになってしまった。

そして母は最期まで生き残った梨花を呪い自殺した。いや梨花を巻き込んで無理心中しようとした。
そして梨花は生き残った。彼女の5ナンバーである瞬間移動によって。

親から拒絶された彼女は、魔法という力によって必要とされる場所を見つけた。
彼女は喜んだ。
魔法があれば、自分にしか出来ない事が出来る。認めてくれる人がいる。必要とされる。

だから彼女は魔法を使い続けた。闇雲に。
野方の指示の下。犯罪というものに手を染めてもなお。

そして梨花は一人の少女に出会った。

佐樹の人生はおそらく平凡なものであった。魔法に目覚めるまでは。
魔法という力で佐樹は人を殺した。友達を守りたかったから。
完璧な正義を実現したと思った。

けれどそのやり方では誰も笑ってくれなかった。褒めてくれなかった。
更生教育の後で待っていたのは誰からも投げ出された事実だった。
親戚中をたらい回しにされながら行き着いたのは野方の所だった。
どういうツテだったかは知らない。
野方は佐樹に言った。

君は間違っていなかった。
だから、これからは君のやり方を活かせる事をしよう。

二人の魔法使い。二人は野方の言われた通りに動いた。
佐樹の理想を体現するため。
梨花の顕示欲を満たすため。
二人は自らの目的のために動いた。
そして佐樹と梨花は出会った。

「こんにちは！　高田梨花です。石神佐樹ちゃん?だっけ、よろしくね！」

けれどもある日。

「高田梨花は恐らく1年と保たない」

ある日、そう告げられた。佐樹にはそれが理解出来なかった。

「そっかー、残念だなー」

そう明るく言う梨花を見て佐樹は理解出来なかった。
どうしてそれを告げられて平然としていられるのか。

「佐樹ちゃんとせっかく友達になれたのにね」

けれど佐樹は気付いた。笑顔の裏に隠しているだけなのだと。誰よりもその事実を受け止めきれないのだと。

そんな梨花を見て佐樹は耐えきれなかった。

「何か方法は無いんですか、梨花を助ける為の」

「魔法が彼女の、肉体を蝕んでいるのが原因だ。魔法の無害化、それさえできれば何とかなる」

「どうやって」

「それは分からない。けれど、その為に私は研究を重ねている。だから協力してくれないか、君の力を彼女を、助けるために貸して欲しい」

ただがむしゃらに。佐樹はひたすらに。梨花を救う為に動き続けた。魔法の無害化さえ出来れば。その為だけにありとあらゆる人間から情報を得、奪い。

佐樹の目的はいつしか梨花の為だけになった。

「救ってみせる、必ず梨花を。私が」

【11-19】

【11-19】

『計画はどうかね』

野方はワイングラスを揺らしながら夜景をぼんやりと眺めていた。
通話相手すらもどうでも良くなってくる。

『こちらは手筈通りライフルを十丁用意した。人員も問題ない』
「計画に何の支障もないよ。しかもだ、タイミングよく革新派が大規模なテロを起こしてくれた」
『新宿のは凄かったようだな。高層ビルが消えたと』
「国内感情は弱腰の政府への不満が高まり、移民政策も多大なバッシングを受けている。更に不審船事件も親中派の政権のせいでグダグダだ。下地としては申し分ない。そこへ今回のテロ。計画を実行してくれと言わんばかりだよ」
『後はスキャンダルの一つでもあれば完璧だが、このタイミングをのがしたくはない』
「それに関しては手を打っているよ。計画実行は来週中に行う」
『そうか、成功を祈る』
「祈るまでもないさ」

通話が切れた。東永井ビル消失現場の報告書を眺める。
それは期待はずれなものであった。高濃度の大量の魔力が流入しただけで、変わった物質の一つも確認されていない。
だがそれで十分であった。野方の考えを裏付けるのにはそれで十分であった。

「失礼します」
「あぁ」

佐樹が野方の部屋を訪れた。何か決めたような表情を見せる佐樹に野方は優しく声をかける。

「何か用かな？」
「梨花の容体が芳しくない。これ以上あの子を使うのはやめて」
「しかし、それは彼女自身が拒否するのではないかな」
「だとしてもあの子を死に急がせるわけにはいかないわ」
「君ですら止められないのだ、私に出来よう筈がない」
「指示を与えなければ良いわ」
「彼女は嫌がる」
「それだって生きてこそよ」
「……分かった。彼女を前線から外すよう努力しよう。だが、次の計画ばかりは彼女の力が必要だ」
「それであなたの計画は最終段階に入るというの？」
「あぁ。ようやくだ。この国が変わる時がきた」
「乗りかかった船であろうと、あなたの言う理想が、追い求める末が、どんなものであろうと私にはどうでもいいわ」
「けれど君も信じた道だ。完璧な正義という理想を」
「そうね、でも正義なんてものそこら中に転がっているのだとも知ったわ」
「なら君の言う正義とは何かな。私の想う国の行く末ではダメなのかね」
「あの子が笑うなら何だっていいわ」
「ならそれは何をもってして満たされる」
「少なくともあの子が戦い続けた末にはあり得ない」
「それを決めるのは彼女自身だ」
「あなたがそんな個々性を重んじるとは思わなかったわ」

「私はいつであろうと自主性を尊重しているさ、君たちの処遇のようにね」
「あなたのいう理想とは随分違うようだけど」
「自らの内に指標を持たない者と確固たるモノを持つ者は違う。君たちは後者だ、尊敬に値すると私は思うがね」
「……。」
「私が忌み嫌うのは前者だ。だがらこそ、私は彼らの為に尽力するのだよ。正しき道標を立ててやらねばならない」
「政府の解体、そして新しい政府の立ち上げ」
「国民を導く強い国だよ」
「魔法使いの国……」

【11ー20】

【11ー20】

革新派による同時多発テロより三日後。

テロは全て当日中に解決したものの、甚大な被害を出した。また弘佳達のグループによる新宿東永井ビル占拠事件はビル損失だけでなく、突入部隊と人質全てが行方不明という最悪の事態を招いた。

あまりの被害と魔法使いの存在により政府当局は情報統制と現場周囲の立ち入り禁止を行ったものの、高層ビルである東永井ビルの消失という事実は隠しきれるものでなく、インターネットを中心に爆発的に話は広まり情報開示を行わない政府への風当たりは非常に強かった。

東永井ビル消失現場への制圧を行った独立派の意図も未だ不明であり、一両日中に全て撤退した彼等の足取りも掴めずにいた。

「上も下もひっちゃかめっちゃかだぜ」

私のぼやきを璃瑠が拾った。

「現政権への批判もより強くなるでしょうね」

政府が積極的に行った日本への移民政策は、近年長引いている不況と失業率の増加が原因で厳しい評価を受けている。移民排斥への気運も高まりつつある。

また日本民間人の死者を出した日本海中南部海域不審船事件での対応の弱さもあいまって国民の中には右翼感情が高まりつつある。

おそらく次の選挙では中道右派が大きく議席を増やすかと思われる

のだが、中道右派の政党が小さいため何とも言えないところである。

「政府はどう乗り切るか、だな」

「問題は六課も山積みです。魔法使いによる大規模テロに対してＳＡＴや六課では対処しきれないと露呈しました。現に大きな被害を出しています」

「陸自の魔法使い連隊が何処までやれるかだな。六課はそっちと足並み揃えてかないと」

私はそう答える。

妙に意識してしまって璃瑠と目が合わせられない。

私も問題を一つ抱えていた。

あの記憶が交錯した時見えた璃瑠の感情の奔流。あの中で璃瑠は私の事を好きだと言っていた。

つい意識してしまう。

「革新派は今回のテロでかなりの痛手を受けた筈です。しばらくは動けないかと思いますが」

「だが、あいつは降りないって言ってたぜ」

「……美樹さん」

「なんだ？」

改まった口調に私は動揺する。璃瑠がこっちに向き直ったせいで慌てる。

私は何を恐れているんだろう。

好意を寄せられている事？　それを口に出される事か？

「あの……私」

そこで課長が顔を出した。

「仕事だ」

「貧乏休みなしっすね」

「美樹さん、心が貧乏なんですか」

「誰かさんのせいで心が休まらんのよ」

課長が声を落とした。

「今回の任務はとある人間をピックアップし保護してきて欲しい。アルカナ計画に関わっていた人物だ。所在不明だったが最近居場所が割れた。革新派にアルカナ計画に通じるものがいる以上、革新派が壊滅状態の今、何らかのアクションを起こす可能性がある。そのため速やかに保護して六課へと連行して欲しい」

「保護……ですか？」

「ただし、その人物が我々に従わない場合や革新派に同調しようとする場合は情報漏洩を防ぐ為に然るべき手段を行使して欲しい」

「然るべき手段って」

「消せ」

【１１章・魔術師は夢見た（前編）完】

【12章・太陽は沈んだ】

【12章・太陽は沈んだ】

「こんな山奥で隠遁生活とは。スキーがしたくなるな、私達も」
「……。」

コート一枚では少し肌寒い。山道バスを降りたのは私達を含めて十人ほどだった。スキー旅行と思われる集団の中で高校の制服にPコートを着込んだ私達は浮いてる様に見えた。
スキー旅行の集団が歩いて行く方向がペンションの密集地帯だと分かると私達はその後ろについて行く事にする。
この辺りはスキー客相手のペンションと別荘が多くあり、今回の保護対象は、その内の一つで文字通り山籠り生活をしているらしい。
新宿真里亞（あらやど　まりあ）。女性。29才。アルカナ計画の主任者。

居場所の割れた彼女をいち早く保護し六課へ連れて帰る。それが不可能であるのなら（彼女が拒否、もしくは革新派などに着く）速やかに処分せよ。

処分か……。

「ねぇ、君たち。何処から来たの？」

少し気分が沈み込んでいると私は声をかけられた。
30過ぎ位の女性だった。ダッフルコートにジーンズを履き、長い髪を後ろで一纏めにしている。
リュックサックを一つ背負っているが、旅行者ではなさそうだった。

「どなたさまですかー？」
「あぁ、わたし？　川越って言います。雑誌の記者をしてるんだけど、この辺の取材に来てるんだ」
スキー場の取材か。にしては時期が遅くはないか。１２月中旬だぞ、もう。
ジャーナリストという職業ほど信用できないものはない。名刺にジャーナリストとでも書けばなれてしまう簡単なものだ。偽装も容易い。
考え過ぎか。
「それ高校の制服よね、この辺に学校あるの？」
「冬季講習終わったから直接こっちに来たんですよー。お母さん達先にこっちに来てるんですー」
「あぁ、そうなの」
制服は避けるべきだったか、目立ち過ぎる。
「記事のネタ探してるから、何か面白いものがあったら声をかけてね」
「はーい」
川越はそういうと先へ進んで行ってしまった。璃瑠がポツリと呟く。
「美樹さん」
「何だ」
「警戒し過ぎですよ」
「やっぱり？」
「美樹さん」

「何だよ」
「あの喋り方気持ち悪いです」
「可愛いだろ、私」

【12ー1】

【12ー1】

新宿（あらやど）の所有するというペンションは二階建ての小さなものであった。木製のドアをノックする。

「すいまーせーん！」

片っ端から聞き込みをしてようやく見つけた新宿の居場所。アルカナ計画の根幹を握る人物。

「ごめんくださーい！」

その人物がここに居る。璃瑠を美智を運命へと巻き込んだ人物が。私達の抱えた謎を解き明かすかもしれない人物が。彼女を保護し連れて帰る。

「あのー！　新宿さーん！」

どんな人物であろうか。

背にハンドガンを握った手を隠して。額には季節に似合わない汗が滲む。

六課に状況によっては消せとまで言われた人物だ。危険なのかもしれない。第一アルカナ計画なんていう狂った計画に関わっていた人物だ。まともな人間とは思えない。

……。

「ていうか、出て来いよ！」
「美樹さん、落ち着いて」
「どんだけ焦らすんだよ！　もう考えることなくなっちゃったよ！」
「何やってんだ、お前ら人ん家の前で」
私達の後ろに立っていたのは背の低い女性だった。成人女性ながら璃瑠よりも低い。化粧は薄く装飾品の類もない。
肩くらいまである髪は無造作に切られていた。上下スウェットにジャンパーと身なりに気を配って居る様には見えない。
「そこオレの家なんだけど、お前ら何だ？」
「オレの家……って、あんたがまさか新宿なのか」
「そうだが」
私はハンドガンを構える。
「公安部公安第六課超自然現象及び事件特別対策係だ。新宿真里亞、一緒に来てもらおう」
「あぁ、となるとそこのちっこいのはもしかして落合璃瑠か」
新宿は手から提げていた大きく膨らんだビニール袋を私達に突き付けて見せた。
「まぁ、上がれよ。お前らの為に買い込んで来たんだから」
「え？」
「沢山来られると何の用意もないんでね、駅前までわざわざ下りて買って来たんだ。たいしたものは出せないが、ワインならあるぞ」

【121-2】

「適当に座ってくれ。あぁ、それとストーブをつけてくれないか、脇に赤いボタンがあるからそれを押してくれ」

流される様にして私達は新宿（あらやど）の家へと招き入れられた。新宿がビニール袋をテーブルに置くと中から食料品を次々と取り出す。

「アカとシロどっちだ？」
「ワインの話なら未成年だよ」
「政治の話だが？」
「ワインの瓶片手に聞くとそうとは思えないよ」

璃瑠が私の後ろでキョロキョロしていた。

「にしてもこんなに早く来るとは思えなかった。他のは後から来るのか？　いや、別々か」
「……あんたは何を言っている」
「あと三人来るだろう？　伏見だったか、お前が来るのは予想外だったが」
「は？」
「食器足りないからプラスチック皿だが勘弁してくれよ」

私が聞きたいのはそういう事じゃない。

「あと三人とはどういう事だ」
「お客さんが来るんだが？　オレはてっきりお前らのお仲間かと」

「私達が来るのを知っていたというのか」
「そうだが？」
「どっから情報が漏れてる、政府筋のパイプラインがあるのか？」
「あー勘違いするなよ、もうそういうのは一切お断りだ」
「ならあんたは何故私達が来るのを知っていた、そしてあとの三人と言うのは誰だ」

新宿が忙しそうな手を止めた。私の方にオリーブオイルの瓶を向けた。

「伏見、お前魔法使いだな」
「そうだよ」
「なら魔法を信じているな？　５ナンバーは？」
「信じているし、私自身５ナンバーだよ」
「オレには特殊な力がある。未来予知だよ」
「未来予知……？」
「五人、それだけの来客がここに来る。その映像が見えた」
「んな馬鹿な」

未来予知だと。それによって私達が新宿を訪ねる事が予測の範囲内だったというのか。
第一未来予知などという魔法が、存在し得るのか。

「なら、用件も分かるのかしら？」
「！？」

知っている声がした。嫌な記憶が過る。

「弘佳に美智！？」
「勝手に上がらせて頂きましたわ」

この二人が来客だというのか。
突然家に押しかけられたにも関わらず新宿は余裕そうに笑った。

「役者が揃って来たな。それと久しぶりだな美智」
「なんであんた達が」
「こちらのセリフですわね」

こんなところで顔を合わせるとは予想していなかった。
どうする。腰のハンドガンのグリップを指の腹で触る。

「ストップだ。オレの家に揉め事は持ち込まないで欲しいな。それにまた誰か来た様だぞ」
「ごめんくださーい！　あのー宅急便でーす！」

また知っている声がした。忘れられる筈がない、勘違いしようもない声が。

「下手な小芝居は良いから上がって来い」

足音騒がしく一人の少女が顔を出した。

「おお、なんだこりゃ。オールスター集結？　集合？」
「鷺ノ宮こより……」

私に璃瑠、弘佳に美智、そしてこよりと、あまり嬉しくないメンバーが揃った。

「なんなんだ、こりゃ」
「さて食事にしようか」

【12ー3】

なんだ、この状況は。
と誰もが口に出さないが思っていると思われた。こよりだけはマイペースを崩さないように見えた。

「これめっちゃ美味しい！　うんすごく美味しい」
「だろ？」
「いやー来てよかったよ」

お前は何をしに来たと言うのだ。
革新派である弘佳達と行動を共にしているようには見えないし。前回の新宿区でのテロで決別した筈である。アルカナ計画の責任者から情報を引き出しに来たのか。
こよりはどれだけの情報のライフラインをもっているのか。政府内部にでも内通者がいる気がする。
新宿（あらやど）はワイングラス片手に言う。

「オレはもう関わるつもりはない。政府だろうが革新派だろうが」
「そう言われてもこっちも仕事なんだよ」
「キュウリョウドロボー……」
「連れて帰って来いってのが上の指示なんだよ」
「キュウリョウドロボー……」
「璃瑠ちょっと黙って」
「こっちも素直に帰れと言って帰ってくれるとは思ってないさ。そ

っちの質問には全部答えてやる、それで手を打ってくれ」

新宿の提案に弘佳は頷いた。私達はそれで手を打つというわけにはいかないが、彼女の話は聞いておきたい。

「もともとこちらはそのつもりですわ」

「あんたは何処まで知っている」

「何処まで知りたい？」

「アルカナ計画というものは本当に次元干渉を目的としたものだったのか」

「あぁ。だがしかし」

「しかし？」

「それは計画途中であまり重視はされなくなった」

「兵士としての完璧な魔法使いの完成を目指したからか」

それの成功例が璃瑠であり、上位次元干渉を目的とした魔法使いの成功例が美智であるとは聞いた。

「それもあるが、オレの研究対象が変わった。魔法の本質だ」

「魔法の本質？」

「一応念を押すが、ここから先はオレの確証のない推測を多分に含む。それとあんたらは多分引き返せなくなるが良いのか？」

新宿の何かを含んだ言い方に璃瑠が不機嫌そうに答える。

「引き返せなくなるってどういう事ですか」

「お前らの中の世界がひっくり返り崩れる」

「ここまで来たら引けねぇよ」

私の返事に新宿は鼻を鳴らした。

「魔法は熱エネルギーの、エネルギー保存の法則を無視している。あれだけ莫大なエネルギーを生み出すには下地がない。言ってしまえば無から有を生み出している。逆にオレ達は魔法使いが何処からエネルギーを生み出しているか考えた。何処かにエネルギーがあって、それを現実へとフィードバックしてくる、つまり魔法の存在する領域があると考えた」

「何処からかエネルギーを引っ張って来てるってこと？　こと？」

「そうだ。無から有を生み出すのではなく、何処かにある有を無の空間へと引っ張ってくるとな」

作れないからもって来ると。

エネルギー保存の法則を今更解くまでも無いだろうが、簡単に言うとエネルギーが形を変えたとしてもその総量は変わらないというものである。

私達が魔法でどんぱちやった時に生じるエネルギー量は多すぎると言う事だ。

それを説明するのがＭａ元素であるが、このＭａ元素自体もかなりあやふやなものである。

「エネルギーを引っ張ってくる元、それが上位次元か」

「上位次元にある莫大なエネルギーつまり、魔力をこの次元へと引っ張ってくるわけですね」

「……それを可能とするのが魔法使いです」

「魔法の存在する領域、この次元より一つ上の場所。それの居場所をオレ達は突き止めた」

「それは何処なんだよ」

「ここだよ」

そう言って新宿は自分の側頭部の辺りを指差した。人差し指でこめ

かみを突つく。
意味が分からず私は首を傾げる。

「エカタス理論というものを知っているか」

我々をその存在として確立し得るのは観測者による認識によるものである。逆説的ではあるが、観測者に認識されるものならばその観察物は存在するものである。観測者が観測しているならば、それが実在しないとしても存在として確立する。それを否定する術を観測者は持たない。
故に観測者の内に共通の認識を抱かせる事が出来れば、無より有を確立すると等しい。それは即ち現代の魔法となり得るのではないか。

この話、いつか璃瑠とした気がする。梨花と話をした後だったか。
そう言えば、あいつはどうしているのだろう。

「観測者の認識によって全ての存在は確立される。量子力学の話だろ？」
「あぁ。つまりだ、観測者が認識したものは真偽はどうあれ事実となるという事だ」
「それが？」
「魔法というわけだよ」

こよりが食べる手を止めた。
新宿の話がだんだん大きくなってきたのを感じる。

「魔法使いは周囲の認識を歪めこの世界の構造へと介入することの出来る。つまりだ、魔法使いが魔法と言うものを自身で認識しそれを周囲にもみせることでそれを現実へとフィードバックしているんだ」

魔法使いが魔法というものを認識し、周囲に見せる。それによって現実にフィードバックする。
その言葉を脳内で何回か反芻するも理解に辿り着かなかった。

「魔法と言うのは実在しないとでも？」
「いや観測されることで存在は確定される。周囲の人間、つまり観測者達がが魔法が『観えてる』ならそれはもう実在すると同義だ」
「周囲に魔法が存在していると誤認させると言うことですか？」
「誤認だとしても魔法で火をつければ火は出るし、誰かを攻撃すれば傷付く」
「それを誤認と言い切るのか」
「存在していると認識しているからな」
「んな強引な」
「脳内概念の具現化。周囲の観測者たる人間が魔法使いの生み出した概念を共有することで現実とする」

私達が魔法としてきたものは実在しない誰かの妄想だと。それを周囲の人間が存在していると信じ込んでいるから現実になるだと。
そんな、それこそ妄想の様な話だった。

「それが魔法だ」

【12ー4】

「自らを上位の観測者へと押し上げ、周囲の認識を捻じ曲げる。それが魔法だ」

【12ー4】

観測者が認識する事で存在は確定される。その認識を操作出来る存在。

単純にすると、魔法使いは目が良くて声の大きい存在だ。何かを見つけるとそれを指差し叫び出す。それにつられて、周囲の人間も魔法使いが指差し指摘したことでその存在に気付く。誰もが気付かなかったゆえに今まで存在していなかったものが、周囲の人間に認識されることで存在することになる。

魔法使いは存在していなかった魔法を観測することで周囲に認識させ現実に存在するものへと昇華させる。

「魔法の存在する領域はお前たち魔法使いの脳内だ、それを現実へとフィードバックしているんだ。

そしてその中でもより強力なものを5ナンバーと定義した。

観測者は自らが観測したものを否定する術をもたない。どんなに否定しようと観測してしまったものは既に実在してしまうからだ。しかし上位観測者は違う。自ら観測したものを否定しネジ曲げる」

「魔法使い全てがそうではないのか」

「魔法使いは魔法の存在する領域からフィードバックしてくることは可能だが、現実に既に実在、つまり認識されているものへ介入することは出来ない」

「性質が違うのですわね。無の領域へと違う領域から有を引っ張ってくるのが魔法使いであり、5ナンバーは有を違う有、もしくは無

へと変換することが出来る」
「そうだ、つまり周囲の人間そして上位観測者自身が既に認識し存在を確立したものを否定することが出来る。見たものを見なかったことに、あったものをなかったことに。普通の観測者ではそれは出来ない」

人は現実に存在しているものを存在していないと完全に思い込むことは出来ない。
故に観測してしまい、その存在は確定される。

「5ナンバーの特異性はエネルギー反応以外の方法をもってしてこの世の理に介入出来ることだ。つまり観測者によって認識されている現実へと介入して認識を捻じ曲げる。既に観測されてしまい存在を確立したものを否定出来る」
「ちょっと待てよ、私は5ナンバーだけどそんなこと出来ないぜ」
「お前の5ナンバーは何だ」
「物質の位置をずらす」
「やってみせろ。そこの椅子をずらせるのか」

部屋の隅に放置された椅子を新宿（あらやど）が指差した。
言われるがままに、私はスライドシフトを発動する。突き出した右手の平に視点を合わせ、ぼやける視界の中に椅子の存在を認める。
椅子の周囲の空間へと干渉し、位置をずらす。
右手を滑らす。触れることなく椅子は横に３０ｃｍほどずれた。

「ほれ」
「今その椅子がずれたのはお前の念力のようなもので押したわけではない。位置情報を書き換えたわけか」

確かにテレキネシスとは違うが。

「私達がAという位置にあると認識している物体。その事実に介入して、Aという位置という情報を書き換えてBという位置にし、それを周囲と自分自身に認識させる。すると周囲の人間、つまり観測者によって物体はBという位置にあると観測され確定される。それによってAという位置にあった物質はBという位置に移動する。ということですか」

「今オレ達は椅子がズレる過程は見えずズレた後の椅子しか見えなかったからな」

「スライドシフトはそういう理屈だったなんて……けど、上位観測者である5ナンバーが自由に認識を操作出来るなら私のスライドシフトが物体の大きさや質量に影響を受けて、しかもずらせる範囲や距離に限界があるのはおかしくないか」

「おそらくそういった制約や限界があると思ってしまっているからだ。魔法の話をしながらでおかしなもんだが、常識的な尺を何処かに当てはめているんだろうな。これ以上は無理だろうとか」

「うーん」

そういうものなのだろうか。自分で自分の限界を決めてしまっているのか。

それを超えることが出来るのか。

ふと一つの事を思い出す。

「……なら東永井ビルが消えた理由はまさか」

「上位観測者が観測出来なかったからですか」

「上位観測者が認識出来ない、もしくはしないものは存在しないと同義だ」

「待てよ、あの場にいた5ナンバーは私だけど足場になっているビルなんて認識してるに決まって……いや違う」

そうじゃない。あの時に消えたきっかけは入間沙織の言葉だった。

『なにこれ、ねぇなにこれ。私一体……ねぇ、答えてよ!?』

『こ、ここ……わ、わわわわたたわたたわたたわたしは』

『消える……!?』

「入間沙織の消える、という言葉で全てが消えた」

タイミングからして、彼女が関係しているのは間違いない。

「錯乱状態の入間沙織が認識齟齬を起こした事で全てが消えたと言うの？　まさか？」

「入間沙織はビル内に居た突入部隊の存在も人質の存在も知らなかった。つまり認識出来なかった」

「あの時視界がぼやけていたのは入間沙織の認識している世界を共用させられていたからですわね」

「認識齟齬を起こした入間沙織が自分自身の存在認識があやふやでそれに錯乱し消えると思い込んだ事で入間沙織が消え、更に入間沙織が認識していた東永井ビルと認識していなかった突入部隊と人質も消えた。」

「それだけのポテンシャルを彼女は秘めていたというわけですか」

「入間沙織が魔法に無害だったのは魔法という存在を限りなく認識していなかったからかもしれないね、認識してなかった」

認識されないものは存在しないと同義だ。

こよりがいつか言っていた。

あたし達が社会に認められない限りそれは生きていないと同じなのだと。

【12ー5】

「東永井ビル消失直前に私達は互いの記憶を覗き見たっていうか交差したんだけどこれはどう言う事だ」

私は話を続ける。

あの時、私達はその場にいた他人の記憶の映像を確かに見た。知り得る筈のない他人の頭の中を。

詳しい話を聞いて新宿（あらやど）は口を濁した。

「……5ナンバーであるお前ががその場にいたものの記憶を観測したことでそれが無意識のうちに共用されたのではないかな」

「記憶を観測？」

急に歯切れの悪くなった彼女は少し考えてから続けた。

「お前はおそらく上位観測者では収まりきらない。その上に居る」

「？」

「人の記憶までも観測してみせた。信じられないことだよこれは。」

「……私が」

「人の記憶までも観測した……あり得ない」

しかし現に私はその場にいて、彼女達の記憶を見たのだ。無数のフィルムカットをかき集める様にして。走馬灯の如く。

私の記憶能力は上位観測者としての能力によるものなのだろうか。

記憶の中にダイブし五感全てが記憶の中でも機能し、見ていなかった細かい箇所も鮮明に思い出す事が出来る。

これも上位観測者だからと、いう説明がつくのか。

新宿が黙りこくったので弘佳が話題を変えた。

「なら魔法の有毒性についてはどう説明しますの」

「脳の酷使に身体がついてこれないんだろうな。そもそも魔法自体理に反する。周囲の観測者の認識を捻じ曲げることで魔法使用者内の脳内領域の概念を現実世界へとフィードバックする。この反動が出ないわけがない」

だがしかし、魔法使用者以外にも魔法は有害な筈だ。魔法反応の生じた場にいた全員に悪影響を及ぼす。

周囲の認識を捻じ曲げているから捻じ曲げられている方にも悪影響が出ているのか。

「なら魔法の有毒性をなんとか回避する方法はないの？　ないの？」

こよりの質問に新宿は腕を組んだ。

そればっかりは難しいのか。そもそもアルカナ計画で完璧な魔法使いを目指すのなら、それも目的に入っていそうなものだが。

「そこまでは分からん。原因がはっきりしない以上なんとも言えんが、魔法という概念を中毒者から引き離す事が出来ればあるいは」

魔法という概念か。

私の中にも確かにある。確かに魔法を信じてる。

私達の魔法は御伽噺の様に素敵なものじゃない。突き詰めれば莫大なエネルギー反応とそれを利用し転用した兵器でしかない。けれど、そこにあると信じているからこそ存在するのが魔法だなんて随分とメルヘンな話じゃないか。

「概念を引き離す？」

「魔法なんて忘れて静かに暮らせってことさ」

「よく言うよ」

「オレだって忘れたいもんだよ」

【12-6】

新宿（あらやど）の部屋を一人、美智が訪れた。

「……お久しぶりです」
「あぁ。」
「……。」
「オレは逃げ出した。今でもなにが正解だったのか分からない」
「……。」
「お前を助けた事は本当にお前の為になったのか今でも悩む。美智、オレを恨んでいるか？」
「……いいえ」
「恨んでいてくれた方が気楽だったかもしれないな」
「……。」

アルカナ計画の中断は全ての破棄を意味した。政府組織が人体実験を行っていたこと。更に魔法というものに手を出していたこと。全てが明らかになってはならない事実であった。
利用価値があると判断された落合璃瑠を除き全ての強化人間と被検体を破棄し、組織は解体。参加していた科学者、職員達は別の研究施設や公安へと配置換えされた。

新宿はその時、美智を生かす選択をした。

「あの時、オレにはお前が哀れに見えた。誰かの都合に振り回され、そして殺される。そんな運命はおかしいと思った。

だから、もっと生きるべきだと思った」
「……。」
「けれど、それはオレのエゴだ。そんな過去と宿命を背負った人が自由に幸せに生きれるなんていうのは無理だった」

もしそれが叶えられないのなら。
行き着く先は憎しみだけだ。
その矛先が見つからないから、突き立てる先は大きなものになる。

「美智。お前は何をしたいんだ。何を思って此処まで来てしまったんだ」
「……私は生きていると証明したいです」
「どうやって」
「成し遂げてです」
「何をもってして」
「人も世界も変わらないといけない。でなければ同じ事を何度も繰り返す。私の様な子供が生まれる事のないように人類を進化に導かなくてはならないんです。そのための力も宿命も授かった。それが生きる意味だと背負わされました」
「もうそんな事に拘る必要はないんだ」
「……でもそれが私の使命です」
「それだけが生きる意味じゃない」

その宿命は背負わされただけだから。その重荷はもう背負わなくて良いのだから。
復讐の矛先を大義名分で塗りかくして、人と世界へ喧嘩をうって。
それでは何も救われない。

「……。」
「なぁ、オレと何処か遠くへ行かないか」

「……え？」

新宿の誘いに美智は虚を突かれた。

「世界の手なんて届かない場所へ。煩わしいものは何もないどこか。もう疲れたんだ、立ち向かうだけが人生じゃない」

「……私は」

「オレにはお前が必要だ、美智」

「何処かで静かに暮らそう」

【12-7】

美智が部屋から出てきたのとすれ違いに私は新宿（あらやど）の部屋に入った。

「美智と何を話していたんだ？」

「プライベートだよ」

「あんたがやった事で、不幸な人間を生み出した。彼女もそうだ。その事に後悔はないのか」

「あるさ。今でも押し潰されそうになる。人は後悔の中でしか生きていけない。過去ばかり見てる人間は特にな」

「そればっかりは同感だよ」

私達は過去の積み重ねの上にしか立てないから。だから埋れそうになる。それが悪いことだとは言い切れないと私は思う。

「落合璃瑠はどうだ？　今でもオレを恨んでいるのか」

「どうだろうな。わかんないよ。ただあいつが何もかも馬鹿げた事だと思っている原因はあんたかもしれないな」

「当時からだったよ。だが今日見た時は幾分違って見えた」

「？」

「あの頃より目が生き生きしている」

「あれでか」

「骸骨からゾンビ位にはレベルアップしてるよ」

「そりゃ大したもんだ」

「それに恋する少女の顔になった」

「恋！？」

「鷺ノ宮こよりを見る目が完全に嫉妬の目だったよ」

「なんと言う……」

璃瑠の気持ちが私には分からない。いや分かっているけれど理解すれば引っ込みがつかなくなる。
それが何故だか怖い。

「それで本題だ。公安六課は何を要求している」
「あんたを連れ戻せとしか命令を受けていない」
「今更アルカナ計画を掘り起こしてきてどうしようって言うんだよ」
「あんたは知りすぎだ。どこから良くも悪くも狙われるだろう」
「オレが消されるのはともかく何処かにヘッドハンティングされるのは我慢ならないわけだ」
「上は多分そう考えてる」
「お前自身はどう思う」
「現に今革新派の接触を受けているわけだしなぁ」
「親子の再会みたいなもんだろ」
「涙じゃなくて血が流れかねん、今すぐではないだろうけど」
「だがオレの知り得る事は全て話した。あの二人はもう十分なんじゃないか」
「弘佳はまだ人類の進化を諦めていない」
「オレの知識じゃそれは無理だ」
「上位次元の生命体、そしてそれへと進化することは可能だと思うのか？」
「問題は上位次元と言うものが眉唾なんだよ。アルカナ計画は確かにそれを目的としていたが、聞いての通り魔法は周囲の認識を捻じ曲げるというものだ。原理はあれだが、この次元でも理解できるものだ」
「理解できるものは上位のものでない。クラインの壺と同じ理屈か」
「となると上位次元自体存在しないか、オレ達には認識出来ないという事になる。魔法でならそれは可能になると弘佳は以前思ってい

て踏み切ったようだが魔法はそんなに便利なものでもないさ」
「ならアルカナとは何だったんだ」
「計画のきっかけとなった始めての次元接触や美智によって開かれた次元の扉。これらの事象の際にこの世界ではないものと接触したのは確かだ。だがこれ以上は分からん」
「そうか」
「あぁ。」

魔法の存在する領域が新宿のいうとおり、魔法使いの脳内概念だというのなら、新宿区大規模爆発事件の際に大量の魔力が流入してきたのは何故なのか。
弘佳達は上位次元との接触によって魔力が流入してきたと考え、故に魔法は上位次元のものであると考えた。現にアルカナ計画もそれと同じ発想を元に始まった。
だが魔法は上位次元のものではなく、私達魔法使いが周囲の認識を捻じ曲げることで起こすものであり、上位次元そのものがあるかどうか疑わしいものであると新宿は言った。
しかし新宿区大規模爆発事件の際や東永井ビル消失の際に大量の魔力が何処から流入したのは確かでありその際に何らかのこの世界ならぬものと接触したのも確かだ。

上位次元はやはり存在していると考える方が自然だった。

「話を変えよう。オレはお前に着いて行く気はない。やることも行くべき場所もある」
「……もしあんたがその知恵と力を誰かを傷付ける為に使わないと言うのなら、もしあんたがあの子を幸福に出来るというなら。私には止める理由はないよ」
「……聞いてたんじゃねーか」
「それがあんたが過去と向かい合う方法ならさ」

【12ー8】

「話とやらは済んだんですか」
「……あぁ。」

璃瑠の元へ戻るとこよりと微妙な距離感を保って、張り詰めた空気が漂っていた。

「……おまえら二人きりだったのか」
「……仲良くしてましたよ」
「……うんホントホント」

嘘つくなよ。
この家では揉め事は無しだと言う新宿（あらやど）の言いつけを守ってか珍しく璃瑠は大人しかった。
表面上はだが。

こんなにも早くこよりと再会すると思わなかった。前回のテロの際に説得したかったのだが。

「これからどうすんだ」
「それはあたしに聞いてる様に見えてそうでもないよね」
「少なくとも、こよりにも聞いてるよ」
「……井草美智が何故革新派に居るのかあたしは詳しくは知らないけど、うん知らない、でも彼女が復讐の為に動いてるのは確かだよ。それって何でだか分かる？」
「人体実験の被検体にされ、用が済んだらポイなんて許せるわけが

ない」
「一番の問題はさ、彼女の居場所が何処にもないからだよ、きっと。だから壊してしまいたくなるんだよ、世界も人も。変えてしまいたくなるんだよ、失ってしまった心の隙間を埋める為に」
「でもそんなんじゃ」
何も救われない。何かを奪ったって埋める事なんて出来るはずがない。

「人体実験で完璧な魔法使いという改造人間になりました……なんて、そんなの誰が認めてくれるの、受け止めてくれるの。この世界に居場所を作ってくれるの。異質を拒絶して彼等はまた世界を形作って行くけど、美智はその時何処に居ればいいの。
拒絶された者たちは何処に辿り着くの」
「……。」
それはきっと、こよりが言いたいのは、私達もそれと同じだと言うことだ。
私とこよりの関係は異質だ。それ故に拒絶される。
それが嫌だから、こよりはそう言って世界を変えようとした。
けれど、私はそんなのは嫌だ。

「そこの璃瑠ちゃんだって一緒でしょ、誰が受け入れてくれるの。アルカナなんていう存在を。
世界が受け入れてくれないならその存在なんて……」
「違う」
「何が、何が？」
「私は璃瑠を知ってる。璃瑠は璃瑠だよ。どんな些細な問題があったって璃瑠であることは変わりない。」
「それが何の言い訳になるの」

「璃瑠がアルカナだって聞いた時、アルカナ計画の細部まで聞いた時、私は確かにそんなの気持ち悪いと思ったよ。でも私は璃瑠の事を知ってる。
璃瑠は璃瑠だし、こよりはこよりだろ？
私はそれで十分だと思ってる。」
「それで何が変わるの、変わるのさ」
「変わるんじゃない、変えていける。アルカナだろうと何だろうと璃瑠という人間を誰かが知ってくれたなら、それで受け入れてもらえる。要素じゃない、本質で」
「……。」
「人が誰かを拒絶するのは要素だよ、本質じゃない。だからそんなものに囚われずに本質を見抜けるなら人は分かり合える。
そしてその方法は私達は既に知ってる。なら人は変えていける、変わっていける」
「それが美樹ちゃんの答え？」
「そんな大層なものじゃないよ」

【12ー9】

「あなたが行きたいと言うなら行くべきですわ」

弘佳が新宿と美智を前にして言った。事情を聞いて即答した。

迷いない返事に少し美智は拍子抜けする。

「良いのか？」

「美智を引き取りたいのでしょう、そして彼女もそれを望んでいるなら、わたくしが口を挟む余地は有りませんわ」

「……でも革新派の……、弘佳さんの目的は」

革新派は前回のテロによって残像勢力は散り散りになり、弘佳の目的であった次元の扉を開き人類を強制的に進化させるそれは失敗に終わった。

美智の心配を弘佳は切り捨てた。

「あなたはもう用無しですわ。お好きになさったら」

その冷たい言い方に新宿は反論した。

「そんな言い草は無いだろう」

「人類の進化が少なくともあの子の力では不可能だというなら、あの子に固執する意味もありませんもの」

今まで散々利用しておいてその言い草かと新宿は思った。

「オレが言うのも何だがな、お前がおかしいぜ」

その言葉を聞いて弘佳が一斗待った。

そして静かに言う。

「あなたがあの子を幸せに出来るというのなら、わたくしは何も言う事はありませんわ」

「……！」

「それが成し遂げられるのなら、誰があなた達を止めようとするんですか」

その話を立ち聞きする形になってしまった私は、そっとその場を離れた。

私が出来る選択のうち何が正しいのか。けれど正しいかどうかで選ぶのは私は嫌だ。

「新宿を見逃す」

私の決意に璃瑠は無表情のまま答える。

「意味が分かっての発言ですか、それは」

多分、と濁した私に璃瑠は冷たく言う。

「下手すれば懲戒免職ですみませんよ、あなたは今アルカナ計画に関わる重要人物を革新派のテロリストに引き渡そうとしているんです」

「そうだとしても、あの二人にとってこれが最善だと思う。今ここでそうしなきゃ一生後悔する」

【12ー10】

「それで多分彼女達は救われる、私達にはそんなこと出来ない」
「覚悟は？」
「あるよ、クサイ言い方だけど、誰かを救うためにここまで頑張ってきたんじゃないのか私達は」

私の目を璃瑠は数秒覗き込んだ。瞳孔の微かな流動すら見えるほど、私は目を逸らさなかった。
無表情のそれを璃瑠は崩して、瞬きをする。次に見えたのは諦めでも呆れでもない表情で。

もし新宿（あらやど）が美智を救えると言うのなら。今まで暗闇に囚われて動けずに居た彼女をそこから連れ出せるというのなら。きっとそれは今でなくては駄目なんだ。そしてそれは私達には出来ないことだ。
美智の求めていた救いがどんな形であれ、新宿の言葉ほど近いものは無いだろうから。
璃瑠が口を開いた。

「見逃す……というのでは問題が有りますが、逃したならどうでしょうか」
「……故意ではなく過失だと？」
「まぁ、そんなもんです。幸いここは山奥ですし目撃者も少ない。新宿は逃走の末、転落死。それを偽装出来ないでしょうか」
「転落死を偽装か。死体がないのはどうする」

璃瑠が少し悩む素振りを見せた。

それを考えるのは私か。彼女達を逃すこと自体は難しくない。川に転落死なら何とか誤魔化せないだろうか。遺留品を幾つか流す事で偽装する。死体が上がらないのも誤魔化せるかもしれない。

「……というわけだ。明日の早朝あんた達を逃がす」

「それは有難いが良いのか？」

私の提案に美智と弘佳と新宿は驚いた。

出来れば直ぐに逃したい。公安に定期報告を催促される前に動きたい。あまりのんびりしていると怪しまれる。

「少なくとも私はそうしたい。それにそれが最善だと思ってる」

「事実が露呈すればお前の立場は危なくなるぞ」

「それは私の問題だ」

「……どうしてあなたがそんなに頑張るのです？」

「あんたの幸せを願う人だって居るんだよ」

「……。」

「ありがとう」

「だから生きろ。誰かを呪う人生でないものを」

【12-11】

【12-11】

日が出る少し前の明るくなりかけた空の頃。コートを着込んでもかなり寒く、突き刺すように冷気が潜り込んでくる。しかし高揚していた。

朝起きた時には既に弘佳は居らず、私達は取り残される形となった。それが彼女なりの優しさなのだろうか。

旅支度をした美智と新宿（あらやど）が白い息を吐きながら立っていた。それと向かい合うようにして私と璃瑠は立っていた。それから半歩引くようにしてこよりも居た。

「五時間後、あんたが川に転落死したという通報をする。出来るだけ遠く人目のないところへ行くんだ」

「アテはあるよ」

弘佳をずっと探していた美智は諦めた素振りだったがたえず辺りを気にしていた。

「それじゃ」

「ああ。」

なんて返すべきなのか分からず私は曖昧に頷いた。

「ありがとう」

その言葉はもういい、と私は新宿を止めながら追い出すように出発

するように急かす。
私達を背にして歩いて行く二人の後ろ姿を私達は見送る。登り始めた陽の光が凍り付いた結晶に反射して眩しい。足音は私達の吐き出す白い息の立てる音にかき消され始めた。
これで良い。
私はこれで良かったと思っている。

新しい旅立ちを選んだ二人の後ろ姿を見てそう思う。

「美樹さん」
「なんだよ」
「これで良かったと、思いますよ」

璃瑠の言葉は最後まで続かなかった。短い、本当に短い鋭い音がした。静寂を突き破ってその音は轟いた。スロウ・モーションで私の目には見えた。新宿が何かに突き飛ばされたように頭だけがよろめき、そして力なく崩れ落ちた。

「新宿を逃がすどころか革新派のテロリストに手渡すですって。一体それが何を意味するか分かっているの」

Ｍ２４－Ｓ。陸自で型落ちしたスナイパーライフルだなぁ、とぼんやりと思った。
名前はなんだっけ、あぁ川越だ。確か。
雑誌記者の彼女が何故スナイパーライフルを持っていたのか分からなかった。

彼女が新宿を狙撃したのだという事実はぼんやりと時間をかけながら私の脳内へ浸透する。

「公安としての自覚がかけているんじゃないの」

何故、この人は私が六課だと知っているのだろうか。
何故、この人は新宿と美智の正体を知っているのだろうか。
つまりだ、私達の知らないうちに六課は『援助』を送り込んでいたのか。

なんだよ、それ。

川越が話を続けようと私達の元へ歩み寄ってくる。しかし、それは途絶えた。銀の煌めきだけが辛うじて見えた。
川越の首が飛んで、それに続いて血が吹き出す。
美智がゆっくりと刀の背を返す。
見えなかった。美智が私達を飛び越して川越を斬るまでの一連の流れが。

「……あなた達は……こんな……！」
「違う」
「……３．０２Ａ－０５Ｊフェーズフローズ」
「違う」

これは。
こんなのは。
私が望んだことじゃない。

鈍い音と同時に白銀が舞った。踏み込んだ美智の手首を璃瑠が蹴り上げた。その足を踏み下ろす前に美智が刀を横凪に振り切る。璃瑠が咄嗟に張った魔力盾に刀の刃がぶつかる。しかし、美智はそのまま振り切った。魔力盾ごと璃瑠が吹き飛ぶ。
私と美智の間に空白が生まれた。その一線を美智が一気に駆け抜け

る。
その瞳に浮かぶのが何の表情か分からずに私は動けなかった。
「美樹さん！」

【12ー12】

美智の動きが止まった。飛び出したこよりに止められて。
声は出せなかった。
こよりが身を挺して私を庇ったのだと理解出来ずに。こよりの張った鎖は網の目のように無数に絡み合い壁となっていた。しかし、それが美智に到達する前に彼女は距離を詰めていた。鎖は美智の背になにも掴むものもなくただ存在しているだけだった。
だから。

美智の刃を止めたのは鎖ではなく、こより自身だった。

「これで……満足なの？　ねぇ？　こんなのは可笑しいよ」

こよりの身体を貫いて、その切っ先から血が伝う。
美智の前に立ちふさがり足を踏ん張り、その身を追いたて立たせる。
美智の手が緩んだ。口の端から壊れた笛のようなか細い音を立てて息が漏れる。開いた瞳孔が視点の先を探して震える。
動揺した美智にこよりは食いしばった歯の隙間から声を漏らす。

「わかんないけどさ、こんなのは違うってわかるけどさ、もうやめよう？　あたし、こんなの、誰もこんなの、違うってわかるけどさ、きっと君のやろうとしている事も違うよ。欲しかったセカイと違っても、望んだセカイと違っても、あたしたちはそれを壊しちゃいけないんだよ。向かい合って変えて変わっていくしかないんだよ。だからもうこんなのはやめようよ」
「……あ、たしは……なんに……も……こんなの……」

「こより！」

私は腰のホルスターからハンドガンを引き抜く。セーフティを解除して駆け出す。美智が私の姿を見て彼女の懐からハンドガンを抜き出した。
互の銃口が向き合う前に銃声が響いた。

「ーーっぁ！？」
「もうこんなの終わりにしよう、もう良いんだよ」

美智の胸から血が溢れ出す。こよりが片手で握ったハンドガンから放った銃弾が美智に風穴を開けた。
美智の左手が何も掴めずに彼女の身体は前のめりに倒れて行く。それを見てこよりは力なく倒れた。

「こより！　なんでこんな！？」
「ねぇ美……樹ちゃん……」

こよりの身体から溢れ出る赤が止まらない。こよりの身体を深く貫いた刀で私は右手を切ったがそれも気にならなかった。
弱々しくこよりは言う。

「こんなの嫌だよね。おかしいよね。何も分かってないくせに、分かったふりして、ワケもワカンナイで、がむしゃらになるんだよ」
「こより！　しっかりしろ！」
「あたしたち、あたしが欲しかった世界は手に入らないのかな。欲しかったな……。
ねぇ美樹ちゃん。
美樹ちゃんの言葉はきっと正しいよ、そしてあたしが欲しくて、あたしが探してた言葉だよ」

「こより、死ぬな！」
「ごめんね？　ごめん」

その日。
私は大切な人を失った。何も出来ないまま。

【12-13】

【12-13】

同時刻、東京。

それは突然の知らせだった。東京スカイツリーが武装グループによる占拠を受けた。武装グループは職員十数名を人質にとり立てこもり。そして政府に対して政治犯50名の開放を要求した。
そのニュースは犯行グループの声明と共に各種メディアとインターネットに政府の情報統制がかかる前に公表された。

エレベーターが固定されたことで、第一展望台まで300m以上、全長は600mを越すというその巨大な塔は最悪の要塞となった。
それに手をこまねく警察を見越してか武装グループは早急な回答を求めた。

梨花は東京スカイツリーを眺めていた。朝日の中に浮かび上がるそれはとても高くまるでそびえ立つ塔だった。
情報リークにより各種メディアにテロの情報が伝わった事で各社はこぞって報道ヘリを飛ばしていた。
東京スカイツリーまで2kmほど。民家の屋根の上で梨花は深呼吸する。後ろで軽い着地音がした。
佐樹がいた。

「指示が出たわ。始めましょう」
「うん、そうだね！」

「……。」
「あたしは大丈夫だよ、大丈夫」
梨花が笑顔で頷いてみせる。佐樹は少し悲しそうな顔を見せたが直ぐにそれは消えた。
梨花が地を蹴って飛び上がる。それに佐樹が続く。
東京スカイツリーの第一展望台に人質と犯行グループは集まって居るはずだった。
だから、そこへ跳ぶ。
梨花の姿が消えた。
第一展望台。そこへ突然現れた梨花の姿に犯行グループは動けなかった。
瞬間移動してきた彼女に動揺した、その大きな隙をついて梨花は彼女の武器である叢雲を構え引き金を引く。
光芒が一線、全てを破壊した。
『君達を呼び戻すのは様々な理由で適しているとは思えないけれども、状況が状況だ』
失意の私を待っていたのは緊急の通信であった。
こよりが死んだ。たった数時間もない前にはあんなに生き生きとしていた彼女が。美智の刃に倒れた。
『今より二時間前、武装グループが東京スカイツリーを占拠。職員１９名を人質にとり立てこもった。彼らの要求は政治犯５０名の解

放だ。そして返答がない場合人質を殺害すると』

どうしてこうなったのだろうか。
なぜこよりが死ななくてはならない。
何がいけなかった。
何がおかしかった。
こんなのは誰も望んでいない。

『しかし、彼らは全滅させられた。警察でも陸自でもない。
独立派の魔法使いによってだ。』

美智は奪われた。新しい希望の芽を。それに錯乱して彼女は全てを壊そうとした。そしてそんなのはもう嫌だ、とこよりが止めに入った。
そうして二人の死によって全て収束した。
敵も憎むものも怒りの理由も分からないうちに力を振るって、そしてその守ろうとして握った手の平で何もかも壊れてしまった。

『事件を解決した独立派の魔法使い達は人質を救出し、人質を地上に解放。そして独立派の魔法使い達は声明を出した』

どうしてこよりが死ななくてはならない。
どうしてこよりが死ななくてはならない。

そんなのは絶対におかしい。
私はそんな、こんな結末の為に今まで頑張ってきたんじゃない。

『武装グループ相手に迅速に動けない弱い政府を批判し、彼等、独立派が人質解放の為に事態を解決したとのアピールを行った。これは政府としては由々しき事態だ。テロリストに人質までとられた占

拠事件を解決され、なおかつその情報と声明は大きく拡散された』

なら私はどうすれば良かったのだろうか。

こよりが居ないんじゃ何の為に戦っているのか分からないじゃないか。

『独立派は未だ東京スカイツリー内部に居り更なる声明を出した。議員全ての非公式活動家記録と献金実態の公表だ。これは事実上のテロにあたる。独立派は事件を解決したと言っているが、先の邪魔者を排除し立てこもりによって自らの要求を行っているにすぎない。これより東京スカイツリーを占拠する独立派の排除作戦を開始する』

【12章・太陽は沈んだ完】

【13章・塔は開かれた】

【13章・塔は開かれた】

東京スカイツリーの第一展望台を中心として展開している独立派の魔法使いの数は５０。殆どがマギア機関によって魔法を手に入れたもの達ばかりであった。
第一展望台までは地上から３００メートル。エレベーターは封じてある為、突入する方法は二つしかない。

ヘリによる接近か。
魔法使いの投入。

「そして後者を選んだようね」

佐樹は愛銃のチェックを済ませると、無線に手を延ばした。

「石神より全員へ。政府は我々の要求への返答もなく制圧を選んだ。各員持ち場につけ」

政府がどれだけの戦力を投入してくるのか。投入出来るのか。
魔法使い５０人を相手にし、更に高度３００m付近で戦えるほどの魔法使いのストックはあるのだろうか。

スカイツリーの展望台、ここから見下ろす景色は余りにも遠く届きそうもない。梨花が佐樹に声をかけた。

「佐樹ちゃん」
「乗り切るわよ」

「うん！」

長い言葉はかけられそうになかった。余計な事を、気持ちを零してしまいそうであったから。
終わらせて、そうして全てを終わらせる。

美樹は煩わしい無線を垂れ流すヘッドセットを耳に突っ込んだ。風が強い。
東京スカイツリーの周辺空域には魔法使いが大量に展開しているらしい。それを突破する。
陸自の魔法使い連隊から一個中隊が派遣されてきている。それだけ、上は迅速な解決を期待しているということだろうか。
空へ向かいそびえ立つその塔は全てを拒んでいるように見えた。全体無線でなく、個別無線が璃瑠から入った。

『美樹さん、……その無理はしないでください』
「璃瑠、お前は展望台へ突っ込め、他は無視して良い」
『美樹さん。なんて言って良いのかわかりませんが、彼女の死は決して』
「ではいくぞ、璃瑠」
今はそれだけだ。

【131】

【131】

美樹が黒蛇を砲撃形態へ移行させる。テロリストが二人アサルトライフルを連射しながら美樹へ向かう。空を蹴って旋回しながらそれを回避すると美樹はその二人を無視して翔ぶ。

後ろから弾丸が飛んでくる。耳元で空気が渦巻く音が聞こえる。左手で手榴弾を取り出すと安全装置のピンを口の端で噛んで引き抜く。

それを後ろ手に後ろへ放った。空中で炸裂した手榴弾が短い爆音を轟かせ空気を震わす。それを感じて空中で身を捻り姿勢を変えると黒蛇の引き金を引いた。

「3．02A－02D：2．02－02－01Cジェノブレイカー」

黒蛇の内部で生成された力場によって加速させられた魔力の塊がパルスを撒き散らしながら手榴弾の爆煙ごと貫きテロリスト二人を撃ち抜いた。

血が曼珠沙華のように無数の触手のように散ると彼等は力なく落下していく。それを見届けるでもなく美樹は加速する。

頭上から弾丸が降り注ぐ。方向転換して急停止すると頭の上に魔力盾を掲げる。

無数の鉛玉が盾にぶつかると跳ね返り散らばって行く。盾を貼ったまま黒蛇内部の力場のボルテージをあげて行く。そして黒蛇の銃口を天に向かって掲げる。

盾に弾丸がぶつかる度に火花が散り視界を拒む。その先に、敵の姿

が見えそれへ狙いをすませる。そして引き金を引いた。自らの盾を引き裂き弾丸を呑み込み天空へ一線の光芒が走った。光と赤い噴水を撒き散らして光芒はか細くなった。そしてその姿が消えると美樹は次の敵へと向かう。

ロックするより先に引き金を引く。テロリストが砲撃をギリギリで回避すると、そのまま空を蹴って一気に直線飛行に移る、それを見て美樹は自分の目の前の空を蹴り上げた。背中から落ちて行くように飛び接近してくる敵との距離を保つ。後ろ向きに飛びながら黒蛇の引き金を引き続ける。

美樹の後ろへ回り込む様に一人が援護に入った。
挟撃される形となった美樹は一気に速度をあげて降下する。後ろをとってきた敵へとすれ違いざまに射撃を撃ち込む。

「璃瑠！　スカイツリーにまだ取り付けないのか！？」
『現在、石神佐樹と交戦中！』
「私がそっちを引き付ける！」

追撃を撃ち落とすと、美樹は璃瑠の元へと向かう。
遠くの方に璃瑠と交戦中の佐樹が見え、美樹は足を止めた。空中で停止すると、黒蛇を構える。

足元から魔力が巻き上がる様に身体を包み込む。それを束ねて指先へ、そしてその先へ。黒蛇内部の力場を膨張させる。

「ぶち抜けぇ！」
「！　ちぃっ！」

石神佐樹が動きを止めると、５ナンバーのプレッシャーリージョン

を発動した。石神佐樹を中心に鐘のような打ち鳴らした鈍い音が広がり空気の色が変わった。美樹の放った砲撃が空気を蝕みながら直進するも、石神佐樹の発動したプレッシャーリージョンの範囲内に侵入すると光芒は下に曲がった。

「先に行け、璃瑠！」

私に向かって頷くと璃瑠は石神佐樹から距離をとる。

「随分と長い付き合いになっちまったな」
「相手にする気もないけれど」
「気付く間もなく堕としてやるよ」

【131-2】

【131-2】

石神佐樹の5ナンバー、プレッシャーリージョンは周辺の空間にプレッシャーをかけることで全ての物へ影響を与える魔法だった。
だから、そこへ侵入した人も魔法も銃弾も下へと押しつぶされ真っ直ぐ飛ぶ事は不可能になる。

「3．02A－04Qアサルトビット、3．02A－05Mインペリアルバスター」

石神佐樹が自身の周囲の空気をなぞる。指の軌跡の端から結晶が生まれて行く。結晶は舞い落ちていくと一斉に向きを変えて勢いよく射出された。
それに合わせて石神佐樹はハンドガンを腰から提げた拡張レールに接続すると魔力砲撃を放つ。轟音とともに莫大な魔力を絡ませた弾丸が美樹へと向かう。

砲撃と誘導弾の多重攻撃。美樹は目の前の空を蹴っ飛ばすと宙返りして砲撃をギリギリで回避する。体表を熱さが一瞬よぎる。砲撃から散る火花が美樹の
服の一部を焦がす。美樹が無数の誘導弾へ向かって砲撃を放った。
光の柱の如く、伸びたそれが石神佐樹のばら撒いた結晶を吹き飛ばす。砲撃を放ったまま銃口の向きを変え砲撃で片っ端から撃ち落とす。

「これは……」
「ここで堕とすと言った！」

空中で踏ん張ると黒蛇の引き金を引く。

「3．02A－02D：2．02－02－01Cジェノブレイカー！」

轟音とともに巨大な光芒のうねりが射出される。それを見て石神佐樹は後ろへ飛んで距離をとる。石神佐樹の周囲のフィールドとも呼べるプレッシャーリージョンの発動領域に美樹の砲撃が届くと砲撃は下向きに逸れた。

「正攻法じゃ無理ってことか」

「これ以上、付き合う気はないわ。私にはやるべき事がある、こんな所で時間を潰すわけにはいかないの」

「随分とつれねぇじゃねーか」

「届かない攻撃でどうしようというの」

石神佐樹がハンドガンを二丁交互に撃つ。空を穿つ細い閃光が向かってくる。美樹は魔力盾を貼ったまま空を蹴った。片手で連結を解除して射撃形態に移行した黒蛇を連射する。

石神佐樹のフィールドに届かない距離を保ちながら互いに並行しあったまま二人は撃ち合う。

石神佐樹の射撃は精確だった。空中制御の中で一瞬生まれる隙を精確に狙ってくる。

だがしかし。

「ずれろ！」

精確なその一撃を回避しきれない瞬間、美樹はスライドシフトを発

動させた。自身の周囲の空間を突き動かす。その姿勢からは想像できないほど美樹は高速で動いた。
自分自身をずらすことで、攻撃を回避して行く。

「姑息な」

石神佐樹の攻撃を回避していくも、美樹の反撃として放たれる射撃はてんで的外れだった。
プレッシャーリージョンの発動領域に侵入することで、弾丸の軌道は下に逸れる。しかし、それだけでは説明出来ないほど的外れな攻撃だった。

「そんな攻撃で！」
「……見えた」

【13ー3】

「……見えた」

美樹が黒蛇を両手で構えた。銃身の下に取り付けられた拡張バレルが持ち上がり接続し砲撃形態へと移行する。狙いをつけて引き金を引く。

砲撃は石神佐樹より大きく上へ外れた位置へ翔んだ。当たりようもない着弾点だった、しかし石神佐樹のプレッシャーリージョンの発動領域に砲撃が侵入すると、大きく下へ逸れた。それによって大きく上へずれていた砲撃は下へ逸れることでフィールドの中心にいた石神佐樹へと向かう形となった。

「なーー!?」

石神佐樹の目の前すれすれを砲撃が通り抜けた。その風圧で石神佐樹の長い黒い髪が靡いた。

「プレッシャーリージョンによる重圧。それを受けて砲撃は下へ曲がる。それを利用した……けれど、この空中戦で絶えず動き回る相手にそれだけの事並大抵の事じゃない」

互いの距離や位置取りが変動し続ける上に外部要因によって下へ曲げられる砲撃の軌道を計算して直撃コースになるように砲撃を放つ。それをこの戦闘中の僅かな時間に思い付き更に実践してみせた。

それだけの技量に石神佐樹は驚く。

「今度は外さない……！」
「思っていた以上に厄介ね、あなたは。何の信念も守るものもないくせをして」
「背負ってばかりで重くなってるぜ」
「一発のまぐれで調子に乗って！」

石神佐樹が二発同時に砲撃を放つ。弾かれる様に美樹が横に高速で動いた。スライドシフトで自身の位置をずらす。
美樹が手榴弾を山なりに投げた。石神佐樹のプレッシャーリージョンの発動領域に入った手榴弾は下向きに逸れる前に爆発した。石神佐樹が張った魔力盾に爆風が直撃する。その隙をついて美樹が砲撃を放つ、発動領域に直進した砲撃は下向きに逸れて石神佐樹を掠める。

「何発当てたら認められるのか試してみるか！？」
「何も考えずただ流されて引き金を引く。その怒りの矛先はどこでもいいのでしょう。そんな薄っぺらい人間が！」
「そんな物分りが良かったら誰もこんな事になんてならねぇんだよ！」
「口だけは達者ね！」
「お前の方が口数が多いぜ！」

美樹が黒蛇を構えたまま突撃する。石神佐樹が迎撃として誘導弾をばら撒いた。美樹は一気に下降して追ってくる誘導弾を引き離すと振り向き様に砲撃を放った。美樹という一点に向かって収束していた誘導弾は纏めて消し飛ばされる。

「……全力で行くわよ」
「力んで落ちるなよ」

美樹を前にして石神佐樹が自身の魔力を完全に解放した。

【13ｌ4】

【13－4】

「5．02B－Fプレッシャーリージョン・オーバードライブ」

石神佐樹の足下から光の粒子が巻き上がる。石神佐樹の一挙一動に粒子がまとわりつくように舞い上がる。

鈍い鐘のような音が二度打ち鳴らされた。音が振動が空気を巻き込みながら沈み込んで行く。

目に見える範囲が全ての色が変わった。絵具を落とし込んだ水に見える。その空気が美樹の身体中にのしかかってくる。

まるで空気が重さを持ったかの様にただ無音で美樹の身体を軋ませる。

空中制御すら余りの重圧に難しくなり飛ぶのがやっとになる。

身体が悲鳴を上げる。のしかかる重圧で何処までが自分の身体か空気かの境界線も分からなくなるほど感覚が麻痺してくる。

気を抜けば落ちる。

「これは、……何度……食らって……も、慣れるもんじゃないな」

美樹がもがく様に空を蹴っ飛ばし後退しようとする。しかし、重さで思う様に動けない。

美樹が黒蛇をゆっくりと持ち上げると引き金を引く。しかし、砲撃はあまりの重圧に直ぐに下へ曲がりそして消えた。

「魔力……結合が重、圧に……耐え……きれない！？」

石神佐樹がハンドガンを拡張レールに接続すると、それを持ち上げる。光の粒子から線へそして壁へ。莫大な魔力を集束させ石神佐樹はそれを撃ち出した。

撃ち出された魔力の塊の速度はとても遅かった。光球は鼓動を打ちながらアテもないかのようにゆっくりと漂う。それは鼓動を打つ度に周囲の魔力を呑み込み巨大化していく。

「全て堕ちなさい、３．０２Ａ－０５Ｔインペリアルジャッジメント」

石神佐樹がその中心へ向かって一線の砲撃を撃ち出した。細い途切れ途切れの閃光が光球の中心を撃ち抜く。膨れ上がった魔力の塊は歯止めを失って破裂した。

花火の様に無数の閃光が飛び散る。一つ一つの閃光が全てを塗りつぶす。

それは敵味方問わずその場にいた者達全てを呑み込んだ。大量の魔力の固まりに呑み込まれ悲鳴とともに全て消し飛んだ。

「３．０１Ｂ－０１Ｆディフェンスシールドデュアルストラクチャ、３．０１Ｂ－０１Ｇディフェンスシールドリアクティブ」

美樹は黒蛇を背負うと両手を前に突き出し、二つの防御魔法を同時発動する。二重の魔力盾を前に生成すると、その盾の前にもう一つ盾を作り出す。

粒子が光の線となりその軌跡が幾何学模様を作り出す。それが一瞬光ると盾としての魔力の塊が生まれた。

降り注ぐ魔力が盾に直撃した。
３．０１Ｂ－０１Ｇディフェンスシールドリアクティブは反応と同時に魔力盾が爆発し威力を相殺する魔法である。
それと二重の魔力盾。
守りは完璧な筈であった。

しかし、莫大な魔力が滝の様に降り注ぐと盾は淡く砕けた。

「ぁぁぁ

【13ー5】

落下していく美樹はぼんやりと目を開けようとした。
何処まで自分の身体か分からない。何処まで保っていられているのかも分からない。何かが流れ出て行くのは分かる。
目を開けても視界は開けなかった。

力を入れても入っているかが分からない。落ちていく。風がただ受け止めることもなく邪魔もせずただ流れていくだけで、落下は止まらない。
意識が泥の中に沈んで行く。
身体中の熱さがぼんやりと痛みへ変わっていく。激痛へと変わって喉の奥から悲鳴が漏れる。

身体中を打ち付けられた鈍い痛みが這う。指の端から心の奥まで一つの感覚に支配されて行く。
口の中の血糊を吐き出した。
耳鳴りが風の音と混ざって脳内を叩く。
眼球の奥で針が転がっている様な痛みが肉を突き刺す。爪の中まで血の色で染まる。

「こんな、こんなところで私は」

美樹の視界に黒い影が見えた。
石神佐樹が美樹へ向かってハンドガンを、ぶっ放した。風を切る軽い音が走り閃光が美樹を貫いた。

「ぁぁっあ！」
「ここで堕とすんじゃなかったかしら」
石神佐樹がハンドガンを連射する。美樹が魔力盾を貼るも、魔力弾が直撃した衝撃に美樹は吹き飛ばされる。
「あなたは危険すぎる、だからここで！」
「っーー」
ここで死んでも良いかな。
死ぬのかな。
『こんなの嫌だよね。おかしいよね。何も分かってないくせに、分かったふりして、ワケもワカンナイで、がむしゃらになるんだよ』
石神佐樹の放った砲撃を美樹が魔力盾で受け止めるもその威力に押され美樹は遥か後方まで撃ち落とされた。
スカイツリーの脚の鉄骨に背中からぶつかると声にならない悲鳴が漏れた、音だけでなく血も漏れる。
必死に鉄骨の上に着地する。不安定な足場で足元がよろめくのは強い風のせいだけではなかった。視界に透明な結晶が映り込む。定まらない視界の先に石神佐樹にだけ焦点があっていた。
視界の半分が暗転している。
背中の痛みがこめかみにまで響く。生暖かいものが身体中を伝いすぎて何処まで無事なのかも分からない。
「こ……れで……満足、……なのか。私が……死ねば……、あ、の

こ……は救わ……れる……のか」
「命乞いに付き合う気もないわ」
「あん……たが私を……殺せば高……田梨花は……幸せに……なれるのか」

石神佐樹が不快感に顔を歪める。
そんな筈などない。目の前の敵を何人倒した所で高田梨花が救われるわけではない。助かるわけではない。
だからといって、どうすれば良いと言うのだと。

「何も知らないくせをして」
「自……分だけ……が背追い込ん……でいると……思う……なよ」
「あの子の命まで背追い込んでいる人間がいるものか！」
「なら……背追い込……んで……いる……あんたは、こ……れで……正しいと……思う……のか。これで……あの子が救われ……ると思うのか……！」

【13ー6】

【13ー6】

ずっと悩んでいた。
梨花の事。

梨花の寿命は長くない。確実に魔法は彼女の命を蝕んでいく。
魔法が何故有毒なのかはいまだに分からない。けれど、確かに魔法は梨花の身体を蝕んでいく。
その事実を前にして何も出来なかった。

野方の言う新しい強い国などどうでも良かった。確かに拾われた恩もここまでしてくれた感謝の気持ちもあった。
野方に言われるまま彼の指示をこなした。自らの才能を存分に使って。

自分がこの国を変えるのだと思った。
力で、どうしようもない間違いだらけの世界を変えるのだと。

けれど、気付いてしまった。何処か他人事だと。新しい国だろうと何だろうと関係がない様に思えた。どうでも良い様に思えた。
ただ流されるまま状況を受け入れて流れに身を委ねて。

梨花の寿命が長くないと聞いて居ても立っても居られなくなった。
けれど、出来る事など何も無かった。
だからその現状に苛立ち変えようともがいた。何も出来ない事実を忘れるかの様にただひたすら任務をこなした。

それは逃げてるだけだ。
そんなのは分かっている。二度と元に戻らない事も分かっている。
ならどうすれば良かったというのか。
梨花は止められない。彼女の存在理由が認識欲だから、それを満たせるのは魔法しかない。けれど、魔法は梨花を傷付ける。
なら。
何が出来た。

「早急に全てを終わらせる。全て終わらせて私はあの子と帰る！」
石神佐樹が魔力を集束させた。目の前の美樹へ向かって全てを撃ち込む決意と共に。

「本……当にそれ……で良い……のか……よ！　お前は！」
美樹は声を絞り出す。こよりの言葉が頭を叩く。
何も分かってないくせに、分かったふりして、ワケもワカンナイで、がむしゃらになる。

美樹には石神佐樹と同じ様に思えた。
どうしようもない事実が目の前に直面して、そのために何が出来るか分からなくて。何をすれば良いのか分からなくて。
そうして分からないまま何かにぶつかっていく。
それが正しいのか近道なのかも分からずに。そうして居ないと不安で押しつぶされそうになるから。
だけどそれじゃあ駄目だと美樹は思う。

本当に必要な事はもっとシンプルで気付けないだけだと。そしてそれに気付けなかったのだと。

「あなたさえ居なければ！」

石神佐樹が引き金を引いた。集束した魔力がうねりを帯び二本の砲撃が絡まり合い美樹へ向かって跳ぶ。

それが眼前を支配し視界が塗りつぶされる。
美樹は動けなかった。身体中を浸す様な鈍い痛みがただのしかかっていた。血が溢れ出て指先から死んでいく。

ここで死ぬのか。私は。

もう分からないんだ。何をすれば良かったの、何が悪かったのか。
暗闇に放り込まれてどこへ向かっているのか。

こより。

お前を守れなかったのは何がいけなかったんだ？

『欲しかったセカイと違っても、望んだセカイと違っても、あたしたちはそれを壊しちゃいけないんだよ。向かい合って変えて変わっていくしかないんだよ』

なら、どうすれば良いのさ。お前の居ない世界で私は何を頑張れば良い。
この衝動を何処にぶつければ良い。

私達は本当は何が欲しかったんだ。
私達は本当は何を守りたかったんだ。

「だから、こんな……！」

【13-7】

「だから、こんな……！」

石神佐樹の放った砲撃が美樹に向かって着弾し爆発を起こした。スカイツリーの鉄骨が大きく振動する。
その爆煙の向こう側から一筋の閃光が走り、黒煙をかき消すと閃光は収束し一線の砲撃となった。
その反撃に石神佐樹は動揺しプレッシャーリージョンを発動し後退する。細く鋭いその砲撃はフィールドに入ると下向きに逸れ石神佐樹は安堵した。

美樹が立っていた。砲撃によって炎上したその足場の上で確かに立っていた。
美樹がまだ無事であることに石神佐樹は驚く。

「それじ……ゃあ、そのやり方……じゃあ、誰も救え……ない」
「知った様な口を」
「私達……が本当にやる……べきだったの……は、伝える……事だろう」
「もうそれで変わらないから、この国を作り直そうなんて事になるのよ！」
「そん……な事言っ……ているんじゃない。　お前はあ……の子と本当に……向き合った……のか！？」
「！？」
「何もか……も諦めたフリ……をして、本……当は向き合うの……

が怖かっただけじ……ゃないか！」
「何も知らないで、人の心に踏み込んでーーあなたは！」
「伝わら……ないからって、……伝えられないからって、……それで、逃げ……出しちゃ何も……変わらない！」

それじゃあ、私と同じ轍を踏む。本当は諦めずに踏み込んで、分かろうとして、伝えなくちゃいけなったんだ。
いつからか、それを諦めてたんだ。

「何も知らないくせに、偉そうにごちゃごちゃと！」

石神佐樹が拡張レールを構え直し砲撃を精製する。大気中の魔力が石神佐樹の一点へと集まり離れ集束していく。美樹が飛び出した。引き金を引き続けながら石神佐樹の元へと飛び込む。銃声と共に黒蛇が跳ね上がる。それを無理矢理押さえつけて石神佐樹へ弾丸を撃ち出す。弾丸は石神佐樹のプレッシャーリージョンの領域内で下へ屈折させられるもそれを厭わず美樹へ突撃した。プレッシャーリージョンの領域内に侵入した美樹の体が悲鳴をあげる。確かな重さが身体中を締め付けてくる。

「3．02A－05Mインペリアルバスター！」
「物分りが……悪いん……だよ！」

美樹を石神佐樹の銃口が捉え引き金を引こうとするのが見えた。その真っ正面で美樹は右手を伸ばす。視界の先には石神佐樹がいた。彼女の構えた銃身を視線で捉えてそこへ向かって全てを込める。
世界は、ずれる。

銃身の一部の位置をほんの少し、距離にして数センチ横にずらした。瞳に映る世界がぶれて焦点が一瞬合わなくなる、古いフィルムの様

に映像が左右に動いて徐々に正しい線となっていく。

「！？」

石神佐樹の拡張レールの一部が横にずれたことでその長い銃身は綺麗に叩き斬られたように一部が消し飛んだ。

ずらされた銃身の先は今まで一体となっていた銃身から切り離されて落下していく。使い物に鳴らなくなった拡張レールからハンドガンを切り離すと石神佐樹はその銃口を美樹に向けた。

「こんなことで、こんなところで私は！」

「５．０２Ｂ－Ｘスライドシフト……！」

その手にしたハンドガンの、グリップから先をずらして切り飛ばした。

石神佐樹がそれを手放すも、直ぐ近くで爆発を起こした。その爆発をモロに受けて姿勢を崩す。

美樹が黒蛇の出力を最大まで上げる。呼応した愛銃の銃身に手を添えて全力で引き金を引いた。

「ーーっ！？」

「こいつは外さない……！」

美樹の砲撃は石神佐樹を呑み込んだ。

【13ー8】

スカイツリーへと突入しようとする璃瑠へ向かって頭上から閃光の如く弾丸が降り注いだ。目の前の空を蹴っ飛ばし宙返りでそれを回避すると即座に辻風を頭上へ向け内蔵されたハンドガンを撃ち出す。

高田梨花が璃瑠の頭上から急降下してライフルを内蔵した巨大な剣ー叢雲ーを振り下ろす。璃瑠の辻風がそれを受け止め金属音と火花が散った。

「霧風解放」

辻風からグリップが突き出し、それを掴んで霧風を抜きはなった。突如、大剣の中から飛び出してきた剣の一閃を高田梨花は魔力盾で受け止める。

剣として、そして鞘としての辻風に隠された剣、霧風。

そのまま切り込もうとした璃瑠の剣は空を切った。高田梨花の姿が消える。細かな粒子だけが舞う。

後ろのほうで風を切る音がして璃瑠は振り向き様に魔力盾を貼った。突如後ろに出現した高田梨花の放った剣撃を受け止め魔力盾を消すと右手の霧風を振り切る。互いの剣がぶつかり合い剣に乗せた魔力が小規模な爆発を起こす。

「瞬間移動、やはり厄介ですね」

「見切っといてそんな言い草……3．02A－05Gディストードブレイド！」

高田梨花が後ろに飛び退いて距離をとると叢雲を構え引き金を引く、轟、と音が響き空間を歪ませて魔力の奔流が貫く様に璃瑠へ向かった。璃瑠は
身体を反転させて空中を転がる様にして回避すると空を蹴って高田梨花への距離を詰める。

辻風を叩きつけるようにその幅広の刃を振り下ろす。それを高田梨花は叢雲で受け止め互いの剣は反発した。その隙をついて璃瑠は霧風を横薙ぎに払う。その切っ先は高田梨花ぎりぎりを切り裂くも、後ろに退いた彼女には当たらなかった。

「３．０２Ａ－０５Ｇディストードブレイド」

叢雲の銃口が魔力の奔流を撃ち出す。空間を歪ませながらその砲撃は璃瑠を狙う。

「射撃も格闘も出来て瞬間移動持ちとかどんなチートですか」
「えぇいっ！」

砲撃が掠めながらも璃瑠は回避すると急上昇する。それを見て高田梨花が叢雲を横に振り切るとその姿は消えた。
璃瑠の正面に突如高速移動して高田梨花が叢雲を構え突き出しそれを璃瑠の二本の剣が受け止める。

「何が狙いなんですか、あなた達は！」
「もう伝えたよ！」
「こんな方法で政府が応じるわけがない」
「だとすれば批判に変わるだけだよ」

璃瑠は二刀を振り払うと、半身を捻って高田梨花の手首を蹴り上げる。そこへ向かって霧風を突き立てるも魔力盾に阻まれた。

「テロを武力で排除して正義の味方気取りですか」
「それはそっちもだよね！」
「自覚があるなら結構です！」

高田梨花の姿が消えた。即座に振り向きつつ魔力盾を貼るもその先に高田梨花の姿はなかった。

「そう何度も同じ手を使うわけないよ！」

遥か眼下へと移動していた高田梨花が璃瑠へ向かって砲撃を放つ。霧風を辻風の内部へと仕舞うと、半歩身体を引いて構えを取る。

「２．０２Ａ－０３リベレイトリィパリィ」

向かってきた砲撃へと向かって仕舞った霧風を居合切りの要領で思い切り引き抜きながら叩き斬る。
霧風が解き放たれると同時に剣に纏わせた魔力が加速して砲撃とぶつかり互いの魔力がパルスとなって力の行き場を求めて彷徨う。
それが璃瑠の肌を撫でて皮膚を焦がす。

「痛いところ突かれたからって口封じに来たんでしょ」

スカイツリー占拠をしたテロリストを速やかに排除した独立派はスカイツリーに居座り、国会議員の非公式活動記録と献金記録の公表を求めた。
問題は彼らがスカイツリーを占拠はしたものの彼らの行動自体は迅速に部隊を派遣して制圧されるものでもない。

明らかに過剰だ。彼らは占拠以外は何もして居らず、そればかりか先のテロリストに取られた人質の解放まで行ったのだから。

これを迅速に大量の部隊を投入までして制圧すれば世論は割れる。独立派側に有利な意見は充分表出する。

「この国の政治家の闇を解いて世直しでもする気ですか、あなた達は」

【13ー9】

テロリストに人質をとられ動けなかった政府の評判は落ち、迅速に解決し人質を救出した独立派の評価は上がる。
これを有無を言わさず制圧すれば、政府への声は厳しくなる。

「あなたは何も感じないの？　どこかおかしいって、狂ってるって。この国を変えなくちゃいけないって思うよ」
「そこまで思い上がってないですよ」
「それだけの力があたしにはあるんだよ。そしてそれが必要とされてるから。なら、あたしは……3．02A－05Gディストードブレイド！」

高田梨花が飛び退いて引き金を引いて、叢雲の銃口から砲撃が打ち出される。何かを撃ち抜くかのような鋭い音が響いて砲撃が打ち出された。砲撃の先端が突き進む度に周囲の空間を歪ませる。

「新しい政府を立ち上げる、理想論は結構ですがその先も見据えないまま、こんな！」
「無理でも無謀でもない！」

砲撃を回避すると璃瑠は空を蹴って高田梨花への距離を一気に詰める。大振りで向かってくる璃瑠へ向かって、かいくぐるようにして高田梨花は突進した。璃瑠が剣を振り下ろす前に高田梨花が叢雲を突き出した。刃が璃瑠の腹から背まで一気に突き通すと璃瑠の姿は瓦解するようにあやふやになり消えた。

「!?　残像？　じゃなくて」
「幻影ですよ」

璃瑠の姿がかき消されるとその向こうに本当の璃瑠の姿があった。
完全に隙をつかれ動揺した高田梨花へ向かって璃瑠は空を蹴って霧風を振り下ろす。高田梨花が身を引く様にして叢雲を横に構え璃瑠の一撃を受け止めたものの、一気に押し込まれる。

「っぅーー！」
「子供の戯言を相手にする気はないです」
「馬鹿にして！」

叢雲で霧風の刃を切り払うも、璃瑠はそこへ鋭く蹴り込んだ。

「きゃぁっ！」

蹴りを入れてから、更に右足を蹴り上げ高田梨花の顎を打ち上げる。
彼女がよろけた所へ璃瑠は辻風を横薙ぎに力任せに身体へ叩き込んだ。
吹き飛んだ高田梨花へ向かって璃瑠は辻風に内蔵された拳銃をぶっ放す。
高田梨花は魔力盾を貼ると弾丸を弾き飛ばす。

本来なら璃瑠の距離だった。彼女の速さなら大きな隙を作った高田梨花へ一気にまた飛び込めたにも関わらず、有効打とはならないであろう射撃を選択したのはひとえに高田梨花の瞬間移動を警戒してだった。

見えない移動。厄介とはいえ、璃瑠も元々それを武器にした魔法使い。瞬間移動と高速移動の違いはあるとはいえ、魔法使いが対魔法

使いで狙う一点は一つしかない。
魔力盾を抜く瞬間。そしてそれを作り出すための戦略はどちらも同じであるならば、互いに狙うのは魔力盾を貼らせない隙を突く。
それを意識すれば瞬間移動の発動タイミングも察しがつく。

「けれど、その先はどうしますかね」
「３．０２Ａ－０５Ｇディストードブレイド」

迂闊に攻め込めば誘い込まれる。隙をつこうとしても瞬間移動で躱される。璃瑠には射撃も砲撃も大した魔法は持っていない。速度と幻影で圧倒するしかない。
だがしかし、そうなれば高田梨花は有利だ。思った以上に器用な彼女にとって格闘一辺倒で単調な璃瑠の動きも見切られかねない。璃瑠は今一歩踏み込めない以上、時間がかかる。

「あれを試すしかないですかね」

【13ー10】

「堕ちてよ！　なんで、こんな！」
「ちぃっーー！」

高田梨花の砲撃が璃瑠の姿を撃ち抜き、その姿は瓦解して風に流され光の粒子と変わる。

「幻影ーー！？」
「だぁっ！」

遥か上空に居た璃瑠が真下に刃を突き立てるように霧風を握ると飛び込む。霧風の切っ先が高田梨花を切り裂く寸前に高田梨花の姿は消えた。
高田梨花が真後ろへと瞬間移動し、璃瑠の背後をとる。璃瑠が振り向き様に霧風を振り回すも、高田梨花はまた一度瞬間移動で距離を取り、砲撃をぶっ放した。
回避は間に合わないと判断して璃瑠が魔力盾を貼り砲撃が盾へ直撃した。砲撃が盾を抉り、のめり込む。
砲撃が空間を歪ませ、魔力盾がぐにゃりと曲がる。

「これは……！」

璃瑠は飛び退くと魔力盾は砲撃に呑み込まれ消えた。
理屈は分からないが、どうやら防御はさせて貰えないらしい。
元々防御は苦手である為そこまで状況は不利になったとも思えない。

「あなたなんか！」

高田梨花が砲撃を放つと璃瑠は真っ直ぐに砲撃へと突っ込んで行く。閃光手榴弾を一つ砲撃の元へと放りこんだ。そして一気に加速して回避行動に移る。

砲撃と爆風が激突し爆音と閃光が轟く。

「やった……？」

爆発の向こうには何もなかった。爆炎が風によって散り散りになっていく。

「でぇぇぇい！」

爆発を目くらましにして璃瑠は高田梨花の頭上をとった。高田梨花の反応が遅れて叢雲を引き寄せ璃瑠の一撃を受け止めるために構える。璃瑠が辻風を振り下ろしその重量を力任せにぶつける。

「くぅーー！」

「２．０１Ａ－０３Ｒスティールパイルヴァンカ」

辻風を中心に魔力を練り上げると辻風を再び叩き込むと、魔力を小規模に爆発させる。爆発によって加速された辻風が高田梨花へ衝撃を打ち込む。

「っぁぁ！」

高田梨花は大きく吹き飛ばされ落下していく。肉迫した状況で叩き込まれた衝撃が身体の芯まで伝い、その反動で大きくえづいた。

姿勢を立て直すと、それを見て璃瑠が言う。

「退いて下さい」

「何を言って……」

【13ー11】

【13ー11】

高田梨花の姉は母曰く「とても出来た子」だった。それは梨花自身も知っていて感じていた。姉には勝てない。どんな分野でも姉には勝てそうになかった。

運動も勉強も芸術も性格も何もかも。

そしてそんな姉ばかりを溺愛する母を見て、高田梨花はそれすらも勝てないのだと思った。

愛されないと思った。

その姉が交通事故で死んで、妹だけが生き残り、その事を母が呪った時、崩れてしまった。

せき止めていたものが溢れてしまった。

母は自分を認め愛してくれない。

「あたしがここで諦めたら、無くしちゃう！　やっと見つけたのに、あたしが必要とされる場所、そんなの絶対に」

「だからって、なんでそんなに生き急ぐんですか」

「あなたなんかに分かるわけがないよ！　魔法でならあたしは誰かに必要とされる、認めてもらえる！　こんなの誰もくれなかったんだ！」

高田梨花の言葉を璃瑠は少なくとも共感は出来た。何処か同じものを感じた。

璃瑠は霧風を握り直す。かつての自分と同じだからこそ。高田梨花に昔の自分を重ねてしまうからこそ。

璃瑠は辻風を握り直す。越えなければ、いや越えた筈だと。追い越して昔の自分を遠くへと。

「だから、あたしは！」

「あなたを大切に想ってくれる人は必ずいる筈です、ならそれで良いじゃないですか」

「そんなのがいたら、あたしはこんな事にならなかったんだよっ！」

そんな姉は死んだ。そして全てが崩れ落ちてしまった。自分を支えるものが消えてしまって不確かな物になってしまった。

母が愛してくれないのなら、こんな自分を誰が認めてくれるのだ。こんな自分を認めてもらえる唯一の、そして文字通りの魔法なのだ。なら、そこに縋って使って何がいけないのだ。

その為だったら、何をしようとも構わない。

「あたしは！」

高田梨花が叢雲を構え直し、内蔵されたトリガーを引いた。叢雲の刀身が大きくスライドし二倍近い長さへと変化する。その刀身から白い光の粒子が溢れ出て、刃を羽の様に多い尽くす。まるではためく様に粒子の力場が鼓動する。

叢雲の刃は魔力サーキットを内蔵しており、それを全て解放する。

「叢雲（むらくも）・雨（あまの）」

「なんですか、それ。奥の手とか真の姿とかそんなですか」

叢雲のリミッターを解除し高田梨花は更に魔力を解放する。

空気が震えるのが頬で感じられる。

「あたしは戦わなくちゃいけないんだよ！」
「その場しのぎのアイデンティティをぶつけられても困るんですよ……！」

何かを作ろうとして、口で上手く嘘をついて。辿り着いた場所は崖の目の前で。

璃瑠が霧風を辻風に収納すると、辻風を盾にして向かってくる高田梨花へと飛び込む。高田梨花が大きく振りかぶった叢雲・雨が纏った魔力で周囲の空を切り裂きながら、その刃の切っ先が高田梨花の飛ぶ軌跡を描き出す。
真っ正面から激突して、璃瑠は大きく押し込まれる。

段違いの威力となったその一撃に璃瑠は驚く。ただでさえ厄介だったのが、より、だ。

高田梨花が璃瑠の辻風をいなすと、そのまま踏み込みながら斜めに叢雲・雨を振り切った。刃から零れんばかりの魔力が溢れ出し、大気を歪ませる。受け止めた辻風が金属の悲鳴を上げた。
辻風に大きく切り傷が付く。璃瑠は急いで辻風を引き戻し右手で魔力盾を貼る、そこへ高田梨花が斬りかかる。盾越しからでも伝わる衝撃に璃瑠は吹き飛んだ。

スカイツリーの鉄骨に吹き飛ばされ璃瑠は盾を張り、閃光手榴弾を放る。一途遅れて破裂する様に光が拡がって周囲一体が白一色に塗りつぶされる。

「！」

【13ー12】

閃光手榴弾で高田梨花の視界を奪うと、璃瑠はその隙にスカイツリーの展望台をガラスを突き破り突入した。
独立派のテロリストが占拠しているスカイツリー展望台を制圧すればこの戦闘は終わる筈だった。

派手な音を立てガラスの破片と共に突入する璃瑠を銃弾の嵐が迎え入れた。着地と同時に地を蹴って滑る様に駆け抜ける。アサルトライフルをぶっ放すテロリストの姿を目で追いながら、すり抜けざまに辻風を突き立てる。

「散れ、２．０２Ａ－０３リベレイトリィパリィ」

辻風に収納した霧風を居合抜きの要領で一気に引き抜いた。封じ込めた魔力が急速に解放されて爆風の如く旋風を巻き起こす。
それによって敵を一気に吹き飛ばすと霧風で、すかさず次の動揺した敵を躊躇無く斬りつける。
袈裟斬りにすると、力尽きたその敵を蹴り飛ばし銃弾の嵐からの弾除けにした。

閃光手榴弾を一つ敵の元へ放り閃光が爆発する隙を付いて幻影を投影した。自らの姿を描き出すと、それを囮に敵の懐へと一気に飛び込み敵の顎を辻風で叩き上げる。

「数ばかり居ようと」

斬り捨てた敵の呻きを後ろに璃瑠は呟いた。銃弾の嵐は止んでいた。全ての敵を呻く残骸に変えて璃瑠は嘆息する。

「こちら落合璃瑠、展望台を制ーー！」

璃瑠を追って高田梨花が突入してくる。その巨大な得物を振り切ると、衝撃波が舞う。璃瑠がそれをくぐり抜けて霧風を構え懐へと飛びこむ。高田梨花が横薙ぎに振り払い受け止めようとするも、璃瑠が突然横に跳んで軌道をずらす。

「！？」

璃瑠が跳び避けた跡には閃光手榴弾が一つ放り出されて居た。高田梨花の目の前で閃光が膨張し視界を奪う。白く暗転した視界の中で身体に衝撃が伝うのを感じた。

「っぅ！」

璃瑠が蹴りを入れると高田梨花の姿は消え、少し距離をおいた場所へと現れた。視界を取り戻して高田梨花は即座に叢雲・雨を構え直しその姿は消えた。璃瑠の目の前に突如現れて高田梨花はその巨大な刀身を力任せに振り下ろす。璃瑠がそれを受け止めるも吹き飛ばされ床を滑った。

抉られる。

一撃の速度は変わっていないのに重さが桁違いになっている。

梨花の攻撃からの体勢を立て直し呼吸を整えていると、皮膚を生温いものが伝わっていくのが感じられた。

受け止めたはずにも関わらず衝撃で流血した。

「……。」

璃瑠の皮膚が裂けた頬から伝う血が口の端を汚した。
高田梨花が走り出す。その巨大な得物を振りかざし璃瑠が受け止めようとした瞬間にその姿は消えた。

「あぁっ！」

激痛が脇腹に走って璃瑠は顔を歪めた。
璃瑠の背後で高田梨花が刃の背を返して血を払う。下腹部をねっとりとした感触が侵食し続ける。冷や汗が噴き出すように出るのが分かる。

瞬間移動でのすれ違い様に斬られた。
至近距離に「跳ばれる」というのは思った以上に厄介かもしれない。

「あたしにはもうここしかないんだよ！　ここに居れないなら、認めてもらえないなら生きてる意味なんてないじゃない！」
「駄々っ子の無い物ねだりでこんな！」

叢雲・雨が更に呼応する。高田梨花がグリップを強く握り締めると刀身を覆う魔力が膨れ上がる。彼女の目がすわり璃瑠の挙動の端を捉えた。
璃瑠が踏み込もうとすると高田梨花の姿が消える。璃瑠はそこから横っ跳びに飛び退くも高田梨花は璃瑠から遠く離れた場所へ出現した。

「読まれて、距離を離された……！」

高田梨花が叢雲・雨を構えその場に踏みとどまる。呑み込むかのよ

うに剣から溢れ出した魔力の奔流がどっと無秩序に放たれて全てを破壊する。
辻風を盾にして身を隠すも魔力砲撃が辻風を抉る。金属音が耳を突き刺し霧風が削られる。

衝撃で身体が持っていかれそうになる。
砲撃を凌ぎ切り盾にしていた辻風を構え直すと、その璃瑠の頭上へ高田梨花が瞬間移動で跳んだ。

「あたしは戦うしかないんだよぉ！」

【13ー13】

今まで言われるがままに、璃瑠は指示された敵を斬ってきた。そこにいつしか感傷も覚える事もなく、ただ淡々とこなしてきた。
だから、初めて。
心の何処かが疼いて。

高田梨花が、目の前で斬り合う少女の目が、涙で濡れている事に気付いて璃瑠は戸惑う。恐怖でも激昂でもない。その感情の高まりの正体が分からず璃瑠は戸惑う。

高田梨花は戦うしかないのだという。
でなければ自らの存在価値を認めてもらえないのだという。

「だぁぁぁっ！」
「ちぃっ」

それは。
自分と同じではないか。昔の自分と同じではないか。
アルカナなんていう宿命を背負わされて、戦うことでしか自分の居場所が見つからないと思っていた。でなければ呪われた存在なんか認めてもらえないと思っていた。

けれどそれは勘違いだった。本当は怖くて気付こうとしないだけで、手を伸ばせば握り返してくれる存在は居たと気付けなかった。

だからきっと、高田梨花もいつかは気付くはずなのだ。自らの存在を認識してくれる人が必ず居るのだと。自らの存在価値を必死で求めなくとも、そこに居る理由も居ていい価値もあるのだと。

「だから、こんな、こんなのはおかしいんですよ！」

高田梨花が璃瑠の頭上へ瞬間移動し、飛び込みざまに叢雲・雨を振り下ろす。璃瑠が身をよじって躱そうとするも叢雲・雨の刃は璃瑠の身を斬り裂いた。肩から胴にかけて一閃の斬撃が傷を作る。視界が血飛沫で埋め尽くされる。

「がぁっ！？」

璃瑠は身体から力が抜け崩れ落ちる中、魔法を構築する。辻風を左手で背中へ振り上げると、激痛を堪え身体ごと巻き込む様に力一杯辻風を投げ飛ばした。高田梨花が叢雲・雨を構え投げられた辻風を受け止める。その鈍器としての剣の質量に受け止めた高田梨花はよろめいた。

璃瑠は魔法を発動する。

璃瑠と高田梨花の間の一直線にサーキットを構築する。

魔力を練り上げる。集束した魔力に盾のように、壁を張る。その幾何学模様の盾は璃瑠が上にジャンプすると、璃瑠の足へ吸い付く様に近付いた。膝を曲げ、霧風を構えると、壁を蹴り飛ばす様に足を力一杯伸ばす。その瞬間に集束した魔力が開放され壁と璃瑠の力がぶつかり弾き出される様に璃瑠が勢いよく加速をつけ突進した。

「３．０３Ｂ－０１Ｒアクセラレイト・チャージャーサーキット」

もし仮に、こんな時でなく、こんな巡り合わせでなく、もっと違う出逢い方だったのなら、高田梨花をもっと違うやり方で止められたのだろうか。

【13ー14】

【13ー14】

璃瑠自身をまるで弾丸の様に撃ち出し爆発的な加速を受け璃瑠は霧風を構え突撃する。
高田梨花が叢雲・雨を突き出す。
最低でも刺し違えようと高田梨花は踏み込んだ。
それは一瞬だった。

衝撃波が白い波を打ち、展望台の強化ガラスを弾き割る。鋭い轟音は遠くなり外の喧騒に掻き消される。
砕け散る音がして床に金属の塊がぶつかる。

璃瑠の霧風が正面からぶつかった叢雲・雨を砕きその一太刀は高田梨花の身体を貫いていた。かのように見えた。

「ぁぁ……」

切っ先は高田梨花の首をギリギリで避けていた。叢雲・雨を破壊しながら、高田梨花には刃が触れる事もなく寸前で剣は止まった。
寸前で止まり細かく揺れる切っ先が高田梨花の視線を釘付けにする。

「あ、あたし……」
「はぁっ……はぁっ……投降してください……次は上手くやる自信がないですから」

璃瑠が霧風を降ろした。高田梨花が手に握った叢雲・雨の砕け散った姿を見て力無く膝を突く。

「あたし……負けちゃったんだ……あたし……！」

武器だけを破壊し無力化を図った璃瑠の圧倒的な技量を見せ付けられた。

それを前にして武器もなく立ち向かうのは無理だと高田梨花は悟った。

負けた。

その事実は高田梨花に無力感を突き付ける。戦って結果を残して、そうでなければ自分の居場所は見つからない。認めてもらえない。

それがただただ、胸を締め付ける。

高田梨花の無線から石神佐樹の声がした。

『梨花！』

「佐樹ちゃん、ごめんなさい。あたし負けちゃったごめんなさい。あたし何の役にも立てなかったねごめんなさい。こんなんじゃ、あたし何の意味もないよね。勝てなきゃ結果を残せなきゃこんなあたしなんて誰も認めてくれないよね」

『違う！』

石神佐樹の突然の大声に高田梨花は戸惑う。

たった一言。単純な一言だった。

『私はあなたが居てくれさえいれば良かったのに』

それはきっと誰もが欲しがっていた言葉なのだ。それだけを求めて

いた筈だった。
高田梨花の頬へ気付けば大粒の涙が染み出す。それは頬から顎へ伝い引力に惹かれ落ちていく。

「ごめんね……あたし……馬鹿だね」

泣き崩れる高田梨花を見て璃瑠は床に放り投げた。乾いた金属音が高田梨花の嗚咽の音に呑まれそうになる。

もし仮に、違う場所違う時、違った運命で出会えていたのなら。
こんな終わりではなかったのだろうか。

高田梨花にいつかの自分を重ねてしまう。

斬れなかった。そう出来た筈でそうする筈であったのに。寸前でそれを止めた事が正しかったのかは分からない。
彼女は昨日の自分を越えて、追い越していけるだろうか。

「美樹さん」
『こちら伏見。どうぞ』
「制圧完了。事態収拾へ向かうよう本部へ」
『了解。』

美樹が応えて無線はまた慌ただしくなる。その喧騒の向こうで美樹が璃瑠に呼び掛けた。

『璃瑠』
「なんですか」
『ありがとう』

「それは……どうも」

【13章・塔は開かれた完】

【１４章・女神は振り向いた】

【１４章・女神は振り向いた】

射撃訓練場の重い扉を開けると鋭い音が轟いて璃瑠は少し顔をしかめた。
足音すら聞こえない程の絶え間なく続く轟音を立てている主の元へ璃瑠は向かう。こちらに背を向け引き金を引き続ける美樹の姿があった。
美樹が撃ち終わるまで待って見ている事にする。
マガジン１本分を撃ち終わると美樹は璃瑠に気付いて、その方へ振り返る。

「璃瑠か。珍しいな」
「面白いものが見れると聞いたものですから」

ヘッドセットと防弾グラスを外しハンドガンからマガジンを引き抜きながら美樹は射撃訓練場のレーンから出てきた。

「黒蛇の追加オプションの試射ならもう終わっちまったよ」
「どうでした？」
「実用性を除けば完璧だったよ」

美樹には硝煙の匂いが染み付いていた。ガンオイルで汚れた手を裾で拭いながら美樹は笑う。

「璃瑠、身体の調子はどうなのさ」
「平和な日々を享受する位なら」

「そうともいかんだろうね」

独立派の東京スカイツリー占拠テロから丸二日。多くの犠牲者を出しながらも璃瑠の活躍により制圧されたそれから二日間。独立派の動きは全く無かった。

占拠事件の失敗は打撃となったということかもしれなかったが、未だ予断は許されなかった。

あれで終わり諦めるにしては、捨て身の計画過ぎた。なんらかの二の手を打ってくるとしか考えられない。

璃瑠は美樹に問い掛ける。わざわざここまで出向いた本来の目的の為に。

「美樹さん」

「ん？」

「鷺ノ宮こよりの葬儀、行かないんですか」

「行けるわけ……ないだろ」

美樹が視線を逸らすも璃瑠はそのまま美樹を見つめ続けた。

暫くの沈黙を挟んで美樹は顔をあげる。

「璃瑠、ちょっと半日、付き合ってくれないか」

【14ー1】

美樹に連れられた璃瑠は新宿駅の東口にある広場のベンチに腰掛けていた。美樹が両手にクレープを持って璃瑠の元へ帰ってくる。片方を璃瑠に握らすと美樹はその横に腰掛けた。

「前来た時はクレープじゃなくてドーナッツ屋があったんだけどな」

「そうなんですか」

璃瑠はクレープにかぶりつきながら相槌を打つ。余計な事は聞かない事にした。美樹が話したがるまで、話したがることだけを、聞くことにした。

「前来た時はあの事故の日だった」

「新宿大規模爆発事故ですか」

「うん。あの日が私にとって全ての始まりで理由でもある。いやきっかけに過ぎないのかな」

「……。」

「あの事故でこよりが魔法使いとしての力を手にしてから、私達の昨日は崩れた。私は六課に行き、璃瑠と会って、色んな事件に立ち会って。成功もした失敗もした。笑ったし泣いたし怒ったし喜んだ。必死で事件を解決していれば、いつかこよりに巡り会う機会があると思って。言葉で力でこよりを止められると思って。今までの事が全て無駄だったとは思わないけど」

そこで美樹は言葉を止めた。

本当は無駄だったなんて思っているのを誤魔化すかのように。

「けれどこんな結末じゃ、こんな終わり方じゃ何の意味も無いじゃないか！」

結局はこよりの為と、いつかはこよりの為になると走り続けて来たのは全て無駄だった。ただの遠回りの当て外れだった。

こよりを止められなければ、救えなければ何の意味も無かった。

伝わらないからって、伝えられないからって、それで、逃げ出しちゃ何も変わらない。本当は諦めずに踏み込んで、分かろうとして、伝えなくちゃいけなかった。

何かをやっている気になって本当に立ち向かうべき事から逃げ出した。こよりに拒絶される事をどっかで恐れてもう一歩踏み込めなかった。

「何も分かってないくせに、分かったふりして、ワケもワカンナイで、がむしゃらになる」

「なんですか、それ」

「こよりの言葉。本当にその通りだよ。当て外れの見当違いのがむしゃらで何かやった気になってるんだよ、みんな。そして無駄な道程で意味もない結果を掴むんだ」

場所を変えよう、と言って美樹は立ち上がった。その手を璃瑠は掴む。

「行き先、私が決めてもいいですか」

【141-2】

周囲からぽつねんと浮いた赤い電波塔のエレベーターを出ると、全面ガラス張りの明るい展望台に出た。

「東京タワーに来たかったのか？」

「来た事無かったんです」

修学旅行らしき学生服の集団の脇を通ると、スカイツリーじゃねぇのかよ、なんて声が聞こえた。璃瑠がポツリと、ごめんなさいと苦笑した。

占拠テロを受けてスカイツリー周辺は未だ封鎖中であった。

璃瑠は少し迷ってから目当ての方角を見つけたらしく美樹の手を引いて前を歩いていく。

ガラスの前で璃瑠が立ち止まると美樹はその横に並ぶ。

「ここからだとスカイツリーよく見えますね」

「そうだな」

「高田梨花は救われました。それによって石神佐樹も」

高田梨花は石神佐樹の言葉によって自分の居場所を存在価値を見出した。誰かに必要とされている、それは特別な事でもなく特別な事をして帰ってくるものでもないと。

「救ったのは璃瑠だ」

「あの時、高田梨花にいつかの自分の姿を私は重ねていたんです。

戦わなきゃ、こんな自分に居場所なんてないと頑なに思い込んでいる自分を。だから、私は彼女を止めたくて、そんなの違うって言ってあげたくて」

「そう思える様に成長した璃……」

「美樹さんのお陰です」

璃瑠が美樹の手首を掴んで引き寄せる。胸の前で美樹の手を両手で包み込む。

「あなたが私を、私の事を大切だって言ってくれたから。アルカナなんて関係なく私は私だって言ってくれたから。

あなたが私に出会わなければ、あなたが高田梨花を知らなければ、あなたが石神佐樹へ言葉を伝えなければ、どれか一つがかけてしまっていたのなら、そうしたら救われなかった。

あなたが無駄だった、何の意味も無かったって切り捨てた事達が私達の運命を変えたんです。あなたがその運命を認識したんです。

それを無下にするなんて寂しいじゃないですか」

「……私は……」

手に入らないものがあった。

取りこぼしたものがあった。

届きもしないものがあった。

誰かをまた傷付けて何を手に入れたのか。

何も手の内には残らなかった。

鷺ノ宮こよりに何も出来なかった。

残ったのは虚無と嘆きだけだと思っていた。

けれど、それは違うと璃瑠は言う。

「でも、こよりを救えなかった。それだけは、それが成し遂げられないんじゃ私はなにをしてきたのか意味を見出せないよ」

「あなたの道程は無駄なものなんかじゃありません」

「好きです、美樹さん」

【14－3】

「好きです、美樹さん」

璃瑠の言葉に私は動揺する。
そんなのはずるいと思う。
璃瑠の目から視線を外せないまま私は何も答えられなかった。私は璃瑠を救っていたのだろうか。

璃瑠の目から視線を外せないまま私は思う。私は璃瑠の事をどう思っていたのだろうか。
璃瑠の背には東京の街並みが浮かんでいる。この街に一体どれだけのモノが眠っているのだろうか。ひた隠しにされているのだろうか。

「私は……」
「あなたが何の意味もないなんて思っていたってわたしのこの感情は本物です。あなたがくれたモノです」

だからそれさえ無駄なんて思ったら、私の今までが無駄だったなんて思ったら、璃瑠の気持ちまで否定した事になってしまう。

けれど、こよりは死んだ。世界を変えようとして私を庇い死んだ。
それじゃあ、私達の軌跡は何だ。何だったのだ。
バッドエンドってやつだろうか。
誰もが幸せを望んだだけだった筈なのに。私は誰の不幸を望んだわけでもなかった筈なのに。

「答えは無くても良いです、でもこれだけは、私の気持ちだけはあなたに知っておいて欲しかったから」

きっとそれは本心であった。璃瑠の正直な気持ちだと私は感じた。だからこそ、その真っ直ぐな言葉に私は答えられなかった。どんな答えだろうと、それはきっとズレを生んでしまうだろうと思ったから。

「あなたの全てを否定なんてしないでください」

「璃瑠、私はーー」

張り詰めた私と璃瑠の間の空気を断ち切る様に私と璃瑠の携帯が同時に鳴った。

確認するまでも無く六課であることは明白だった。

電話先の八坂が慌てた口ぶりで出た。

『今、二人とも何処ですか!?』

「璃瑠と一緒に港区にいる」

『六課に戻れますか!?』

「大丈夫、何があったんすか」

『独立派が、声明を出しました』

ついに動きを見せたというのか。

「それで、なんて?」

『独立特区の成立を要求するとのことです』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9136q/

あさきゆめみしきみへ

2011年11月22日02時52分発行